


桃太郎の誕生

柳田国男

角川文庫



桃太郎の誕生

昔々、爺と婆とがあった。爺は山へ木をきりに、婆は川へ洗濯に……。誰もが一度は胸ときめかせながらきいたこの“小さ子”物語の背後には、日本民族固有の信仰が秘められ、知られざる日本の謎がかくされている。民族の心の奥ふかくに昔話発生の拠りどころを探り、昔話の構造・分布・系統などをはじめて科学的にとりあげた歴史的名著。読者の知的興奮をそそる日本文化探検の書である。

好評発売中！

新しいエンターテインメントと
ドキュメントの月刊誌

野性時代

毎月24日発売 角川書店

カバー 村沢朝子

桃太郎の誕生

柳田国男

角川文庫

桃太郎の誕生

柳田国男

角川文庫 白八三

¥380

¥380

0139-308303-0946(1)

角川文庫
柳田国男著作集

海南小記
雪国の春
桃太郎の誕生
一目小僧その他
遠野物語
日本の伝説
昔話と文学
木綿以前の事
妹の力
日本の祭
日本の昔話
こども風土記
小さき者の声
野草雑記・野鳥雑記
火の昔
毎日の言葉
女性と民間伝承
地名の研究

カバー 旭印刷



角川文庫

— 19 —

桃太郎の誕生

柳田国男



角川書店



桃太郎の誕生

柳田国男



桃太郎の誕生

柳田国男



角川文庫

19

本書は、著作権継承者の了解を得て、現代表記法により、
原文を新字・新かなづかいにしたほか、漢字の一部をひ
らがなに改めた。

(編集部)

自序

今からちょうど十年前の、春のある日の明るい午前に、私はフィレンツェの画廊を行きめぐって、あの有名なボティチェリの、海の姫神の絵の前に立っていた。そうしていずれの時かわが日本の本の故国においても、「桃太郎の誕生」が新たな一つの問題として回顧せられるであろうことを考えてひとりこころよい真昼の夢を見たのであった。

それがわずかに十年の後に、かような形をもって世に現われようなどということは、私にも実に意外であったが、これには予期しえなかった二つの理由がある。その一つは、各地の忠実なる採集者によって、急に多くの珍しい昔話が、全国のすみずみから報告せられてきたことである。前駆者たる佐々木喜善君、その他二、三の同志の功績は、永く記念せらるべきものであった。第二には、この興味多き比較研究の事業が、爾来何人にも試みられんとする様子がなく、再びせっかくの資料を埋没に付すべき懸念のあったことである。たいていの説話集は、それほどにも流布の限られたものであった。特にこの方面に向かっての注意を喚起する者がないと、久しからずしていわゆる珍書道楽の手に鎖蔵せられてしまうかもしれないのである。私は境涯も年齢も、ともにこの仕事に任ずるに適してはいないが、ただ学問の未来のために、坐視していることがで

きなかっただけである。

もしも幸いにして別にその人があったならば、民間説話の二千年間の成長変化を考察すると同時に、時の文化学者の受売的態度を批判するような、そんな性急な一石二鳥は企てなかったらう。この二つはともに現代の忘れられたる問題に相異ないが、それをあわせて論じなければならぬ必要は少しもない。むしろ順序を追うて二度にしたほうが、感じははるかによかつたのである。しかし私にはこの次の仕事が待ちかねている。これより以上の時と力とを、昔話のためにさくことのできぬのを遺憾とするばかりである。

いま一つ不本意なことは、本篇各章の発表が時を隔てているために、そのうちに若干の変説改論があつて、完全にこれを現在の意見に統一しえなかつた点である。たとえば木を献じて水の神を喜ばしめた理由を、はじめに偶然であらうといい、後には深い意味があるらしく考え、また山路の物語の永く伝わつた原因を、前には舞の手のおもしろさであらうといい、次には笛の曲の力に帰している。もちろん今信じているのは新しいほうであるが、前者もまた一説として存するまではよからう。私は最初より人を誤りにみちびくような断定はしていない。またこればかりの研究によつて、ただちに軽信するような読者も少ないことと思う。将来際限もなく成長していかねばならぬ学問である。この小さな一冊子の全然無用となるような時代が、かりに到達するとしてもそれもまた私には喜ばしい。

大海に流れ入る日をほと遠み山下清水いは走るらん

昭和七年十一月

改版に際して

『桃太郎の誕生』が世に出てから、ちょうどまた一昔、多くの宝の島は引き寄せられ、学問の地平線ははればれと遠くひろがってきた。人をいちだんと高い岡の頂上にみちびいて、静かに四方を望ましめることができたならば、どれほどか喜ばしくまた楽しからうと、私なども考えてはいる。ただいかにせん、われわれの昔話研究は、今も依然としてふもとの野を耕すのみで、たまさかに腰を伸ばし手の土を払い、かの大空の白い雲を、指さすほどの余裕さえもたずにいる。そうして一方には昔話の背後に、何か埋もれたる深いものがあるように感ずる者は、もういちじろしく多くなつているのである。

偶然なるしあわせかもしれぬが、この十年の間に昔話の採集は進んだ。これまで一顧もせられなかつた地方の隅々から、千年を持ち伝えた家々の語りごとが発見せられ、はじめて記録の形になつて公けの利用に供せられてゐる。これが消えていくものの全部または大部分を、取りとめたことになるとも思われぬが、とにかくこれから後は、さらに大きな速力をもつて忘れられてしまふところであつた。それを一国文運の輝かしい転回期において、かろうじて保存することができたのはありがたいことだと思つてゐる。十年前にも私が言つたように、『桃太郎の誕生』は少し出方が早かつたのである。これがその後の新資料によつて、どの程度まで確認せられ、または反

証をあげてしりぞけられるか。実ははなはだあふないものであった。しかしこの学問の将来の展開のためには、私の失敗のごときは小さな犠牲である。それが恐ろしいようでは、とてもこの未知世界へははいっていけない。だから今私たちは、できるだけこの新たな採集を促進し、またこれを整理し公開して、むしろ自分の前説の誤りが、すみやかに露顕せんことを期しているのである。些々たる訂正や追加をもって、弁護と妥協との余地をつくるには、私の仮定意見はあまりにも大胆なものであった。ちょうど今後の研究者たちのために、手ごろの稽古台を供する意味において、今しばらくもとの形のままで残しておいてみるのがよいと思う。

珊瑚海を取り巻く大小の島々には、文化のさまざまな階段に属する土民が住み、そのある者は今も鬼が島である。しかもかれらの中にすらも、やはり昔話はあるのである。それとわれわれの珠玉のごとく、守りかかえていた昔話との間に、はたして悠久の昔から、なんらの相交渉するものがあったといえるかどうか。これは世界の謎であり、しかもわれわれ日本人ならば、いつかは解きうべき謎でもある。私は幸いにしてこの島々の新たな資料が、ほぼ公共の財産となる日を迎えうるならば、もう一度この旧著を読みかえして、改めてこれが保存に値するか否かを決したいと思っている。人が家々の祖神の神話として、たしかに信じていた時代がかつてはあったという点ならば、むしろ未開の民の間にその跡を見つけやすいであろう。それに争うべからざる両者の類似がもしありとすれば、記録こそは少しもないけれども、一度はともに住んで教え合ったことがあるか、そうでなければ、人間の自然の性として、いつかは同じような空想に遊ぶ段階を経、しかもその思い出を永く失わないという癖を共通にしているのである。あまり多くの参考書

は見えていないが、この書に説くがごとく昔話の起原論、これと中間の成長発達とを、二つに引き離してみようとする方法論は、まだ諸外国の通説とはなっていないようである。そうしてやや大ざっぱな私の検討では、まだ明白にこれらの仮定をくつがえすような資料は発見せられていない。ことによるとこの予想はあたっているのかもしれない。そういう楽観も少しは手伝って、この一つの旧作に対する著者の愛着は深いのである。

昭和十七年六月

柳田国男

目次

序 二つ

桃太郎の誕生

- 一 知られざる日本
 - 二 民譚二種
 - 三 童話の起り
 - 四 童話とその記録
 - 五 赤本の災厄
 - 六 桃と瓜
 - 七 妻もとめ
 - 八 昔話のもとの姿
- 犬子噺
あくど太郎

海神少童

- 一 はなたれ小僧様
- 二 薪を採る翁
- 三 貧者の奉仕
- 四 竜宮の女性
- 五 海の神の贈りもの
- 六 しこ名と醜い容
- 七 説話の成長素
- 八 興味と教訓
- 九 善玉悪玉
- 一〇 将来の神話学
- 延命小槌
- 嘉手志川
- 竜宮小僧

瓜子織姫

一 昔話の分布

五 六 七 八 九 一〇 一五 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一〇四

田螺の長者

- 一 舌切雀と腰折雀
- 二 蛙の王子と蛇の王子
- 三 小泉小太郎と泉小次郎
- 四 タミナの聲とツブの長者
- 生きている小太郎

- 二 瓜の中からお姫様
- 三 瓜と桃
- 四 申し児の靈験
- 五 驚くべき成長
- 六 瓜子姫の事業
- 七 瓜子姫の敵
- 八 動物の援助
- 九 瓜子姫の復活
- 諸国の瓜子姫
- 天之探女
- 黄金の瓜

一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

隣の寝太郎

- 一 治水拓土の功績
 - 二 長者の聲
 - 三 奥州のならず者
 - 四 沖繩の睡虫
 - 五 「物草太郎」の草子
 - 六 博打聲入りの事
 - 七 せやみ太郎兵衛
 - 八 信州の信の宮
- 山田の露
- 妻に助けられて

繪姿女房

- 一 黒川能の起こりと瓜子姫

狼と鍛冶屋の姥

- 二 桃売り殿様
三 エンプの果報
四 安積山の糠次郎
五 般若寺の磐若姫
六 六十六本の扇
七 殿様の無理難題
八 白介の翁
髪長媛
山路の笛

- 八 荒血山の物語 三二四
 九 良弁僧正の杉 三二九
 古屋の漏り 三三三
 狼と鏡と火 三四二

和泉式部の足袋

- 一 熊の子鹿の娘 三二四
 二 浄瑠璃御前の生い立ち 三二九
 三 鹿母夫人 三三三
 四 南無薬師 三三七
 五 雨乞い小町など 三六一
 六 誓願寺と鳳来寺 三六五
 七 清少納言の亡霊 三六九
 八 横山の禰宜 三七三

米倉法師

- 一 盲と文芸 三七七
 二 笑話の分布 三七九

- 三 蚯蚓の歌 三八三
 四 盲をからかう話 三八八
 五 餅と座頭 三九一
 六 狐と座頭 三九六
 七 狼と座頭 四〇〇
 八 水の神に仕うる者 四〇三
 九 信仰から文芸へ 四〇六

- 注釈 四二二
 解説 四二六
 年譜 四三三
 索引 四三六

関敬吾

- 三八三
 三八八
 三九一
 三九六
 四〇〇
 四〇三
 四〇六
 四二二
 四二六
 四三三
 四三六

桃太郎の誕生

一 知られざる日本

これは最初はただ自分ひとりの楽しみのために、手をつけてみた研究であるけれども、今に及んでは誰か聞いて下さる方を捜してあるく必要を感じる。桃太郎の鬼が島征伐などという昔話は、すでにお互いの家の子供すらも、その管理を辞退するほどのたわいもないものではあるが、なおそれがひとり日本現代の一つの問題であるのみでなく、実際はやはりまた世界開闢、以来の忘るべからざる事件として、考察せらるべきものであった。しかも壮年の学者が全力をこれに傾けてさえも、なお五年や十年では整理しきれぬほどの材料が、われわれの国には保存せられていた。それがこのごろになってようやく明らかになってきたのである。この研究の後半分だけは、ぜひとも志を同じゅうする何人かに引きついでおく必要がある。私が書いてこの不完全なる研究を発表するのも、本願はこれよりほかにはない。

われわれの昔話の中でも、特に外国におけるこの道の学者を感動せしむべきものは、英国でいう「シンドレラ」、グリム童話の「灰かつき姫」、日本で「糠^{ぬか}福^{ふく}米^{めい}福^{ふく}」などと呼んでいる物語であった。これがわが国にはいつてきてから、いかに短くても千年は越えているだろうと思うが、話

はその間にまことにわずかばかりしか変化を受けていない。蜜柑の皮を遠くから妹に投げつけたというような、些細な点までがなお残っている。そうして北は青森県のさびしい村から、南は奄岐島の海端にまで、数多く分布し、かつ今も生きている。英国の「シンドレラ」研究者ミス・コックスが、もしこの事実を知っていたならば、彼女の記念碑的名著も必ず若干はその体裁を改めて、柳田のごときはなぜ早くこれを説こうとせぬかということを、かつて「大阪朝日」紙上で注意せられたこともあったが、実はそのころまではまだ私なども、そう大きな問題とも思っていなかったのである。それに国内の蒐集が、いっこうに進んではいかなかった。今とても決して豊富とはいわれぬが、とにかくに新たな材料によって、その後明らかになってきたことがいくつかある。文学すなわち記録文芸の上では、この話は普通に「紅皿欠皿」の名をもって知られている。馬琴の『皿皿郷談』などはまったくこれによつたもので、話を美作の久米の皿山の歌に結びつけたのも、かれが独創に出でたる趣向ではなかった。今ある『住吉』『落窪』の物語をはじめとして、日本に最も数の多い継母話のものと種も、おそらくはこれと無関係に生まれでたものではなかった。ドイツのグリム研究者たちが、日本の類話として採録しているのは、御伽草子の「鉢かつぎ姫」ただ一つであるが、これも姥皮とか藝の皮とかの形になって、広く民間に行なわれている。ドイツではこれをアルレイラウフ（千枚皮、フランスではボーダーヌ（驢馬の皮、英国ではまたキャッツスキン（猫の皮）などと称えて、ともに灰かつぎ姫譚から派生した一傍系であることは、コックスもすでにこれを述べている。ただかれらはわれわれの草子以外の文芸を知るべきを

もたなかっただけである。

日本民間の口承文芸においては、シンドレラは奥州南部の「糠子米子」、または津軽の「粟袋米袋」等の名をもって伝わっている。これと並び行なわれている多くの継子いじめの話で、姉妹の名前がお銀小銀、またはお月お星だの葦子萱子だのと、二つ相對するものの名になっているのも、すべて「紅皿欠皿」の系統をつとめて、やや目先きをかえようとしたものらしい。しかもその継子のシンドレラが台所へ追ひ下され、始終火たき番をして灰まみれのきたない衣を着ていたという点は、まだこの温暖の国に來ても、脱ぎ捨ててはいないのであった。今までこの説話の研究者たちが、たいせつな分類の標準にしていた一つの点は、幸運な心がけのよい美しい継娘を保護する者が、ある一つの動物であったか、なくなった実母の霊であったか、はたまた当人の守り神であったかで、この特徴の異同によって、個々の民族の伝承する説話の親疎、伝播の経路を尋ねることができるようになられていた。ところがその方法のすこぶる心もとなくなってきたわけは、日本にはまさしく右三つの型がともに現存するからであった。前の目安を信頼するとして、この国へは三口別々の隣国から、前後して持ってきたという結論になるので、そんなことは容易に信じがたい。だから尊敬する外国の篤学者でも、おりおりは誤ったことをいうものと承知しなければならぬ。それというのが渉獵は広くても、一つの国民からそういくつもの資料は得られず、得られたものだけによって一応は意見を述べようとするからで、したがって誤謬をはじめから新資料の発見によって、訂正せられるようにできているのである。それを受け売りするほど愚劣なことではない。これからどんな変わった標本が出てこぬとは限らぬが、とにかくに日本で

の採集によって知れてきたことは、この世界的に著名なる一つの昔話が、わが国においてもまだ比較的まとまった形で保存せられていたことと、それが継母話のやや残虐にすぎたる一種を発生せしめた以外には、特に他の多くの説話の上に、これという影響感化を与えてはいなかったらしいということである。

二 民譚二種

それからいま一つ、ヨーロッパではかなりもてはやされている昔話に、古風なる死人感謝譚デーン・グラーフ・アクトというのがある。あるいはまた「歌うたう骸骨」ともいって、その死人が髑髏ヒョウロウになって歌ったり過去を語ったりしたという話が多い。これなども『日本霊異記』の昔から、よくまとまった形で久しい間、広くわれわれの中には伝承せられていた。私はこの事実を解して、この種の説話がはやく神話信仰の時代を去り、一個言語の芸術となつてしまつてから後に、この日本民族の間に運びこまれたことを、意味するものであらうかと思つてゐる。もちろんそれを断定するためには、まだまだ数多くの類例を集積してみなければ安全でないが、少なくとも今日お互いが一括して昔話、もしくは民間説話と名づけているものの中に、こういう国際的類似のいちじるしい若干がある以外、これと対立して国内かぎりでも、思い切つて変化をしているものがあることは事実である。これは一般の芸術発生の法則とも関連しているものであるが、説話にはとにかくその成熟期とも名づくべきものがあつて、個々の風土環境と社会生活の段階により、ないしは説話そのものの各

自性質から、国ごとにちがつた年齢をもち、ちがつた経歴を持ちしたがつてその伝播の様式にも、幾通りかの差異がありえたのである。大体にこれを輸入の時代の前後といつてしまえばわかりはよいだろうが、中にはおそく持つてきて、なお芸術となりきつていない方面から来たものもあるうし、他の一方には早くはいつたものにもすでにこの成熟期を過ぎて、熟した果実として受用せられたものもありうるのである。われわれの灰娘や歌うたう骸骨などは、ちょうどこの第二の場合に属していたゆえに、その渡来後の変化が案外に少なかったのではないかと思う。

これとは反対に、西洋でも数多く知られている異類求婚譚フレイム・タールすなわち人間の美女または美男と、鳥獣草木などの人でないものとが縁を結んだという昔話などは、日本一国内においても非常な変化発達をとげ、しかもその経路が今もなお大よそは跡づけえられる。たとえば幼少年者が笑ひそぞろいて聞く「猿智入」のおどけた話から、遠くは三輪山ミヅノヤマ筆墓の伝説と、筋の続きを認められる敬虔なある旧家の昔語りまで、現にその進化の中間の十数段階が、地を接して同時に併存しているのである。神話に関する学問は、将来この採集が進み、比較が容易になり、同時にそれが古く、それが新しくその次に変わったのかをはかるための、一定の尺度が備わるに至つて、おもむろに改造せらるることと私などは信じてゐる。今日のいわゆる神話学は、いわば今集まつてきた民間説話の中に、交つて伝わつてゐる神話的分子を取り扱つてゐるので、必ずしも神話でもない昔話を研究の対象として、これが神話であると強弁しようというのではないが、たまたま二者の分界を明らかにすることを怠つた結果、なんだか異様な言葉の用い方、たとえば国の歴史を神話といつてみたり、そうかと思うと「桃太郎」や「かちかち山」の類までを、神話の大系にさし

加えたりする者を生じたのである。語原からいっても、神話（ミコトワザ）は本来神聖なものであった。定まった日時に、定まった人が定まった方式をもってこれを語り、聞く者がことごとくこれを信じ、もしくは信ぜざる者の聞くことを許されぬ古風の説話であった。それとこの退屈な時に、または人が耳を楽しましめたい時に、随意に所望しえた話の芸術と、二者が類を同じくせざることは誰にでもわかりきっている。ただヤソ教国の人々だけは、従来文化は平押しに、新しいものが進み古いものが退いたと解していたゆえに、説話時代の神話を認めることができず、ましてや神話時代にもすでにあった民間説話などは、これを想像してみることもできなかった。そうして昔話が神話の孫子であることをのみ、ただひたむきに信じたがったのであるが、かりに孫子であったとしても、同人でない以上はちがった閥歴（ハツレキ）を持っているはずである。だからこれを混同してよろしいなどとは一人だつて言つてはいない。他に方法がないならこれによって、かれを尋ねようとしてただけである。

ところがわれわれの生まれた国においては、今でもまだこの二つのものが、それと因縁の深い「伝説」と三つどもえになつて交錯している。もちろんその三つの中でも神話だけは、数も少なく出現の機会もまれであり、また非常に荒れすさみ、かつ不純になつてはいるが、とにかくこれから伝説と民間説話へ、移り動いていった足どりだけは見られる。それにはこの異類求婚譚、その中でもことに蛇の掣入（ハシグチ）の話などが、かなり豊富に手ごろの材料を供するかと思う。私はこの説話を整理するために、婚姻慣習という一つのもののさしをあててみようとしているが、同時にまたその多くの類型の比較は、われわれの婚姻制の変遷を解説せんとする者に、いくつかの暗示を

投げてくれるようである。

三 童話の起り

「桃太郎」の昔話なども、日本に根を生じてからよほど年久しいと見えて、その樹は何代となく生い代わつて、もうもとの株は枯れている。したがうて神話時代の桃太郎原型は、蛇掣入譚のごとくにはわれわれの目に触れる処に残っていない。その代わりにはまた一方の「糠福米福」などともちがって、近世に入つてからの変化が最もいちじるしく、そのいろいろの形が隣を接して併存するがために、これにもとづいてこの口碑の永年にわたつた経過を、大体は推測することを許されているのである。私などの見たところでは、この昔話成長の三つの変化、すなわち、

一、説話が上代においてはやく芸術化し、そのやや成熟した形において広く流传していたもの、たとえば死人感謝譚や紅血欠皿話

二、説話の信仰上の基礎がまったく崩壊せず、したがってこれを支持した伝説はもとより、その正式の語りごとがなおかすかながら残っていたもの、たとえば「蛇掣入」のごとき一部の異類求婚譚

三、最後に説話が近世に入つて急に成熟し、もとの樹の所在は不明になつたが、まだその果実の新鮮味を失わぬもの、たとえば桃太郎・瓜子姫説話の類

こういう二種類、三様式の説話が、入りまじつてともに行なわれているということは、比較研

究者にとってこの上もなく便利なことである。グリムも伝説の若干は集めているが、それはもう痕跡であり、またかの家庭童話とは関係のないものであった。説話が近いころまで信じられていた島々はあるが、それも白人が近よってきたころから、一時にことごとく娯楽用のものにならうとしている。こんないろいろの標本のそろっていた国は、日本以外に決してそう多くはないということは、やがて世人が心づく時がくるであらう。

日本はたしてそういう国であった。ことに近世の二百年ばかりの文明が、そういう状態を作り上げるのに適していた。江戸期から明治の中ごろまでにかけて、都市の生活だけがひとり大いに進んだのみならず、またその中でも一部の者と、村に住するごくごくの少数だけが文字を知っていた。読書階級はほとんど別種族の観があり、新たな普通教育は単にその生活を、なるべく多数の者に模倣せしめようとしたにすぎなかった。事実、大部分の俗衆は残された者として生活していた。文芸に対する態度も明らかに二様あった。たとえば演劇の歴史として今伝わっているものは、わずかばかりのいわゆる見巧者の記録であつて、この以外に別に舞台におどり上つて、赤面の役者を斬ろうとした田舎武士の逸話さえもあつた。町にもまた最初から泣くつもりで、鼻紙を多量に用意していく芝居見物人がいた。井沢蟠竜軒の『広益俗説升』などは、中古以来の語り物や説話を多く掲げて、ことごとくこれ小説なり信ずべからずと弁じている。すなわちそう訓戒しないと信ずる人が多かったのである。あるいはこれが足利時代からの、諸道の職人と百姓との別れ目であつたのかもしれないが、とにかくわれわれの一つ前までの社会には、なんでも茶にしたり趣味にしたがる人々と、ただきまじめにしか物の見えぬ人々とが、相対立して生を営んでいる。

たので、今日はただその一方からの観察だけが、文獻として伝わっている中で、農民芸術はまったく別の足取りをもつて進んでいた。この二種のものの融合が、珍しい世相の混乱を生じたことは、ちょうど冷温二つの潮流の行き逢う海に、ガスが立つのも同じわけであつた。

その中でもただ名前ばかりでは見当のつかぬものに、このごろよく使用せられている「童話」という語がある。日本では口承文芸の童話化ということとは、どう考えてみても古いことではない。少なくとも子供のための話、または子供に向く文芸、そんなものはもと村にはなかったと思う。子供の遊びは本来が自治であつた。かれら自身の能力にかなう発明と保存、それよりも盛んであつたのは模倣である。前代の大衆教育は一般に、ちょうど今日とは正反對の傍觀傍聴主義であつた。成人の言うことすることの中から、各自の年齢に応じて学び得るものだけを汲んでいた。だからまた今よりも早く一人前になりえたのである。しかしいくら昔だつても子供は話をせがんだであらう。だだをこねれば爺婆はすかさずとしたであらう。かれらばかりとの会話は平易であつたらうという人があると思うが、それはそのとおりとしたところで、そのために話は作ることができない。なんとなれば、話は話す人の持っているものだけ、かつて自分も聞いたことのあるものよりほかには、話すことができないのが普通人の技能であつたからである。童話の根原は、要するに選択より以上の何物でもなかった。たくさんある昔話の中から、比較的に子供に似合わしいものをまず話すというのがせいぜいで、それも効果の利不利よりは、むしろ理解の容易なものをとらうとした。これが今日の童話というものの起こりといつて、たぶん誤りはないと私は考えている。

ただしこの選択者の心理の上に働いた外部の事情が、さらに三つほどはかぞえられる。その一つは話術の進歩をうながした力の変化、すなわち子供だけが聴衆だと考える時に、用語を解しやすくするはもとより、さらにまた叙述の省略と敷衍とが行なわれたことである。しかしこれは子供に対してだけでなく、話術は元来がそういうふうな、いつも聴衆の顔色によって影響を受けるものであった。たとえば色町の話はなまめかしく、軍談はそうぞうしいものとなったのも、聞く人柄が知らず知らずのうちに、話す人の上に働きかけていたのである。第二には話者に今日の作家のような特別の準備がなくて、常に自然の印象と記憶力とによって動かされていたことである。家庭の昔話の管理者は、通例は女性であった。母ならば二十何年前に、婆ならば五十年ばかりも前に、かつて自分のおもしろくうれしかった記憶が、子供の智慧つくを見て復活する。ただそれだけが御伽の資料であった。したごうて話者聴者の世代を重ねるほどずつ、興味はおいおいに大人のものから、子供のそれに移っていくので、いつの間にか話の要点がかわり、たとえば「桃太郎」でいうならば、割れて赤ん坊が飛びだしたところ、またほとんどぶりこんぶりと桃の実が流れてきた個条などが、中心かと思われるようになるのである。すなわち大人や青年が、そんなものはつまらぬと思う時代がくると、別に童話にしようという気がなくとも、昔話はしだいに子供らしくならざるをえない。これがまた案外に古風な説話の、小児の間ばかりに保存せられていた理由である。

四 童話とその記録

そういう中でもまだ大人たちの間に、若干の昔話交換が行なわれているかぎりには、児童はまたそれをも傍聴して、始終二通りの種類を知って覚えていたのである。ところがさらに第三の事情として、夜話の衰微ということが重要であった。以前古い話を聞く機会であった庚申や日待の晩に、人がもう徹夜をする元氣も余裕もなくなると、かえって昼日中そちこちに立ちよどんで雑談にふける風は多くなつたが、これにはもう昔話のような長いものは出てこなかった。それから一方にはすこし押し売りのきらいもあったが、年長者が自分の知っていることだけは、ぜひとも語り残してゆきたいという気持、これが書籍の増加と反比例に、おいおいと遠慮深くなつてきていた。以前はこの念慮は一般に今よりもずっと強かった。だから聞いてくれる人があれば、それになつたかしがりが愛したのである。そういう篤志者が一人去り、二人立ちのいて、しまいに残されたのが子供だけ、それも熱心にもっともっとと注文するのは、概して小さい者ばかりになつてしまつた。われわれの昔話は急激に童話化せざるをえなかった次第である。これを要するにこれら外部の事情変化がもしなかったら、われわれの民間説話は決してこのごろのような形にはならなかつた。昔もかりに童話協会の会員という類の人が参与していたならば、無意味なたわいのないお話を、もう少し数多く出していたはずであるが、事實はまさにその反対であつた。同じ話をそうたびたびは聞きたがらぬ児、話をむさぼる子がすこしせがむと、その次に出てくるのはたいはいは

「ためによくない話」であるのみならず、子供専用のごとく心得られている「かちかち山」でも、または「瓜子姫」でも、その内容はすではなはだ殺風景なものであった。これを小児のために最初から、支度せられたと見ることは不可能である。しかも現代の作家たちはそれをそうかと思っているゆえに、自分らのすることのほうがたしかに改良進歩だという誤った自信を得るのである。二つのものはまったく別のものだ。これを童話という一個の名詞で包括していたのがそもそもまちがっている。

私はこの近世の経験に徴して、さらにまた神話が後々の昔話となる際にも、やはりおおよそはこれと似た外部事情の感化を受けて、一種の選択が行なわれたものと想像する。それだから固有信仰のまだ生きて働いていた時代のなごりが、そのわずかに残された破片の中からも、見いだされるのではないかと考えている。この想像が誤っていなかったら、ここにもまた一つの芸術と宗教との交渉点が、将来の考察者のために保存せられていたわけである。われわれの固有信仰が、儒・仏その他の外来思想の影響を受けて、少しずつ移り動いていた間に、なにかまだ明らかになっておらぬ動機によって、古い言い伝えのあるものは形を損じつつも永く残り、他のあるものはつとに文芸化して、興味をもって常民の間にもはやされ、それが後さらに都市の風雅階級に入りこんで、また別様の取り扱いを受けるに至ったことは、そう大きなめんどろなしに誰にでも認められる。ただ不思議といってもよい一つの事実は、多くの文人たちがいつも伝統の拘束を受けて、いまだかつて文学をもって、無より有を生ずるの術とは考えていなかったことである。これらの想像力には目に見えぬ線緒が付いていた。そうして自由奔放にそう遠くの空を飛びかける

ことができなかった。鶯が春に鳴き、鶏が天明を期して高く唱うように、詩歌物語にもそれが出現すべき場合は予定せられていたのみか、さらにその言葉のもつ意味以上に、別に隠れたる連想のこころよい興奮の原因となるものがあつて、それがまたいたって素朴なる前代の生活に筋を引いていたのである。芸術を天才の独創と解し、ないしは各期の社会生活がこれを生むと説く者には、これはたしかにやっかいなる不思議だ。これをなんでもない当然の出来事だと心づくためには、やはりわれわれの子供らしい桃太郎を、頼んでこなければならなかったのである。

今日のいわゆる五大御伽断が、書冊の力をもってほぼ現在の形に結集せられたのは、江戸期も半ば過ぎにできた、『雛乃字計木』ということになっているが、あのころはシナの小説類まで翻案せられていた時代で、何を書いてもよく、またなんと改造しても自由であつたらうに、実際は新聞の雑報などと同じ程度に、おおよそそのころにおける都市の昔話の退歩した状態を、ありのままに映写している。しかもそれが今日の標準型として、さもさ大昔からこの形をもって伝わっていたかのごとく、多くの人をして信ぜしめたのは、まったく文字の魅力とも名づくべきものであつた。記録はただ単に筆者のいた時と処とに、そういう話し方もあつたということを知らしめるのみで、二つある場合に古い記録の話のほうが古いとも言いきれないことは、『宇治拾遺物語』と『醒睡笑』と、二つの瘤取り話をくらべてみただけでもわかる。この両度の採集の中間には四百年ばかりの時間がさまっている。同じ一つの昔話は、一方に誰かの手によって文字になっていることも知らずに、なおこのような久しい歳月をどこかに前の形をもって保存せられていた場合もあつたのである。五大御伽の名称は、明白に誤っていた。これはただ数多い昔話の一つの、

偶然に筆とる者の耳にとまった、小さな変化の一例というにすぎなかったのである。この中でも「花咲爺」などは、比較的その沿革がよくわかつている。これは昔話の最もありふれた形で、われわれのかりに隣の爺と名づけている種類に属することは、前にいう「瘤取り」なども同じである。いくら一生懸命にまねてみようとしても、生まれつき備わった福分をもつ者、または心がけがよくて神に愛せられている者にはかなわないということを、裏表二つの極端を並べ説いて、効果をあげようとした話であるが、これにまたいろいろの小別があつて、犬をたいせつに飼ひ育てて、莫大の財宝を得たというものにも、「黄金小犬」のごとく、ただ金の粒をひり出したというのと、まねする唱えごとのいくつもある複雑なものとがあり、いずれもみなその小犬の出現と成長とに、もとは奇瑞の中心をおいていたことは「桃太郎」と似ている。ところが「花咲爺」にはその点よりもうはぶかれていて、しかも枯木に花を咲かすというだけは違っているが、尻をまくというところまでは越中の「灰時爺」、奥州の「雁取爺」と同じだからその前後のとのうている後の二者よりは新しいことがわかる。それから終わりの殿様に尻を斬られたという部分は、いま一つの隣の爺型の尻ひり爺と共通であるが、これも尻ひりのほうには土地によつて古い形があり、もとは山の神との交渉を語っていた話であつた。それを忘れてしまった「花咲爺」は、これらの爺話の片はしを切つてつないで、後に結構したものゝと断定して、たいていはまちがいがいがないのである。

五 赤本の災厄

それからまた「かちかち山」、これは三種の昔話の継ぎ合わせということがほぼ証明しえらる。その中でも智謀に富む兎が愚直なる狸をあざむき苦しめるという一条は、世界共通の動物説話の、ことによく知られている部分で、ここではただ狸がそのようにまでひどい目に会わされる理由を、爺の名代なぐさしろの仇討とした点がちがつているのである。最初その狸が爺に捕えられた事情なども、近ごろはしごく手短かに述べることになっているが、以前はこれがまたまった一つのお話であつて、要点は石の上に餅をぬつておくの知らず、いつものごとくその石の上に登つて、爺婆を悪口しようとして失敗したことになつてゐた。そういう愚かな狸が中途において婆をあざむき殺し、その婆に化けて爺の帰りを待ち受けていたなどということは、少し考えてみれば不調和は争えないが、この部分がまた北欧の赤頭巾物語と対照すべき、われわれの瓜子姫譚の骨子であつた。ただかれには「糠屋の隅を見よ」ということを、家の鶏が鳴いて教えたに反して、これでは狸がみずからそういつて逃げ去つたという点を異にするのみである。この三通りの昔話は、今でも独立して方々の田舎には行なわれている。「かちかち山」は単にこれを省略し、かつ綴り合わせたという以上に、これという変化は加えていないのである。

次に「舌切雀」と「猿蟹合戦」とであるが、この二つだけはあるいは古くから、こういうまとまつた形で伝わつていたのかと思つてみると、それがやはり少しずつ怪しくなつてきたのである。雀報恩譚は朝鮮にもあるという鰻うなぎの米、柿の種のはうは猿蟹との餅争いなどから筋を引いていることは明らかであるにしても、ただそのみでは話がこのように展開するわけはなかつた。それには他にいま一つの系統のこれに参加した昔話があつたことは、しいてもものしい弁証推理を

やとわずとも、ただおいおいの採集資料のみによって、自然に判明しようとしているのである。今日はまだ何びとも心づいていないようだが、雀と蟹との二つの御伽噺は、相互にも関係をもち、また「桃太郎」の話とも似通うた点が若干ある。少なくとも「桃太郎」一つの成長過程をつまびらかにすることによって、他の二つのものが今の形に変化してきた理由も説明しえられるように私だけは信じている。それでいづれの側面から考えていっても、結局は同じ処に落ち付くのかは知らぬが、同じことならば、目今比較の材料がやや豊富で、手をむなしゅうして今後の報告を待っていないことも、ある程度までの仮定が立てられる部分から少しずつこの問題に近づいてみようとしているので、私の目的は広く民間説話の世に伝わり、また案外に改作増補を受けずして、今まで保存せられていた事情を知るのを第一段とするのである。

今ある桃太郎童話の言い伝えの中で、どの点とどの点とが特に昔から重きをおかれていたかということは、もちろん人によって見方も違うであらうが、少なくともその個々の要素には、類例の多いものとまれなるものと、国の内外を通じて分布の広いものとそうでないものと、非常な差等のあることだけは認められる。たとえば桃の実が割れて、中から子が生まれたということは、日本の桃太郎以外にはないらしいに反して、犬やその他の動物に助けられて、大きな仕事をした話は他国にも多い。犬が猫をおどし、猫がまた鼠を駆使して、紛失した宝物を見つけさせたという話はわが国にもあり、『西遊記』の三蔵法師までが、犬・猿・猪のなかば人間の形をしたのを供につれて遠征し、道々いろいろなしじりや仲間喧嘩のあったことを笑話の種にしている。遠い諸民族の間にもこの点は相似たるものが多いが、その中でもローマの博物館などにいくつも陳

列せられているミトラ神の石像などは、猛牛を退治しているのは桃太郎同様の少年であり、これを助けているのは犬と蟬せみとであって、何びとが見てもこれを動物忠誠譚の古くから世界的であった証跡と感ぜずにはおられぬのである。説話の英雄が隠れたる約束により、もしくは恩義に報いんとする動物の助勢を受けて、非常な難事業に成功したということは、とにかくに日本ばかりの伝承ではなかったのである。

日本の特徴というのはただその英雄の名前であり、またその出現の様式であった。桃が川上から流れてきてその中に赤児があり、それで桃太郎と名を付けたという点ばかりは、隣近民族にもその類似のものを発見せられていないから、たぶんはわが国において新たに出現したものであり、したがって同胞国民の間に、その原因を探り求むべきものであったろう。見のがすことのできない一つの事実は、この点がかねてわれわれの固有信仰の、かなりたいせつなる一つの信条であったことである。『玄同放言』などには和漢の多くの書を引いて、桃の中から桃太郎の生まれる原理のようなものを説明せんとし、それに推服した人もおりあったようだが、かりにそんな想像が正しかったとしても、実際は大したことではなかった。不思議な赤ん坊は必ずしも常に、桃の中からばかり飛び出していたのではないからである。「瓜子姫」の昔話は少なくとも「桃太郎」と同時に並び行なわれ、九州中国にもまれに伝わり、東日本はほとんど至る処に保存せられていた。ただそれが文筆の士に採録せられなかったゆえに、人が久しくこれに心づかなかっただけで、その代わりにはまたいわゆる五大御伽噺に見るような、新奇なる潤色を受けずにすんだのである。

六 桃と瓜

奥州に行なわれる瓜子姫などは、その発端がよほど『竹取』のかぐや姫と近くなっている、末はいま一つのかなり重要な説話につながっている。紫波郡の例を見ると、爺と婆が嫁入支度をととのえに町へ行った留守に、瓜子姫は一人でよい音を立てて機を織っている。そこへ山姥がやってきて作り声をして、指のはいるだけでよいから戸を開けろという点は、グリムの『狼と小羊』やペロルの『赤頭巾』などともよく似ている。この山姥は、他所ではアマノジャクともなっているが、それが姫を殺して小豆餅をこしらえ、自分は姫に化けて、その餅を帰ってきた爺と婆とに食わせ、悪口を言って逃げていくところはすなわち「かちかち山」であって、別の多くの例においては、雀・鶉または鶏が鳴いて事実を親たちに教え、即座にアマノジャクは復讐せられたことになっている。姫はそれと同時にたぶん復活するというのがもとの話し方であつたらう。今でも木のこずえに縛られていたのを、助けおろされたというふうに話す例も少なくはない。

さてこの大きな瓜と大きな桃、それが水上から浮いて流れてきたということは、小児にはもとより感じのよい言葉には相違ないが、要点はむしろ「大きな」ということではなかったようである。もとはおそらくは桃の中から、または瓜の中から出るほどの小さな姫、もしくは男の子、すなわち人間の腹からは生まれなかったということ、それが急速に成長して人になったということ、私たちの名づけて「小さ子」物語といおうとするものが、この昔話の骨子であつたかと思う。

後世のいわゆる一寸法師、古くは竹取の翁の伝えにもそれはすでに見えているのみならず、『諸社根元記』の載録する倭姫古伝の破片にも、姫が玉虫の形をして篋の中に姿を現じたまうということがあるのである。それからいま一つは水上に浮かんできて、岸に臨む老女の手には達したというところ、これがまたたいせつなる点ではなかったかと思う。海からしだいに遠ざかって、山々の間に入って住んだ日本人は、天から直接に高い嶺の上へ、それからさらにふもとにおりたまう神を迎え祭る習わしになっていた。だからまた谷水の流れに沿うて、人界に近よろうとする精霊を信じたのであつた。賀茂の瀬見小河の丹塗りの矢、出雲の加賀窟の黄金の箭もともにそれであつて、その結果は戸の隙間からさし入った日光の金線が、人間の少女の身を射た場合と同じかつたのである。「桃太郎」の桃が「瓜子姫」の瓜よりも後のものであつたことは、そう多くの臆測を借らずとも容易にこれを認めることができる。瓜類が中うつろにして自然に水の上を浮きただよう事実は、非常にわれわれをしてその内にあるものをゆかしがらせていたのであつた。後世のうつぽ舟説話を成長せしめたもとの起こりには、新羅の朴氏の始祖が鰐に乗って、日本から渡ってきたというような例もある。これと白鯊の皮で作った舟に乗り、鶴鶴の羽衣を着て、潮のまにまに流れ寄つたというわれわれの小男神の物語とを比べ合わせてみると、最初異常に小さかつたということが、その神を尊く、また霊ありとした理由であつたことは察しえられる。

これが桃太郎の鬼が島征服の話と復合するにいたつた主要な点のように私は思う。ドイツの私たちは、人文神などという語を設けているようだが、われわれの説話の上代の英雄にも、かれと共通した運命の前定があつた。常人すらなおうとい企てがたしとする難事業を、はじめは普通

以下のごとく見た者が、なんの苦もなくやすやすとなしとげた。これ奇瑞であり、これ天意でなくして何であらう。すなわち一種族の幸福を指導するの力があつたのも偶然でない。ゆえに伝うに足る。また伝えざるべからずという考え方を、昔の人たちはしていたらしいのである。だからアジアでもヨーロッパでも、現在知られている英雄の成功譚には、単に小さくて弱々しい者であつたという以上に、非常な貧乏人であり、極度のなまけ者であり、または少なくとも外見には法外なおろか者でもあつた。この四つの条件の二または三を兼備して人からかえりみられなかつた者が後にえらい事をしている。これをただ桃や瓜の中から飛び出したというだけにしたのは、われわれのほうの単純化であつたかもしれない。とにかくに国内に瓜や鶯の卵や竹の中から出た例もあることを知らずに、むやみに子供のように桃というただ一つの特徴をとらえて、桃の話ばかりを搜してみようとしたのが、『玄同放言』とその随喜者たちであつた。そんな比較などはしてもらわぬほうがよっぽどよかった。

七 妻もとめ

比較をするくらいならば、異なっている点も考えてみなければならぬ。たとえば遠征の目的のごときも、日本の昔話のほうはやはり単純化している。西洋の「桃太郎」たちの大旅行は、必ずしも財宝を持って帰るというためばかりでなかつた。むしろそれを手段として、よき配偶者とよき家を得、さらによき子をもうけて末永く榮えんとしているのである。われわれの側でも瓜子姫

だけは、この幸福なる婚姻をもつて結末としているものがあるが、あちらでは男性の冒険者も、同じくその珍しい宝物を持ってきて、ついに王様の御となつた話が多いのである。察するに近代の「桃太郎」は子供を主人公にしたというよりも、むしろ子供にのみ聞かせる話であつたために、計画をもつてこの重要な妻覓ぎの一条をはぶいたのであつた。奥州民間の「桃の子太郎」というものには、地獄から手紙を持って鳥がきたので、この遠征を思い立ったというのがある。そうして黍^{もち}団子を携えていって地獄の門番の鬼を懐柔し、地獄のお姫様を連れて逃げてくる。それを大鬼が火の車で追うてくるというなどは、すこぶるまた御伽の「御曹司^{おせうし}島渡り」とも似ている。「桃の子太郎」の桃は夫婦の者が花見に行つていたおりに、女房の腰のあたりにころがつてきたことになっているが、それと近い昔話には「スネコタンバコ」というのもあつた。すなわち子を祈る女房の臍^{はら}から生まれたという親指の頭ほどな小き子であつて、これも長者の娘を嫁にもらいにいったということが、かの「一寸法師」の草子と共通の話し方をそなえている。信州木曾の小き子嫁の伝説というものは、すでに破片となつてもとの姿をきわめがたいが、あまり小さいので臼に入れて育てたといひ、あるいは笠のかけにおおわれて見えなかつたといふことだけは残っている。ところがこれがわが国の神子譚の至つて古い形であつたと見えて、九州にもまた東北のそちこちにも、神に祈つて授けられた申し子が、笠の中にわだかまつた小さな小蛇であつた昔話が伝わっている。これも大きくなって妻求めをして長者の家を訪問することは、他の多くの蛇姫入話と同じきものがあり、終わりに花嫁の力によって壮麗なる人間の若者の姿に復したといっている。書伝はこれを逸してすでに年久しいけれども、われわれの祖先の間にはこの説話はか

つて広く流布していたらしいのである。大和の三諸岳みもろだけの霊神との因縁を語り伝えていた小千部連氏は、その家名の由来として別の説を録進しているが『日本霊異記』の最初の数条を読んでみると、同じ語部かたりべはまた頭に蛇をまとわせた霊童の誕生をも説いていて、上代の小千部連を管理した者は、この家もまたその一であったことが察せられる。私はかつてこの問題を細叙して、古伝も時あつて信すべからざる場合があるという説を立てた（参照「民族」二巻四号。若宮部と雷神）。それはまだ十分なる論拠とはいわれぬが知らぬが、少なくとも小千部出現の昔話は古かつたのである。それからなお一方のなまけ者と貧乏人とが、美しい上臈を妻に得た話、これも同じく太郎という名をもって日本に行なわれている。古い記録では「物草太郎」の草子、枕もとの団子も拾って食おうとせぬくらいズクなしであったが、後によき妻を得、かつ立身してさらに神となった。隣りの寝太郎を婢にとれという話などは、私たちも小さい時から聞いているが、周防ではそれが寝太郎ねたろう荒神の縁起と化して土着している。沖繩ではこれとよく似た話が『遺老説伝』に出ており、さらにさかのぼって『宇治拾遺』の「あめが下のみめよし」などは、二目と見られぬ面をしたならず者であった。これがいずれもみなやすやすと長者の婢になる話であつて、いわば身に負わぬ大望と、その案外な成就とが、よほどはやくから説話興味の中心をなしていたのである。このほうの類例ならば、外国にもいくつかを見つけられる。もちろん笑話となつてからはこれをもてはやした動機も変わったろうが、なんにもせよ、これだけの結構をあえてしえざる人々が、すでに話の趣意を忘れてしまつても、なお久しくこれを語り伝えていたのだから、その一つ以前の起こりというものがなくてはならぬのである。西洋の学者たちには、非常な労苦をもつてこの根源を

突きとめ、かつこれを証明しようとしている人も多いようだが、気の毒ながら、あちらにはもうその資料が乏しくなっている。これに反してわれわれのほうでは、まだ幸いに同じ母語の圏内に、いろいろの比較に供すべき生きた昔話をもっている。生きたということは、昔話には似つかわしくないが、とにかく純乎たる文芸の目途から、これを改作しようとした者のなかつた話し方が、今なお凡人大衆の間には伝わっているのである。橋はもうなくとも飛び石だけはある。われわれはそれを踏んで神話の彼岸まで渡っていけるのである。最も簡単な一語で結論を下すならば、こういう昔話の起こりは古かつた。すなわちある最高の意思、もしくは計画のもとには、貧しい大工の女房の腹からでも、イエス・キリストは生まれえたと同様に、いたつていやしい爺と婆との拾い上げた瓜や桃の実の中からでも、鬼を退治するようなすぐれた現人神あらひとがみは出現しうるものと信ずる人ばかりの住んでいた世界において、この桃太郎の昔話も誕生したのであつた。それから以後のいろいろの変化は、単なる成長であり、ないしは老衰であつて、われわれはこの一つの生きてゆくものに、新たな生命を賦与する力はもたなかつたのである。

八 昔話のもとの姿

この推定は今はまだ大胆と評せられるかもしれないが、これを側面から証明しうる資料に、前にも一言しておいた蛇蛻入譚、すなわち説話流伝の第二の様式によつて、固有信仰の推移のいくつかの階段にある口碑と並び行なわれて、今もその間にこまかな比較を許される説話がある。われ

われの「桃太郎」は幸いなことに、これとも若干の連絡をもっていた。神が小蛇の形になって、人間の美女に求婚したという話は、上代の百襲止々姫の記録にも残っている。すなわち錦の文ある小さな蛇が女のたつての望みにまかせて、櫛笥の中にその姿を現じたというので、その神がやはり小蛇連の祖が迎え申したと称する三輪山の後の高山、三諸岳の大神たる大物主であった。これなどは明白に神が小蛇の姿になって現われたので、蛇が神として拜まれていたのではなかった。単に人間の娘には蛇としか見えなかったというだけである。しかるにそれをただ霊ある蛇体が、人の美しい少女を恋慕うものと解するようになって、しだいにわれわれの忌みは恐れとなり、これを災難のごとく厭い避けて、ついには祈禱や武勇の力をもって、撃退しまたは報復したという伝説を生じ、さらに一方には白を負うて水に墮ち沈み、あわれな辞世の歌を詠んで流れたという、猿蟹人の童話をさへ生ずるにいたった。これ疑いもなくこの国人の信仰の変化のあとであつた。

この美しい錦の小蛇という想像の起こりも、私たちにははばわかつている。これは今でも稲妻の名をもって呼ばれる電光の形から、これを太陽がこの世に通おうとする姿と考えるにいたつたので、あるいは黄金の筈とか丹塗りの矢によそえたこともあつたが、実際に天から人界にくだつてくる火の線は、蛇のようにうねり、また走つていたのである。次にはその光の蛇が妻を覓めんとした目的も、日本でならばまだ跡づけえられる。すなわち人界に一人のすぐれたる子をもうけんがため、天の大神を父とし、人間の最も清き女性を母とした一個の神子を、この世にとどめようがためであつたらしいのである。蛇蟹入説話の一要素、一方これがまた伝説の中心として、意

外に年久しく信ぜられていた一点は、当の本人の妊める少女、もしくはその血族や従者が立ち聞きをしたことであつた。竜蛇は鉄針の毒に苦しみもだえつつも、もはや人間に胤を残したから、死んでも恨みはないなどとうめいていたというのは、痛ましい古信仰の衰頹の影であつたが、しかも伝説の場合においては、これを保管する者は必ずその美女の出た家、すなわち水の神に奉仕した神職の家であつた。かれらの何びとかが立ち聞きをしたといわなかったならば、いわゆる蛇蟹人の神秘なる理由は、人間社会に知られかつ伝わらないはずであつた。今日の伝説は、通例外部の噂として流布しているのであるが、私どもの経験では、その家でも多くはこれを否認せず、また必ずしも恥じたり、迷惑に思つたりしてはいないようである。今ならばとうていありえないそういう不思議な話が付きまとうているのも、つまりは家が古く、かつ土地との関係が深いからだと、人も解しわが家でもそう見ている。また一朝一夕にはこれがないものにしてしまうことができぬくらいに、根強くかつ一般的なる信仰でもあつたらしいのである。

日本の小さな説話が、最初小さな動物の形をもって出現した英雄を説き、または奇怪なる妻問いの成功を中心に展開しているということは、それが右申す神人通婚の言い伝えのまだ固く信じられていた時代にはじまつている証拠として、われわれにとつてはかならないせつな要点であつた。しかるにその点をいわゆる標準御伽の「桃太郎」のみが、なんの考えもなく取り除いてしまつていたのである。それと同様に「一寸法師」でも「物草太郎」でも、日本でならばそれが最後に神と現われて、永くまつられたというわけもわかるのであるが、外国の民間説話はこれを單なる凡人界の出来事とし、ただ一個極度の幸運児の立身出世をもつて、話の結末を付けることにな

つているために、もうその起源をきわめることがだいぶん困難なように見受けられる。つまりはとくの昔に神話から分離してしまつて、他にはその連絡を暗示するだけの、なんらの口碑も保存せられておらぬゆゑに、かりに見当はついても安全にこれを論証する途がないのである。この意味からいって、われわれはまだたのもしい国に生れま合わせたと言ひうる。むやみに洋人の通つた跡ばかり踏んでいこうとさえしなければ、これほど変化しきつた「桃太郎」の中からでも、なおこれを語りはじめた人たちの心持を探つてみる事ができる。神から送られたわれわれの救い主は、いつまでも変装していて最初はあるなどられ、後には必ず奇蹟によつて発覚するものと信じられていたらしいのである。日本でのいま一つの例としては、「山路の牛飼」と称する古い歌物語があつて、舞の本の「鳥帽子折」にも記録せられている。これは舞の手ぶりが非常におもしろかつたと見えて、幾度か後世の浄瑠璃の題材ともなつてゐるが、要点は古今おおよそ同じであつた。牛に乗つて笛を吹く草刈り童は実は天子で、長者の娘を恋ひ慕うて、身を下賤にやつしてはるばると都よりお下りなされた。八幡の祭の日の流鏑馬に、何びとも知らなかつた射術の神秘をお示しなされたら、社殿もこれがために動揺し、すなわち神よりも尊いお方なることが現われたと語つてゐる。それを『用明天皇職人鑑』などと題したのは、姫を娶つてその間に生まれたまう太子を、日本の太子の中の最も賢明靈異なる聖徳太子の御事だと推定した結果であつたが、それは歴史とは合はぬことであるがゆゑに、歴史の学問が少しでも進むと、これを改訂してできるだけ信じやすかつた。だから奥州の荻田宮には日本武尊、越前・羽後では継体天皇、薩摩や土佐では天智天皇の御逸話と解して、しかも伝説として今もなおこれを信じたがつてゐる。神が形

を錦の小蛇と現じたまいしか否かによつて、末々の口碑はこれだけの大きな差異を生じたが、説話の蛇蛭入も伝説の用明天皇も、神が思いがけぬ姿をもつて人間に降臨なされたというもとの意は一つであつた。もちろんこれはすべて最初は非常に崇敬なる神秘であつて、凡人の決して常の日に口にすべからざる教訓であつたろうが、歌と舞姿とによつて年に一度、その記憶をよび返す日のおもしろさに引かれて、後に信仰がゆるめば人はこれを娯楽の用に供した。これが芸術の分立して、独自の発達をとげた因縁であつたろうと私は信じてゐる。酒や美女の紅粉が常の日のわざとなつたごとく、祭の日の語りごととはわれわれ遊宴の興を助け、舞は演劇となり、説話は童子の夜眠る前の慰みとまで零落し、かつ変化しおわたつたのである。あるいは零落というのはあまりに尚古趣味にとらわれてゐるのかもしれないが、少なくとも今はこの程度にまで利用の途がかわり、また異なる人々の悦の具となつたので、ちょうど太古の偉大なる杉葉・つくしんぼうが、今日の石炭になつたのと事がよく似てゐる。これは石炭の物理を研究する人には、あるいはなんでもない事実なのかもしれない。しかし私のように杉葉の植物学、もしくはつくしんぼうの自然史を知ろうという者にとっては、微々たる一片の桃太郎昔話も、なお万斛の感慨を催さざるをえぬのである。

(昭和五年一月、桃太郎の話をきく会講演)

犬子噺

全国の「灰まき爺」が童話化したのは、もうよほど久しい前からのように思われるが、それでも多くの新採集を比べてみるうちには、だんだんと古い形が現われてくる見込みがある。現在知られている七、八つの例の中からでも、古い新しいは他日の論として、とにかくにこれと「桃太郎」との連絡だけは見つけ出すことができる。たとえばよい爺の飼っていた小犬は、松村武雄氏の著とある『日本童話集』には、
子供が一人もありませんので、白い犬を一匹飼って、それを子供のようにかあいがつていました。

というのみであり、他の普通の「花咲爺」にはそれを白犬とすらいわぬものも多いが、爺が金持になった奇瑞の根本には、実際はそのかしこい小犬の不思議なる出現ということがあったらしいのである。森口多里氏の集められた胆沢郡の昔話『黄金の馬』では、上の爺と下の爺とが川に魚をかける。上の爺の簀に小犬が一匹引っかつたのを、怒って流れに投げ込むと、それがまた流れて下の爺の簀にかかる。下の爺はそれを拾い上げて、太郎と名づけてかわいがって育てる。皿で飯を食わせると皿ほど大きくなり、碗で食わせるとまた碗ほど大きくなるので、その次には臼で食わせた。そうしてたちまち大きくなって爺様を背に載せて、山へ出かけて数多くの鹿を捕らせたということになっている。石井研堂氏の『国民童話』に採録せられたのは、青森県上北郡

浦野館の「灰まき爺」であるが、これも心のよい下の爺が掛けておいた簀に白い小犬が流れてきてはいつていた。それを白妙と名づけてかわいがって育てたといっている。岩手県江刺郡の昔話においても、

二人は一しよに川に簀をかけた。ところが上の爺の簀には小犬が入り、下の爺のには多くの魚がはいっていたので、さきに揚げにいった上の爺は腹を立て、下の爺の簀の中へその小犬を投げ込み、自分は下の簀の魚をば皆取って、知らぬ顔をして帰ってきた。

といっている。同じ県の『紫波郡昔話』の中にあるものも、順序はあらかじめこれと同じだが、い

ま少し様式が「桃太郎」に近い。それでその第一節だけを原文のままで載せると、
上の爺と下の爺と二人で川に簀をかけた。上の爺はまだ夜も明けぬうちに往つて見ると、自分の簀には大きな木の根株が入つてをり、下の爺のには雑魚が沢山入つて居た。そこで自分の簀の根つこぶしをば、下の爺の簀に投入し、下の爺の簀の雑魚をば、自分の簀に入れて持つて来た。夜が明けてから下の爺は往つて見ると、自分の簀に大きな根株が入つてあつたから、持つて来て日向に干して置いた。いい加減に乾いたから斧で其根株を割りかけると、中から「爺、静かに割れ」といふ。それで静かに割ると一疋の狗児が出て来た。それを大切に養ひ育てたところが、碗で食はせると碗の大ききだけ、鉢で食はせると鉢の大ききだけ、臼で食はせると臼だけ大きく育つた。

これと同様の発端は「旅と伝説」の昔話号（二七頁）に、岩手郡雫石村の例が一つある。『老嫗夜譚』（二二〇頁）に採集せられた上閉伊郡の「雁取爺」も、なれば笑話に化していてなおこの型

を保留している。小犬が木の根株の中にいて、「文福茶釜」の狸のように、「爺様そつと割れ、そつと割れ」といったなどというのは、思い切って奇抜な空想のようであるが、これも佐々木喜善君の『聴耳草紙』(二〇五頁)に、同じ例がなお一つある。必ずしもある土地かぎりの新しい付け加えではなかったのである。しかもこの靈妙なる白い犬が殺されてその跡から木が生えるということ、九州以南の「黄金小犬」ともよく似ており、それが臼にきられ、最後には灰になってまで、常にもとの飼主のよい爺にのみ幸いした点は、すべて現在の「花咲爺」と同じいのだから、後者が考えなしにある一つの重要な簡条を脱落していたことは想像してよからう。すなわち以前はこの小犬もまた桃の中の桃太郎のように、遠く不可測の川上から、縁ある者のほうへ流れ近づいてきたと説いていたらしいのである。それがただ単なる偶然の一致であったか、ただしはまだ底につながっている縁の糸があったかは、私には必ずしも決しがたい問題とは思えない。今までに集まっている諸国の資料だけでも、ある程度までは両者の連絡を証することができるようであるが、それはまず各人の判断次第として、ここにはただわれわれの注意すべき事実を注意するだけにとめておこう。大田栄太郎君が「国語教育」の昭和五年一月号に報告した、越中上新川郡の「灰時爺」では、爺が山へ柴刈りに行った留守に、婆は川へ出て洗濯をしていると、水上から大きな桃が流れてくる。それを拾ってきて爺に食わせようと思って、家の庭の塙はらの中に入れておいたところが、爺が帰って蓋たかをのけてみると、桃ではなくて一匹の犬ころが入っていた。大事に育てているとだんだんに大きくなり、それから以下は奥州の「灰まき爺」とほぼ同様に展開している。

それとはちょうど逆に、東北地方の「桃太郎」には、桃でないものが流れてきたという話がある。たとえば出羽の庄内の「桃太郎」は、堀維孝氏の記憶によると、婆が洗濯している所へ箱が二つ流れてくる。

かーだこん箱あっちゃえけ

みーだこん箱こっちゃこえ

と唱えて、寄ってきた箱を取り上げてみると、その中には桃が一つはいつている。家に持って帰って爺様と二人で食べようと思つて、しばらく神棚に上げておいた。晩に柴刈りにいった爺がもどってきて、その話をするのを忘れていううちに、不意に神棚から赤子の泣く声が聞える。不思議に思つて上を見ると、その桃が二つに割れて、中から男の子が生まれておつたといったそうである。「みーだこん箱」は中に実のある香箱かぐはこということ、香箱は多くの子守唄にもあるごとく、以前の小児のほしがる玩具であった。すなわちこの話はすでに童話化していて、なおこういう形にも話されていたのである。内田邦彦氏の『津軽口碑集』には、これと関係の深い話が二つ出ている。その一つはこれも婆様が川に出て、川上からきれいな筥はこが流れてきたのを拾い上げると、中には桃の実が一つはいつている。爺様に見せようと思つて筥の中はこの中に取つておいた。その夜山から爺様が帰つてきて、夜中に筥の中はこの中で幼児おぼこの泣く声がする。桃から生まれたんで桃太郎と名をつける。それがだんだんに大きくなって、黍団子あまみちを持って鬼征伐に行く話である。いま一つは桃太郎でなく尾羽剪雀おはさずの話であるが、これまた婆が洗濯に行くと、川上から鳥籠が流れてきた。きたない籠はあちへ行け、きれいな籠はこちへこいというところになった。婆様は大喜び

で鳥籠を家に持って帰り、「爺むし爺むし、きれいな娘こ一人拾ってきた」、「ああそうか、娘ならこの糊をすらせろ」といったとあって、籠には何が入っていたのかはつきりせぬが、糊をすりながらちゅんと鳴いては糊を食い、またちゅんと鳴いては糊を食って、とうとうみな食ってしまったので、爺が怒って尾を切って追い出したとあるのは雀である。それから後はただ爺婆がさかさかになっているだけで、他は普通の「舌切雀」と異なるところがないのだが、これも考えてみると、どうしてそのような非凡な雀が老夫婦の家に来たかは、いわゆる標準御伽のほうでは言い落としているらしいのである。喜田貞吉氏の話によれば、阿波でも「桃太郎」の桃が流れてくる代わりに、瓜が流れてきて、その中から出た雀が、舌切雀になるというこみいった筋もあるという（郷土研究「二卷二七六頁」）。これがこみいったもののように考えられたのは、むしろ今日の五大噺なるものが公認せられた結果ではないかと私は思っている。阿波には通例の桃太郎はもとではなくて、黍団子を半分やって栗・欒・白などを家来とし、猿が島を征伐にいったのは蟹の子であった。能登でも島渡りの童話はやはり「猿が島の敵討」であって、桃太郎は単に川上からいくつもの桃が流れてきて、その一つの中から桃太郎が生まれたというところをもって終わり、その後の立志談はなかったと、尾佐竹猛君などはいっておられる（同上五〇四頁）。狸のかちかち山の中段が「瓜子姫」であったと同じく、「花咲爺」の犬子噺が桃の実と結びつくことになったのも、その川上を求むれば必ずしも偶然であったとはいえないごとく、雀も猿も実はある一つの肝要なる昔話の、流れて推移した種々の形相であった。しいてこの五つを対立せしめようとした歴代の碩学たちは、実はこの問題を難解に持っていた功勞しかなかったのである。

あくど太郎

「猿蟹合戦」では、今ある親の蟹を討ったという話よりも、猿にいじめられた弱い蟹が、多くの友の援助を受けて、相手を撃退したというほうが古くはないかと思う。二つの動物が田を作り餅をつき、または人の家から餅臼を取ってきて、分けて食おうという段になって争いをする。無理を言ったほうが結局は負けるという話は、猿と蟾蜍について最も多く語られているが、その蟾蜍が蟹になり、餅が握飯から柿の種と変ってゆくのは順序が自然であって、このほうにはまた猿が腹を立てて蟹をおどし、蟹が困って泣いていると、臼や牛糞などが寄ってきて力を付けるという、後日譚も続きやすいのであった。昔話の争闘は、できるだけ善悪勝敗のけじめをはっきりとさせてある。強くして暴虐なる者が眼前に攻め滅されるという簡条は、聞き手が子供でなくとも最も愉快なる大団円であったに相違ない。それを親が殺されて敵が勝ち、子供が大きくなってから仇をかえすということにしても、なお辛抱して人が聞いているようになったのは、話術の進歩でもあれば経験の増加でもあった。あるいは曾我兄弟の物語などが、こういう長たらしい復仇計画の期間を、普通のことのようにならせたことになったのかもしれない。一つのよい例は全国どこにもある「山姥と牛方」の昔話であった。山の峠で非常に苦しめられた牛方が、里に逃げ下って山姥の家に忍び込み、その晩にすぐにだまして相手を退治してしまうというところは考えてみるとできそうにもない話であるが、そういう話し方は一般に久しく行なわれていた。ところがこ

れもまたいつの間にか、小さな孤児が後日に敵を討つといって、復仇はようやく二代がかりになろうとしていたのである。

これには別にしかるべき理由のあることで、もしこの変遷をも考えずにしうて国際の比較を試みようとするれば、おかしい結論におちいるべきことは「桃太郎」の桃も同じであつたろう。だから標準御伽の現在ある形をもって、古来ただ一つの正しいものと見ることはやめなければならぬ。その前にいまだ少く各府県の異なる形の、いかにして発生したかを考えてみる必要があるようである。近ごろになってまるで無視せられてしまったのは、昔話の英雄の異常なる出現、すなわちただの女の腹からは生まれなかったことと、同時にその普通でない成長のしかたであるが、人が昔話は作り事、どうせありもせぬことをいうのだと思うようになって、かえってこの要件には重きをおかぬ結果を見た。しかも前代の常識においては、これほど人を感動させることはなかった。ある一人の童子が誰にも予期しえぬような難事業に成功したとすれば、それは必ず生まれから違つていたろうと思ひ、もしくはそれと反対に、不思議の誕生をするくらいな人間だから、鬼が島の宝でも取つてこられたのだと解する風が、われわれの祖先には行きわたつていた。したがうて蟹や雀の大勝利という話が、かつては発端において桃太郎とよく似ていたとしても、必ずしも奇怪でなくまた混乱でもなかったと思う。その上に人が時あつて異類に転身し、もしくは鳥獸草木の姿をそなえつつも、人と同じく思惟し咏歎しえたということも、きわめてありふれたる上代人の考え方であつた。桃や瓜の中からでさえ生まれると認められた者が、しばらくは小蛇・小犬の形をもつてわれわれの間にいたとしても、それだけが特に不可思議というほどでもなかつたのである。だからこのいわゆる五大蛇の相互の類似なども、ことによると、それがあつた一つの根幹から、わかれて変化していった経路を暗示する、偶然の痕跡であるかもしれぬと私などは思つてゐる。

ただしそれを言いきるためには、もっと多くの材料の集まつてくる時を待たなければならぬのだが、ある程度の仮定は今だつて成り立たぬことはない。たとえば『老嫗夜譚』（二一三頁）に採録している雀の仇討などは、実はわれわれの「猿蟹合戦」と比べて、どちらが転用だということが容易にいえないほどに、自然なる話の運び方を示している。昔一羽の雀が竹藪に巢をかけ、卵を温めていた。そこへ奥山の山母（やまはは）が来て、雀々、その卵を一つくれないかという。雀は恐ろしいので一つやると、また一つ、また一つと卵をねだつて、最後にはその親雀まで引き裂いて食つてしまつた。その時たつた一つの卵が巢からころげ落ちて、藪の中で孵（かえ）つて大きくなつた。それがなんとかして親の雪を取ろうと思つて、あつちの稲架（いなば）から一穂、こちの稲架から一穂の稲を集めてきて、それで団子をこしらえて背に負うて、「米の団子の本団子」とふれてある。そこへ向かうの方から栃の実がころがってくる。それからまた針と蟹と牛の糞と臼とが順々にやつてきて、いづれも問答をして、雀の企てを聞き、団子をもらつて味方になる。そうして山母の屋形に忍び入つて、敵を打つ手続きは蟹の昔話とまったく同じである。

この話に対するわれわれの興味は、第一に、蟹が計入りの連中に加わつてゐることである。普通の「猿蟹合戦」では、蟹は一役を分担してゐるだけであるが、ここの雀はかえつて戦闘員を統括してゐるのである。第二には、たつた一つの卵の中から生まれたという点が、古くある竹取翁

の一異伝と似通っていることである。雀ではないけれども、卵から英雄が生まれたという言い伝えはなお他にもある。第三には、山母の無法なる誅求と残虐とが、いわゆる「牛方山姥」など一致した話の型であって、しかもその山母は留守のうちに敵の忍び込んでいるのも知らず、ここでも寒い寒いといって罫炉裏に踏みまたがってあたっていた。これがまた普通の「牛方山姥」と「猿蟹合戦」との共通した点でもあった。牛を食った山姥の退治譚は、前にもいとうとおり親の讐ではなく、その日のうちに被害者の牛方が報復することになっているのだが、奥州の三戸郡には、また次のような一例もあった。八戸市の「奥南新報」の昭和七年新年号に、小等原梅軒氏の随太郎の童話というのが出ている。少し文飾が過ぎているが、要点だけを抄すると、

身持ちの女房が一人で留守をしているところへ、山姥がやってきて、酒を出せ肴を出せといひ、いろいろ乱暴したあげくに、その女を頭から食ってしまつて帰っていく。その跡へ夫が戻つてきてみると、炉のわきに山姥の食いあました女房の踵が落ちてゐる。それをたいせつに紙の袋に入れて引つ掛けておくと、ある日その袋がかさこそと動くので、怪しんでおろしてみたら、踵が二つに割れて、中から男の子が生まれてゐた。それをあくど太郎と名づけて大事に育てると、一杯食わせると一杯だけ、二杯食わせると二杯だけ大きくなって、後にたくましい男になった。母が山姥に食われた話を聞いて口惜しく思い、寒い冬の日山姥の小屋を尋ねていき、だましてその悪婆を殺してしまふ点は、大体に他の地方の「牛方山姥」の話に似ている。この話の中でも珍しく思われる点は、石を炉の火で焼いて、餅だといって山姥に食わせること、これは多くの山村の山人口碑に、最も多く伝わっている人間の計略であつた。それがこの話の中

にも挿話風利用せられてゐるのは、これに無名の作者があつた証拠である。第二には女房の踵だけが、しなくて食われないので食い残されてゐたということ、ずいぶん殺風景な滑稽ではあるが、これもしばしば灰まきの雁取翁などに用いられてゐる。隣の慾深爺が灰をまくと、雁の目には人らずに自分の目に入つて、雪隠の屋根からころがり落ちる。それを雁かと思つて婆様が棒で打ち殺して、雁汁をこしらえて食つてしまふ。その中にしなくて済みきれないものがあるから、なんだと思うと爺様の耳であつた。またはいま一つのものであつたともいふ。これも座頭の坊などの悪い趣味かと思うが、ただその中から強い赤子が生まれたというだけは、他にはまだ聞いたことがないのである。

故高木敏雄君はその「桃太郎新論」において、今から二十年も前にすでにモモ太郎のものは、人間の股ではなかつたかと説いている『日本神話伝説の研究』五五頁。しかしあの時分は、まだそれを裏書するだけのごく確かな資料というものはなかつたのであるが、それから十幾年を過ぎて『紫波郡昔話』が公けにせられ、その中には花見をしている女房の腰のもとに、桃の実が一つころがってきて、それを持ち帰つて綿にくるんで寢室におくと、桃が二つに割れて、その中から生まれたという桃の子太郎の話がある。それから子を祈る女房の脇に生まれ、生まれた時には小指ほどの大きさであつたという「スネコタンバコ」の話もあつて、両者はともに不可能に近い妻問いをして成功している。桃が単なる言葉の誤解であつたという証拠にはまだ不十分であるが、少なくとも神童が尋常を超越した状況の下に、この世に現れ出たという語りごとの一つに、股から生まれた股太郎もあつたというだけは認めえられる。また以前、吉田巖氏が報告した十勝ア

イヌの昔話に、オムタロ・シタロなどというはまさしくこれであった（『郷土研究』一卷七号）。オムは蝦夷の語で股を意味し、爺婆のオムから生まれたゆえにオムタロと名づけられた。成長の後、舟をこしらえてもらって海に出で、鬼が島に渡って博奕ドコロをする鬼を追ひ、あまたの財宝を得て帰ったことは、桃太郎よりもむしろわれわれの「団子浄土」の話と一致している。それを隣の少年がうらやんでまねをして、失敗して満船の糞を持つてくる。シタロのシは、アイヌ語の糞であった。この話はアイヌが近接する日本人から学んだらうという想像は、太郎という童児の名一つからでも成り立つかと思う。でも金田一氏の集めた『アイヌ昔話集』を見ると、かれらの中にも錦ニシキに入られて川上の大きな里から、流されてきたなどという童児の話もあって（『日本童話集』下巻）、その展開の形はかなりわれわれのほうにあるものもとちがっている。だからこの話のごときももとはあちらにあり、あるいは双方に独立して生まれたということもいえるかもしれないが、かりにそうであってもわれわれの昔話に、鰯イサナから生まれ、または鰯から生まれた偉人もあったという事実だけは争えない。少なくとも桃を主眼とした「桃太郎」研究が、詮なき辛勞であったことはもう明らかになっているのである。

海神少童

一 はなたれ小僧様

最初に私は五つの著名なる今日の御伽噺が、どうやら互いに関係のあるもので、五つ別々に成育してきたのではないらしいということを書いてみた。この次にはずっとかけ離れた各府県の昔話の中に、これと縁があつてしかも忘れられていたものが、いくつかあるということを説くのが順序である。昔話は伝説とちがって、記憶する者が自身これを信ぜず、したがって人をして信ぜしむる必要がなく、その記憶はまた多く子供の時のものであつたゆえに、きまじめにこれをわれわれに向かつて語る人がまれであつて、今までその採集はいっこうに進んでいなかったが、その代わりにはへたな研究者によっていじくりまわされておらず、一つ見つかると一つだけの新しい暗示が得られる。問題はそれがあまりにひどくこわれてしまわぬうちに、どうすれば精確にできるだけ多くを記録しておかれるかであるが、しあわせなことにはこの十数年以来、思いがけぬ地方から幾人かのすぐれた伝承者が現われて、熱心なる採集家と遭遇したのもあれば、あるいは自身直接にその記憶を筆にしようとした者もあった。初期の若干の記録の互いに相知らず、なんらの予測なくして偶然に一致しているものは、特に将来の研究のために貴重なる資料であるが、

その中でも国の南北の両端において、古来一度も比較を試みられたことのなかったものが、はじめてこの採集によって顕著なる類似を認められ、もしくは意味ありげな部分的の相異を注意せられるにいたったのは、まことにわれわれにとつては逸すべからざる機会というべきである。いたずらに採集の完備を期して、再び書冊の不当なる統一のために、いわゆる五大嘶のごとき混乱を招かぬようにしなければならぬと思う。

そこでまず最も意外なる九州の一つの例を援用して、桃太郎説話の古い姿を尋ねていく^{しる}。これにしてみたいのである。これは熊本県でも北の境、玉名郡の真弓という山中の小部落に、長く伝えられている昔話であつて、その話の中に出てくる南関の町に生まれた、多田隈正巳君の報告するところであつた〔旅と伝説〕二巻七号。主人公はハナタレ小僧様などというおかしな名をもつて呼ばれ、話の運びにも童話らしい点はいたつて少ないが、神童出現の奇瑞と、よい爺が富貴になつたという点では、すでに他の多くの申し子説話と一致しているのみならず、その前後の細々とした筋においても、必ずしも話者の予想したごとく孤立のものではなかつたのである。できるだけ手短かに大要を抄すると、

昔この里に一人の老翁があつて、毎日山に行つて枯枝を拾ひ集め、それを関の町へ持ち出して売るのが渡世にしていた。

ある日その薪が売れないので、町の中を流れる川の上の橋に休んでいたが、なんと思つたか背の薪を取りおろして、竜神を念じつつそれを橋の下の淵に沈める。そうするとなんとよいえな

いよい心持になつた。

その時に水の中から、美しい^{じようろう}上臈が小さい、ほんとうに小さい一人の子を抱いて現われてきた。「爺よ、お前が正直で毎日よく働くのを、竜神はたいへんに喜んでおられ、その褒美にこの子供をお預けなされる。この方の名はハナタレ小僧様といい、お前の願い事はなんでもかなえて下さるが、ただ毎日三度ずつ必ずエビナマスを供えることを忘れぬように」といって、美女は淵の底へ帰つていった。

爺は大喜びでそのハナタレ小僧様を抱いて帰り、それを神棚の側に坐らせて、毎日^{なま}海老の^{なま}臈を上げることを忘れなかつた。

それからというものは米でも金でも、どうかお授け下さいというたびに、ハナタレ小僧様がフンと鼻をかむ音をさせると、ほしいと思つただけ爺の前に現われた。もう山へ行くに及ばぬことになった。家も大きなきれいなを出して下さいという、たちまちフンと音させて、驚くほどりっぱな家ができた。倉がいくつも建つて米や宝で一ぱいになり、わずかな間に爺は長者になつた。

爺の仕事は毎日町へ下りていって、臈にする海老を買うことだけであつたが、それがしまいにはめんどろになつてきて、ある日ハナタレ小僧様を神棚の側から下して、「もうあなたにはなにもお願いすることがありませんから、どうか竜宮へお帰り下さい。そうして竜神様へよろしくお伝え下さい」といった。そうすると小僧様は黙つて家の外へ出ていった。しばらくして家の前でスーと鼻を吸う声が聞えたかと思うと、たちまちりっぱな家も倉もなくなくなつて、以前のとおりあばら屋だけが跡に残つた。爺はびっくりして飛び出して見たが、もうどこにもハナタ

レ小僧様の姿は見えなかった。

二 薪を採る翁

さてこれからがいよいよ各箇条の比較になるのであるが、昔話の重点は普通まん中と末の方とにあるごとく見られているけれども、かえって順序を追うて始めから述べてゆくほうがわかりやすいかと思う。第一段には話の主人公の、山に行つて薪を採ってくる爺であつたこと、これは現在の童話では、ほとんどどうでもよい事のように考えられているが、かつては必ずこいうわぬと昔話ではないような、何か特別の約束ともいふべきものがあつたのではなかつたらうか。それがまず問題になつてくるのである。ただし今日の実際においては、「桃太郎」以下のいわゆる五大御伽を始めとし、多数の昔話はことごとく山に行く爺の経験談の形になつてゐるので、この点の一致だけでは説話の異同を説くことができない。

たとえば三人の娘を持つていて、そのうちの一人を嫁にくれようと、蛇に約束したという親爺もしくは小鳥が腹の中にはいつてから、尻で珍しい「びびんびよ鳥」などという文句を、唱えるようになったという尻こき爺なども、たいていは昔「かちかち山」の老人と同じに、山の畠に出て働いていたらとか、山にはいつて竹を伐つてゐるといふことになつてゐるのである。あるいは「舌切雀」のごとく、その爺に對立して慾深婆が登場し、もしくは「風の浄土」や「灰まき爺」のごとく、隣家にいま一人の意地悪爺があり、それがまた双方各一組の老夫婦ともなつてゐるの

は、もとは單純に主役のよい性質を反映せしむる方法として、または一つの教訓を裏表両面から念入りに説き明かす手段として、どこの民族でも採用した話術の改良であつたらうが、後にはそうしなければ昔話ではないようになり、またその對照をおもしろおかしくするために、これを敷衍したいいろいろの滑稽が付け添えられるようになった。しかしそうまで言わずとも一人の爺の心がけが変わつて、せっかくの福分を取り逃がす結果になつたことは、まだ他にも話し方はあつたはずである。日本でも取れども尽きぬ米俵の尻をたたいたら、白い小蛇が飛び出してそれからもう米が出なくなつたといふ、櫛を洗うと貧乏になるといふ戒めを知りながら、富貴に退屈して櫛を洗つたといふ長者の話なども、伊予の櫛洗池の伝説となつて残つてゐる。たつた一つの条件を守らなかつたために、不幸におちつたといふ話も方々の國に流布してゐる。この点にかけてはハナタレ小僧様の説話は、私たちの隣の爺型よりは一つ古いかと思われる。

この一人の柴刈り爺を中心とする話し方は、西洋の説話研究者が輪廓もしくは額ぶち(Cadres)といつてゐるものの一つであつた。その中でもこれなどはおそらく非常に古くからの様式であつて、つまり昔話の第一次の話し手がいつも老翁であり、また一人称をもつて自分自身の経歴のやうに話をする習いであつた痕跡かと思う。記録に残つてゐる中古以前の昔話で、類例を求めるならば竹取の翁、またはこれから分れて出たらしい箕作りの翁であつて、これらは前半分がもっと「桃太郎」や「瓜子姫」に近く、後段は今ある「蛇智入」とも似通つてゐる。「桃太郎」の桃を拾い上げるためには、爺が柴刈りに行くことは少しも関係がない。それにもかかわらず「爺は山へ柴刈りに」と語ることになつてゐるのは、偶然ながらも以前あつたものの保存であつて、新

しい付け加えてなかったことが知れるのである。ただしその薪と水の神様との関係は、話の自然の推移ともいうべきもので、必ずしも薪ではなくとも、何か自分に大切な物を惜しげもなく差し上げたというだけでよかったことは、比較をしていくうちにおいおいわかってくるのである。

三 貧者の奉仕

薪を竜宮に献上したという話は、山に柴刈る老翁として、そう説くのが自然であったというにすぎぬと思うが、それでも起こりは古かったと見えて、南北にその例が数多く分布している。九州でいま一つをあげるならば、肥前の島原半島には次のような昔話があって、報告者もその変化の奇抜なるに驚いている〔旅と伝説〕二卷一〇号、山本靖民君。

昔々姉と妹との二人があつて、姉は金持の家に嫁入りし、妹は山番の妻になった。妹は毎日山から薪を負うて町へ売りに出たが、ある日どうかして薪が売れぬので、姉の家へやるのもいやだと思つて、その薪を海に投げ込んで帰つてきた。

そういうことが何度か続いたところ、ある日いつものように薪を海に投げて帰ろうとすると、海の中から女が出てきて、竜宮へ来てくれといつて案内した。その途で「帰りに何か土産を下さるといわれたら、黒猫を所望するがよい」と教えてくれた。何日か竜宮に逗留して後、いざ帰ろうとする時に、土産をやるうといわれたので、かねて教えられたとおりに黒猫をといて、これには毎日小豆を五合ずつ食わせなくてはならぬといつて、その黒猫を下された。家につれ

てきて五合の小豆を与えると毎日五合ずつ黄金を糞するゆえに、たちまちにして大金持になつてしまつた。日ごろ音信もせぬ姉はこの事を聞いて、その黒猫を借りにきた。いやともいえずから貸してやると、元来欲の深い姉は大喜びで、小豆を一升ずつ食わせてみたが、一升の黄金は糞せずに死んでしまつた。

妹はかわいそうに思つて猫の死骸をもらつてきて、自分の屋敷にいていねいに埋めてやると、後にその土から橙だいだいの木がはえてきた。黄金を生んだ猫の死骸から成長した橙の木だから、めでたい物としてそれ以来、正月にはその実を飾るようになったという。

この例においては爺はすでに退いて、貧しい妹と富みたる姉と、二人の同胞に分身しているが、町に売りに出て売れなかった薪を、水底に向かつて投げ込んだ点のみは一つである。そうしてまた売れ残りだから投げ込んだということは、はやすでに一つの変化であつたらしいのである。遠く日本の他の端に行つてみると、岩手県江刺郡の一つの昔話などは、この点はまったくちがつていて、結果はかえつて肥後玉名のものに近かつたのである。

昔爺が山に行つて柴を刈つてゐると、その下の淵の水がぐるぐるとおもしろく渦うずを巻いている。それをおもしろいと思つて、刈つていた柴を一束投げ込むと、みごとにぐるぐるとまわつて水の底に沈む。これはおもしろいとまた一束、また一束と投げてゐるうちに、とうとう三月の間刈りためていた柴を、残らずこの渦巻の中へ沈めてしまつた。ところがその淵の中から美しい女が出てきて柴の札をいい、ぜひわたしの家へ遊びにきてくれという。そこで目をつぶつて女に負われて、淵の底に入つていくと、まことにりっぱな構えの屋形があつて、爺が投げ込んだ

柴はその脇にちゃんと積み重ねてあった云々『江刺郡昔話』二三頁。

これとよく似た話は、同じ県の紫波郡にもあるが、このほうは時を歳の暮れといい、爺が淵の渦巻の中へ投げ入れたのは、正月の用意に迎えに行った門松の木であったと伝えている『紫波郡昔話』二頁。緑の松の枝を谷川の淵に投じたのは、絵様としても美しいというだけでなく、他の多くの昔話、たとえば「笠地蔵」や「大歳の火の由来」においても、無邪気な老爺がよい事をして福德を授かったのは、たいていはまた除夜の出来事となっている。すなわちこの日は最も奇瑞の起こりやすい時刻でもあったのである。

次に江刺郡の方にはいま一つ、これと半分以上同じ話があった。これは自分の旧著「雪国の春」*にも掲げておいたから知っている人もあろうが、舞台は右の二つのごとく渦まく谷川の淵ではなかった。

昔爺は山へ柴刈りに行って、谷に大きな洞穴を一つ見つけた。こういう穴にはえて悪い物が住むものだ。ふさいでおいたほうがよいと思つて、一束の柴を押し込むと、柴は穴の栓にはならずに、ずるずると穴の中へはいっていった。また一束押し込んでみたがそれもその通りで、それからもう一束と思ううちに、三月の間刈りためてあった柴を、ことごとくその穴の中へ入れてしまった。その時に穴の中から、美しい女が出てきて、たくさん柴をもらった礼を言い、一度穴の中へ来てくれという。あまり勧められるので爺はついはいってみる氣になつてついでゆくと、中には目のさめるようなりつばな家があり、その家の側には爺が三月もかかつて刈った柴の束が、ちゃんと積み重ねてあった云々『江刺郡昔話』一三頁。

こういうふうに、柴刈る翁が柴を投げ込んだことは同じでも、それを投げ込む氣になつた理由は、一つの郡においてすらもうまちまちになっている。そうしてどの話もみなもつともらしくないのは、さらにいま一つ以前の別な語り伝えがあつて、しかもその動機がもはや通用しがたくなつていたことを想像せしめるのである。

四 竜宮の女性

柴を水底に送り届けた動機は、今はこのとおりに話されている。しかし本来はそれがなくさみでもなく、また不用になつたからでもなく、実は貧しい老爺の好意に出でたらしいことは、若い上臈が水の中から出てきて、礼を述べたというのからも察せられる。あるいは当人にはそれだけの考えもなくしてしたが、偶然に水の神の悦びたまふ贈与となつたというふうに、はやくから語ろうとしていたものかもしれない。とにかくにそれは非常な善事であつたことだけは疑いがないのだが、肥後のハナタレ小僧様の話などでは、もうその点が不明になつてしまつて、爺が平生よく働くから、竜神が感心しておいでするなどといつていたのである。

しかも女性が現われて水の都の居住者の満足を語つたという点のみは、上に列挙した南北五つの昔話に共通であつた。単にそればかりでなく他のいろいろの民間説話、たとえば何心なく斧を淵に取り落としたところが、それは水の神のこの上もなく感謝することであり、日ごろ水底にあって暴威をふるう大蟹の足を斫り、退治してくれたのはまことにありがたいと、出てきて礼を言

ったという話などでも、その主は若い女性であった。浦島子の旧伝はこちらから遊びにいったことになっているが、今ある竜宮女房の昔話においては、美しい少女が訪ねてきて、妻となり子をもうけて後に帰り去ったというのがいたって多い。その子はいずれも人間の世にとどまって、後に父の家を富貴にしているのである。それからまた非常に多い水の神の文使いの話、某の橋の袂に立つ女のもとへ、もしくは某沼の底に住む姉神へ、どうかこの手紙を届けてくれと頼まれるのも若い女性からであった。これには無邪気にその任務を果たして、尊い宝物をもったという話、それを裏切ったがために害にあおうとした話、人が警戒したので災を転じて福となしたという話、その他幾通りかの変化があつて、尋ねてみるならばその成長してきた過程がわかり、決して最初からこれだけまことに、話されていたものではないことが知れるように思われる。諸国の伝説に今も残っている機織池・機織淵、大歳の夜の真夜中にまたは静かなる雨の日に、箴の音、梭の音が水の底から聞えることがあるといい、あるいはその音をきき得た者は幸運であると称し、もしくは某家の美しい一人娘が行方知れずになったのが、後に水底に入つて機を織つてるところを見てきた者があり、また堅く口留めせられたなどというのも、その根本には何か一つの古い信仰があつて、それがどこかの点で右にいう昔話と、縁の糸を引いているように思う。とにかくにわれわれは今なお竜宮といえは乙姫様を思い起す習わしをもっている。これなどもよその国にも例のあることだといって、しいて一部の似寄りを引っぱってくる人はあろうが、程度も様式もともにわれわれのは特殊である。絵をかく人たちの作り事以外に、日本の竜宮はまたいずれの国とも別なものであった。ひとり神秘なる蒼海^{そうかい}の消息を伝えた者が、ほとんど常に若い女性であつたと

いうにとどまらず、さらにまた不思議の少童を手を抱いて、きたつて人の世の縁を結ぼうとしたのもかれらであった。海はこの国民のためには永遠に此の国であつたといふことができるのである。

五 海の神の贈りもの

小さな童児とはまことに珍しいおみやげであつたが、これも前に列記した五つの例の、四つまでに共通する点である。何か今日の知識ではまだ解しえない関係が、海と少童との間にはあつたものと想像して、この点を私などは最も重要な一つに数えているのである。ただしどういふうにしてもらつてきたかの手続きにおいては、この玉名郡のハナタレ小僧様だけが、かなりいぢむしく他の四つと異なっている。岩手県^{いわて}のほうの昔話では、いずれもその礼を述べた美女に案内せられて、水の底または穴の中へお客にいくことになっており、その中でも江刺郡^{えさき}の二つはともに帰りしなに、みにくい小児を無理やりに連れていけといつて、押し付けられたのもらつてきたことになっている。紫波郡^{むらさき}のほうは前もつてその同行の女性が、何かみやげものをやろうといわれたら、必ず子供を下さいと答えよと教えてくれたことになっている。山本氏採集の肥前島原半島の話などは、この最後のものとことに近くして、しかもその変化はさらに一段と奇抜であつた。すなわち小さな子を所望する代わりに、黒猫を下さいといつてもらつてくるのであるが、これも後になって利用の条件にそむいた者が、失敗をしたというだけはほぼ同じである。

とにかく五つある話の四つまでが、こちらから竜宮または地下の国へ出かけて、もらつてきた

ことになっているに反して、ハナタレ小僧様だけは女が子を抱いてきて手渡しする。そうしてこれとよく似た昔話は、別に産女うぶめの話として広く行なわれているのである。産女の話は以前も少しく説いてみたことがあるが、大体に早くから二通りにわかれていたようである。すなわちその一つは通行人に向かつて、この子を抱いてくれというから抱いていてやると、後に木の葉に变じ、または石地藏になった。たぶん悪い狐などの所為であつたろうという、結末のあまりおもしろくない例で、それも『今昔物語』にすでに出てきているのだから、決して新しい変化ではないのである。しかし第二のもののもう一段と古い形で、普通の人ならばとても我慢ができないほどに、抱き取った赤子の重くなるのを、頼まれた者が正直者であり信心者であり、または勇士・名僧などであつたために、じつと辛抱して女の帰ってくるまで抱いて待っている、非常に喜んで厚く礼を述べ、かつ報酬をくれる。その報酬は取れども尽きぬ金財布かねざいふなどであつた場合と、その家に遺伝する大力の筋であつた場合と、また二つにわかれているのである。この産女が現われたという場所も、往々にして淵の上や池の堤、または橋の袂などといつて、どうやら水の神と縁があつたらしいのであるが、これまでの人たちはその一致には心づかなかつた。ところがこういうハナタレ小僧以下の例が出てきたおかげに、その赤子の双方同じものであつたことが少しばかりわかりかてきた。これだから昔話の採集は、今後もお大いに努めなければならないのである。

それからこのついでにいま一つ言っておきたいことは、私が最初に聞いたほうの江刺郡の昔話で、柴を投げ込んだのは淵の渦巻でなく、山中の穴ということになっているので、なんだか水の神との縁は乏しいようにも見えるが、これも決して別口ではなかつたということである。人のよ

くいう婉貸し伝説を始めとし、岩屋に水の神の信仰の移っている例は他にもある。谷の奥などの岩穴にも水の流れ出すものがあれば、人はその底が竜宮に通うと言ひ伝えていことがあつた。そうして土地の表に現われた流れよりも、かえつてかくのごとき地下泉の露頭を神秘なもののように想像し、これを水の神の神座とつながるかのごとく考える傾向があつたらしいのである。この点は淵の渦巻のよく物を吸い込むところから、これを水底にはいつていく門口のごとく見たのだと、あるいは根元において一つであつたろうと思うのである。

六 しこ名と醜い容

次には水から出てきた少童の、普通でない名をもって呼ばれていたこと、この点も水の神の昔話の特に大切な部分であつたように思うが、これがまた互によく似通うているのである。肥後のハナタレ小僧様などは、単に「小さなまことに小さな子供」であつたというが、それにしてもその名前が非常に粗末であつた。『紫波郡昔話』では、柴刈りの爺が水中の屋形へ遊びにいってもらつてきたのは、一人のみにくいカブキレワラシ、すなわちおかつぱの男の子であつた。爺は案内の美女に路で教えてもらつて、なんだか知らずにヨケナイというものを下さいという、そのヨケナイがこの子供のことであつた。迷惑には思ったが今さらいたし方がないので、連れて戻つてきてかわいがつていたという。江刺郡の第一話においては、爺がほしいとも何ともいわぬのに、一人の醜い小児をくれるくれるといつて、無理に押し付けた。それを連れて帰つてくると、

爺よ、おれはウントクという者だとその小児がみずから名乗った。第二の話でもしいて与えたという点は同じで、ただ子供の名前はヒョウトクといったそうだと、話者が話の終わりに付け加えている。ヨケナイとウントクとはその意味不明であるが、いずれその結構な名でないことは察しがつく。ヒョウトクのほうには、終わりにその童児が死んで後に夢の告げがあって、その醜い顔に似た面を電かみの前の柱に掛けておくとか家が繁昌すると教えたといひ、現に今日でも岩手県下の農村では、鬼のような木の面や版画を、電の神として掛けておく風があるのだから、つまりこの風習の起こりを説明したものであった。それでこの昔話の採集者や友人たちは、ヒョウトクはすなわち火男ひおとこであつて、今日のいわゆるヒョットコの面、口をとがらし火を吹いているものと、根本は同じ名であつたろうと解しているのである。

なんにしても水の神から贈られたという童子は、非常に汚なくて見たところ少しもありがたそうでなかった。ただ心の素直にして神霊の指揮に従順であつた親爺のみが、大切にこれを養ひ立ててその福分にあやかつたのである。肥前島原という黒猫なども、その形はあまりにも変わっているが、話の趣意においては同一であつたことが、その結果からしてうかがい知られるのである。ハナタレ小僧様の非常に形が小さくて、家の神棚の脇にすておくくらいであつたというなども、ヨケナイ・ウントクが醜い顔をしていたのと同じく、やはり最初は人は見かけによらぬということとを説明するほうが主ではなかつたろうか。この想像の一つのよりどころは、例の「一寸法師」の昔話である。一寸法師のものと名は「小さ子」であつて、これもまた一つの嘲弄の異名であつた。何かの機会においてその「小さ子」が俄然として成長し、普通の人間にはできないような難

事業を完成し、彼をたいせつに育てていた爺と婆とを幸福にする。そうしてその子は御伽草子の「一寸法師」においても、また奥州のスエコタンバコの昔話においても、ともに信心祈願によつて授けられた子ということになっているのである。今ではこの点を深く注意する人もないようだが、桃太郎は桃の中から、瓜子姫は瓜の中から、『竹取物語』の赫奕姫は竹の節の間から生まれ出たというのは、いずれも最初ははなはだしく小さかつたことを意味していたのである。この以外にもなお一つ、同じ系統の珍しい例として、申し子が小さな蛇の形をもつて生まれ出たという昔話があるが、これなどは蛇であるだけに人間よりもさらに成長が目ざましかった。鉢に入れておくと鉢に一ぱいになり、盥うに入いれておくくと盥うに一ぱいになり、次に馬槽うまぐちに入いれて育てたという話もある。奈良の朝廷の代にできた『常陸風土記』にも、努賀毗咩ぬかひめという婦人が神の児を生んで、それが小蛇の姿であつたことを次のように記している。

すなはち淨杯に盛りて壇を設けて安置す。一夜の間にすでに杯中に満てり。さらに瓮みかを易かへて置けばまた瓮の内に満つ。かくのごときこと三たび四たび云々。

これもおそらくはあの時代の、信じられたる昔話の一つであつたろう。肥後のハナタレ小僧様は、成長したということはないが、前には抱かれて来たり後には歩いて去つた。そうしてまた神棚の側に安置してあつたということは、右に引く常陸の旧話とも同じである。この点があるいは今幽かになつた神話期の要件でなかつたかと思う。白人諸国の間においても、または他の異民族の説話でも、非凡の英雄の最初の出現は多くはこれであつた。あるいは小動物の形を借り、あるいは人であつても非常におろかでありなまけ者であり、あるいは貧しく

かつ醜い姿をしていて、親と神靈とを除くのは、誰あつてこれをかえりみる者もなかったというのが普通である。ただその形が極度に小さかったという点のみは、ヨーロッパにも指太郎などの話はないでもないが、特にわが国のようには古くから発達していなかったに反して、日本では現に少名御神の神代から、こういう説話が流伝し、また記録せられていた。ただそれが神話の側から見ても、あさましいばかりに零落してただけである。岩手の昔話のヨケナイやウントクなども、もとは何かもう少し意味のある名前であつたのが、後々話し手の空想によって、いつとなく取り替えられたものかと思われる。とにかく話としては、ただ悪いつまらぬ名でさえあればよかったのである。名前や外形ばかりでは、人の本当の力を推量することができぬという趣意を寓しておりさえすれば十分であつたのである。ハナタレ小僧に様の字を付けて呼ぶなども、よく考えてみると、凡人にはむづかしい修行であつた。それをなんとも思わぬほどに敬虔な老爺のみが、特殊の恩恵を受けえたのは理由がある。これもおそらくは隠れたる神の試みの一つで、最初には江刺郡のヒョウトク童子が、臍ばかりいじくっている見たくないワラシであつたというと同様に、海の少童がお姿の小さかつただけでなく、いつも鼻汁を垂らしたはなはだきたらしい小僧であつたゆえに、侮蔑せられていたように語り伝えられてあつた痕跡かと思われる。したがうて小僧が鼻息をもって財宝を出し入れたということは、同じ鼻でもこの呼び名とはまるで関係がないか、もしくはこれにもとづいて後に言いはじめたかの、二つに一つであらうと私は考えている。

七 説話の成長素

神話が経典でなかった最も重要な相異は、実際はこの方面において求め出すべきものではなかつたろうか。当初われわれが信じ伝えていた上代の事蹟が、一句一字の末まで守るべく改むべからざるものであつたならば、その大部分は現在に到達する以前に、倦まれ軽んぜられてつとに消えていたかもしれない。それがなお若干の古意を包容して、とにかくに今日まで保存してこられたのは、むしろその内容の片端に、自由に世とともに推移することを許された区域があつたからで、いわゆる説話文芸のいかにして起こつたかを問おうとする者は、ぜひとも前もつてこの土地ごとに変化するものを調べておく必要があつたのである。もちろんこの区域は時代により、または社会の事情によつて一定せず、かつては大切であつた不変分子が、しだいに改まってゆくに巻き込まれた場合もあつたろうが、大体に変えてよろしいと認められたものが古くからもあつた。そうして小さなところではウントク・ヨケナイなどの童児の名前、大きな点では爺がその神童のおかけをもつて、富貴を得たという手続または方法などが、これに属していたことは比較によって明らかになるのである。ハナタレ小僧様が鼻ひ・鼻吸いをもつて、金銀・米倉を出したり、なくしたりした例は、肥後より他には聞いたことはないが、他国のこれに該当する部分もまた思い思いに変わっている。たとえば『紫波郡昔話』ではヨケナイは爺に向かつて、おれをどこか人の目につかぬ処に置けというので、家の一番奥のデコに入れて隠しておいたとある。デコは

正しく書けば出居子であつて、出居というのは接客室のことである。現在でも奥州各地の多くの旧家において、座敷ワラシという童形の守り神がいると伝えられるが、それが多くはまたこの座敷にいたのである。すなわち珍客同様の待遇を受けつつ、このヨケナイ童子は非常によく働いてくれて、たちまちに柴刈り爺の家では財布に錢がじゃぐめき、また米があふれて飯米櫃の蓋が合わなくなったほどに富んできたのである。江刺郡の第一話でも話は夫同様で、やはり奥座敷に隠しておくと、朝晩よく働いてまたたくうちに家を富貴にしてくれたというのみで、それがいいかなる働きであつたかまでは説いていない。ところが同じ郡でも、いま一つの話では、もう少し要領よく筋が運ばれていて、地の底から連れてきた見ぐるしい子供は、いつも臍ばかりいじくっているのに、爺もあきれてしまつて、ある日試みに火箸でちよいとその臍を突いてみると、そこからぶつりと金の小粒が飛び出した。それから後は一口に三度ずつ、火箸で臍を突きつつ長者になつてしまつた。それを欲張りの婆が一度に多くの黄金を出させようとして、ぐんと火箸で突いたためにヒョウトクは死んだとある。これと同断の話は前にも引いた肥前島原の黒猫で、こちらは毎日五合ずつの黄金をひり出したというのが、たいへんな糞もあつたものだ。

要するにこれはこれ富貴自在の法、なんでも手軽にまた奇抜に、爺を大金持にしさえすればよかったので、必ずしも鼻息の吐入によらねばならぬ理由はなく、この点後代の説話伝承者、ことにその運送と分配とを職務とする者どもの、次々に知能弁舌をふるうべき余地の存するところであつた。それゆえにこそ地方ごとにその叙述の様式を異にし、したごうて聞く者の興味をこれに集注させて、おいおいとわれわれの昔話を愉快きわまるものにしたのであつた。一例をいうとあ

る動物が金を糞する話、これなどはすでに寛永年間の『醒睡笑』において、猾智ある弟の田九郎が、鈍にして家富みたる兄の旦九郎を欺く手段として用いられており、ここではすでに金ひり馬の話に化しているのである。尾崎紅葉のいわゆる「二人探助は、外国でもすでに人望多き笑話になつていて、その中にも黄金の卵を生むという鶯鳥の話はある。だからまた彼を知りこれを知らざる人々には、たちまちにして文化拝借の一例証を供するかも知らぬが、兄弟の境遇氣質のちがいが、貧しくて正しい者が後に幸福を得たというまじめな話ならばかえて日本に多く、それが変化していつとおどけ話になった順序は、むしろこちらにおいてこそ精密に跡づけられるので、しかも一方が他を学んだということも、実はまだすこしでも明らかではないのである。ただ今われわれがほば安心して言えることは、血を分けた兄弟、縁あつて連れ添ふ爺と婆、もしくは軒を並べて住む二組の老夫婦の間に、これほどまで裏表のはっきりした心がけの善し悪しと、それにとりなり運不運とがあつたというのは、なんほ素朴な昔の人たちにも、高笑いせずには聞かれないう誇張であつて、したがつて後來話者の空想のおもおくまみに、しだいに笑話化していくべき傾向を、特にこの部分がはやくからそなえていたということである。笑話は近代にはいつてはその数が非常に多く、中には実際の経験から生まれたものもあるように考えられているが、よく見るとたいていは古い根株の存するものばかりで、その役者の数もわずかであり、変化はただすぐれたる者の成功と、劣れる者の失敗とをいくらかでも耳新しく、話しかえてきたというにすぎなかつたやうである。しかもその新趣向ととも、必ずしも毎回の創意になるものとは限らず、中には今まであるものを転用しもしくは継ぎ合わせた場合もあつたことは、黄金を糞する黒猫の話などが

これを推測せしめる。いわゆる金卵伝説はすでにわが国には痕跡を留めないが、それと独立してはこの空想はおそらくは生まれなかった。だから今日はもとのきまじめな形がかりになくなっておろうとも、またまれには外国にも同じ型が伝わっておろうとも、なお笑話が最初から笑話として、この世に現われたと見ることでできないのは、童話の場合もまったく同じことである。つまり説話というものは成長したのである。成長したればこそ、いつまでもおもしろかった。というよりも、後ほどおもしろくなってきたのである。

八 興味と教訓

しからば説話の不変部分として、いかなる個条が永く保存せられていたか。たとえば一方の土地できたないおかしな名前の子供であったものが、他では黒猫であり、または白犬でもあったらしいのは、これもまた私のいう成長素に属するものかどうか。こういうことが次には問題になってくる。その答えは歴史が長いために、そう簡単にはしかりとも否ともいれないが、大体に二つの条件を付して、自分はこれがある時代の不変分子の後に崩壊して、他の成長する細胞に巻きこまれてしまったものと解しているのである。二つの条件というのは、その一つは前にいう駄用と複合、すなわち個々の記憶ばかりがかすかに残っていて、いつまでももとの話の周囲に纏綿してはいるが、筋の続きはすでに変わってしまった場合の多いことである。これがあるがためにもはや昔の形でない昔話が、手つかずに伝わっているような感じを人に与えることは、ぜひともあら

かじめ警戒してかからねばならぬ。いま一つの条件は説話を支持していた者の思想なり社会観なりが、刻々に移動して常に大いなる外部の影響を及ぼしていたことである。これを認めないかぎりには、かつてあれほど重きをおかれていた民間説話の骨子が、一朝にして変化してやまざる部分に遷っていった理由を、把握することは望みがたい。神が現実^{じやうじつ}に童児を人に贈り、しかもその童児が時あって小さな動物、または桃や鶯の卵の形をもつて出現したなどということも、ずっと大昔には人がこぞってこれを信じていたはもちろん、信じてこれを伝うがゆえに次の者も疑う能わず、もしくは昔の神代ならば、そういう出来事もなかったといわれぬと思う者まで、かなり久しい間この点には手をつけることができなかったのである。ところが知能が進み推理の力がたくましくなると、底の信仰がまずゆらぎついにはこれを聞こうとする者の要求が改まってきた。話術の自由なる区域は徐々として拡張し、前には昔話の要素であったものも、興味の少ないものは片隅に押しやられ、一方におもしろくてたまらぬものは、おもしろいがために保存せられてはいたけれども、それもまたやがては少しずつ作り換えられて、話はいつとなく大話^{おほはなし}になってしまったのである。これに数千年にわたった遅速がなく、また土地によって配合の異同がなかったならば、比較研究もあるいは徒勞であつたかもしれぬのだが、幸いにしてこの変化には順序があり、個々の民族には、またそれぞれの状況の差があつた。そうして日本という島帝国は、無意識ながらもその最も安全なる実験場の一つであつたのである。

鳥が黄金の卵を生んだという話なども、かつては信じ伝えた時代がわが国にもあつたと見えて、手毬歌の章句には今も残っているが、説話の領分からはつとに消え去って、その代わりかとおぼ

しきものが行なわれている。これに反して、われわれの「小き子」は、つい近いころまでなお一部の信仰であった。それが忽然と成長して、人間の最も偉大なる者となったということも、不思議ではあるが、笑うべきことではなかったのである。しかるに御伽の「一寸法師」が世に行なわれたころから、他の多くの靈童譚にはもうこれを説かなくなり、少なくとも京都の文雅の及ぶ範圍においては、これを新たな一つの境目として、

皿で食わせば皿の大きさだけ、鉢で食わせば鉢の大きさだけ、毎日々々大きくっていった。

などという話し方は、古くさいものになってしまったように思われる。そうなってくると、ただの女の腹から生まれる以外に、この種の英雄の出現を想像することは容易でない。したがつて申し子生まれ替わりの口碑のみはますます多く、「桃太郎」はすなわち童話化せざるをえなかったのである。これが説話の最初からの形でなかったのはもちろん、その変化のはじまったのも、さまで古いことでなかったことは、地方に保存せられていたいろいろの類例以外に、別に文書の側からもこれをうかがうことができる。中世の冊子類ではこの小き子のことを、心得童子こころえどうしとも如意童子いようどうしともいっている。仏者のほうではこれを護法・天童などといったらしいが、名義は異なっている、その言い伝えは互いによく似ていた。つまりは神靈に恵まれる人の処へ派遣せられてきた小さな神使であった。北アジア各地のシャマンたちは、今でもまだ自分の親しくしている天上の神から、一人以上の侍値を乞い受けて、それを人間と神との間の走り使いにしているというところで、この信仰は決してわれわれの昔ばかりに限られたものではなかった。心得童子のことは、以前『神を助けた話』^{*}という小著の中にも、ややくわしくこれを説いてみたことがあるが、日本

の昔話においては、北方巫覡ムサヒの使役している者以上に、なんでもかでも主人の意を体して、いまだ命を下さざるに先だつて、いちはやくその希望をみたしたとさえいわれている。人を富貴にする手段のごときも、一通りや二通りでなかったのは当然のことである。昔話はそれを実例によって説こうとしたがゆえに、興味ある話術の変化は、最初まずこの部分において試みられ、後はおいおいに当の本人の身の上まで延長していったのである。俵藤太が竜宮に行って、もらってきたという二人の心得童子のごときも、とどまらず秀郷の後裔たる野州の佐野氏に仕え、竜二・竜三郎と称したという話がある。その子孫だという者が永く佐野の町に住し、家伝のひび薬を売り、また紙漉かみを業としておつた。先祖が竜宮の子供だから水を冷たがらず、寒中手足を水に浸して紙を漉いても平気であったというわけである。これなどはむしろ新しい敷衍えんげんであり、また昔話の二度目の土着であったが、とにかくにわが国古来の神子譚が、単に一身の栄達を説くにとどまらず、いつもある家の歴史と結び付けて語り伝えることを特徴としなかったならば、こうした空想も突如としては生まれなかったろう。すなわち変化はすでにはじまっているにしても、まだこの部分においては若干の昔の姿をとどめているのである。

それからなお一つ、これも消えんとしてわずかに残っているものは、神に愛せられる者の約束とも名づくべき点であった。何ゆえにある家ある一人の単純な親爺だけが、異常なる童児または稀有の珍宝を得て、たちまち長者となることができ、他の者はすべて失敗してしまったか。もとはこの部分が説話の特にたいせつなる骨子、すなわち最もかたく記憶して自分も実行しなければならぬ教訓であつたろうと思うが、今日はもうそれがいかにも合点のゆかぬ話になっている。

「桃太郎」その他の著名な童話には、すでにその点を脱落したものもある。われわれ研究者にとつては、実にあぶない瀬戸際であった。これを忘れてしまっていたならば、今よりもっと勝手放題な解釈が成り立ち、また盲従せられていたかもしれないのだが、このかろうじて残り伝わっていた要点が、一見不可解に見えるということも、むしろ疑念を刺戟するたよりとなっている。前に列記した五つの昔話にも見えるごとく、かつては普通の人ならば格別重きをおかぬこと、どうだつてもよかりそうに思われることを、ほとんど馬鹿正直に守っていた老翁だけが恵まれ、それに銘々の私心をさしはさんだ者はみな疎外せられたことになっていた。しかも世の中が進むというのは、そういう人間の智慮分別が働くことであつたゆえに、年を経るままにいいよ昔話は解したい教訓となり、末にはただ滑稽なる意外とさえなつて、略してしまわなければこれをおもしろく改めようとしたのである。ハナタレ小僧様の例でいうならば、爺は毎日毎日海老の膽を買求めて、上げていればよかったのであり、黒猫の話でいうと小豆の分量は五合よりも多からず、また少なからずであればそれでよかったのであるが、神の指図に素直でない者に、なぜそうしなければならぬのか疑われてきたのは、是非もない社会のなりゆきであつた。開けて見るなという玉手箱を開けて見ただけで、浦島太郎は白髪になつてしまう。のぞいてはならぬ産屋の戸をのぞいて、海の姫神は還つていかれる。初期の人類は他のいづれの民族でも、常に人生の不如意の原因を、ある一つの隠れたる法則を守りえなかつた罰のごとく解して、改めて神に向かつてその法則のどんなものであつたかを問おうとしていたのである。その答えがかの失業國の物語でもあれば、またこの海老膽の挿話でもあつた。説話は決してただわれわれの笑いを催すために、最

初から存在したものではなかつたのである。

九 善玉悪玉

右の問題は、さらに進んで柴刈りの翁の失脚談を、他の諸国の例と比べてみるとよくわかる。熊本県の話は同じ一人の老翁の心変わり、すなわち後に海老の膽を求めにくのがめんどろになつて、海の少童神を追出したことになっている。丹波の比治山の天真名井の少女の話もこれと同じであつたが、説話の単純さを保つため、または原因と結果とを力づよくつないでみせるためには、そのよい行ないと悪い行ないを、それぞれ別の人に分担させたほうが都合がよかった。それゆえに「舌切雀」においては爺と婆、「花咲爺」ではもう一人、同じ年輩の隣の爺をつれてきて、甲には甲の賞、乙には乙の罰があつたように話すのが、相応に古くからの説話法であつたらしい。奥州紫波郡のヨケナイ話は、この点では最もハナタレ小僧と近い。爺は正直者の条件とおり、毎日一度ずつ奥座敷にはいつて、そのみにくい童子の無事な顔をながめ、頭をなでてやつてにかつと笑つて出てくる。それを老婆が不審に思つて、留守中にはいつてみるとおかしな子供がいる。箒でうんとたたいて追い出すと、ヨケナイは泣きながら山の方へ行つてしまふ。それからたちまち米櫃の米はへりはじめ、財布の錢もなくなつてきたので、はじめてこの童子の福の神であつたことに気がつくのである。

次には江刺郡のウントクの話でも、これと同様に婆が変に気をまわして、そつと奥の間を見る

と、なんともかともいえないような子供が、物陰からちょこちょこ出てきた。一日見るといやでいやでたまらぬので、箒でひっぱたい泣かせ泣かせ追いつてしまつて、その日からまた貧乏になつたといつてゐる。第三のヒョウトクの話だけは、これとは少しばかり事情がちがつて、婆が欲が深く、一日にたつた三度しか金粒の出ないのをもどかしがり、これも爺の不在中に童子をつれてきて、火箸でやたらにその臍を突いたので死んでしまつたというのは、よほどまた肥前の黒猫のほうに近くなつてゐる。ただし後者においては、心得ちがいをしたのは婆にあらず、平生貧しい妹に親切でなかつた富める姉であつた。これも「花咲爺」のごとくしてその猫を貸せというから貸してやると、一度に多くの黄金をひり出させようとして、小豆を一升も食わせたなら猫は死んでしまつた。それを本主の妹が悲しがつて、死骸をもらつてきて、屋敷内に埋めてやつたところが、その土から橙の木がはえて美しい実がなつた。これが正月にこの果実を飾り物にする由来だという点は、やはりまた白犬を埋めた処からコマの木がはえて大木となり、それを白にくほめて物をつくつと、金銀がわき出したという「花咲爺」の昔話と、まったく連絡のない言い伝えでもなかつたのである。

「花咲爺」ではその宝の白もまた隣の爺に借りられ、金を出さないで割られて竈の下でたいしてしまわれる。そうするとその灰がさらによい爺様に利用せられて、またしても大きな幸運をもたらしたのである。これは興に乗じてやや奔放にすぎたる改造であつたかもしれぬが、なおその中間に、死んで竈の神に祭られたという火男童子の話を置いて考えると、双方の起りのいたつて近いものであつたことはわかるのである。ただし私たちの研究方法においては、しいてそのよ

うなところに力こぶを入れる必要はない。それよりも他にいま一つ、これまで世人の心づかずにいた類似が、遠く南方海上の島々にもあつたということに注意しておくほうが大事である。故佐喜真興英君が採集しておくれた『南島説話』の中に、次のような一話がある。

昔沖繩の島に二人の兄弟があつた。兄は不孝者で親の祭を粗末にし、弟は孝行者でいつも墓に参つて、ねんごろなる供養をした。ある日も常のごとく酒と香とを供えて親の祭をしていると、不意に墓の中から一匹の犬が飛び出した。それを家に連れてきて、一合の飯を食わせると、その犬は黄金の糞をする。それが毎日つづいたので、弟は金持になつた。兄はこれをうらやんで犬を借りてゆき、決して一合より多く食わせてはいけなかつと、弟がかたく戒めておいたにもかかわらず、一度にたくさんのお金を得ようという欲心から、一升の飯をたい無理に食わせると、犬は食い過ぎて死んでしまつた。これを悲しんで、犬の骸を引き取つて庭に埋めたところ、一本の木がそこから成長して、黄金の実を結んだ。これが今でもクガニー（こがね）の名をもつて呼ばれる一種の橙であつて、沖繩の島ではこの因縁にもとづいて、正月七日祖先の祭には、必ずこの果実を供える慣習になつてゐる（第五十二章）。

この昔話は、薪を水の神に贈るという一節を除くのはかは、大様は肥前の黒猫について話されているものと一つであつた。こがねの実の由来は同じ書物の中に、さらにもう一つの話が記録されているが、両者の異なつてゐる点もまた一つの心づよい参考であつた。昔ある貧しい百姓の子が、大晦日に父の家へ帰つてくる路で、女が路傍に子を抱いて立っているのに出会う。今この子が死んで埋めるのに困つてゐる。銀を借りてくる間しばらく抱いていてくれぬかという。明日は元日

というのに穢れをいわず、ころよく抱き取って待っているが、いつまでも女は戻ってこない。仕方ないので家に来て戸口にその子を置き、父の承諾を受けて後に、外に出て抱いてこようとすると、非常に重くなっている様子でどうしても持ちあがらぬ。それを不思議に思つて父とともにその包みを解いてみると、子供の屍ではなくして、黄金の大きな一塊であつた。それゆゑに今でも元日には、クガニーの実をもつて祖神を祭るのだといつてゐる。この「それ故に」は少しばかり説明の欠けたところがある。あるいはこの百姓の息子が孝行であり、またはその場処から橙の木が生えたなどということが落ちたかと思う。年越しの夜中に死骸を托されるというのは迷惑のいたりだが、その穢れをかえりみずに親切に人を助けると、たちまち報いがあつて、骸と見えたのは実は黄金であつたという話は、内地でも大歳オホトシの焚火ヒキの由来、もしくは嫁が火を消したという話などになつて、なお各地に保存せられている。大晦日は前にヨケナイの話について述べたごとく、福分ある者の必ず神の恵みを受ける日、すなわち霊界の勘定日とも名づくべき日であつた。そうして女性が子を抱いてきて人の心を試みるということも、われわれの昔話のきわめて普通な型であつた。それが肥後の北境においては、竜宮から送られたるハナタレ小僧様であつたのである。

以前はこれらの説話は、それぞれに別の起源をもつものと考えられていたが、よく見るとこのとおり下に通うている心持があつた。ことごとく一つのものから変化したとまでは言いきれないが、少なくとも一方の話をする者が他の一方の話も知っており、いわば共同の井戸からくみ上げたいろいろの器の水であつた。この後類例の数が増加して、全国に二十も三十もの昔話が拾われ

るようになったら、もっと安全に甲から乙へ移つてきた飛び石の一列を指示しうるかもしれない。兄弟がなき親の墓に参るのに、その情に厚薄があつたという話ならば、『今昔物語』にある「萱草と紫苑」などがすでに有名である。兄はわすれ草を植えて早く悲しみを忘れんとし、弟は紫苑を栽えて永く愁えの色を咲き匂わしめんとした。そうすると土の下に声あつて、われは汝の親の骸を守る鬼なり。汝の孝心にめでて、日の内にあるべき事を夢に見せんとしたとある。墓の中から呼ぶ者ならば祖霊であつてしかるべきであるに、それが別の鬼であつたというには何かまだ探るべき意味があることと思う。私はこれがあるいは前代日本人の埋葬式、その他の死に関する教法が、本来は水の神の信仰と交渉をもつていたことを暗示するものではないかと考えている。もっと具体的にいえば、岩穴に遺骸を収蔵する慣習は、その最も奥の奥に住んでいる神とその眷属にこれを委託するのだという信仰があつたために、新たに人の世に送り寄せられる偉大な靈魂も、やはり水の底からと想像するようになったのではなかったか。海を母の国といった古い言い伝えは、私の知っているかぎりでは、まだ理由をきわめられていない。この大きな宗教史上の問題を解くためにも、説話の研究は断じて今日のごとき譚談状態に放置することはできなかったのである。

一〇 将来の神話学

望みは大きかれ。しかしまず事実を精確にしなければならぬ。現在われわれのもっている材料

だけでは、とうてい多くの断定を下しえないのはあたりまえで、諸君が安心して信じ、また人に説きうるものが、今はまだわずかであるのはいたし方がない。それでも遠からず共同の注意によって、ずっと前の方へ進んでいくことができるという、希望のみは明朗になった。満足は決してできないが張り合いのある学問だとまではいえる。

今度私たちのはじめて知ったことは、第一に、昔話の個々の変化によって、中世民間の文芸生活の非常に活潑であり、貴紳文芸の擬古をもっぱらとするものの比ではなかったことが、鮮明に証拠立てられる点である。たとえばいわゆる五大御伽噺が、「話の種」は一つで、部分はそれぞれに別のものごとく異なっているということとは、四つは少なくとも後代にこう話しかえられたことを意味する。いたずらに昔話の昔という字にはだされて、これを上代の遺^レの形と見るなどは、いささかも理由のない推断であった。第二には、説話は聞く人の要求に動かされて、時代ごとにその興味の中心を移さんとし、したがって以前の話の種は、必ずしももとどおりの待遇を受けていないが、そのために古くあったものがごとく埋もれ、または代わられているとはきめられぬということである。近世は笑話と退治譚とがことに数多く分化した時代であり、また若干の輸入説話のもてはやされた時代でもあったが、前者は主として固有の「話の種」によって展開し、後者もまた今まで伝わっていたものと結合調和して、実はおいおいに今日の基礎を作ったのであった。だからそういう新たに付加したことのわかるものを取り除いていけば、跡には自然にわれわれの祖先の聞いていた話の種の、濃厚に交っているものが残るはずである。しかるに日本で説話を研究しているという者は、多くは外国の学者の言うことに感心して、考えても見ずに昔

話の国際的一致を信ぜんとし、中には自分のわずか知った例だけによって、たちまちその国から教えてでももらったようなことをいう者がある。これはその他のまだ調べてない諸民族が、全部日本とちがった説話しか持たぬときまっても、なお容易に推断のできぬことであるのに、実際は盲蛇にそんな事をいつているのである。国々の昔話に意外な広一致のあることくらいは、学者などを頼まずとも書物はいくらかも来ており、索引もついている。読めば誰にでもすぐわかる。それよりも必要なのは、もっと有効にそれらの索引類を利用して、明瞭なる共通分子を片脇に整理し、さて残りの日本国内の生成発達^レの跡を見ることがある。なんらの改良も時代適応も考えずに、借りたら後生大事にいつまでもそととかかえていること、あたかも当世の輸入学者のごときなまけ者は、われわれの先祖の中には幸いにしていなかった。すなわち日本の昔話は、何千年かの昔から引きつづいて成長していったのである。

われわれの昔話に対する深い興味は、主としてその分布が何を語るかを知らうとすることにある。したがって經典から訳され、説教聖^{セウキョウセイ}に学ばれて、シナ・天竺から来たというだけならば、特に事新しく立証してもらわずともよいのである。むしろなんでもかでも輸入だ舶来だと、概括せられることを警戒するほうが必要であった。水の神の信仰を暗示するかと思う説話は、他の多くの国にもあるけれども、日本に伝わったものだけは、いちじるしく型が違っている。少なくともある特殊の部分^レが異常に行き進んでいる。たとえば小児の誕生を水の神の靈威に托するというだけの信仰ならば、偶合であれ、また伝播であれ、異なる多くの民族にも共通であったろう。ただ日本は海の国、そうしてまた山川のたぎち流るる国であったがゆえに、海には「うつぼ舟」の漂着し

た話、川には「瓜子姫」「桃太郎」の話などが、他には類のない発達をしたのである。それからその小児が大きくなって、いかなる影響をあるすぐれて古い家に及ぼしたかという点も、またこの一章においてわれわれが発見したように、かなりいちじるしい国民的特徴を示しているのである。こういういくつかの実例を記述することによって、当然に今日の神話に関する学説は改まらねばならぬ。すなわち民間説話の信仰的背景には、往々にして各民族ごとに独立したものがあつたこと、それが外部からの刺戟の少なかつた日本の田舎などでは、存外に近いころまでその痕跡を保存していたということは、外国にはまだ知らぬ人も多いのである。場処や時刻や話し手の条件を完備せぬゆえに、これを純然たる神話とは区別せねばなるまいが、少なくとも説話が一種の宗教力をもって、支持し伝承せられていた時代は新しかった。伝説と説話との分界がわが国ではやや明瞭を欠くのも、私にはこれが原因であつたように思われる。

これを他の一面からいうと、昔話の宗教史史料としての価値は、日本においては他の国よりも高いということにもなる。実例でいうならば、何ゆえに竜王竜神が、今でもこのように尊信せられていくかという疑問には、仏者・漢学者の答えうる以上に、「ハナタレ小僧様」が一段と明確に説明してくれるかもしれぬ。水の中からいたって小さな童児が送られて、まのあたり人類を富貴安楽にしたという昔話が、このとおり広くまた久しく伝わっているからである。ひるがえって他の一方には、神代の正史というものに、二代までも引きつづいて海の神と御縁組なされたといひ、さらに宇佐八幡の別伝には竜女をお妃となされたと記しているのも、あるいはまた中国の広い山地にわたって、田の神が日天と竜女との結婚によって、毎年誕生して嶺よりくだりたまうと

いう田植唄が行なわれているのも、ともにこういうただ一種の昔話をとおして、それぞれの時代の感覚をうかがい知ることができるのである。少なくとも今日の雨を乞い堤の守護を期待する信仰以上に、はるかに広汎の交渉ある水神様を、以前の日本人は渴仰していたのであつた。それは島国の水田を耕す人民として、もとより当然のことというべきであるが、多くの昔話のごとく具体的に、その事実を理解させる材料は、他にはちょっと見つけることができなかった。ゆえに私たちは大人になってから、もう一度お伽話を考えてみるのである。

(昭和五年四月、「旅と伝説」)

延命小槌

水の神に木を奉る功德は、かつてこの上もなく重大なものと、考えていた時代があったようである。今日は単に一つの説明せられざる様式と化して、それを守らぬと何やら気になるというにとどまるほどのものでも、なおその古い信仰の痕跡と認められる例が、数えてみるといくつもあるのである。たとえば田植の代掻きの日、苗代の種下しの際、または正月十一日の田祭の日などに、水口に三本の栗の小枝を挿すなどはその一つである。楊は時々折口から根をさすことがあった。これがこの木をめたいものにした理由かとも思われる。稲妻という歌言葉も以前は現実の信仰であった。それで青田の雷に見舞われた箇所に、青竹を立てて日水二神の婚姻を記念する風習も起こったらしいのである。泉の神をオスズサマという地方は広く、その祭は多くは夏の盛りに営まれ、これにも木の串を水のほとりに立てるのを通例としていた。その串のシデに白い紙を切って付けるのが目に立つようになってから、行事の中心はわずかばかり移ったかと思うが、百姓が白紙を用いえなかった時代は、ずいぶん久しく続いていたのである。清水のわく土地には必ず一本の神木があった。それが自然に生い茂ったものである場合にも、特にそのうちのある木を保存して、神の憑りたまうものとして崇敬していた。井のかたわらに植える木は今でもほぼ定まっているが、これもおそらくは風景の宗教的起原とも名づくべきものであらう。

あるいはそれらの木の美しく栄えている場所に、しばしば清き泉を見つけたという経験が最初

であったかもしれぬ。とにかくに水の神は木を愛したまうという信仰が底になかったならば、柴刈り爺の所行があれほどまでに、神の御氣にかのうたという昔話は起こらなかったはずである。そのいたってたいせつな理由が、世とともにようやくおぼろになってきて、各地の靈童譚は童話らしく、軽くその発端を取り扱うようになった。同じ熊本県でも南の八代郡に残っていた一例などは、この点に関しては幾分か北のハナタレ小僧様が補充している。浜田隆一君の採録によれば(昔話号七七頁)、あの地方の昔話には次のごとき形ではじまっているものがある。

むかしある処に一人の爺さんがあった。ある年の暮に門松を売りに町へ出たが、どうしたことが一本も売れぬので、そのままかたいで家に帰ってくる途で、ふと思いついてこれは川の神様に上げたほうがよいと、途中の橋の上から其松を水へ投げ入れた。しばらくするとその川の中から、竜宮の御使が現われて、迎えに来たからいっしょに竜宮へ行こうといって爺は竜宮へ連れていかれ、たいへんな御馳走になった。そうしてその帰りに、小さな打出の小槌というものをもらってきた。……

これから後は「米倉と小言」の話になっていくので、その事はもう一度説くつもりだからここでは略しておく。爺がほしいという物は何でも出してくれたというまでは、小槌も小僧もまったく同じであった。『甲斐昔話集』ではこの槌が延命小槌、奥州三戸郡ではエメ小袋とエメ小槌と、二つの宝物にしているのである。『豊前民話集』はある貧乏な男が、子供の殺そうとする亀を助け、後にその亀が美女に化けて、小槌を携えてきてくれたことになっており、今ある「浦島太郎」の話や『今昔物語』にある小蛇救助の話とも近いが、宍岐の島では次の節にて説くごとく、小さい

亀が直接に小僧の代わりをしているのであった。小僧と黒猫と宝物の打出小槌とは、あんまり話に変化しているように見えるが、どういうわけかは知らず、筋だけはいずれも共通している。

嘉手志川

老岐の昔話には、水の神に木を献じたという点はまったく落ちていて、その代わりによほど「花咲爺」のほうへ近くなっているものがある。山口麻太郎君の昔話集中、この島田川村の例として記載したものは、

昔ある処に貧乏な爺と婆があり、またその隣に金持の爺と婆とが住んでいた。正月が近くなつて、隣の金持の家では餅をついている。こちらは貧乏で餅もつかれぬので、

隣の餅つき音高い。音は高うとも口にゃはいらん

といつて、二人で正月の飾り柴を売りに町へ出た。売ってしまつてから海辺の岩の上に腰かけて煙草を吸うていると、海の中から乙姫様が現われて、竜宮へ連れていくからこいといわれる。二人は喜んで連れられていくと、日もまぶしいほどのりっぱな御殿で、何日も御馳走になった。帰る時に乙姫様が土産に一匹の亀を下さる。それをもらつてきて教えられたとおりに、小豆を五合ずつ食べさせて戸棚の中に入れておくと、毎晩ちりんちりんとお金をいくらでもひる。それを隣の爺婆は聞き知つて、無理に借りていつて小豆を一升食わせ、戸棚に入れておいて翌朝あけてみると、金は少しもひらずに、そこら中糞だらけにしていた。二人は大いに怒つてその

亀を殺してしまふ。貧乏な爺婆はたいへんにそれを悲しんで、亀の子を持つて帰つて庭さきに埋めたところが、そこに一本の蜜柑の木がはえてた皆さんの実がなり、それをむいてみると、中にはお金が一ぱいつまっている。喜んでその蜜柑の実をみなむいて、とうとうえらい大金持になった(昔話号八二頁)。

この話は老岐全島に知られているらしく、村によってはや少しずつの変化がある。たとえば渡良では婆様と息子があつて、その息子はたいへんなまけ者であつたといひ、立石村ではこれを貧しい兄と富める弟の話とし、年の暮れに兄が金を借りにいったのに、弟がおしんで貸さなかつたという点は、遠くは新羅の旁桓の話、または奥州に数多い「黄金小白」の話の一つである。それから年木のほうもこの二村では、売りに出たが売れなかつたことになっており、海に捨てたところが、それがちょうど、竜宮で入用な品であつたゆえに、恩賞があつたようにも話されている。立石のほうでは金をひつたのは亀でなく、この点も肥前の島原と同様に猫であつた。乙姫の使いが途々二人の者に教えるには、竜宮ではなんでも望みの物を土産にやろうと仰せあるから、その時は「みかんころの猫」がほしいと言えとあつた。その猫が小豆飯あづきいりを食つて金をひり、それを弟に借りられて殺されて、埋めると蜜柑の木がはえ、その根もとからまた黄金が掘り出されたことになっているといふことである。

おかしいことには、兄が貧乏の正直、弟が欲深だつたという点のみが、肥前とは逆になっている。沖繩のクガニの実の由来などは、伊波氏の昔話集や牛島氏の採録(「民俗学」二巻二号)にも見えているが、ともに親孝行で小犬を授かつたのは弟のほうであり、相異はただ前者には粟飯一

合とあるのを、後者で犬の墓に一本の木を植え、それが橙^{だいだい}でなく蜜柑であったという個条だけである。犬が墓場の奥から、または片脇から飛び出したということは、この全国的な説話の最も目に立つ変化ではあるが、これもはじめからこの形であったとは見えない。岩崎卓爾翁の採集せられた石垣島の昔話などは「旅と伝説」四巻二号、かえって本島を飛び越して九州以北のものと近く、またある程度までは他の簡略なる「乙姫様」を補充している。これもかいつまんで話の筋だけを転載すると、

むかし一人の貧しい男が、磯に出て美しい小魚を釣り、家に持ち帰って甕^{かめ}に入れて飼うていた。それから以後毎日外から帰ってみると、家の内がよく清められ、新しいアザネの蓆などを敷いて、酒と肴とがちゃんと用意してある。あまり不思議に思っている日ひそかにのぞいて見ると、わが家の内に美しい娘が立ち働いている。近よってわけを尋ねたら、それは小魚になって来た竜宮のお姫様であった。毎日この男が釣をして父の菰^{こも}島を荒らして困るので、嫁になりに竜宮から来たという。それで二人で竜宮へ鯉入りをする時に、途中女に教えられて、何か引出物をといたら、ヒンジャ（山羊）を下さいと所望することにする。それをもらって帰ってから、たちまちにして長者となった（というのみで、黄金の蓑をすることはないが）、後にその女房と喧嘩をしたところ、女は怒って火の神の灰を、ことごとく風呂敷に包んで持って帰り、それから再びもとの貧乏になった。

この後に付いている一節は、夫が帰り去った妻を慕うて、海に迷い出てコイナリーという鳥に助けられる。それゆえに今でもこの鳥の渡ってくる季節になると、夜は家々に火をたいて陸地の方

角をコイナリーに知らしめるというので、この点は中古のいわゆる本地物^{ほんじぶつ}が、一見関係の乏しい神の由緒を付け添え、または蛇の鯉入りの昔話等において、たちまち五節供の桃・菖蒲・菊の酒などの起りを語るとよく似ていて、私たちには非常に意味の深いことと思われるのであるが、今はただその問題を掲げておくにとどめて、もう少し当面の因縁だけを考えてゆこう。水の神の贈物がある土地では童子、他では黒猫であるのは驚くにたえたる変化ながら、それが亀ともなり、また山羊とさえなっているのを見ると、異常なる靈魂の自在にその形体を取り替えることは、前代の日本人には容易に承認しえられる事実であったのである。これを信太^{しんた}の森の葛の葉のごとく、狐が化けてきてというようになったのは、むしろ近世の信仰の変化であった。そのために今やこれらのほうが、人間よりもえらいという推論におちいろうとしているが、それは決して尋常の狐ではなく、人狐いずれの形をでも採用しうる靈魂にすぎなかったようである。魚が人間の嫁になりきたという話も、内地ではしばしばある家の祖先譚として、今なおなかば信ぜられている例が多い。いわゆる「鶴女房」や「鶴島女房」の話なども、それが文芸化した「羽衣」の伝説よりは、実は一段と自然に聞きなされていたのであった。古い記録の蛇の鯉も蛇女房も、この意味においてこそ信ずることができたのであった。ところが、いつのころからともなく、信じられなくともよいから珍しいことが聞きたいという人が多くなって、話はこの幹から際限もなく枝葉を茂らせた。よき妻、めでたい婚姻ということをおもしろく語ろうとすると、ついには身の毛をむしって美しい錦を織ったという裸鶴^{はだかづる}の話や、鍋の中に尻を洗ってうまい汁を調理したという、「蛤女房」のような殺風景な話さえ現われることになったのである。

他の一方では、人間よりも賢かったという白い小犬なども、やはり「灰まき」「雁とり」「花咲かせ爺」の程度にとどまっていることはできなかった。今でも下がかったきいた話のはじまると、人はよくこれを話のおしまいだというが、実際そこまでは展開していくのが普通であったらしい。ただ私たちの注意せずにいらぬのは、その変遷の最後の形と思われるものが、犬に關するかぎり是非常に広く、日本全国に行きわたっていることである。今日沖繩に伝わるような整うた昔話ではないが、かつて同種のものがあったという痕跡だけならば、内地にもなお方々に発見せられる。たとえば備前犬島の犬石の由来として、付近の住民に知られている話などもその一つである。犬が菅原天神の飼犬であつて、船の導きをしたとか、跡を慕うてほえたとかいうまでは、島にその御社もあるのだから不思議でもないが、ここではその以外に熊野の路で路銀がなくなつて、渡し錢の代わりにその小犬を、渡し守に与えられたなどといっている。一腕の砂を食わせるで一兩の金をひり、二腕の砂をやるとその犬が死んでしまった。それを海に流したらこの島へ漂着して、大石様になったなどというのである。あるいはその旅人は菅公ではなく、ただの一人の浪人であつた。紀州日高川の渡し場で、爺と九歳になる孫の竹市とが、その小犬を浪人からもらつた。頸輪には一日に砂一合、小判二枚を生むと書いてあつた。それをどうしたわけであつたらうか、子供とともに一つの樽の中に入れておいたのが、海にただようてこの大島に流れてきたという口碑もあるとのことで、こちらはよほどまた「桃太郎」や奥州の「灰まき爺」の話と近いのである。三州宝飯郡八幡村の千両大明神は、またの名を犬頭宮とも称えて、昔ある正直なる女のために、鼻から多くの絹糸を出したという霊犬の故跡と認められていたが、今から百年ほど

前にある学者がその地を訪い、故老について尋ねてみたところが、いわゆる犬頭蚕の由来は痕形もなく、ただ昔浪人がこの里を開いた時に、その飼犬に金を糞するものがあつて、毎年得るところの黄金が千両あつた。ゆえにまた千両という村の名ができたと言つていたそうである『神祇全書』巻四。信州でも上高井郡の伝説に、また一つの「黄金小犬」の破片があつた。昔八幡長者の家の犬が、毎日一升ずつの小判を糞にした。それを女房の山吹御前が強欲で、しいてその小判を三升にしようと思つて、一日に三升の米を食わせた。それでも小判を出さぬので、怒つて犬を打つと、犬は走つて池に飛び込んで死んだ。その池のあとというのが、今は塩川の流れの中ほどにあると伝えている（『上高井郡誌』）。

私が今知っている例はこれだけだが、気を付けていたらまだいくつも見つかるであらうし、見つければ必ずそれだけは連絡が明らかになるだろうと思う。しかしこの三つの資料からでも、若干の仮定は下されぬことはない。八幡長者とその妻の山吹は、古い語り物のごくありふれた人の名であつた。今でも子供の手毬唄などには、おりおりはその名が用いられている。備前犬島でいう熊野街道の渡し守なども、たぶんはまたそういう章句の中で、人の耳に熟した情景であつたろう。それと結び付いて記憶せられていた犬の話ならば、まずは中世以後の作り事であつたと想像しておいてさしつかえがないようである。ところが一方にその事実を信じて、ここがその遺蹟だという伝説ができているとすると、それははたしてどういふ事を意味するであらうか。思うに昔話是一所不住に流伝するものであつたけれども、やはりなんらかの因縁ある土地だけに、引つかつて残る傾向を持っていた。これが三河の大頭の宮などに、第二の犬の伝説が入れ替わつて

いた理由であるらしい。すなわち住民はかつて霊ある犬の説話を聞き知って、それをやや忘れかけていたところであるがために、比較的多くの注意を、次に来るものに払ったとも考えられるのである。その以前のものがこれとどれだけでも似通うていたかは、もとよりわずかな類例によって決することもできぬが、少なくとも今ある府県の昔話、その中でも新しい文化の中心から、比較的遠ざかっている伝承の間に、いくらかは消え残ったものがまだあって、それが一つの手がかりを供するであろうという望みはある。たとえば沖繩の「黄金小犬」が、善悪二人の兄弟の親の墓から、飛び出してきて孝行な弟に幸いしたというなども、後に付け添えられた空想のように思えない。この島の墓所は今日の漆喰造りになる以前、もっぱら天然の岩窟の中に設けられていた。その旧習は現にある一部に痕跡を留めているのみならず、本州においてもまれにはその実例が残る伝わっている（『人類学雑誌』第五百号拙文参照）。家々の祖霊の帰り休らう処から、再び若々しいすぐれた生命が、子孫のこれを受継する者に供給せられるがごとく、信じかつ話していた時代があって、それがこの方面にばかり、たまさかに保存せられていたのかもしれないのである。

犬が岩穴の奥から出てきたという口碑は、数多く諸国に分布している。その中でもこれまで最も発生の理由を知るに苦しんだのは、犬に教えられて清き泉を発見したという話の、そちこちに伝わっていることであつた。沖繩では南山王国の城山の北麓に、嘉手志川（かてしがわ）という有名な大清水がある。昔この土地の人々が飲料の得がたきによって、いずれへか退転しようと決意していた時に、岡の茂みの奥からぬれて一匹の犬が飛び出したので、そこに泉のあることをはじめて知り、永く安住の計を立つるをえたと称して、今も井の上にある一つの石を、その犬の霊の宿りとして拝している。嘉手志川はすなわち語り井の意であると解説したものが古い記録にもある。「黄金小犬」が金を獲するようになる以前から、もしくは「桃太郎」の桃、「瓜子姫」の瓜がただよってくるよりもずっと以前から、すでに語り井の清水はわいて流れていた。現世のわれわれはただこの一筋の流れをさかのぼって、遠く人世の水（みな）上に尋ね入ろうとしていたのである。それが末濁って徒渉の人ばかり多くなったことも、またこの学問の実状とよく似ている。

竜宮小僧

諸国の谷川の地名に小僧淵（こそうみ）というのがいくらもあって、中には川童という妖怪が現われ、人を捕ったという類の口碑を伝えているものもあるが、その多くはもう由来不明になっている。私はわざとこの書に説くところを隠しておいて、もう一度親しくその土地の故老から、かすかに残っている断片を聞き出したいものだと思っている。近年刊行せられた『引佐郡誌』によると、この郡鎮玉村には久留女木の大淵（おほのふみ）という淵があつて、昔竜宮から小僧が出てきたという話が残っているそうである。この小僧は村の家々をめぐる、農事の忙しいころには田植えなどの手伝いをして助け、夏のころにわか雨の降るころには、すぐに出てきて干し物を片づけてくれる。土地の者の大しあわせであつたので、行く先々でも喜んで御馳走をした。ただ蓼汁（れいじゆ）だけは決して食わせてくれない、常々かたく頼んでいたにもかかわらず、ある日ある家でつい忘れてそれを出したために、竜宮小僧はその蓼汁を食べて死んでしまった。村の中シゲという字（な）の奥に、大きな榎木（えのき）が

あつてそこにこの小僧を埋めたと言ひ伝えている。榎の近くからは清水がわいて、今なお中シゲ全体の田を灌漑しているというところである。この点はヒョウトクが死んで竈の神になったという昔話と、比較をしてみなければならぬ一つの要件であると思う。

蓼汁の奇抜なる特徴にもまた類似があった。ここから山嶺を隔てて、さまで遠くない天竜川の右岸、三州市原の田原家では、屋敷のすぐ下が青淵になっていて、いつも川童が出てきて農作の手伝いをしたり、客来の折には必ず鯰魚を二尾ずつ、川から捕ってきて台所口に置いてくれたりした。この川童は平日は同家の竈の上に住まっていたといい、または釜の蓋の上であつたともいうが、とにかく姿は人間のとおりで、円座にすわつて御器で御飯を食つたそうで、その御器は欠けてはいるが今も伝わり、円座も三十年前までは大事に保存してあつた。いつのころの事かこの家の召使が、誤つて川童に蓼汁を食わせたところが、非常に苦しがつて天竜川にころがり落ちて、そのまま帰つてこなかった。その時に屋敷つづきの広々とした前畠を、薙ぎを起こして突きくずしていき、それ以来家運もおいおい衰えたといっている。同じ北設楽郡の振草村小林にも大谷地という旧家があつて、屋敷の下を流れる振草川にスミドン淵という淵があつたが、この淵のカワランベ（川童）も毎年田植えの手伝いにきたり、また膳碗を貸してくれたりした。この辺でゴンゲノボウと称する田植え祝いの日には、姿こそは見えなかつたが、昔から上座へ一人前の膳をさえる例になつていた。後にこの家の者がそれをわずらわしく思うようになって、ある年のゴンゲノボウに馳走の中へ蓼をまぜておいた。川童はそれを食つて、おお辛おお辛と叫びながら、谷をころがつて振草川に落ちていったが、それ以来淵は浅くなり、その旧家も何かにつくて不仕合せ

が続いて、衰微してしまつたと伝えている。それからまた天竜川の上流、信州下伊那郡の天下条村にも似た話があつた。この村字川田の大家という家の後に、一坪ほどの井戸のような池があり、昔はこの池に手紙を書いて浮かべておくと、膳碗を貸してくれた。またその池からカワランベが、田植に手伝いに来たり、鋤鋸の類も貸してくれた。田植えの忙しい際には竈の火もたいてくれた。それがあつた時この家の主人が、田植振舞のオセチの中へ蓼をまぜて食わしてから、手伝いにもこなくなり、また膳碗も貸してくれなかつたという。遠州の側でも同じ川の対岸、奥山の草木という部落に、オトボウ淵という淵があつて、その伝説がこれとよく似ていた。昔この近くに大きな物持があつて、淵の主と懇親を結び、これは膳碗を借りるのではなくて、金銭の融通を受けていたそうである。それで家へはたびたび淵の主からの使者がやつてきたが、そのたびに蓼汁だけはきらいだといふ返していたのに、ある時家の者がその事を忘れて、振舞の膳に蓼を付けて出したところ、一口食つてこれはしまつたといふと叫び、そのまま淵に向かってころがり落ちていった。そうして落ち込んだ姿を見ると、今までは人間のとおりであつたのが、赤い腹をした大きな魚になつていた。それがだんだんに水の中を流れながら、しきりにオトボウやオトボウと連呼したゆゑに、以来この淵の名もオトボウ淵というようになった。この事あつてより淵の主との縁は切れ、さしもの物持もたちまち家運が傾いてしまつた。土地の人の説ではオトボウはこの辺では父というところである。あるいは死にがけに父の名を呼んだのではなからうかといっている（以上四件、早川孝太郎君採録、「民族」二巻五号および三巻五号）。

竜宮小僧が田植えに手伝いをしてくれたといふことは、農民でない者にはあまりに軽少な恩沢

のように感じられるだろうが、この際の手不足は村の最も大きな悩みであったというにとどまらず、ここで仕事にはかいくということは、事実また蓄積の主要なる力でもあったので、百姓の身上ではむしろ金銀・珊瑚・綾錦などこそ、物遠い空想にすぎなかったのである。奥州の昔話のヨケナイやウントクが、ただ何くれとよく働いてくれて、家を富貴にしたというほうが、自然でもあれば具体的でもあった。夏の日の驟雨に干し物を取り込んでくれたというなども、外庭にあるだけの蒔をしきつめて、穀類や何かをひろげておいたままで、家中野に出て働いているような土地でないと、そのありがたみはよくわからない。奥州の座敷童子、またはオクナイサマという類の家の神は、こうして家の幸福を守ると信ぜられ、また鼻取地蔵だの田植仁王だのといって、日ごろ信心する尊像が、足を泥にして農事を助けた話は、全国にわたってその例最もおびたしいのである。引佐郡の久留女木に關しては、寛政元年（一七八九）の自序をもつ内山氏の『遠江国風土記伝』にも、別に一つの口碑を採集している。

古老曰く、昔行基菩薩、諸国を行化して古郷に帰る。老婆に問うて曰ふ。汝^{まき}応に衣を洗ふべきや。答へて曰ふ、今まさに田の苗を殖ゑんとす、故に衣（を）洗ふの暇無しと。菩薩いへらく、我將に汝に代りて田の苗を殖ゑんと、藁の偶人を造つて田毎に之を置く。偶人忽ちに田を殖ゑ去つて水口より川に流れ、反転して此処に止まる。故に久留女木と謂ふなりと。

この話も土地の人は知らなかったが、やはり川の童と關係があるのであった。『北肥戦志』の載するところによれば、橘諸兄の孫兵部大輔島田丸、春日神宮造營の命を拝した時、内匠頭某という者、九十九の人形を作り、匠道の秘密をもつて加持するに、たちまちかの人形に、火たよ

り風寄りて童の形に化し、ある時は水底に入りある時は山上に到り、神力をほどこし精力を励まし召し仕われける間、思ひのほか大營の功早く成就す。よつてかの人形を川中に捨てけるに、動くことなお前のごとく、人馬家畜を侵してはなはだ世の禍となる。この事はるかに叡聞あつて、その時の奉行人なれば、兵部大輔島田丸、急ぎかの化人の禍をせずめ申すべしと詔を下さる。すなわちその趣を河の中水辺に触れまわりしかば、その後は河伯の禍なかりけりとある。これよりしてかの河伯を兵主部と名づく。主は兵部という心なるべし。それより兵主部を橘氏の眷属とは申すなりともいっている。これはまことにとりとめもない空想のようであるが、同じ由来談はミヅチの古名とともに、すでに年久しくアイヌの間にも知られており、内地のほうでも河太郎とは人形であったゆえに、左右の腕が一本の棒のように抜けて通っているのだという処は少なくない。だから『北肥戦志』が肥前潮見の城主渋江家の歴史として、こういう俗説を述べたのも作り事ではなくて、少なくともこの書編修の当時の、肥前の渋江一族にはもうこの伝説が付いていたのである。渋江という苗字は肥後にも筑後にもあるが、この家と川童との關係は深いものであった。近世九州の各地で水難よけの護符を出し、もしくは川童の祟りを攘う祈禱をしたという家は、尋ねてみると多くは渋江氏であった。前に掲げた橘島田丸の河伯統御なども、その一つの説明であったかと思われる。肥前の潮見では、今でも川童は大工の弟子だといひ、土地の風習として水難をよけるために、大工の墨打ちをする器の糸をもらひ受けて、小児の足にまといつけることが、あるという（『郷土研究』二卷七号）。川童が水の神信仰の零落の姿であるらしいことは、ずっと以前に私も『山島民譚集』においてこれを説いたことがあり、その後さらに精細に論究してみよう

とした人もある。遠州湖北の行基菩薩伝説が、われわれに暗示する一つの点は、新宗教の下互がいつの場合にも、在来の信仰をできるだけちっぽけな、かつ低級なるものに解釈せんとしつつも、なお全然これを承認せずにはいられなかったということである。日本に妖怪変化の種類が多く、概してその根原の推測しがたいものばかりであったのは、一言でいうならば、国教紛乱の永い歴史を反映するものにほかならぬのであった。

終わりになお一つ心づいたことをいうと、久留女木という村の名は、行基の人形が反転して流れたから起こったというのはこじつけだとしても、とにかくにもとは大淵の名であったものが、転じて民居の称呼となったことは疑われぬ。今でも格別珍しい地名でないから、実地にあたつた人は多いことと思うが、私の知るかぎりでは、クルメキは必ず水辺の字名で、水のくるくるとまわる特徴によって生じたことは、他の百女木・沢日木・柄目木なども同じであった。そのクルメキの名ある淵から、竜宮小僧が出てきたということは、すなわち紫波・江刺の二郡昔話に、ある谷川の渦を巻く淵より、水界に往来してみにくい童子をもらってきたとあるのと、同日の談でなければならぬのである。ただし地形は変わりやすく水の姿は常住でないから、渦は巻かなくなつて地名のみが、伝わっている場合もありうるのである。諸国に数多く分布する和泉式部の誕生地の中で、おそらく北の端かと思うのは陸中和賀郡の横川目村であるが、ここでもその地名をグルメキといい、しかも故跡の名木笠松は汽車の窓からも見えながら、もうそのあたりには渦巻く淵はなく、したごうて別の伝説が地名を説明するようになってゐる。『和賀神貫郡村誌』に、この笠松の下に一つの古碑があつて、それが太陽に向かつて回転したゆえにグルメキといったとある。

そんな向日葵ひまわりのような石塔いしとうというものが、ありうるか否かは問題でない。それよりも考えてみたのは、この全国に数箇所の誕生地をもっている伝説の和泉式部が、あるいはまた一個の竜宮小僧、もしくはこれと対立すべき水の少女ではなかったかということである。決断はもとより容易でない。しかしそれに進んでいく飛び石だけは散らばっている。竜神の黒猫や木の根株から出た白犬を見たわれわれは、さらに中間の異なる例を比較した上で、もう一度肥前福泉寺の鹿の娘のことを考えてみなければならぬのである。

瓜子織姫

一 昔話の分布

「桃太郎」の昔話は、その記録に固定したのが早かったためか、あるいはまたその成立が新しくあったためか、今までは少なくともその変わった型の分布が、意外にわずかしき発見せられていない。だからこの一つの民譚の歴史を考えてみようとするには、どうしてもその周囲のこれと関係あるらしきものから、比較の試みをはじめていかなければならぬ。そういう中でも、「瓜子姫」の昔話は、他のいずれのものよりも「桃太郎」に近く、また幸いにして諸国の類例が、いくらかずつ互いに異なっているもので、将来あるいはもう少し精確な起原説を、提出しうる見込みもあるのである。ただし現在の採集は、まだ日本の一部だけにしか及んでおらず、今後出てくるものの変化如何によって、私の意見はなお大いに改訂せられるかもしれない。それゆえにまず問題の興味を掲げて、地方の採集家の活動をうながす必要もあるわけである。

まだ私の見落としてはあることと思うが、今わかっている瓜子姫説話は左のとおりで、数は十一だがその七つまでは岩手県のものである。この以外に信州松本付近に一つ、阿波にも瓜の流れてきた童話があったというが、内容が知られていないからこの中には数えなかった。

一 陸中和賀郡。

二 同国某地。

三 同国某地。

四 同 上閉伊郡遠野郷（以上四、「郷土研究」四卷一号、佐々木喜善君）。

五 同 胆沢郡（森口氏「黄金の馬」）。

六 同 郡（胆沢郡昔話集）。

七 同 紫波郡（紫波郡昔話）。

八 信濃「下水内郡（『下水内郡誌』）。

九 日向某地（『国民童話』）。

一〇 出雲松江市（高木氏『日本伝説集』）。

一一 石見邑智郡井原村（「旅と伝説」一卷十二号、久長興仁君）。

この中で最後の石見の例が、新しい採集であるのみか、形もほぼ整っているように思われるから、ここにはこれを標準にとって、他の話との異同を比べてみようと思う。

二 瓜の中からお姫様

それで最初にまず石見の話の概要を列記してみると、

昔々、爺と婆とがあった。爺は山へ木を樵りに、婆は川へ洗濯に行った。川上から瓜がコンブ

リコンブリと流れてきた。それを拾うて食べてみると、あまりにおいしいので、「もう一つ流れてこい、爺さんにやるから」というと、はたしてまた一つ流れてきた。

その瓜を拾い上げて、持って帰って櫃の中へ入れておいた。

爺が帰ってきたから出して庖丁で切ろうとすると、瓜はひとりで二つに割れて、中からかわいいお姫様が出てきた。

爺と婆とは大喜びであった。

そのお姫様が毎日機を織る。「爺さんサイがない、婆さん管がない、キーリボタン、スットン」と機を織った。

ある日二人の留守の日に、アマンジャクがやってきて、トントンと戸をたたく。「手のはいるほどでよいから開けてくれ」「しかられるからいやだ」といったが、しいて開けさせる。

今度は「頭のはいるだけ」といい、今度は「体のはいるだけ」といって、とうとう家の中にはいってきてしまった。

アマンジャクは姫を誘うて柿の木谷へ柿を取りに行く。そうして最初には木の上から渋い柿を取って投げ付け、次には姫にきたない自分の衣物を着せて、柿の木に登らせて高い枝に縛りつけた。そうしてアマンジャクは姫に化けて、家に来て機を織っていた。

爺と婆とは帰って来て、それを知らずに姫を嫁にやるというって駕籠に乗せる。「柿の木谷を通ろうか、梨の木谷を通ろうか」。アマンジャクの姫は梨の木谷のほうをという。いやいや柿の木谷のほうがよいというて、そちらを通っていった。

柿の木谷の高い柿の木の上で、本当の姫がこれを見て泣いた。「わが乗っていくのに、アマンジャクこそ乗りていくかや、ピーロロロ」と泣いた。

それではおのれはアマンジャクであったかと、駕籠かきは駕籠からアマンジャクを引きずり出し、姫を木の上から助けおろした。

そのアマンジャクを三つに切って、栗の根へ一切れ、蕎麦の根へ一切れ、黍の根へ一切れとその体を埋めた。栗と蕎麦と黍の根の赤いのは、その時アマンジャクの血に染まったからだという話。

三 瓜と桃

前に数えた十一の昔話の中で、婆が洗濯に行かぬのは二つしか例がない。しかもその中でも胆沢郡の一話(六)は、爺と婆とが二人で瓜を食うべと思って、二つに割ってみたらメンコイオボコ(かわいい赤んぼ)が出たというので、瓜子姫子を爺婆の実の子のごとくに話すのは(四)だけである。水の流れを下ってきたということが、もとは欠くべからざる要件であったことはおおよそ推定してさしつかえがなからうと思う。すなわちこの縁児は授かった子であったのである。現在の昔話においては、「桃太郎」以外にはないように思うが、この川上の未知数ということは、山の多い日本の島では今でも考えられることだと見えて、菓が流れてきたので谷の奥に里あるを知り、木の槐を拾い上げて落人の隠れ家を尋ねあてたという類の趣向は、くりかえして後代の小説

にも思い浮かべられている。古代の言い伝えとしては山城賀茂の瀬見小河の神話、それと必ず一系であろうと思う大和のほうの物語にも、流れてきたものは美しい筋であって、少女がこれに感動して身ごもったことに帰着している。『出雲風土記』の加賀神崎の伝説においては、御子すでに生まれて後にその母がまずらお神の験を求めたまいことになっているが、やはり窟の奥から水に沿うて、父の御弓箭が流れ出たことは同じである。そうしてその弓箭が金色に照り輝いたというのは、賀茂で語り伝えた丹塗の矢にひとしく、いわゆるダナエ神話のこの島に来てからの変化かと想像せられる。すなわちわが日本においては、人間の少女を母にする異常の力が、特に川上の清く高き処にあるものと、信じられていたらしき痕跡である。

瓜と桃とが産子^{うぶこ}を運んできたという昔話は、双方ともにいたって古くからこの国にあったものと、考えて少しもさしつかへはないのであるが、桃のほうにはなんとなくシナの感化ということが思われるので、この点に重きをおいた近世の註釈家は、諸人言い合わせたごとく「桃太郎」が翻案であり、少なくとも漢学興隆後の所産であることを説こうとし、それでは昔話の中にも、かつて大衆と関係のない文芸があつたという結論に帰することをさえかえりみなかったのである。これはまったく昔話というものがどうして流传するかという大切な問題を、考えてみなかった誤りというの他はないが、とにかくに「桃が流れて来た」という一点の、日本固有らしくないことだけは、かれら無意識にすでにこれを認めていたのである。瓜もはたして最初からこの民族の中にあつたかどうか。後に結合したかもしれぬという疑いは、実は桃の実と五十歩百歩であるが、幾分かこのほうがまだ民間の信仰と調和しやすかった。たとえば今日祇園^{ぎよん}という名をもって知ら

るる行疫神^{やみわづかし}は、胡瓜^{きゅうり}を好みたまうといつて、その夏祭の日これを川に流し、または祭の日以後これを食うを忌むこと、またはそういう瓜の中には小蛇がはいっているという畏怖があることなども、われわれにはかなり重要な暗示である。それから水の神の瓜をにくみもしくは非常に好むということも、今は川童などの俗信に化して伝わっているが、これもまた河内の茨田堤^{あつたつみ}、さては備中の畠守淵の古伝に見えるごとく、かつて瓠^{ひよこ}をもつて神意を占うたうた習俗のなごりかもしれないのである。いずれにしてもこの昔話の一つの要点が、童子の異常出現を説くにあつたならば、瓜はその性質が桃などに比べて、はるかに多分の靈怪味を持っていたということだけはいえる。そうしてその特徴の桃のほうに欠けていた二点は、瓜はその中がだんだんとうつろになっていくこと、およびよく水に浮かんで流れるということにあつたろうと思う。

だから「瓜子姫」の説話が一段と古く、「桃太郎」はすなわちその第二次の変化であつたという説なども、今はまだ確かでないが、成り立つかもしれないのである。故高木敏雄君が熱心にこの問題を考えていたころには、ちょうど二つの偶然の発見があつた。その一つは、子をほしがっている善心の婆が、股^{もも}に孕^{はら}んで小さな子を生んだ、それでモモ太郎と名づけたという昔話のあること、第二には、アイヌの中にもオムタロという昔話があつて（『郷土研究』一卷七号）、オムはすなわち蝦夷語の股であり、同じく爺婆のオムから生まれて、後に鬼が島に遠征した童子の話であるが、これはその全体の一致から、内地の昔話の運搬せられたものとも想像しえられる。高木氏はこの二つの事実を重要視し、いよいよ桃太郎という名の後に起こったことを信じたようであるが、もちろん単なる語音の近似だけからは、これまでの変化は起こりえなかつた。二つ以上の昔話のもと

同じであるか否かを決するには、どうしても内容の比較が必要である。瓜子と桃太郎とはいろいろの点でよく似ているが、それが男の子であり、また女の子であることは、かなり顯著なる一つの差異である。したがって名前はかりに後のものとしても、話はずっと前から男女二通りのものが、並び存していたのかもしれないのである。

四 申し児の靈驗

ひとり「瓜子姫」の一例には限らないが、遠い昔話の童話と化していく過程には、いまだ気づかれざる信仰の衰頹というものがあつた。これを具体的にいうと、童話では「そんな事があるものか」ということが実現するので、聴衆はむしろその突然に笑い興ずるのであるが、ずっと以前にはその奇跡が予想せられ、また信じられていたのである。すなわち特定の方法により、もしくは特定の条件をそなえた人のみが、そういう不思議に会ふのだという解釈が、昔話を発生せしめたのであつた。その信仰が衰えて、しだいにその部分には力を入れて説かぬようになったのである。しかしいくら衰えても、かつてあつたものならば痕跡はどこに残っている。蛇に見入られて子を産んだという類の話なども、人はこれを願わないばかりか、後には忌み怖れて避けたはずであるが、それでもその女は必ず美女であり、旧家の娘でありまたいろいろの前兆があつたように語られている。「瓜子姫」「桃太郎」もこれと同じことで、今日子供らが驚いて目を円くするような意外な出来事になって後まで、なおどこかの隅っこにかすかなる「さもありなん」の破片

が、こびりついて残っているのである。第一にその爺婆の善人であること、ことに児のないことをただ一つの苦勞にしているところへ、拾われてきて育てられるということは、おそらくこの種の民譚の最初の要件であつたろうと思う。

この部分は石見の例のごとく、単に大喜びで大事に育てたというだけに代わつたものも多いが、中には和賀郡(一)や、日向(九)の例のとおり、ちょうど子供がなくて一人ほしいと思つていたところだといつて、一生懸命になつてかわいがつたというのが多く、これがまた「桃太郎」のほうでもしばしば何心なき挿話になつてゐる。それはただ偶然の不思議をいよいよ不思議ならしめるだけの話し方と解する人もあるかしらぬが、それに付け加えていま一点、婆が水上に向かつて「もう一つこい爺様にやろ」といふと、はたして問題の第二の瓜または桃が流れてきたことになっているのは、確かに念願と應驗との関係であつた。婆が川端でさっそく最初の瓜の味を試みたということは、持つて帰つて爺と二人で食べようといふ話と比べると、人情味も足らず、またありそうにもないことだが、ぜひとも「もう一つ」といわなければならなかつた点に、何か隠れた意味があつたので、事によつたらこれも以前は聞く者が待遠しくなるまで、何べんとなく同じ言葉をくり返してゐたのが、後に形を整えて三度目の正直または二度目の見直しをもつて終局とすること、あたかも出雲の佐陀大神の神話のごとくになったのかとも考えられる。

中世以降の高僧伝などには、申し児の話は非常に多い。単に靈夢のお告げなどによつて、生まるる児の英俊なるべきことを予期するにとどまらず、進んで神仏にこれを要望した場合に、始めて非凡の童児が授けられたことになっている。その点は昔話の一寸法師系のものも、たいていは

皆一様であった。實際桃太郎のごとき大事業をなした者が、ただ偶然に子をもたぬ老夫婦の家に生まれ合わせたということは、おそらくは古人の信じ能わさることであつたゆえに、そこに第二の桃といひ、「もう一つこい」という唱え言をしたという一条が入っていたのであろう。瓜子姫のほうでも右の石見の話以外に、これが陸中に一つ(二)と日向に一つと、飛び離れて一致があるのは、私には理由があるように思われる。そうするとさらに一步を進めて、婆が川に出たのを「洗濯に」という点も、あるいは童話になってからの話し方の改良かもしれない。同じく分布の広い「屁をひらぬ女に植えさせよ」という昔話なども、琉球の久高島では黄金の瓜になつていて、これを海から拾い上げたという王子は、毎朝潔斎をして東の浜に出て待つていたら、浪にゆられてその瓜が漂着したということになっている。すなわち形はまったく違つてゐるけれども、これもまた加賀神崎の伝説の系統に属せしむべきものであつたのである。

五 驚くべき成長

さらにいま一つの申し子信仰の痕跡は、こうして瓜の中から生まれて出た赤子を、いずれの昔話においてもことごとく瓜子姫または瓜子姫などと、姫の名をもつて呼んでゐることである。親は柴刈るほどの貧しい百姓の家で、たとえ不思議に拾ひ上げた子であらうとも、ただちにその名をヒメとつけたというのは、これを「貴き子」と信じていた結果でなければならぬ。桃太郎の太郎にもそういう意味があつたのかしれぬが、今は少なくとも何びとにも気づかれぬようになってい

る。しかしこういう習俗はひとり昔話の上に残つてゐるのみならず、實際の歴史においても見いだされうることであつた。たとえ王でもなんでもない武家またはそれ以下の家で、生まれた子を何王丸と名づけ、もしくは何若という童名が普通になつたのも、流行の根原はおそらくはまたこの申し子の風であつた。すなわち祈りをいれたまいし神の王子、または若子に准じうる子であつたゆえに、そんな名をつけても僭越でなく、後にはまたこれをもつて無病息災、立身富貴を求むべき、普通の手段のごとくにも考へるにいたつたのかと思う。氏子という言葉や神前元服の慣習、それからオシラ神の養子とか地藏の奉公人とかいう類の珍しい契約も、ただこの方面ばかりから説明しえられるものであつた。武州熊谷の奴稻荷のことは、前にも一度公表したことがあるが、この神に願掛けして小児の無事を祈る人は、たつた一つの条件として決してその子をしかつてはならぬのであつた。それが何ゆえであるかはもう説明しうる者もなくなつた。昔話のほうでもこの点は軽く取り扱われるようになったが、かつて神授と解する信仰がなかつたならば、姫と名づけるわけはなんとしてもなかつたのである。

説話は右のごとく、絶えず重点ともいへるべきものが移つていた。これを最初から今ある形式をもつて語られていたと見る人は、いつでも誤つた断定におちいらすにはおらぬであらう。その中でもたいせつな一つの簡条は、「瓜子姫」においてその瓜の中の赤子が、急に大きくなつて人間のとおりになつたということではなければならぬが、普通の童話では「桃太郎」も同じように、ほとんどその部分を素通りしようとしている。まれにあるいは「一寸法師」のごとく、力を入れて小さかつたという点を説こうとするものでも、その変化を単純なる打出の小槌や、如意宝珠の作用

に托してしまつて、神の子だから大きくなつたというふうには説こうとしない。しかしいかに巨大なる桃でも瓜でも、その中にはいつていたといえは小さかつたにきまつている。それが機を織り鬼が島を征伐するまでになつたのは、確かに驚くべき成長である。しかも新たに外部の奇術を借りずして、自然にそつなつたといえはなお靈異とすべきであるが、近ごろの聞き手は妙にこの点には深い注意を払おうとしなかつた。これもおそらくは童話の一つの特性であつて、童児は自身盛んに成長する者であるために、かえつて成人のようにはこの事実に興味を持ちえなかつたのであらうが、それよりもさらに大きな理由は、かれらにはすでにその信仰が失われていたことであると思う。したがつて採集童話が今日のごとく、自由に編纂者の手によって改竄せられる世の中では、古い伝承の中にあるこういうかすかな痕跡は、ゆくゆく飛び散つてしまわぬとも限らぬ。だから自分らは、世の多くの昔話に無関心な者よりも、むしろ作書の才分ある童話作家と呼ばれる人々を、常に警戒しかつ疾視せざるをえないのである。

ただしこの種の改作によつて、新しい聞き手の意に投じようとする試みは、必ずしも今日にはじまつたことではない。以前は大方無意識にはあつたが、それでもおりおりはかなり大きな変更を加えていたらしい。幸いにその事業が地方的であり個人的であつて、今の円本のごとく全国を風靡しなかつたゆゑに、たまたま地を隔てたいくつかの採集を比較してみれば、まだその間から若干の消え残りを拾ひ出すこともできる次第である。今後の研究者のために採集のことに必要であるのは、まづこの心なき統一事業に對抗しなければならぬからである。実例はこれからなおおいおいに出てくるが、瓜子姫の場合でいうと、第一に瓜を谷川から拾つてきて、爺と二人

で庖丁をもつて割つて見たということ、これなどは小さな点だが、もとは決してこうは語られなかつたと思う。岩手県イワテケンの六つの例のうちでは、ただ紫波郡の一つ（七）と、西は日向の例（九）とが庖丁を用いたとあり、その他は（一）と（二〇）とが「割つて見ると」とあるだけで、残りの六つはいずれも自然の出現であつた。ことにこの石州の話などは、「庖丁で切ろうとするとひとりでに瓜が割れて」とさえいつてゐるのである。こういうわれわれから見ると大切な個条でも、人は何心なく変化を加えてみようとした。そうしてもしかりに爺が刃物を手に持った画でも本になるものなら、おそらくはこの申し子の推定などは成り立たなくなるかもしれないのである。次にはその瓜をどうしておいたかという点も、桃太郎の桃のほうはもう普通にはなんともいつておらぬに反して、奥州の五つの例（一、二、三、五、七）では戸棚の中に入れておいたといひ、その四つは戸棚を開けてみたらその瓜の中から、美しい女の子が生まれてゐたといひのである。この点もかつては至つて重要であつたのではないかと思うが、急いで話をする人はなんとなく省略しようとしていた。ただ幸いに石見の例において、櫃の中に入れておいたといひ、信州下水内郡の話（八）では、重箱の中に入つて川上から瓜が流れてきたとあるために、それが本来は『常陸風土記』の蛇体神子、あるいは倭姫命の玉虫伝説と同じく、必ず清浄なる容器に入れて安置するを要したことが察せられるのである。他日もう少しくわしく述べてみたいが、越中の「灰時爺」の話において、婆が洗濯に出て桃を拾ひ、それを持ち帰つて臼の中に入れておいたのを、爺が戻つてきて臼の中を見ると、桃がいつの間にか白い小犬になつてゐたといひ、また木曾の小子塚の口碑などで、その小さな子を臼の中で愛育したということになつてゐるのと考え合わせると、古

くは瓜子姫の成長を説くためにも、やはりこの容器という点が欠くべからざる一個条であったことを、推定することができるのである。

六 瓜子姫の事業

「桃太郎」と「瓜子姫」と、二つの昔話を比べ合わせてみると、双方一致しているのは前半分だけで、これから後はまるで行き方が違っているように見えるが、この相異ははたして最初からのものか、それとも童話になってからの傾向が、おいおいにそれを著しくしたかということは、かなり私たちには大切な問題である。それは単にこの説話の成り立ちを明らかにするためのみならず、広く一般にわれわれの昔話なるものが、いかにして起こりまた何によって変化したかを知るためにも、もう少し推究しておく必要があるのである。私の見方がもし誤っていないとすれば、二話は主人公の男であり、女である点において、明らかに相対立しているけれども、他のいくつかの異なる内容は、たいていみなそれから導かれたものであって、始終を一貫した語りごとの筋路、すなわち異常の経過をとって人界に出現した童子が、後に成長して異常の事業をなしたとげたという要点にいたってはほとんど左右一対といってもよいくらいに、一致していたのである。次にはその事業に勁敵があり、また危難があったこと、およびある種の動物の援助を受けたということも、注意すべき共通点だと思いが、それは節をわかつて別に述べたほうがよい。なんにしても後々の話し方で、力を入れようとした部分が双方同じでなかったために、いよいよ変化がはな

はだしくなったことは確かであるが、なおその以外にも生活慣習の推移と、背後の思想信仰の発達とによって、話をする者自身がまずこの二つの話の一致共通に心づかなくなってしまうたのである。

瓜子姫が大きくなって、機を織るのが上手であったこと、もしくは毎日機を織っていたこと、それからアマノジャクがうかがい寄った時に、一人でちやうど戸をしめて機を織っていたことは、もうすでに日向の例(九)と、奥州の一言(四)とには抜けているが、私はこれが瓜子姫の事業であり、またこの昔話の骨子であったらうと想像している。それは単に男子の武勇征略に相對して、女性の理想が巧思であり、技芸の精妙にあったからというだけでなく、また織物の工業が貴重であって、それをよくする者が稀有であったというためでもなく、一言でいうならばそれが同時にまた宗教上の任務でもあったからである。神を祭るには清浄なる飲食を調理するを要件としたごとく、かねて優秀なる美女を忌み籠らしめて、多くの日を費して神の衣を織らしめたことは、あるいはわが国だけの特徵であったかと思う重要な慣習であった。それがいかなる信仰に出たものかは、まだわれわれにも明白でないのだが、とにかくに機を織ることが上手というのは、もとは確かに神を祭るに適したということも意味していた。それを後世の話し手は、まず忘れてしまったのである。しかも口碑の中にはいくらでも、まだその痕跡が残っている。たとえばある川の青淵の底が竜宮であり、ある山奥の洞の中に女神が住みたまうという場合には、これを証するものは多くは深夜の埒の音であった。めったにその姿を見たということはいわぬが、まれに水中に落とした斧を尋ねたなどという伝説があると、必ず瓜子姫のような美しい娘がただ一人機を織つ

ているのを見たことになっている。その他「鶴女房」または「鶴鳥女房」の昔話、すなわち恩に感したある鳥類が、女の姿になってきて家を富ませてくれたという話でも、ほとんどみな織機が巧みであつて、しかも毛衣とか錦とか、尋常の家には用のないような貴品を製している。家々日用の衣料を製するには、もとはハタというものを使わなかったか、ただしはまたそれらは物の数でなかったのか。なんにもせよ織姫といえは神に仕うる少女であり、後にはまつられて從神の一に列すべき巫女であつた。その女が清からずまた慎まざれば、神の祭は完全に行ないえなかったのである。これがわれわれの祖先にとって、武夫の勝利に匹敵すべき大事業であつたことは、少しの疑いもないのである。

遠い神代の忌機殿の物語をはじめとして、その機織には障碍の多いものと考えられていた。それを押し切つてたいせつなる神の衣を織り上げることが、かよい女性おんなの勝利であつた。桃太郎の勝利はそれよりもはるかに積極的で、また花やかなものであつた上に、後にはあまりにも手輕ろの危難と戦わなければならなかったことも、相手が鬼でありまた多勢である以上は、やはりいろいろの今ある形においては、いったんは鬼の腹中に吞まれたことにまでなつており、御曹司島渡りの話などになると、いわゆる逃竄とうざん説話の最もきわどいものを経なければ、宝物を分取りして凱旋するわけにはゆかなかつたのである。しかし一方が鬼の降参とか、黍団子の拝領とかいふ類の、明るいや滑稽なる叙述のほうに走らうとしていたに反して、瓜子姫のほうは忍苦の生活を説くに力を費した結果、話に幾分の陰慘を加重するくらいがあり、かえつて終局の喜悅を微弱にした

例さえ生じたのである。これは必ずしも男女氣質の相異というだけの簡単な原因からではなく、別に民間の文芸にも喜劇は喜劇、悲劇はどこまでも悲劇たらしめんとした、二つの感動の分化ともいふべきものが、徐々に昔話の傾向を引き分けようとしたのかもしれない。改めてなお研究すべき題目であると思う。それについて一言だけ述べておきたいのは、日本では「紅皿欠皿」等の名をもつて知られているシンドレラの話は、最初はただ継母に責められる姉妹が、幾多の苦難をなめて後、大いに恵まれたことになつていたのであるが、それとちょうど隣して「お月お星」または「お銀小銀」と称して、徹頭徹尾いじめられぬく継子話が発生した。父が帰つてみたら二人とも死んでいたり、または盲目になつてしまつてからうじて再会したり、いずれにしても悲しい方面のみに、物語の大部分を向けているのは、要するにある時代における悲劇趣味の發達を意味するものかと思う。「瓜子姫」はことに由緒ある昔話ではあるが、不幸にして早くまたこの種の感化を受けていた。そうして鬼が鳥征伐とも匹敵すべき女の大事業が、いかに完成したかという結末を、往々にしてやや不明にしているの、いよいよ他の一端の快活なる武功譚と、大きな距離があるように感じられてきたのである。

七 瓜子姫の敵

姫の事業がすでに完成に近くなつていたことは、以前にはおそらく爺と婆との留守にした理由から、説明せられていたのだらうと思う。陸中の例では、四つまでも(一、二、三、七)山へいつ

ものとおり仕事に行ったことになっているが、他の上閉伊郡の話(四)においては、隣の長者殿から嫁にもらいにきたので、二人で嫁入道具を買いに町へ行くとあり、胆沢郡の二話(五、六)は単に町へ買物にというだけであるが、その一つはやはり方々から嫁にもらわれたとあり、町から着物を買って帰ってきて、にせ物の瓜子姫をりっぱに着飾らせて、お駕籠に乘せて嫁にやることにもなっている。石見国の例もこの点はまったく同じで、やはりなんのために留守になったかは説明せずに、ただ帰ってきてから姫を嫁にやるというて、駕籠に乗せて柿の木谷を通ったのであるのだが、その隣国の出雲松江の例(二〇)にあっては、姫を鎮守様に参詣させるつもりで、爺婆は駕籠を買いに町へ行ったという話になっている。なんでもないことのようにではあるが、これだけの一致は偶然には起こりえない。察するところ、以前にはお駕籠の用意ということが、意味はわからぬながら必ず付け加えられていて、それは織姫が祭の式に参与することを具体化したものであったのである。実際またわれわれの年久しい信仰においては、神の御衣を織りなしたる処女は、当然に神の御妻と解せられていたらしいのである。

瓜子姫の害敵は、ちょうどこの最もたいせつな時刻に出現して、ほとんど姫の事業の根本をくつがえそうとしたのであった。われわれの社会康寧のために、いわゆる神衣祭のいかに必要であるかを解していた人々には、これも戦場の物語と同じ程度に、手に汗を握らしめるような感奮であった。したがうてこれにも「八島」や「高館」などと匹敵するような、種々なる語り草が付け加わったとしても不思議はない。ところが実際はそう複雑なる地方的変化はなく、ほとんど十一箇処の昔話に共通して、しいて織姫に闖入して姫を押し除け、自身その姿を装うて人をだまそう

とした者が、最後に見現わされて失敗したことになる。さらに興味があるのは西洋でも著名な「狼と七匹の小羊」、もしくは「赤頭巾」などにも使われている一挿話、すなわち作り声をして戸を開けさせる一条が、ここでもわずかな相異をもって一様に採用せられていることであつた。この種の国際一致はおそらくは「瓜子姫」の説話の、非常に古いということを旁証するものと思うが、それは単にこの話し方の技術に輸入の痕があるというまでで、説話そのものがこの国特有でないかあるかは、別にまた論究せられなければならない。なんとすれば、いかに古くから忠実に伝えられておるうとも、あざむいて戸を開かせたという一条だけを説くために、この一つの昔話が発生したと思う者はないからである。

日本の昔話としてわれわれの最も注意するのは、瓜子姫の敵の名がアマノジャクであつたという点である。アマノジャクが神の計画の妨害者であり、しかも通例は「負ける敵」であつたことは、広く他の民間伝承にも認められている。これがはたして神代史の天の探女(さぐめ)のものと姿であるか、あるいはまた今に受け継いだのはその名前ばかりであつたか。記録の資料のほうが乏しいので確かめることが困難ではあるが、少なくとも近いわれわれの祖先がこれをどう考えていたかというまでは、今後の採集によって尋ね知ることができる。しからばそのアマノジャクは何者であつたらうか。われわれの同志者には、これについてあらかじめ学者の説明を聞こうというような希望もあるらしいが、それは不用心なことだからぜひ諫止したい。アマノジャクを知ろうと思えば、アマノジャクの口碑を集積し、比較してみるより他の途はない。現在でもすでにだいぶ明らかになっていると思うが、要するにアマノジャクはこんな処へ出てきそうなる魔物であつた。意

地が悪くて常に神に逆らうとはいふものの、もとより神に敵するまでの力はなく、しかも常に負ける者のにくらしさとおかしみとをそなえていた。おそらくは善神・悪神の二元観から出たものでなく、むしろ「灰蒔き話」の隣の爺などと同じく、神の正しさと最後の勝利とを鮮明に理解せしめるために仮設せられた対立者であって、神を神人が扮装して説明した時代には、これもいま一人のワキ役によって代表せられ、それゆえに人は漸次にその実在を感じはじめたのであろう。諸国の古い神社の言い伝えを見ると、神の事蹟はたいいていは征服であった。その敵を普通には鬼といい、鬼もまた後にはその御社に仕えている。すなわち大昔火闌降命が契約せられしごとく、永く俳優の技をもつて、その屈従の状態を公示しようとしたことを意味するのであった。アマノジャクが庚申様の足の下に踏まれているなども、その起原はまたこれと一つであって、いわば瓜子姫の苦心經營を細叙するために、特に作り設けられる相手の名と考えてよかつたのである。われわれの集めてみた十一の例の中で、奥州の三話（二、三、四）はこれを山姥といい、また他の一つ（七）では山姥がやってきたことになっている。同じ陸中でも和賀胆沢の三話（一、五、六）は、出雲・石見と同様にいずれもこれをアマノジャクといい、信州下水内の例は次のようになっている。

瓜姫はだんだん成長して、非常に機を織ることが上手になった。毎日チンカラコンカラヒッピーンスと、拍子よく機を織っていた。ちやうどその裏の家に、意地の悪いアマノジャクという女の子があった。爺と姫との出た留守に、瓜姫をだましてその家に入って、出居の脇の梨の木の下まで連れ出し、自分のよごれた衣裳を瓜姫に着せて、梨の木の下に縛り付け、自分は（瓜姫の）美しい衣裳を着ていた云々。

ところがここにたった一つ非常におかしいのは、『国民童話』に載せた日向国の例で、これだけは「村でにくまれ者の無理助という男」となり、そうしてただ梨の木から落ちて死んだことになっている。これは編者の石井研堂氏に尋ねてみなければわからぬが、私の想像では話がこわれていたか、または名前があるほうがよいという考で、特に本にする際に付与した名前でなかったかと思う。松村氏の『日本童話集』は、不幸かくのごとき標本的でないものを、黙って日本の童話として採録しているが、これからでは瓜子姫の由来は考えられない。それに比べるとアマノジャクの代わりに、これを山母・山姥の所業として説くものは、変化が自然であるだけにはるかに有益なる参考である。近世の俗信においては、アマノジャクもまた山に住む魔女であり、いわゆる山の神の部類であった。この混同の原因はおおよそわかっている。山の反響が人間の声をまねるのを、小児らは普通目に見えぬ物の悪戯と考えて、土地によってこれをヤマンボともいえば、あるいはまたアマノジャクともいっているのである。この二つの中ではアマノジャクのほうがもとであることは、この物がいつも人の言葉をもどき、人の意にさからうのを職業のようにしているといわれているのを見ても想像しえられるが、なんにせよ後にはこれを山の中にいる魔物の一般の癖のごとく解することになったのである。妖怪がもともと空想の所産である以上、その分類差別は容易な仕事でないが、山姥の侵害の強力犯を通例とするに反して、邪魔とか真似とかはアマノジャクの得意とするところであった。そうしてわれわれの瓜子姫譚においては、姫を殺して食ってしまったという話と、縛って隠しておいたというのと両方あるけれども、いずれも姫の衣を着、

姫の姿をまねて爺婆をあざむこうとして、最後にその化けの皮があらわれたことになっているのみならず、次から次へいろいろの物ねだりをして、素直な氣だてのよい瓜姫を苦しめたという点に、特に力を入れて話されているのが、おそらくはアマノジャクのほうがもとの形であった証拠であろうと思う。それがいつの間にか山母・山姥に変わったのは、新しい聴衆にはそのほうが感動を与えやすかったからで、つまりはこれもまたアマノジャクについての言い伝えが、しだいに物違くなった結果といつてよい。信州下水内郡で「意地の悪い裏の家の娘」の名としたのも同じことであった。現在東日本の広い地域にあっては、アマノジャクは単に女の子をのしる語としてよりほかは、もう使用せられていないのである。

八 動物の援助

いろいろまだ考えてみたい点も残っているが、こんな小さな問題をあまり長たらしく論ずるという非難を恐れて、最後にいま一つの「桃太郎」との類似を述べておくだけにとどめる。アマノジャクないしは山母の化の皮が、どうしてあらわれたかという点は、ことに話し方がまちまちになっている。最も奇抜なのは山母が姫を食ってしまった、その皮を顔にあてて姫になりすましているのを、血が付いているからよく洗えといって、手拭でごしごしこすってやると、皮がとれてしまつて正体が知れたというのもあるし(三、五、七、も少しとぼけたものでは瓜子姫の機を織る音が常にカラコロンキコバタントンと調子よく聞えたのに、今日に限ってドチバタと変な音が

するので、障子の隙からのぞいてみると、アマンジャクの尻尾がだらりと下っている、それでたちまち瓜子姫の髻と心づいて、斧を持ってきて切り殺したというのもある(一)。しかしこういう乱雑の中にも、注意してみるとなお一筋の連絡はあるので、たとえば出雲の例(二〇)においてアマノジャクを駕籠に載せて、鎮守様へ参ろうとしていると、柿の木に縛られていた本物の瓜姫が、「ヨーヨーアマノジャクばかりお駕籠に乗ってヨーヨー」と泣いたので、はじめて心づいてアマノジャクの首を打ち落としたとあるのを、石見のほうにおいては前にも掲げたとく、柿の木谷を通ると柿の木の梢に縛られた姫が、

わが乗りて行くのに

アマノジャクこそ乗りて行くかや

ピーロロロ

と鳴いたというふうに話している。このピーロロは明らかに鶯の声であつて、瓜子姫がそんなことをいうのは奇妙であるが、陸中上閉伊郡の例(四)においては、親が賈物の瓜子姫子を馬に乗せて、いよいよ嫁にやろうとして支度をしていると、出口の木の枝に鳥がとまつていて、

瓜子姫子は乗せないで

山母乗せたカア／＼

と鳴き、また庭にいた鶏が、

糠屋の隅こを見ろじゃケケロ

と鳴いて教えてくれたので、急いで糠屋にはいってみたら、姫子の骨がつるされてあつたといつ

ている。これと最も近い『遠野物語』の昔話においては、教えてくれたのは二度とも家の鶏であつて、

おり子姫子載せなえで

山は載せたケケロ

と鳴く声に心づき、すぐに山母を馬より引き下して、殺してしまつたともいつているのである。人間には神秘には通ぜぬという大きな弱点があるゆえに、しばしば眼前の危難をも知らずにいることがある。だから平生より他の形を借りている靈魂の指導に注意をしなければならぬという教訓は、おそらくは多くの動物報恩譚よりもいま一つ前のものであつた。鶏や犬は家と因縁が深いゆえに、進んで親切なる暗示を与えると解することができた人々でも、ただの野の鳥の言葉の中に、そういう交通があるうとまでは想像しないようになって、無意味に石見の鳶の声は残つたのであつた。陸中胆沢郡の一つの話(六)では、うその瓜子姫をお駕籠に乘せて、城下へ嫁入りをさせようとすると、路筋の雀どもはそれを知つて、次のような歌をうたつた。

瓜子姫のお駕籠さ

アマノジャク乗さつた

アマノジャク乗さつた

しかし行列の人はそれがわからぬから、何も知らないでしゃんしゃんと路を急いだといつてゐる。さらに同郡のいま一つの例の(五)ごときは、化の皮の現われたアマノジャクが、飛んで逃げて釣瓶の横木の上にとまり、

瓜子姫の乗掛さ

アマノジャク乗つた、ぶん乗つた

とみずから鳴いて、そのまま天上に飛び帰つたとさえいつているのである。この雀・鳥等を「桃太郎」の犬・猿・雉と比べると、今では働きぶりに雲泥の差はあるが、こちらも最初は鳥の声によつて、誤つたる祭典の大危険を覚知し、一方も別に黍団子の契約という挿話の起こる以前から、動物の援助を必要としたわけがあつたものとすれば、両者の類似はこれよりもはるかに密接であつたので、現に『紫波郡昔話』の桃の子太郎などでは、地獄からお姫様を助け出すために、黍団子を持つて早くこいという手紙がくる。その使をしたのは鳥であつた。その黍団子は一つも半分もやらず、鬼に食わせて酔いつぶれさすために持つていったとあつて、そのお使の鳥のごときは、まったく報酬なしで主人公を助けていたのである。

九 瓜子姫の復活

われわれの昔話は必ずしも世間で想像しているごとく、各個孤立して成長したものではなかつた。ひとり瓜姫・桃太郎が一对であつたのみならず、他のいくつかの有名なる説話も、常に提携し連絡していた事実がある。たとえば石見の^{いづみ}アマノジャクが柿の木に登つて、青い渋い柿の実を採つて、下に待つてゐる瓜姫にぶつつけたという点は、現行の「猿蟹合戦」の序幕もこのとおりであるが、一方には柿の種と握り飯との交易談のもの形として、猿と蟹とが餅臼を山からころ

がして競走して食ったという話もあり、それは地方によって猿と蝦蟇との争いにもなっている。その一部分がまぎれて「瓜子姫」のほうに入ってしまったものとしても、それはもとより近いところにはじまったのでなかった。梨の木・柿の木はかけ離れた四個処の地にもにあり（八、九、一〇、一一）、それがまた奥州のほうの鳥の知らせともつながっている。私にはまだ説明しえないが、何か早くからこういう木のことを説く理由があったのである。

それから東北のほうの山母が、瓜子姫を組で切つて、小豆餅にして爺婆に食わせたという点、これなども「かちかち山」の第二段とよく似ていることは、わざとではないかと思うほどであるが、さりとて一方から切り抜いて、こちらへ取つて付けたとも思われぬのは、この「かちかち山」がまた寄せ集めのもので、とうてい最初からこういう形で流布していたらしくないからである。これは結局するところ説話の変化が、単なるそれ自身の成長または改訂にとどまらず、時としては隣の話との複合もしくは混同、進んではさらに相互の間に、融通してもよいような部分の蓄積までを含んでいたことを意味するのかもしれない。実際話の上手ということは、いつの時代にもこれを長く、新しくかつ複雑に話すことであつた。しかも定まつたテキストが印刷せられていたわけでもないのだから、たくさんの昔話を覚えていた女や年寄が、それを一つ一つ語り分けたことを、むしろ不思議と認めなければならぬ。それで私などは遠く離れた土地土地において、他には類を見ないいくつかの一致の、偶然に保存せられていることを重要視し、特にその部分にもとづいて、説話の成立を考えてみようとするのである。

ただしこの「かちかち山」式の子供らしい惨虐によつて、ただちに瓜子姫の殺戮という点を近

代の改作と見ることは速断であらうとも知れぬ。靈魂の輪廻を完全に信じえた人々には、死と生との分界は今のわれわれの考えているごとく、明確なものではなかった。すなわち姫が梨の木の梢に縛られているのも、現在の魂の宿りを追い出されたというのも、ひとしく厄難であつて、その差はそう大きなものでなかったのである。だから七匹の小羊が狼の腹の中から、のこのこと出てきたという童話も起こり、日本でも蟒蛇に呑まれた飛脚の笑話などができたので、死んでもすぐにまたもつと美しく、生まれ変わってくればよいじゃないかという思想を、ことに久しい後まで東洋のわれわれはもっていたのである。人柱や生牲もその一つの現われと認められているが、神に仕える者のすぐれて清きものは、一般にその一旦の生を去つて後、さらにより高き地位に登るものと信ぜられていた。つまりは人を新しい神にする信仰を、われわれは抱いていたのである。だから事によると瓜子姫がある木に縛られていたということは、かえつてその魂の一時の抑留を暗示していたので、奥州の山母話のほうともとは相容れざる報告でなかったのかもしれない。糠屋の隅っこに姫の骨がつるしてあるのを、鶏が教えてくれたということが、かすかながらも二伝の脈絡あることを想像せしめる。

それからもう一つ、アマンジャクを三つに切つて、一切れは粟の根へ、一切れは黍の根へ、また一切れは蕎麦の根へ投げ棄てた。この三つの作物の根が今でも赤いのは、アマンジャクの血に染まつたからだということ、これもこのように詳しくはないが、出雲の話（一〇）でも黍の根の赤いのはそのためといい、信州の例（八）でもアマンジャクという意地悪娘を斬つて、萱野に棄てたゆえに萱の根は赤いというのみならず、これと同じようないわゆる説明伝説は、なお他の多

く、山姥退治譚、もしくは鬼征討記にとものうて伝わっている。これなどは明瞭に昔話の「相互に融通しうる部分」であった。天然の特に目にたつ現象を指さして、あれはいかなる理由であらなかつたかといふかるのは、人間の智慮の芽ばえであった。いつの世どの程度の文化においても、その問いは年少者、答えは年上の者の管轄であったことは確かである。したがってこれを童話の起こり、説話文学の発端または空想芸術の最初の練習方法と解するのは許されるであらうが、今までの神話学徒が考えているごとく、一種神話のいたって単純なる形と認めることは、私にはまったく同意ができない。神話がもし長老のかたく信ずるところを、次に生まれてくる者に口伝する手段であるならば、これらの説明などははじめから信じていた者はなく、むしろ問いにもとづいて次々に考え出したものであった。それゆえにその内容は最も奇抜であり、また折を見てはおいおいにその目先を変えようとさえしている。ただこういう眼前の事象に対する興味ある解説は、常に鮮明なる印象をはじめて聞く者の胸に刻みえたがゆえに、たいせつなる語りごとにできるかぎりこれを取り添えて、しばしば連想した記憶するようにしたことだけは想像せられるので、いわゆる *why so stories* は、いわば神話の容器であり、同時にまた前者を昔話化させていく、一種の酵母のごとき役を勤めたものと思う。奈良朝時代の諸国風土記に、多く現われている地名談なども、目的はこの「蕎麦の茎はなぜ赤い」と同じく、最初よりそう信じていた人が、語ろうとしたものと見るわけにはいかぬ。さらに一步を進めると、中世の説話の一つの特色たる本地譚なども、事はそれ自身信仰に關係があるとはいえ、それを主張するためには、あのような長話の必要はなかったのだから、すなわちまた人をしてある古くからの口碑を保存せしめるため

に、わざと付け添えておいた記念塔の類にすぎなかったと思う。われわれの歴史に書籍あるごとく、文字なき古人の古事を伝うるためには、何か思い出しやすい目標がなくてはならなかった。伝説が石や木や淵池によって伝わるごとく、説話にはまたこの「蕎麦の茎」などが、支柱として常に入用であつたのである。

（昭和五年五月、「旅と伝説」）

諸国の瓜子姫

右の一文を書いてしまつてから、さらにいくつかの同じ話が報告せられた。私の分析はすでにやや微細の点に入りすぎたから、ここにはただ新たな類例を排列して、いちじるしい異同だけを注意するにとめようと思う。

一二 津輕昔集(川台男太郎氏)

裏の畠に大きな瓜がなつた。それを採つてきて庖丁で切ろうとすると、その中から声が出て、じくじく様、ちよつと待つてけへじや

といい、自然に二つに割れて女の子が出てくる。神のお授けと思つて大事に育て、名を瓜子姫とつけた。瓜子姫は大きくなって殿様から嫁にもらいにくる。それなら着物を買つてこようと町へ行く時に、留守にアマノシヤグがくるかもしれぬから、氣をつけよと言つて爺婆は出ていく(機を織るということはない)。そうしたらはたしてアマノシヤグが来て、

瓜子姫、少しでいいはんで開けてけへ

もう少しあけへ

といつて、内へはいつてしまつた。それから瓜子姫を奥の押入の中に入れて、自分は瓜子姫に化けて待つていた。爺と婆とはそれを知らずに、アマノシヤグに美しい着物を着せて、駕籠に乗せて嫁入りさせようとすると、松の木の上で鳥が啼いて、

瓜子姫が乗る駕籠さ

アマノシヤグに乗てら、ガオラガオラ

といった。それを不思議に思つて駕籠の戸をあけて見ると、中にはアマノシヤグが寝ていた。駕籠をかく人たちはたいへんに怒つて、アマノシヤグをひどい目にあわせた。そうして押入の中から本当の瓜子姫をつれ出して、殿様の処へ嫁入りをさせた。

一三 秋田県鹿角郡の例(内田武志氏)

婆が川さ洗濯に行くと、きれいな箱が流れてきた。開けてみるとその中に瓜が一つはいつている。綿にくるんで戸棚さ大事にしまつておき、爺が帰つてから庖丁で切つてみると、中からめんこい女の子が出てきた。それで瓜子姫と名を付けて育てていた。瓜子姫は大きくなると、機を織ることが大好きで、毎日毎日、

きちんこたんのきんぎりや

くだこアなくてからんころん

と機ばかり織つていた。ある日爺と婆はよそへ行つて、瓜子姫が一人で留守居しているところへ、アマノシヤグが来て、

機ア織るのが上手だじや

なんたて見せでけろ

と、むりに家の中へはいつてきた。そうしてしゃばん(組板)と庖丁を持ってこさせて、そのしゃばんに瓜子姫を載せて、庖丁で切つて食つてしまつた。それからアマノシヤグは瓜子姫子の

胴がらにはいつて、瓜子姫子に化けて機を織っていた。するとそこへ隣の人が、瓜子姫子を嫁にほしいと言ってもらいにきた。爺と婆とは大喜びで承知して、駕籠に乘せてアマノシヤグの瓜子姫子を嫁入りさせる。その途中で路の傍の木の上から、

瓜子姫子ア乗さる駕籠さ

あまのしやぐア乗さた

ホーホケチヨ

と鶯が鳴きつづけた。その鶯は瓜子姫子の魂がなったのであった。それでアマノシヤグの正体は見破られてしまった。(この話は毛馬内けうまうちの町の一女性の語り伝えた話である。同じ鹿角郡でも南部の宮川村などに行なわれているものは、これと比べると二つ三つ異なつた点がある。第一に、木の梢から鳴いて教えたのが、鶯ではなくて鳥であった。次にアマノサグの正体が現われたのも、その鳥が教えたばかりではなかった。あまりきたない顔をしているので、瓜子姫子面洗めんせんえといつてさすると、かぶっていた面の皮がご、そもそとした。それから小便をさせようとして尻をはぐつたら、ヤマノサグの尾っぽがだらりと出ていて、化けが現われてとうとう殺されたなどといっている。瓜の中から生まれたということもこちらにはもう落ちてゐる。)

一四 盛岡市付近(旅と伝説)三ノ七、橘正一氏

爺は山さ薪を採りに、婆は川さ洗濯に行く。川上から瓜が流れてくる。

瓜こ、こつちや寄れ

瓜こ、こつちや寄れ

というところから寄ってきた。それを爺様が山から戻ってきたら一しょに食うべと思つて、綿にくるんで戸棚の中に入れておいた。爺は帰ってきて戸棚を開けてみると、瓜の中から女の子が生まれてきた。瓜の中から生まれたから、瓜子姫子と名をつけて、爺と婆とで大事に育ててだんだんに大きくなった。春が来た。爺と婆とは畠さ稼はたけぎに出かける。瓜子姫子、鬼が来ても戸あけるなよといつて出て行つた。その留守に鬼が来て、戸あける戸あけるといった。しかられるからいやだといふと、

すこうし、瓜の立つだけあけろ

というので、瓜の立つほどあけてやると、今度は、

もうすこうし、指のはえるだけあけろ

といつて、指のはいるほどあけてやったら、鬼は(家に入つて)がりがりとう瓜子姫子食つてしまった。爺様と婆様とは畠から帰ってきて、瓜子姫子いたかといつたけれども返事がない。戸をあけてみたら瓜子姫子はいなくて、その代わりに鬼が火棚の上で大の字なりに寝ていた。そこで戸をたてて、家に火をつけて鬼も一しょに焼いてしまった。

(この話は紫波郡飯岡村から出た老女の語るところであつた。この以外に、別に市中で伝えられていたのは、瓜子姫子は殿様のお妾にあがるので、駕籠に乘せてつれてゆくと、それが実は姫子を食べ殺して、自分がそれに化けていたアマノジャクであつたといひ、ここにも鹿角にある鳥の歌と同じような「瓜子姫子の駕籠さ、アマノジャクは乗はつた」という文句が、童謡のようになって記憶せられてゐるという。)

一五 岩手県雫石村『聴耳草紙』三七二頁

婆が流れてきた瓜を食べるとたいそううまいので、もう一つ流れてこいといえばまた流れてくる。

用のある瓜だからこち来い

用のない瓜だらあっち行け

と呼ぶと傍へ流れ寄ったので、これは爺様の分だとして取っておいた。それが戸棚の中で二つに割れて、中から姫子が生まれている。その姫子が大きくなって機を織っていると、アマノジャクがだまして庖丁とさいばんとを出させて、代り番こに虱取りをするといって、姫子をサイパンの上に寝させて切って食べてしまった。そうして瓜子姫子に化け機を織っている。そこへ着物を買に行行った爺様たちが帰ってきて、いつもならトギカカチャガカカ・トギカカチャガカカと聞える機の音が、トダバタン・トダバタンと聞える（のを不審に思う？）。いよいよ嫁入りになって、うその姫子が家を出ようとすると、食い殺されていた姫子の左の手が驚になつて

瓜子姫子だとして

アマノジャクが化けて嫁に行く

おかしでや、ホウホケキヨ

と鳴いたのですっかり化の皮がはげてアマノジャクは殺された。

（同じ雫石の村にはいま一つこの話が伝わっているが、このほうは川戸へうまそうな瓜が流れてきて、後に戸棚の中で二つに割れ、お姫様が生まれたという部分が詳しくて、組板の上に寝かせて切って食ったというところで話が終わっている。それでもやはり代わり番に虱取りをしようと

いう点があり、山婆が最初隣の娘に化けて、遊びにきたというところは下水内郡の例（八）と似ているのである。）

一六 秋田県角館（右同書三七三頁）

爺と婆とに一人の娘があつて、その名をオリヒメ子といった。オリヒメ子、オリヒメ子、アマノジャクが来た時は決して戸を開けてはならないぞといって、爺と婆とは外へ出ていった。その留守に一人で機を織っていると、アマノジャクがやってきて、オリヒメ子戸を開けるといった。しかられるからいやだといったが、何べんも何べんも戸をあけるといので、しかたなしにあげてやると、

オリヒメ子、オリヒメコ

山さ栗拾いに行くから

下駄はいて来れ

とアマノジャクがいった。

下駄が鳴るからやんだ。

そんだら草履はけ。

草履も無いからやんだ。

それじゃ俺がおぶって行く。

とげが有っからやんだ。

それでや板を敷いておぶるべえ。

という問答があつて、とうとうアマノジャクは背中に板をあてて、オリヒメ子を負うて山に行つた。そうしてアマノジャクは自分だけ木に登つて栗を取つてゐる。後からオリヒメ子が登つてゆこうとすると、その木をうんとゆさぶつてオリヒメ子を木から落として殺し、自分はその皮をはいでかぶつて、オリヒメ子に化けてもどつてきた。それからお嫁に行くことになった。朝起きて顔を洗う時に、あんまりそろそろと洗うので、爺様婆様が今日は嫁に來たのだから、もつとよく洗えというと、おら洗えないといった。そんだったら俺が洗つてやると、爺が強く顔をこするとオリヒメ子の皮がはげて、アマノジャクになって山へ逃げていった。このアマノジャクのオリヒメ子が、お嫁になって駕籠に乘ろうとした時に、鶯が飛んできてその駕籠にとまつて、

オリヒメ子ア駕籠さ

アマノジャク乗つた、ホウホケキヨ

と鳴いて、どこへか飛んでいった。

(この話の栗の木は、遠く離れた出雲・石見の柿の木、信州や日向の梨の木も同様で、当初真飯二人の瓜子姫の葛藤が、一本の果樹を中心として起こつたように、語られていた痕跡かと思われるが、奥羽の方面では他にはまだその例を知らぬ。「猿蟹合戦」の柿の木がこれと縁を引くことは前にも述べたが、事によると「桃太郎」の桃までも、ここから導かれてきているのかもしれない。にせものの瓜子姫が顔を洗つて、発覚したという例は東北に多いが、鳥の鳴声によつて教えられているという話よりも後のものであらう。ここではその二つが重複して、過渡期の混乱を示している。それからお一つ、順序は後先になつたが、岩手県北部の変つた例を載せると)

一七 下閉伊郡岩泉町 (同上書三七六頁)

爺と婆とが子供がないので、ほしいほしいと思つて神様に願掛けした。ある朝瓜島に行つてみると、瓜島のまん中に美しい女の子が一人いた。これア神様のお授けだと思つて、喜んで拾つてきて瓜子の姫子と名をつけて大事に育てた。爺様・婆様は山さ薪採りにゆく。誰が来ても戸を開けんな、この辺は狼がひどえしけに、と言つておいて出ていった。そのあとで瓜子の姫子は、一人でトンカラ・ヒンカラと機を織つてゐる。そこへ山の狼が、瓜子の姫子、遊んべやアといつてやつてきた。(それからだんだんの問答があつて結局) 瓜子の姫子は組板の上へ横になると、狼は庖丁で頭だの手だの足などを切つて、ああらめやエうめやえといつて食つた。そうして骨こは縁側の下に隠して残つたのを煮ていた。夕方に爺と婆とは山から帰つてきて、薪をがらりと下して瓜子の姫子、今帰つたぞという、瓜子の姫子に化けていた狼は、さアさ腹がへつてきたごつたから、早くまんま食つとがれという。爺と婆とは瓜子の姫子を煮た汁を、ああらめやアうめアといつて食うと、その狼は、

板場の下を見さ

骨こ置いたが見ろやエ見ろやエ

といつて、狼になって山ささつさと逃げていった。そして爺様と婆様とはまた二人つこになつた。(この話のもういちじるしく「かちかち山」の中段と似ている。山で爺に生捕られたという部分も、奥州には狸でなくて、狼になっているものが多いのである。佐々木君の『聴耳草紙』には、七つの瓜子姫説話を集録している。そのうちの四つは、ここに列挙しておいた。残りの三つの一

つは、上閉伊郡に行なわるるもの(四)、いま一つは和賀郡の一例として(一)、ともに本章に引用した話を、もう一度精細に記述したにすぎない。最後の二話は新しい採集であるが、その採集地を明示してないために、これを分布の資料に供することができなかった。その筋は大体に第三の例と似ているが、かれには山母といっているのを、これにはまたアマノジャクの所業としており、その上に嫁入りの途中で鳥が鳴いて、教えてくれたという条が付け加わっているが、結末は嫁御に顔を洗わせたら、化の皮がはげたということは彼と同じである。それからなお一つ、瓜子が機を織る時に、

管無^{かんむ}っちゃ、ばんばなや

という唄をうたったという点が、前の鹿角郡の「くだこアなくてからんころん」のほかに、遠い石見国の昔話とも似ているのは一奇である。石見のほうでもお姫さんが毎日機を織るのに、

爺^{おや}さんさいがない、婆^{ばあ}さん管^{かん}がない

キーリパッタンストントン

と織ったといっている。これはおそらく織女の常の言葉であつたらうと思うが、それにしても永く無心の間に保存せられたのはおもしろいと思う。瓜子姫子が野老^{やら}が好きであつて、それをアマノジャクが食べ方を知らぬので、にせ者であることがわかりかけるという点は、次の二つの例の中にも出てくる。これもまた偶然に保存せられたいにせふりであつたと思う。

一八 会津若松市(堀氏夫人)

瓜姫は野老^{やら}が好きであつたので、爺と婆とはいつてもそれを掘ってきて食べさせた。ある日二人

が野老を採りに出たあとで、アマノジャクがやってきて機を織っている瓜姫をあざむいて、しいて戸を明けさせて内にはいつて食ってしまい、自分が瓜姫に化けて機を織っている。そこへ父母が帰って、いつものとおり野老を与えると、にせの瓜姫は野老の食べ方を知らず、毛も皮も取らずに食おうとするので、親たちはこれを見て怪しく思う。そのうちに瓜姫の美しいことが殿様に聞えていて、お駕籠で迎えがきたのでそれに乗って出ていくと、途中で子供たちが瓜姫の駕籠に、アマノジャクが乗っているとやし笑うた。駕籠かきはこれ聞いて心づき、怒ってアマノジャクを引き出して殺してしまう。(この時に宣の根でどうかしたという話があつて) だから今でも宣の根の紅いのは、このアマノジャクの血に染まったのだといっている。(堀維孝翁の手翰によれば、出羽の庄内にも大部分これに似た昔話があつた。瓜子姫が野老を好んでいたのに、アマノジャクの化けたのは、毛も皮も取らずに食おうとして、爺婆に食べ方を教えてもらう。それから殿様に召されてゆく途中、アマノジャクが乗っているとはやしたのは木の上の鳥であつた。それで露顯して萱原へ引き出されて切り殺された。それゆえに今でも宣の根は紅いのだといったそうである。それと近いのは、前に列記した岩手県の一話(例三)に、爺と婆とは山にホドコを掘りにいった留守に、山母が来て瓜子姫を食ってしまい、自分がそれに化けて機を織っている。そこへ二親が山からもどってきて、採ってきたホドコを洗いににせの姫子を川にやる。そうすると大きなのはみな食ってしまった、小さなホドコばかり持って帰り、どうしたかと聞くとすべつてころんで、流してしまつたと答える。かわいい瓜子姫子のことだから爺婆はしからなかったが、顔に血がついているのを手拭でぬぐってやると、それが化の皮だからすぐにはげて、にくらしい

山母の顔になって逃げていったというのである。アマノジャクが切り殺されて、それから萱の根が紅くなったという例は、信州の下水内郡にもあった(例八)。これが出雲では黍の茎はなぜ紅いかの話になり(例一〇)、石見では粟と蕎麦と黍とが根の赤い由来として語られていることは、すでに述べておいたから、もうくり返す必要もない。

一九 新潟県南原蒲郡(加無波良夜譚)二〇二頁

爺と婆とが、おりかわ姫という美しい娘をもっていた。近いうちに嫁に行くことになっている。姫は山芋が好きなので、爺さんと婆さんがそれを掘りに出かける。誰が何といつても戸を開けんなよと言いつけていった留守に、アマノジャクがやってきていて戸を開けさせ、だまして粗板の上に寝させて切ってしまった。そうして姫に化けて知らん顔をしているところへ爺と婆は山から帰って、芋をすって姫に食べさせると、姫はあつぷらあつぷらしてそれを食べた。「変なで、うちの娘は」と爺婆は思ったが、アマノジャクとはまだ知らなかった。いよいよ嫁入りの日になって、迎えの駕籠に姫を乗せて二人が付いていくと、一羽の烏がその駕籠の上にとまって、

おりかわ姫の乗る輿に

アマノジャクが乗つたいや

と何度も鳴いたので、さてはアマノジャクが姫に化けていたかと、駕籠の中から引き出したら尻尾を出した。それをみな寄って殺してしまった。

(尻尾を出したということは、鹿角郡の一例の他に、和賀郡の話でも機を織っているにせの瓜子姫子が、後からのぞいてみると尻尾をだらりと垂らしていたといって、幼ない聞き手の想像力をそそっている。しかも胆沢郡の例(五)では、そのアマノジャクが飛んではね釣瓶つるびんの横木の上にとまったともいつているので、定まった形はもうなかったのである。これがこの話の山姥だの狼だのに、変わっていかねばならなかった原因ではないかと思う。)

二〇 富山県下新川郡(旅と伝説三卷六号、竹内正氏)

これはわずかに一部分が記憶せられている。織姫様が機を織っているところへ、アマノジャクが来て姫を引き裂いて柿の木に掛ける。そうして自分が姫に化けて機を織りつつ、

おり姫様こそ木の上に

アマノジャクこそ機織れ

とんとんからい、とんからい

といっていたというだけで、その他はまだ採集せられておらぬ。

二一 長野県小県郡(郡史余篇)

爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に行くと、川上から瓜が二つ流れてくる。

大きな瓜こつちへこい

小さな瓜そつちへ行け

といって、大きな瓜を拾って家に帰り、庖丁で切ろうとすると自然にその瓜が二つに割れ、中からかわいらしい女の子が生まれた。瓜の中から生まれたから瓜姫と名をつけ、大悦びで育てた。瓜姫がもう十六になったので、嫁入り支度を買いに爺婆は町へ行く。誰が来ても戸を開けると言いつけられて、瓜姫はたった一人、ちゃんちゃんと機を織っていた。そこへアマノジ

ヤクという毛だらけのこえた男が来て、手のはいるだけ、頭のはいるだけ、胸のはいるだけと、だまして戸を開けさせて家の中へ入ってしまった。そうして瓜姫を誘うて裏の畠へ梨を取りにつれ出す。始めは瓜姫は拾い役で下についていると、上から喰いかけや、唾や小便をかけた梨を投げ下す。次に役を代わって瓜姫が梨の木に登ると、薪を木にゆわえて下りてこれらぬようにしておいて、自分が姫に化けて機を織っている。それを知らずに化けた瓜姫を馬に乗せて、爺婆が嫁入りさせようとしてみると、木の上の姫は泣きながら、

瓜姫の乗る馬に

アマノジャクが打乗った

と言う。これを聞いてさっそく馬からたたき落として、殺して萱原へ捨てた。それゆえに今でも萱の根はアマノジャクの血に染まって赤い。

(下水内郡の話では爺婆が帰ってきて、見つけたということになっているが、梨の木登りと萱原に捨てたという点とは、二つながらこれと一致している。しかしそれだからこれを信州型だなどとは、まだ容易に速断することを許されない。『嬉遊笑覧』巻九は私などの知るかぎりにおいて最も古い瓜姫咄の記録であるが、これには信濃の人の語りを聞いたとあって、次のような形のものを記している。

姫生ひ立ちて機織ることをよくして、常に一間の外に出でず。或時庭の木に鳥の声して、瓜姫の織りたる機のこしに、アマノジャクが乗りたりけりと聞えければ、夫婦怪しと思ひて一間の内に入つて見るに、アマノジャクは瓜姫を縄にて縛りたり。夫婦驚きて之を助け、アマノジャクを縛り、此奴^{こやつ}薄の葉にてひかんとて、薄の葉にて挽きて切殺しぬ。すすきの葉のものと赤く色つきたるは、其血の痕なりといふ物語、田舎には今も語れり。

この書の著者がいろいろの事を聞いた信濃の人は、上田付近の者であつたように他の条には見えている。そうすると、嫁入りの話はもう脱落して、輿^{こし}を機のこしのように解していた例が、同じ土地にもすであつたのである。松本市の周囲でも今から三十年前までは、瓜姫が機を織つていてアマノジャクに誘^{ゆづ}拐^{かい}される話のほうに、変化はおそらくは部落ごと、または家庭ごとにもあつたものと思われる。今まで集まつた資料によつて、しいて一つの傾向を求め出すならば、奥州の瓜姫はたいしては食われてしまつてゐるに反して、信州以西の瓜姫はみな助かつてゐる。これなどは同時並存のやや望みがたい点であり、したがうて説話成長の異なる段階を示すものかと思うが、なお今後の新採集までを引くため、予断するだけの胆力は私は私にもつてゐない。江戸の子供が瓜姫の咄を知らなかつたという『嬉遊笑覧』の説はかりに信ずるとしても、四国・内海の島々、大和・紀州の山村等に、まだこの話のないのは伝承者に出会わぬためであつた。注意と搜索との行き届かぬといふことしか意味してゐないのである。しかるに『小泉郡史』の編者は、芳賀博士の説を引いて、瓜姫は信濃と越後とのみに残つてゐる昔話のようだと述べてゐる。芳賀先生は私の旧師であり、またすでに故人である。先生が何によつてかかる説を立てられたかの理由は、もはや尋ねにくい途も絶えたが、他のいま一つの何ゆえに地方の学徒が、この先生の説に信従したかの動機にいたつては、もう一度考えてみる価値がありそうである。

天之探女

『秋田方言』には平鹿郡ひらかにおいて、山彦をアマノジャクというところある。関東でも常陸稲敷郡・上野邑楽郡などで、アマノジャクというのは反響のことであり、伊豆田方郡も山彦をアマノジャクといっている。信州では下水内郡で、反響をヤマノジャク、『東筑摩郡方言』は口答えすること、または反対することをアマネジャクというところある。越中では高岡市の付近までは、山彦をアマノジャクといい、下新川郡ではメメンジャクともいっているが、加賀に接した西礪波郡とくはなになると、もうこれをヤマンバボと呼ぶのである。こだま山彦を山婆という土地は、なおこの以外に美濃の加茂郡でヤマンボ、下野の芳賀郡などもヤマンバーというのがこれを意味する。いずれが先であったかは別として、二つの名称は入れ交って行なわれているのである。山婆とアマノジャクとを同じものように考えたのは、「瓜子姫」の昔話だけではなかった。

出雲では、山彦は山の神に使われる化物の声だといっていた(『郷土研究』二卷二四〇頁)。ある猟師が雪の降った山で日を暮らし、火をたくつもりで枯枝をほんと折ると、向こうの森でもほんと音がした。驚いてあつと叫びたら、またあつと答える。肝をつぶして逃げ帰る途中に、木の株に腰かけて煙草の火を切り、その音があまり高かったので、思わぬことしたというところ、また化物のほうでも思わぬことしたとまねした。それから後は何の怪もなくて、無事に帰り着いたなどという話もある。『続々鳩翁道話』卷二下には、飛驒の山中で檜の長へぎを作る細工人こざとがひとり働

いているところへ、背の高い山臥やまふしが不意に現われて、なんでもかでもこちらの思うことを言い当てる。それに恐れてわくわくしている際に、へぎ板の端がはねて相手の鼻柱を打つと、おのれは気の知れぬ男かなといつて逃げ去ったというところがあるが、この類の話はちょうど談義に都合のよいように寓話化しただけであつて、その起こりはさらに一昔古いものであつたことは、各地の例によつて推察しえられるのである。

阿波でも、反響は山男の口まねだといっているそうだが、一方にはやはりこれと同じ話ができている。『阿州奇事雑話』中巻に、三好郡の深山で杣が小屋の中で焚火をしているところへ、夜分に目一つやまおの山父が来て火にあたる。恐ろしいなと思うと、恐ろしいと思つていゝなといひ、殺してやろうかと思うと、殺してやろうかと思つていゝな、汝なごときが手に合う者にあらずといひ。しかたなしに何事も思ふまいとすると、またその思案を言ひあてるので弱つていたが、折ふし火にあぶつてたわめていた木の端が、はねかえて山父をはじいたのにびっくりして、なお人間の心のうちは測りがたいと、急いで退散したと記している。近ごろの話では、これを桶屋が仕事をしているところ、一眼一脚の山父という怪物が来て思ふことを言ひあてて、そのうちに輪竹がはねて山父を打つたので、その方は思わぬことをする者じゃ。ここにいるとどんな目にあうかもしれぬといひ、逃げ去つたなどというところである(『郷土研究』二卷三七八頁)。説話をこゝういふふうにして世間話の形にして話すことは、日本特有の一つの技術であつた。そうして桶屋はまた近代の説話輸送に、かなり重要な役割を引き受けていた旅人である。

これは前代の農村生活に、非常な人望のあつた化物退治譚の、新しい一分派であつたといふこ

とができる。すなわち夜分に山の妖怪がのそりとやってきて、焚火の向こう側に坐りこんだというまでは、「石の餅」その他の多くの例も共通であって、ここにはただ人の心中を探りあてるといふ一個条のみが、要素として採り用いられているので、偶然かもしれないが、この話の分布する区域も、ほぼ瓜姫アマノジャクのそれと重なり合っている。「岩手郡昔話」では御明神村小赤阪の彦太郎なる者、かつて葛根田の山奥において箕の輪曲げをしていると、山姥が来てああ寒い寒いといって焚火にあたった。このホドアクを（炉火）を引っかけてやるべえと思っていると、彦太郎お前はホドアクを俺さ引っ掛けようと思っているなという。この新しい鉈で切つてやるうかと思ふと、また山姥がそれを言いあてて。これは食い殺されるこつたと思つてみると、それもまた図星をさされる。途法にくれてしまつて、黙つて箕の輪を曲げて火にあぶつていたところが、その輪に火がついてはじめて、したたかに灰を山姥にふりかけた。これは不覚をしたと叫んで外に飛び出し、笹原にころげ込んでうんうんとなつていたという点は、白い石を火に焼いて、餅と見せかけて食わせたという話と同じ結末である。これがあるいは桶屋が竹を切りに山にはいつても、炭焼が炭俵の輪を曲げていたらともいふ人があるそうだが（昔話号三五頁）、なお私たちには小赤阪の彦太郎というほうが、話の成立ちもわかつておもしろく感じられる。彦という名の親爺は、しばしばこういうところでもない話の主人公になっている。ここでもおそらくは世間師の桶屋と同じく、昔話を自分の経歴のようにまことしやかに話すことによつて、彦太郎の名を得た一人の話好きがあつたのであらう。

羽後の角館にも五右衛門という樵造りがあつて、曲げていた小柴の手を放して、狼をはじき殺

したという話が伝わっている（『聴耳草紙』二〇五頁）。信州でも北安曇郡の山村に、飛驒とよく似た例が二つある。その一つは、竹取り男と山男の間答（『小谷口碑集』一四七頁、いま一つは、狸が美しい女に化けて炭焼の小屋に現われ、これもかんじきを造るためにあぶつていたジシヤの木が、片方の手から離れて、罌罌裏の火をはねかけたことになっているが（『郷土誌稿』二巻八九頁）、狸も山男もともに人の意中を洞察しながら、何心なくした事にはおどかされて、敗亡したというだけはどれも同じで、なるほど後に道話にでもなりそうな、ちょっと考えさせられるおもしろい思い付きではあつた。しかもこの話の変化と分布の状態を見ると、何か都会の心学以外に、これを普及せしめた動機があつたことはほぼ確かで、それを私などは山彦やアマノジャクの、人の言葉に口返しするという経験に出でたものと想像しているのである。今までの昔話が採集せられたのは、大体に山に寄つた地方が多かつた。『甲斐昔話集』には、これをオモイという山中の魔物としている。樵夫が割っている木のこつばが飛んで目にあたり、「思う事よりも思わぬことの方がこわい」と言つて、どんどん向うの山へ逃げていったなどという話があるから、オモイという名前はたぶんそれにもついているのである。三河の北設楽から信州伊那の谷にかけては、これをサトリ男といつて山男の一種のように考へていた。これも人間に近よつてその心の中をさとするが、時々人は人の無心の所行に驚かされて、その方はまことにさとりきれぬことをする奴じゃといつて、退散したなどという話がある。信州遠山の程野の助作という狩人の逸話として伝わっているのは、ある時本谷の山にはいつて芝生の上に午睡をしていて、高い声で呼ぶ者があつたから目をさますと、岩の上に目の赤い大男が、自分をじつと見つめていて、まず第一番にサト

リのわっぱという物を投げかけた。そうして腹の内に思うことを次々に言いあてて。いよいよ急場と心得て取っておきの黄金の弾丸を出しかけると、ちゃんとまたその決意を見抜いて、この事口外するなと言って立ち退いたが、あとには径一尺もある足跡が残っていた。助作臨終の床においてはじめて人に語ったとも伝わっているが（「民族」三卷一四二頁）、おもしろいことにはその「サトリのわっぱ」というのが、みずから跳ねて山人の鼻をはじいたという、檜の長へぎのことであったらしいのである。すなわち昔話は山村を行きめぐって、次々にその形を変化させたけれども、なお当初の要点であったものは残っていた。すなわちこんな偶然の出来事に待つよりほか、他にはこれを追い払う手段もないくらいに、人をからかいにくる奥山の怪物が、よくよく始末の悪いものと考えられていたので、これもおそらくは多くの昔話と同様に、まだ人間のいつくうに幼なかつたころの印象が、子供を通じて永く保存せられていた結果かと私は思う。

われわれの国語においては、樹精山魃に対比すべきコダマまたはヤマヒコが、今なお反響の意味に用いられている。かれらは必ずしも頻々とその姿を現わさず、まず遠くから人間の耳に向って挑戦していたのである。これを単純なる自然の現象なりと、解し知るまでの間のわれわれの感覚は、ただ小児のみがまだこれを記憶している。あるいはこの山彦に対する黄昏の不安を、かのサトリ男やヤマンボの話とは、別のことであるように思う人があられるかもしれぬが、二つの点に注意するとその誤りはやがて解ける。その一つは前代人の生活に内外の差が少なく、われわれは常に高声に物を考えていたこと、二つにはいわゆる口合戦のはじまりが、たいていは物まねを武器としていたことである。敵を制せんとするののしりや笑い声が敵にあざけられ、ないしは退いて

わが心に語ろうとするひとり言がまねられると、成人でも多くは怒り、子供はしまいには泣き出す者もある。中世の軍記などを見ると、実際にこの武器がよく用いられていた。少なくとも相手がわが力をたのみ、こちらを軽んじて闘争を辞せざることを表示していた。心の弱い者がそれを敵飛行機の尾羽の音を聞くように、恐れおののいたのは当然のことであつた。それゆえにこの山郷の昔話の一つが、最初山の魔物の際限もない口返しにはじまり、次には内心の弱味を見すかされることになって、末は無言のうちに起こつた外部の事実によって、かろうじて危地を脱したというふうに話されていたのも、いたって自然なる空想の展開であるとともに、一方にはまた他のすべての妖怪退治譚の成長してきた順序とも合致している。怖畏を基調とした昔話の宇宙観が、後に壮快なる勝利の民間文芸と化するまでには、その中間に身の毛のよだつような逃竄説話という一つの過程があつた。あるいは僥倖であり、身に付いた幸運であり、ないしは神仏の冥助、個人の智巧というように、難を免れ仇を制する条件は、時とともにその数を増加し、人はその間においておいおいと正しい法則を発見して、幼ない幻覚は逐次に笑いの領分に押しやられたが、なお昔話のごとく信ずべからざるものを楽しむ社会では、かつてわれわれの一たび経過した境涯が、淡い痕跡となつてしばらくは保存せられているのである。

山父・山姥の信仰は土地と時代によって、かなり著しい変化があるけれども、その起原の至って古いものであることだけは、記録の上にもいくつかの徴証がある。そうするとこれが誘因の一つであつたサトリ男の説話なども、また決して新しいものでなかつたということは、想像してさしかえがないようである。ただし中部日本のやや広い地域にわたつて、その山彦をヤマノジャク、

あるいはアマノジャクという方言があり、一方にはまた瓜子姫の昔話において、山姥とアマノジャクが交互に代用せられているという事実によって、これをも初期以来の山の神怪を代表するもののごとく見ようとすることは早計に失する。私などの考えているところでは、アマノジャクの由来の年久しいものであるか否かは、また一つの新しい問題であって、しかもこれが相応に古いものだという証拠は、別にこれを提供することができる。九州ではいずれの土地に行っても、今なおはっきりとアマノジャクと呼んでいる。かりに内容と定義が時代につれて推し移ったにしても、少なくともその名称は神代史の天の探女あめのさぐめを受けついだものということだけはまず確かである。ところがその天の探女の何物であるかが、きわめてうろんであったのも昨今のことではなかった。『日本書紀』の一書にはこれを国神くにのかみと記しているのに、『倭名抄』はすでに鬼魅類に編入している。後世の諸註にも、あるいはこれに従神しんといい、または天稚彦あまのわかひこの侍女であったと解しているが、はたして『万葉』の歌にあるごとく、石船いしふねに乗って天降った神ならば、国神であつたはずはないので、つまりは今あるわずかな記録ばかりでは、どうしてもその本体を突き留める途がなかったのである。こういう場合にこそは、民間の伝承が役に立つ。ひとり瓜子姫の忌機殿いみきどのを襲うて、昔話の平和幸福を攪乱かくらんしようとしたというだけでなく、大よそ現存の口碑において、アマノジャクの持たされた役割はきまつている。それを集めていねいに積み重ねてみたならば、ひとりでに問題は解けることと思うが、まず気がつくのは人間の望むところ、そうしてまた神々のおぼしめしにかなわぬことばかりをするのが彼であつた。かつては茎一面に付いていた五穀の実を、しごいて穂先だけにちよっぴりと残したのも、田畠には雑草の種、野山には人の困る茨の種をま

いてあるいたのも彼であつた。その茨の種のまき残りがまだ多かったのを、一度にふり散らしていったという土地に、今でも茨ばかり茂つた処があり、大豆だけは手が痛くてしごききれなかったために、今でもものとおり下の方に実がなるといふ話もある。それだからアマノジャクは百姓の讐であるといつて、九州の方では毘沙門天びしゃもんてん、東国ではまた路のかたわらの庚申さんが、足の下に踏み付けておられるみにくい石の像を、彼だと思つている者は多いのである。これはもちろん大昔以来の言い伝えのままではないであらうが、何かもとづところがないから、話がこずいうふうに展開していくことは、おそらくはむづかしかつた。

そのアマノジャクの特徴ともいふべきものを、私は三つほども指點することができ。一つには彼の所行というものが、いつの場合にもぶちこわしであり、または文字どおりの邪魔であつて、いまだかつてシテの役にまわつたことはなく、相手なしには何事をも企てていないことである。次には彼の存在がただ興味ある語りごとの中にのみ伝わっていることと、それからもう一つはその事蹟が、にくらしいとは言いがたが、常に幾分の滑稽を帯びていたことである。近世言いはじめたものでは貧乏神などが似た例ではあるが、これは明らかにわれわれの考えている神というものから遠いのみならず、妖怪鬼魅としてもまた決して純なものではなかった。最初この名の人に知られた際には、あるいはもう少しはじめに恐ろしく、または謹慎して仕えなければならぬ靈であつたらう、という想像は成り立つかもしれないが、少なくとも記録の保存せらるるかぎりでは、天の探女は単なる説話上の仮設敵であつた。以前の神應が特にそういう人物を作り設けて、語りごとの印象を深からしめたもの、すなわちまた一種の「隣の爺」であつたらしいのである。諸

国に数多く残っている一夜工事の伝説に、神が鶏の声をまねて鬼の計画を中止せしめられたというのがあるかと思うと、また一方にはそれと反対に、神や偉人の世に幸いせんとする企てを、アマノジャクがあざむいてさまたげたということにもなっているのは、かなり有力な暗示のように私には受け取れる。佐渡では役の行者と飛驒の匠とが、その一夜の仕事を競争していた際に、やはりアマノジャクの鶏の声にだまされて、行者は国府川を鵜の柄三たけ掘り残し、匠は薬師堂の戸を一枚作り残して中止してしまつたといっている。越後では石地の羅石明神が、その佐渡の島へ岩橋をかけようとして、これも眷属のアマノジャク、一名を山彦というなまけ者が、鶏の鳴くまねをしたのにあざむかれて、未完成のままに姿を隠されたといっている。紀州の南志野の松尾池なども、行基菩薩が一夜のうちに掘り上げようとしたのを、アマノジャクが鵜の音をまねしたばかりに、もう夜が明けたのかと思って、その仕事を断念して立ち退いてしまつた。それゆえに今も「志野の粉はたき」といって、臼を使って粉をひくと村の人に祟りがあると伝えられた。これらはいずれも伝説の目的物がまずあつて、これを説明するために人のにくむアマノジャクが、ひっぱつてこられたものとか考えられない。そうすると、かの難波高津の石船の歌なども、間接にはここにおもしろい一つの伝説が、かつてはあつたということを想像させるし、さらに進んでは記紀のともに採録した天稚彦の物語のごときも、あのころはやすでに口遊みとして流伝していたということを推測せしめるので、つまり人生の理想の幸福なためには、アマノジャクなどはいないほうがよかつたのだが、退いてこの現実の不如意を甘ない、また楽しもうとするには、彼もまた欠くべからざるたいせつな役者であつたのである。

瓜子姫説話のアマノジャクが、ある時は飛んで井の上の木にとまつて鳴き、またある時は尻尾を機台の下へだらりと垂らしていたというのみか、土地によつてはそれが山姥とも狼ともなっているかと思うと、また一方には隣の家の意地わる娘といった処があるなど、他の話の大筋が全国を一貫しているに對して、特にこの部分だけがいくらかでも変化してきたのは、意味のあることではなればならぬ。個々の語り手の自由なる空想は、信じない者の聞くことを許さなかつた前代の説話においても、なおある点に限ってははやくから容認せられ、どうせ乱暴であり、世法の無視であつたアマノジャクの出処進退のごときは、またちやうど勝手にこれを説きたてて、大衆の印象を新たにするに適していたものかと私は思う。灰時き、花咲かせ、尻ひり爺等の、まねをしそこなつて尻を切られる役がこれと似ている。それからいま一つは親に不孝な鳥の話、親が山へというと必ず川へ行くので、わざと墓場を川原に作れと言つて死ぬと、それただ一つだけは言うことを聞いた。その子が鳥になつて雨降るたびに、水が出て墓が流れはせぬかと心配して鳴くというのだが、話の有名なわりにその鳥だけが国々で違つてゐる。たとえば能登では鳩、私の故郷では鳶、またはこれを梟といつてゐる土地もあるばかりか（『南方隨筆』三三九頁）、加賀と上総と九州以南の村里では、それを雨蛙の前生譚として伝えているのである。越後の西蒲原でも雨蛙をアマンギャクというが、ギャクは鳴き声から出た言葉だろうと解せられて、どうやらこの話はもう絶えているように見える。しかし九州では広く雨蛙をアマガクといい、上総の夷隅郡なども雨蛙をアマンジャクという方言があつて、いずれも親不孝が墓を水辺に作つた話をともものうてゐるのを見ると、たぶんは両者語音の近いのがもとで、しだいにこう変わつてきたのも新しいこ

とでなかった。しからばそれを薦・鳩・梟などの逸話としたのは、さらに第二次の改造であつたかという、私は必ずしもそうは思っていない。全体に周囲の生物の特徴に注意して、これを興深く説明しようとしたのが、最も古風なる平民の文芸であつた。ことに鳥類の說話は日本でははやっている。だからこれなども主人公の名前とは関係なしに、別に一種の「なぜ話」として發達したので、つまりはわれわれの天之探女譚が、本来非常に成長しやすい伝承であつたことを意味するまでであつたのかと思う。『豊後伝説集』を見ると、九州のアマガク話がもし最初から兩蛙であつたならば、發生しえなかつた伝説が残っている。高田の町では不孝なる娘が、たつた一度だけ母の言うことを聞いて、墓を川の中に作って大水で流してしまつた。それからある日八幡様へ参る道で、天から降ってきた石のために押しつぶされて、死んで自分も石に化したといつて、鳥居のかたわらなる石灯籠の下に、あたかも子供が押されたような形をした平たい石が今もあるということである。これが毘沙門や青面金剛の、足下に踏まえてござるアマノジャクと、同じ系統の口碑であることはいうまでもあるまい。私はただこれほどまで変化してきた上代の天之探女が、なお依然として女性の要件を失わずにいたことを、驚きまた注意せずにはいられないのである。

黄金の瓜

(一) むかしある殿様の奥方が、あやまつておならをなされた。殿様はたいへん怒つて、その奥方をうつろ舟という箱の舟の中へ入れて海に流された。流れ流れてそのうつろ舟はある島に流れつく。島の漁師が見つけて開けてみると、美しいお姫様がおられるので、家へ連れて帰つて親切に世話をした。そのうちにお姫様は男の子を生む。その子が大きくなつてから、茄子の苗を持つて殿様の御殿へ売りにいく。それは何茄子かと殿様がお尋ねなされると、これは尻をひらぬ女の作つた苗ですと子供が答える。それを聞いて殿様は、おならをせぬ女があるものかという、そこで子供が、それではなぜに私のお母さんは、尻をひつたくらいでうつろ舟で流されましたかといふた。殿様ははつと昔の事を思いあつて深く後悔し、母子二人を城の中へ呼びもとすことにした(『孝嶋島昔話』昔話号八三頁)。

(二) むかし殿様の奥方がお客の前で、どうしたはずみでかおならをした。殿様は腹を立てて、独木舟にその奥方を入れて海に流した。泣きながらだんだん流されていくうちに、舟はある島に流れつく。浜を通りかかつた尼様が助けて自分の寺に連れていって世話をしているうちに、玉のような男の子が生まれる。その子が十歳になつて、母からこの話をきいて、独木舟に乗つて殿様の国に行つて、山から椿の木を一本掘つてきて、「金のなる木や」と殿様の屋敷近くをふれてあるいた。殿様がそれと呼びとめて買つてみると、ただの椿の木だから、どうしてこれに金があるかと尋ねる。おならをせぬ人が植えるならばお金がなりますとその子が答える。馬鹿者め、世の中に尻をひらぬ者があるかしかられて、その子は涙を流し、そんならなぜにお母様は流されましたかと言つた。それを聞いて驚いて殿様はその子の顔を見ると、昔の奥方によく似ていた。すぐに家来をやつて島に船橋をかけ、奥方呼びもどした。そうして今までの島の子供は、たち

まち若殿様になって親に孝行をした(豊後南海郡童話、『日本神話伝説の研究』四〇六頁)。

(三)これと非常によく似た昔話が朝鮮にもあった。昔ある花嫁が新枕の夜、屁をしたために、罌は縁を切って再びおとすれなかった。その花嫁が身持になって、玉の男の子を生んでその名を無心出とつける。無心出は大きくなって通学をするようになったが、友だちがあなどりあざけるので、不審して母に問い、仔細に父に見捨てられたわけを語って聞かされた。そこで外に出て一升の瓜の種を買い、それを携えて父親の家に行き、朝植えて夕に食べられる瓜の種を買ってくれといった。父親が出てきて、それは本当かと聞くと、本当だ、しかし屁を出さぬ人が植えなくては、私の言うとおりにしてできぬと答えた。どこに屁をひらぬ人があるものかと主人がいう。そんならなぜにあなたは私の母様を、婚礼の晩に捨てなされたかといったので、主人ははじめて心づいて少年に一部始終を尋ね、わが子だとわかったからただちにその離縁した女房を呼び迎えた(清水兵三君訳、右同書四〇八頁、ただし出処をつまびらかにせず)。

(四)同じ豊後国でも吉吾嘶という笑話群の中に、主人公の吉吾が「金なる木はいりませんか」といって、ただの椿の木を売りにいった話がある。主人との問答はまったく(二)と同じで、それでやりこめて屁ゆえに離縁した花嫁を呼びもとさせたといひ、おまけにその嫁が客來の席で屁をひったから怒って追い出したというのだから、いよいよもって前の話の転用であることは明らかである。ただしその奇抜なかけひきをした者が、十歳の童児でなくては感動はないのだが、大体に笑話はみなかくのごとく、一部の興味に走ってゆくのが常であった(中田千畝君集、「旅と伝説」一卷四号)。

(五)ところが一方には遠く奥州の岩手山の麓に、これがまだ幾分か信じやすい伝説の形で保存せられていたのである。むかしこの土地には野菊という美人があつて、二度まで雫石の殿様のオキサキに上がつた。雫石の村では野菊井戸というのが、その野菊の化粧の水であつた。そこで面を洗えば、今でもええおなごになるといっている。故老の記憶していた話に、この野菊というのはどこにもないというくらいよい女で、雫石の殿様手塚左衛門尉という人のオキサキに上がつた。ある日殿様の前で少し粗相なことをしたために、おとがめを受けて暇を出されて、この井戸の脇に住んでいた。何年かの後に殿様は鷹狩の帰りに、雫石の町で不思議な童子が、黄金のなるふくべの種と、ふれてあるいているのに出会つた。本当に黄金がなるかとときくと、黄金は本当になるが、屁をせぬ人がまかねばならぬと答えた。屁をしない人があるものかと殿様がいうと、それならなぜに私の母ばかり、おとがめを受けて出されましたかといったので、はじめてその少年のわが子であることがわかり、母の野菊とともに再びお城へ上がることになった。今でもこの地方の御祝いという酒盛歌に、

雫石はめいしうどこ

野菊の花は二度ひらく

という章句があるのは、この時からじまつたものであるという(田中喜多美君、「民族」一卷一号)。(六)右の伝説の主要部が、もとはこの地方でも流行の説話であつたことは証拠がある。しかも今日行なわれている昔話は、はやまた少しばかり変化している様子で、現に隣の紫波郡では、これを黄金のなる吹花といっている。むかし殿様の奥方が同じ理由によって追い出され、里方に帰

つて男児を生んだ。その子がわけを聞いてから一心に学問をする。そうしてある日、いろいろの色紙を買ってきて、きれいな花を吹いて殿の御殿に行き、黄金のなる吹花を売ろうと呼んだ。これも殿様がおかしなことをいうと思つて念を押すと、はい屁をひらない人が手に持てば、必ずこの花に黄金がなりますと答えた。殿様は笑つて、人間に屁をひらぬ者もあるまいという。しばらくどうして私の母親ばかり、そんな道理のないお咎めをこうむったかというので、いかにももつともなことであり、それでまたわが子であることを知つて、ちやうど世継ぎがないのですぐに母子を召し出して、跡目に直したということになっている（『紫波郡昔話』一七五頁）。

(七) 最後になお一つ、これは沖繩で昔あった史実として伝えられたものであるが、それをほぼ記録のままにここに引用してみると、久高くたかの島の外間根人はまねびとの二女思樽おもいだる、巫女となつて禁中に召され、容色佳麗なるがゆえに内宮に入つて王夫人となる。諸妾嫉忌してあえて語を交えず、たまたま思樽が王の御前において誤つて放屁したのを知つて、相集まつて常に笑い事にしたので、懐胎の身ながら王宮にもおりがたく、暇を告げて島に帰つてきた。すでに産月に臨んで意に思えらく、これは聖王の胤たまなればけがれたる処に産むは恐れありと、別に一座を設けてそこに一男を降誕し、名づけて思金松兼おもきんそうけんといつた。長成すること七歳、しばしば母に向かつて父は何人ぞと問うので、包む能わすして事の由を語り、汝は海島に生まれて衣服容貌も京師に像されば、たとえ天顔を拝せんと願うとも、志を遂ぐる能わじと告げたれば、思金松兼はこれ聞き終わつて、すなわち伊敷泊いしきまつという浜に出て、東方に仰ぎ向こうて深く祈誓をこむること七日であつた。その七日目の明け方にあたつて、黄金の一物あつて大なる光輝を發し、波のまにまに浮かびきたる。

衣の袖をのべてこれを撈くわえばそれは黄金の瓜であつた。そこで大歓喜してその瓜をふところに収め、ただちに母に告げて都に上り、禁城の門に立つて謁を乞うた。役人らは彼が髪赤く衣粗なるを見て、怪しみかつ制したけれども、思金松兼はなんのはばかりとところなく威儀蕩々として、進み入り、ついに御前に召し出されて懐の瓜を取り出して献上した。いわくこの瓜は国家の至宝、世界稀有けうゆうの物なり。けだし天甘雨を降らし、肥土すでに湿おうの時、特にいまだ屁を放たざる女をしてこの種を播かしたまわば、すなわち蕃衍茂盛して実を結ぶことはなほだおびたしからんと。王聞いて大いに笑いたまい、人のこの世に生まるる誰か屁を放たざらんやとありければ、思金松兼はその言葉に付いて、人屁を放つあるもなんの咎とがかあるべきと奏上した。王はその語によつて心を動かされ、さらに内院に呼び入れてつづきに事の由をたずね、はじめて母と子の生い立ちを聞こしめされた。東海の小島の外夷孩童、このまま宮中に留めんもいかなり、しばらく帰つて時節を待つべしとあつて、いったん久高の家にもどつていたが、後に国王に世子なきによつて、封じて世子となし、王の位をつぐことになった。それよりして代々の聖主、二年ごとに一度、この久高の島に御幸あり、かつ年に一次は外間の根人および祝女、御仲門より進み入つてうやうやしく魚類数品を献ずれば、祝女は内院に召し入れられて宴を賜い、かつ葉茶・葉煙草を授けらる。根人にも御玉貫一双を下し賜わが例となつていた。康熙庚子こうしこうしの年よりその献物を裁し去るとあれば、すなわち西洋の十八世紀初めまでに、すでにこういふ言い伝えが生まれていたのであつた（『遺老説伝』卷二、原漢文）。

以上七つの話が本来は一個の説話であつたことは、まず何びともこれを否むことはできない。

そうしてその変遷のいずれが早く、いずれが後であったかも、そう多分の弁証は必要でなく、したがうてその分布伝播の経路も、おおよそはこれによって跡づけられるかと思う。ただし大正十年春の「朝日新聞」に、私が「久高の尻*」という一文を書いてしまふまでは、別に同様の例が内地にもあることを、実はまだ一つも知らなかったのである。しかも今日になつてもなおこの最後の沖繩の一例は、他には見られないいくつかの特色あることを指し示される。その一つは、これが文籍に保存せられた、おそらく最古の資料であらうということである。第二には、これを採録した人の心持が、少しでもその内容を疑わず、いわゆる正史の欠けたるを補うものとして、できるだけ合理的にこれを解釈せしめようとしていたことである。第三には、少なくとも久高の島人には、これは純然たる伝説であつて、説話でなかつた。以前この由緒を申し立てて王廷の優遇を受けていた外間根人は、今でも久高の名門であつて、その家には思金松兼王子の産殿を保存するほかに、なお母思樽の白絹の下袴を什宝として持ち伝えているそうである。

われわれの問題はかほどまで世に広く行なわれている一個の説話、それも明らかに中世の文飾によつて、やや興味新しく改造せられたものが、いかにしてこぼかりでは、いとまじめに信じられていたろうかということであるが、それを説明する途はたつた一つ、すなわち神話もまたすでに片端は成長するものであつて、その成長に参与した外部の力には、たとえば尻の理窟のごとく一時風をなし、広く国内を周流するものがあつたということである。他の側面からいふと、久高の小島には、尻の挿話の輸入せられる以前より、これと接合しうるような一種の古伝があつて、前者はたまたまある神童の聡明睿智を例示するにふさわしい新話術として、採用せられたに

すぎぬのであつた。昔話が専門の話者によつて、いくらでも作為し転用せられるようになってからも、純朴なる聴衆はなおこれを信受して、実有の歴史のごとく思つていた例は方々にあるが、それには隠れたる根本の誘因があつた場合が多いかと思う。久高の場合のごときは、その誘因が隠れてもいない。第四の特徴として列記してよいことは、この民間の貴種を世に現わし、再び父の王に逢うてその大業を嗣がしめた因縁は、七日の祈念によつて大海から流れ着いたという黄金の瓜であつたことで、童児はその瓜の中から生まれたのではないけれども、瓜によつてはじめてその夙慧の質を立証することができたのである。われわれの珍重するところの小さな子説話と、瓜との関係は深かつた。しかるに多くの府県ですでにこの点を忘れてしまい、話が流転したと同様に、その瓜もまた茄子となり、山の椿の木ともなつた。ひとり南海珊瑚礁上の若干家族のみが、いつまでも海からだだよい寄るものの尊さを記憶してしてくれたおかげに、ここにわずかなる連絡が見いだされようになつてきたのである。この系統の説話は、今日のところでは男は桃太郎、女は瓜子姫と立ち別れているようになったが、これも決して定まつた固有の形でなかつた。あるいはまだどこかの隅に、瓜をうつば舟にして遠い国から渡つてきた瓜彦・瓜王丸の昔話が、偶然に残つておらぬものとも限らぬのである。

田螺の長者

一 舌切雀と腰折雀

現在のいわゆるお伽噺が、どれほどまでに昔の面影を保持しているか。多くの開けすぎた国ではそれを知るべき手段がもうないために、いくつもの仮定が常に相戦っていたのである。私はもしこれらの間にも日本のように、比較しうべき眼前の資料が豊富であったならば、はたして説話学なるものが今日の形態をとって、発達したであろうか否かを疑う者である。すでに瓜子姫の例でも明らかにしたごとく、この国ばかりでは同じ一つの昔話が、少しずつ姿を変えて隅々にまで分布している。いたってわずかな将来の骨折りをもって、その数を二十にも三十にもすることが出来る。かりに直接にはどの点が古いかを説明しがたくとも、少なくとも何が新たに加えられた変更であるかを見いだすことは、今ならばまだ決してめんどうではない。そうして都会において筆録せられ、もしくは印刷せられたものが、必ずしも最も純なる形ではなかったことだけは、とにかくにすでに確かめられたのである。そうすればまず国内のさらに古いものを尋ねて、何がいま一つ以前の要素であったかを知って後に、かの外国の学者の区々相いれざる意見を判別し取捨するのが順序ではないか。かれらもし新たにわれわれの多くの資料を聞き知ったならば、その

所説はあるいは改訂するところがあるかも知れぬ。少なくとも日本のごとく自身口碑を管理する民族の、直接の理解と感覚とを聞こうとすることは疑いがない。だからわれわれの努力は単なる学問の国産奨励でなく、むしろ進んで将来の輸出を隆盛ならしめんとする準備である。

日本の昔話の中では、ことに「舌切雀」などが外国人に珍しがられるようだが、この昔話のほかに類型の少ないのは、実は近世になるまで口から耳への伝承を主とし、いちじるしい変化がその間に行なわれた結果であった。しかるに世には説話の伝播を信ぜんとするのあまり、かえってわずかに残っている前代の特徴すら、見落とす人の多かったのは不幸である。たとえば『宇治拾遺』に出てくる「瓢の米」の話が、朝鮮を通じて入ってきたということは、今ではもう確かだといつてよからうが、これとわれわれの「舌切雀」との間には、主人公が雀であるという一点以外、本来はそうたくさんさんの一致はないのであった。善人の婆の家が富貴となり、隣の欲深婆は難儀をするというだけならば、ほとんど半分以上の昔話に付いてまわっている。これは一方が純然たる動物報恩譚なるに反して、こちらは単に拾って養い育てたということが幸運の機縁となっているので、その点はむしろ「桃太郎」や「瓜子姫」のほうに近いのである。だからもし瓜と桃とが入れ代わったごとく、またヨケナイ童子が肥前島原で黒い犬の話となり、越中の灰まき爺において、桃の中から犬ころが出たというごとく、話の主人公が雀の形をもって現われたことが後年の変化であると仮定すれば、いよいよもって腰折雀の命を助けたという話から、系統を引くものとは言いにくくなるのである。はたして曲亭馬琴以後の註釈家が、桃とか犬とか雀とかいう部分を、古今不変の要素であるかのごとく、取り扱っていたのが正しいかどうか、今度は一つその点を考え

てみようと思う。

今ある赤本系の「舌切雀」においては、興味の中心はすでに糊を食べて舌を切られたことや、重い葛籠^{くわろう}を欲ばって損したことなどに移って、話はよほどまたもと^{もと}の型から遠くなっている。童話の改造は一般にかなり自由なもので、そのためにかつてたいせつな箇条であったものが、陰のほうへ押しやられる場合はしばしばあったろうが、それがもし痕形もなく消えてしまっていたならば、同じ話で通用しえたはずがない。尋ねたら必ずどこかの隅に、少なくとも中間の階段のものが残っていなければならぬ。ところが今日までの採集だけでは、腰折雀との連絡はまだいっこうにつかぬのみならず、むしろ反対にわれわれの「桃太郎」のほうへ、少しずつ近くなつてゆくとする傾向がうかがわれるのである。以前喜田博士が報ぜられた徳島県那賀郡の例で「郷土研究」一卷五号、桃の代わりに瓜が流れてきて、中から雀が出てその雀が後に舌切雀になるという話などは、あるいは近世の事を好む者が、わざと継ぎ合わせたものかとも想像せられているが、そうでなかった証拠はおおいに出てきたのである。ひとり桃の中から犬ころという一例にとどまらず、近ごろ刊行せられた『津軽口碑集』の中にも東津軽郡野内村^{のな}の例として「尾っぱ剪雀」の一話が採録されている。

昔々婆が川へ洗い物に行くと、鳥籠が流れてきた。きたない籠はあちへ行け、きれいな籠はこちへこいというとその言葉の通りになった。婆は大喜びでその籠を携えて帰り、爺様爺様きれいな娘子を一人拾ってきた。ああそうか、娘ならこの糊をすらせると、その雀に糊をすらせると、腹がへっているの、ちゅんと鳴いては一口、ちゅんと鳴いてはまた一口と、その糊をみ

な食ってしまった。爺は怒ってすりこ木で雀の頭を打ち、尾羽を切って追いついたのを、婆が跡から尋ねていって、途中で臼彫りと菅刈りに、おれが雀を見なかったかと聞く条がある。そうして雀の処へ行ってみると、金の臼に金の杵で、ほつきりほつきりと米をついていた。娘や娘や今迎えにきたどという、婆やよく来たと喜んで、金の膳、金の箸、金の椀で飯を食べさせ、後からついてきた爺には、猫の椀で飯を食わせた云々

とあって、それから軽いと重い^{うしろ}の二つの葛籠になるのである。これについてなお考えてみるのに、舌切りもとはこの尾羽切りと同じく、せつかく授かった雀を冷遇したということの意味するのであろうが、いくら子供の話としても、それはあまりに不自然な空想であって、何かもとづところがないければ突如として思い付かれそうにもない。たぶんは糊を食べたという部分がまず高調せられて、それから尾を切るよりも舌を切ったというほうに、話すことが似つかわしくなったのであろう。かりにこの想像があたっているとすれば、これも「桃太郎」の黍団子と同じく、異常誕生譚の男性のものに、古くから付随していた食物の一挿話の変化であったとも見られるのである。

それからなお一つ、これも後人の技巧になるかのごとく、一応は誤解せられそうな「猿蟹合戦」の変わった型があつて、やはり雀が参予している。以前佐々木君の採録した陸中の「老嫗夜譚」に、次のような昔話が見えていて、その類例はまだほかでは発見せられない。

一羽の雀が竹藪に巢をかけて卵を生んだ処へ、山母^{やまはは}がやってきて、雀々、その卵を一つくれという。雀は恐ろしさに卵を与えると、もう一つもう一つといてみな取ったあげく、親鳥まで

も食ってしまった。その時たった一つだけ藪の中に落ちてかえった卵が、後に大きくなって仇討を企てる。彼方の稲架から稲穂を取り、此方の稲架から稲穂を取って、それを集めて団子をこしらえて、それを背に負うて米の団子の本団子とふれてあるく。向こうから栃の実がころがってきて、雀の息子どのどこへ行く。おれは親の讐を討ちに行く。そんならその団子をつくれ、助太刀をしようといって、団子をもらって跡についてきた。次に針と蟹と牛糞と臼とがやってきて、順々に同じ問答をして味方になる。山母の家に行ってみると留守であったので、これも猿蟹の合戦と同じく、手分けをして隠れている。そこへ日の暮れ方に山母がもどってきて、炬に踏みまたがれば栃の実がはね、筵に尻餅をつけば針が刺し、水桶にはいると蟹がはさみ、走って逃げようとして牛の糞にすべったところへ、上から臼が落ちかかって首尾よく仇討をしたというのである。

山姥退治の最も普通な近世の型としては、牛方または馬方が山姥の留守宅に走り込み、いろいろとからかって後に報復をしたことになっているが、興味はもっぱら征服の痛快さに集中して、山姥害悪の発端がつまびらかにせられていない。私の仮定では牛方または馬方がある時代の主たる伝承者であったために、このようにならるその説話の主人公にしてしまつて、最初のいたけな被害者の物語を、押しのけることになったので、今にまたこの「雀の仇討」以上に、これと「瓜子姫」との中間に立つ話が、現われてくることもあるだろうと思つてゐる。何にもせよ雀が人のような智慧と感情をもち、人と同じき事業を完成したという昔話は、人も雀も魂は一つだということを思つていた者ならば信じえたのである。それを信ぜずともおもしろければ話だという

ことになって、後にかえつていろいろの誇張が行なわれるようになった。すなわち蟹は蟹、猿は猿、雀は雀とそれぞれ管轄をわかつ以前には、もう少し昔の語り伝えが混融して、神の子が必ずしも常に一定の動物の形を借りて現われなければならないということが、期待せられなかった時代もあったらしいのである。

これがある種の動物に関しては、もはや疑いの余地もなくなったことは、私が次節以下に説明せんとするところであるが、ただ雀においては材料がまだ足らず、またあまりにも奇抜なる発見であるがために、人は容易に「桃太郎」と「舌切雀」との、根源の一つなることを認めぬかもしれない。しかし卵の中から英雄の出で来た点だけならば、すでに多くの民族に類例があるのみならず、日本でも美濃の養老山、出羽の鳥海山その他の縁起として、祖神が鳥によって運ばれたことを説くものが少なくない。文学の「竹取物語」を生成せしめた一話なども、同じくまた鶯が少女と化して、時の帝の皇女に召されたと伝うるものもあった（謡曲「富士山」）。スズメという語も本来は今の家雀のみでなく、広く小鳥の総体の名であつたらしく、かつわが国の卵生説話には、しばしば小き子神の驚くべき成長を説くものがあつたのである。竹の林のたつた一つの卵から、山姥を征伐するほどの英雄が出たということが、かつては「桃太郎」の「瓜子姫」と対立することく、富士の鶯姫とならび行なわれたこの説話の要素であつたかもしれない。もちろん「瓢の米」の報恩譚の輸入によって、感化を受けたとまでは言いうるであらう。しかし少なくとも同一系統のものだという『燕石稗志』流の解釈には根拠がない。

二 蛙の王子と蛇の王子

第一にわれわれの「舌切雀」が、はたして最初から雀であつたるか否かが、まだ決定せられてはいないのである。日本の昔話の若く美しい主人公も、土地によつていろいろの動物の形を借りて出現していた。それを一々に別の話だと見てしまうと、末にはかえつて分類によつて比較の利益を破壊すべきことは、たとえばアマノジャクと山母との相異をもつて、瓜子姫の説話を二種に見ようとすると同じで、それではせっかく集められた解説の手がかりを、最初から捨てることになるのである。私の計画はできるだけ意見をさしひかえ、単に経験ばかりを取り次ぐようにしたいのだが、おりおりついでにどんな理窟をいうことになつて申しわけがない。しかし今度は事柄が明白だから、大体実例ばかりを並べておいて用はすむと思う。最初に引用するのは鹿児島県大島の一例、これも「旅と伝説」(二巻七号)に、茂野幽考君が報告したものであるが、この「申し子」は蛙の形をもつて現われている。

昔々爺と婆 四十年も子がないので山の神に願掛けをする。婆さんの膝頭がむくむくとふくれてきたのを、爺さんがたたくと蛙の子がぴよんと生まれた。私は神様から授けられた子だと名乗ったが、何でもよいからと願を掛けたのだから、これもしかたがないと思つて大事に育てようとする。ところが蛙の子はさつそく二親に向かつて、これから嫁をもらいにいくから餅をついてくれといつて、その餅を袋に入れてもらつて背に負うて村々を飛びあるく。ある村で村一

番の長者の家を尋ね、書院の仏壇に上つていた。そうして香を焼きに來た主人に、おれは神様の子だと告げた。それからその長者に三人の娘があることを聞いて、餅の袋を預けてその晩はこの家に泊した。この袋にはたいせつな神様の品がはいっている。一つでもなくすればこの家の一番大事なものをもらうぞといつた。そうして夜がふけてから、そつとその餅袋を持ち出して、三人の中の末の娘の口にその餅を押し込んでおいて寝た。夜が明けて餅が一つ紛失しているとな騒ぎ立てたが、それが末の娘の口にはいつていたから、とうとう約束どおりもらつていくことになった。家では爺さん婆さんが喜んで嫁を迎え、祝言をさせるために村の人たちを招いた。そこでまず風呂をわかつて、はじめに花嫁を入れて、次に蛙の子がどぶんと飛び込むと、たちまち蛙の姿は改まって、りっぱな若者になった。今に蛙が座敷へ飛び出すものと思つていた村の人は、見たこともないような神々しい若者が、式服を着て現われたのでびっくりしてしまつた。

この蛙の変身ということが、花嫁のまず入浴したのと関係のあるらしきことは、次の一例を見ても想像しえられる。ただしこの話のほうでは小さな子は蛇であり、話は北端の奥州に行なわれているものであつた。『紫波郡昔話』の第七十五篇にいわく、

畑に働いていた父と母が、夕方帰りがけに笠を取りにくくと、笠の中に小蛇がわだかまつていて、なんぼ追つてもすぐに来てはいる。夫婦は子がないから連れてもどつて鉢に入れて飼つておくと、すぐに大きくなるから今度は鹽に入れ、それでも入れておかれないので、その次は馬の飼葉桶かきに入れて養つていた。その蛇がある時父母に向かつて、これから長者どんに行つて娘

を一人嫁にもらってくるといつて出かけた。長者どんではちょうど夕飯を食べていると、門にお頼み申すという声があるので、三人の娘が順に出てみたが誰も見えない。四度目に主人が声を聞きつけて出ると、大きな蛇がいて娘を一人くれる、くれないならこの家を巻きこわすといく承知をした。それで町へ行っているいろいろな衣裳を買いととのえ、それを持たせて蛇の処へ嫁にやると、蛇は喜んで娘を背に載せて家に帰ってきた。父と母とが畑に出ている留守に、蛇は花嫁に向かってこう言った。おれはこの藁打ち石の上に登って寝ているから、お前は藁打ちねて向こうの隅に行つてりっぱな美男となつた。そうして二人は大喜びで、抱き合つて炉にあつたところへ、父母は帰ってきて、これはどこの和子様だと聞いた。蛇の息子がこうなかつたが、急いで長者どんにも知らせ、めでたく婚礼の式をあげる。姉仲二人の娘は恥かしがつてどこへか行つてしまった。

この話を前の蛙の嫁入りの話と比べて、抜けている部分をちょうど補填するような例が、同じ紫波郡の昔話集にまた一つある。これは最初から蛙でも蛇でもなかったが、やはり申し子であり、かつ異常に小さかった。

子のない夫婦、薬師様に立願をしてお堂にこもっていると、夢に薬師様が現われて、お前たち二人に授ける子は、葦の根尋ねても茅の根尋ねてもないのだが、あまりふびんだから一人授けてやろう。臍に孕む子だから大事に育てよと仰せられた。はたして女房の臍がだんだんにふくれ、

臨月にそこから小指ほどの子が生まれた。夫婦は大いに喜んで、これをスネコタンバコと名づけて大切に育てていたが、十五、六歳になるまで大きさはもとのままであつた。それがある日母親に向かつて、おれは長者どんのうば子様を嫁にもらつてくるから、米を一ぱいくれろと言つた。なんで長者どんが妹娘などをくれようぞと思つたが、大事なスネコタンバコの言うことだから、望みの通り米を袋に入れて与えると、それを持つて隣の長者どんの玄関に立つて、お頼み申すと案内を求めた。長者の家では出てみたが誰もおらん。たびたび声がするので氣をつけて見ると、下駄の下から隣のスネコタンバコが出てきた。今夜は泊めてくれというから、庭の隅に寝かせようとしたが、ひいひいと泣いて妹様の側に寝たいという。しかたがないので、夜着の袖の中に入れて寝させると、夜中に袋の米をにたにたとこんで、それをうば子様の口に塗つておいて、大きな声で泣き立てた。おれが乞食をしてもらつてきた米を、うば子様に食われてしまったといった。うば子はそんなことは知らぬというけれども、みなが承知しない。夜寝ていてこんな者の米を、盗んでかむような娘は、この家には置かれぬ。スネコタンバコにやるから、連れてゆくがよいと長者どんは言う。そうして二人でもどつてきて、とうとう長者の末娘は、人でなしのスネコタンバコの嫁になつた。

その小さ子が不意に大きくなり、また富貴になつたという部分は、もうこの話からは脱落しているが、これと奄美大島の蛙の子の話と、筋が同じであつたことだけは、疑うわけにはいかない。大島の風習では餅の袋が、妻を求める者の結納であつたという報告は、信用してよからうと思う。男女の契りに相變する晴れの食物は、昔も今も餅を用いるのが例であつたからである。そうする

と一方奥州の小さな袋の米というのも、本来は新夫婦がともにかむべきもので、それを行儀が悪いから追いつ出したというふうに語るのには、後の変化とも見られぬことはない。

それからいふ一点、長者の家の門口に案内を乞う声があつて、出てみたら姿が見えなかったという個条が、前の蛇の息子の話にも共通していること、これも偶然の一致ではなかったやうである。鉢から盥に移し、盥から飼養桶に移したというほど、急劇に成長した蛇が、目につかなかつたというのはおかしいけれども、それはむしろこの紫波郡の二つの説話が、もとは相接近していた証拠であつて、たぶんは蛇のほうにも奄美大島の蛙のように、いつまでも小さかつたという話し方があつたのであらう。スネコタンバコが下駄の齒の陰になつて見えなかつたというおかしみに至つては、すでに御伽草子の「一寸法師」にも見えていて最も有名な挿話であつた。一寸法師は針に麦稈の柄鞘をこしらへたる太刀をはき、御器を舟とし箸を棹として、淀川を鳥羽の津まで上つてきた。そうして三条の宰相殿を訪れて、やはり足駄の下より物申さんと言つたとあるのである。宰相殿の姫君は年十三歳、容顔すぐれておわします。いかにもして思案をめぐらし、わが女房にせばやと思つて、茶袋の散米をかねて夜ひそかに姫がお口に塗つたという点も同じであつた。そんならこの草子を読んだ者が、これを口訳して東北に伝えたかという点、鬼と戦をして打出小槌を巻き上げた点はこれになく、鰯から生まれたという点はかれになくして、かえつて南島の蛙の話と一致しているのである。かりに御伽草子が奥州の民話を筆録修飾したのではなくとも、少なくとも当時この口碑のすでに都鄙に行なわれるものがあつて、これはたまたまその一つの形が、筆に残されたにすぎなかつたのである。ただし今日の「桃太郎」童話が、故意にその求

婚談の部分を省略し、もっぱら鬼が鳥征伐の無邪気なる武勇のみを説くようになると、これと他のいろいろの申し子説話との関係は、どうしても不明になりがちであるが、幸いに御伽の「一寸法師」が中間にいたので、総括してものと起こりを考へてみることができる。神に授けられた多くの異常童子が、たちまち成長してすぐに妻もとめに出かけること、そうして美しい花嫁をもらつてくるのが、時としてはその赫々の功名よりもたいせつに取り扱われていたのは、それが家々の始祖として、また清き血の流の源頭として、熱心に語り伝えられ、敬虔に記憶せられる必要があつたからで、単なる恋愛談の興味のために起こつたものではないと思う。餅を背なかに負うて持つていつて食わせたといひ、あるいは米を袋に携えて夜の床でもとにかんだといふことなどもおそろくはその婚姻の合式確実のものであつたことを語るもので、したごうて桃太郎の泰団子ないしは舌切雀の糊なども、今は童話化して全然別の目的に用立っているけれども、事によるとこれもまたかつてこの語りごとの中に、求婚成功の一節があつた痕跡であるのかもしれないのである。

三 小泉小太郎と泉小次郎

神のお授けによつて蛇を子にしたといふ昔話は、蛙よりもずっと広く行なわれていたらしい。近ごろ聞き知つた実例の一つは、佐賀県藤津郡の五町田という村に、すでに伝説の形になつて保存せられているものである。

昔この村の喜左衛門谷という地には、喜左衛門という貧しい百姓が住んでいた。夫婦の中に子

なきを悲しんで、靉岳の大神に願を掛けたところ、二十一日目の満願の日にお告げがあつて、おまえたちはどうしても子はできない。今日の帰り路に最初に足にさわつたものを、拾ひ上げて子にすることがよいとのことであつた。それで喜んで帰ってくる途中、第一番に小さな蛇が足の物を食うために急に大きくなって、四、五年後には一丈四、五尺にもなった。そうして親の後からどこへでも付いていくので、村人も恐ろしがって喜左衛門とはつき合わなくなった。せつかくわが子として今までは育てたけれども、あのとおり村でこわがるから、どこへでも身を隠してくれと夫婦がいうと、大蛇はよく聞き分けて、別れを惜しみつつ出ていった。それからまた十何年もたつて、二人は年をとり働きがなくなつて困つていて、ちやうどそのころ塩田川の水を引いた井手が破損して、何度修繕してもまたくずれ、付近の村里は水が不足で田植えをすることができない。村々の庄屋が心痛して、易者に頼んで占なわせたところが、これは以前人に養われていた大蛇のしわざである。大蛇は養育の恩を返すために村蛇を子にしていたのは喜左衛門の家よりほかにはないので、一同相談をして、毎年村々から井手米を集めて、この老人の家にやることにすると、その後は井手もくずれず豊作が続き、喜左衛門の家も富裕になつた。今ある井手の神様はその大蛇をまつたもので、今でも毎年秋の彼岸の中日には、村々から鉦浮立かねうりだてをして参拝することになつてゐる（藤井利作君報）。

伝説は通例、昔話の最も主要なる部分だけを保存するものだから、これによつてもとの形を推

することはできないが、それでも高山の神に子を祈り、その子は水を統御するの力をそなえてゐると信ずるのが、この話の骨子であつたことだけは想像せられる。かつて石見国の田植唄についても考へてみたことであるが（『民族』二卷八七頁その他）、われわれの田の神は太陽を父とし、竜女を母として霊山の頂に生まれるというふうな、語り伝えられた例が民間には多い。すなわち主たる穀物の栽培のために、深く水の徳を仰ぐ人民であつたゆえに、取り分けて天に近い川上の地を慕ひ、流れに導かれて人界にくだりくるものを、貴重視したという説話も生まれたらしいのである。だから「桃太郎」の桃や「瓜子姫」の瓜が、こんぶりこんぶりとよい婆さまの前に流れてきたのも、源はもと一つであつたらうと私は思つてゐる。大蛇はただその姿と連想によつて、直接に由緒をさとらしむることができたゆえに、わざわざ水に浮かんで出現することを要しなかつたまでである。甲州の上九一色村、すなわちちやうど竹取の古い物語と、富士の霊山を隔てて裏表になつた土地にも、またこういう昔話が残つてゐた。

昔老いたる夫婦、子なきを憂いて神様に子を祈ると、たちまち婆が身ごもつて男の子を生んだ。これを竜吉と名づけて愛育してゐるうちに、竜吉はおいおい体が長くなつて、家には置かれぬので、鳥籠のような物を作つてその中に入れておいた。それでもいよいよ長くなり、後には手足もなくなつて、蛇のような形になつて、もうどこにも置かれぬので、老夫婦はその箱を山の頂上へ背負ひ上げ、よくわけを言つて聞かせて、また用がある時はここへ来て呼ぶからと言つて放すと、竜吉は喜んで走り去つた。それから何年かの後に國中にひどい旱魃かんばつがあり、雨を降らせた者には褒美をやるという、殿様からのお触れが出た。そこで爺婆は再びその山に登り竜

吉を呼ぶと、竜吉は大蛇となって、草木をなぎかせつつ飛んできた。雨を降らせてくれぬかという承知をして、七日の間静かな雨を降らせてくれた。それゆえに二親はお約束の恩賞を受け、こんな片輪の子ながら竜吉は、親を一生安楽に送らせることができた（土橋里末君「甲斐昔話集」）。

話はこういう形をもってまた広く行なわれていたと見えて、『老嫗夜譚』の蜘蛛息子という一例も、だいぶん世話物風に語り改められてはいるが、一部分だけはこの甲州のものと似ている。貧しい父に一人の娘があった。春のころ山に菜を摘みにいって、美しい若者と心やすくなった。そうして身持になって別れて帰る時に、若者はまことは人間でないかと告げて、大きな蜘蛛の形になって山深くはいつていった。驚いてもどって父にその話を話すと、しかたない、しかたない。その物が大事に生んでくれというなら、大事にして生むがよい。決して心配するなど父がいつて慰めた。そうして生まれた子は、腰から上は人間であるが、腰から下は蜘蛛の姿であった。それでも父と娘は約束事だとあきらめて、たいせつに育てていた。その男の子は十四、五になると、祖父様、おれはこんな体に生まれて人に見られたくもないし、また外に出て働くこともできぬから、どうか家の床板に穴を開けてくれ。その中にはいつて手仕事でもしたいからというので、ふびんに思つて言うとおりに支度をしてやると、息子はその穴から上半身だけ出して、上手に木地繰り物の細工をした。はじめは隣近所の子供らに与えて、その親たちから少しずつの米銭を礼にもらうばかりであったが、後にはおおいと神仏のお姿まで造つて、それを世間に広めるようになった。

腰から下だけが蜘蛛の形というのは、想像もできぬことであるが、人間の少女が大蛇と婚姻するという昔話でも、やはり何かの特徴が後裔の者にまで伝わるといっている。そうしてその家は必ずしもこれを恥じ包まず、むしろこの伝説によつて、富みも貴まれもしていたのである。豊後の緒方氏をはじめとし、諸国に数十の著名なる類例はあるが、それを陳列する事務だけならば私でなくてもできるだろう。ここではもっぱらその「蛇の小さ子」が水を統領する神として、記念せられたらしきことを述べてみたいのである。信州のほうでは、右の甲州上九一色の竜吉を、小太郎という名で話すことになっていた。『小泉郡史余篇』（四六頁）に載せてある一話は、やはり半分以上伝説化してはいるが、なおいろいろの点において興味ある特色を残している。

昔この郡西塩田村、前山区の鏡城山の頂上に寺があった。その寺の住持の所へ、毎夜美しい女が通うてくる。後に正体を知ろうとして、針に長い糸を付けて女の衣服に刺しておくと、その糸は戸の節穴から出て産川の鞍淵の岩屋に入り込んでいた。女は大蛇であつてこの岩屋の中で赤子を産み、それを鞍岩の上に置いて死んだ。それゆえに今も川の名を産川といい、また蛇骨石などという遺跡があるのである。大蛇の産み落とした子供は、下流の泉田村大字小泉の老婆に拾ひ上げて育てられ、その名を小泉の小太郎と呼ばれた。小太郎は小男であつた。そうして十六になるまで、大飯を食つて遊んではかり暮らしたが、十六の歳に始めてたいへんな力を見せた。小泉の山に登つて山中の萩を刈りつくし、それを二束にたばねて家に持つて帰り、決して束を解かず一本ずつ抜いてたくように、くれぐれも母親に警戒しておいたにもかかわらず、母は束の小さいのに油断をして、何心なく結び綱を解いたところが、その萩は家一ぱいになり、

それに押しつぶされて婆様は死んでしまった。今でも小泉山に萩が一本もないのは、小太郎が刈り取ってしまったからである。そうして小太郎の子孫は、代々横腹に蛇の斑紋があるそうだ。この話を分析していると、また長くなるからただ重要な三点だけをあげておこう。その一つは、小太郎がなまけ者で何もせずに飯ばかり食っていたこと。これは信州が物草太郎の郷国であるだけに、ことに偶然の挿話とは思われない。説話の英雄は、最初小さく貧しく、または形が見るしかなかったほかに、往々にして愚鈍であり、怠惰であったと伝えられている。それが常理をもつて予測しえなかった奇跡を現することは、蛇や田螺の形を仮りて出てきたという話と趣意において同じである。第二に、小泉山に萩が一本もない由緒、これは関東などではもっぱら巨人説話にともなうもので、たとえばダイダラ坊が富士を背負って立とうとして、その藤蔓の綱が切れたゆえ、相模野には藤が育たぬという類の話は、必ず大昔の山作りや蹴裂きの伝説を潤色しているのである。小泉の小太郎も小男であったとはいいが、後にまた驚くような大仕事をしているのである。さらに第三の点としては、犀川盆地の小次郎と、もとは一つであったろうことが注意せられる。松本平のほうの小次郎も、東筑摩郡中山村、大字和泉という村で生まれたと伝えられ、父は鉢伏山の神といい、あるいは自身鉢伏権現の再誕であったともいう説がある。はやくから大寺古社の縁起に採り入れられたために、造言が多くていずれを本拠とすべくもないが、『信府統記』（巻十七）の一伝に、父は東高梨池の白竜王、母は犀竜にして、姿を恥じて湖水に入るといい、誕生の地は鉢伏山、成長の地は放光寺山、その名を日光泉小太郎と称すとあるのは、後に父の神と再会した際に、白竜がみずからわれは日輪の精霊なりと言ったとあるのと関係があったらしい。

この泉小太郎の大事業なるものは、母の犀竜の背に乗って、今の三清地と水内橋の岩山を突きやぶり、水の路を越後の海まで切り開いたことであった。これは東国では利根富士川、九州では筑後の矢部川、奥州では猿が石川、その他多くの水筋において土地の神様の偉勲として伝えるところであって、實際地形を熟知する者には、信じかつ崇めざるをえない神話の一つであった。それを土地によっては、異人が山奥から石をけりながら、水路を付けつつ下ってきたともいっている。泉という山麓の部落が、その根原を誇ったのにも信仰があった。しかるに信州の学者の中には、これを『吾妻鏡』の和田一乱に加担して行方知れずになった泉二郎親衡という勇士の事蹟として、すでに郷土の人物志中に載せた者もあり、伝説と歴史との境を認めざる者は、親衡犀竜を退治するという類の武功を讃歎しようとしていたのである。わずか山一つ隣の類例を知っただけでもそのような空想は起こらぬはずであるのに、今日の説話はおおよそまず、この程度にまでも誤伝せられているのである。桃太郎の誕生地が大和と尾張と讃岐の島に、同時に顕彰せられんとしていたのも不思議はないが、ただ不思議なのは、この変化の極にある現今の昔話をもって、ただちに異民族の所伝と、比較しうべしとする人々の心持であった。

四 タミナの掣とツブの長者

桃太郎は日本の理想の若武者である。それが時あって蛇・蛙、ないしは雀の姿を借りて出現したこともあるというのは、無法な推断だと怒るでもあらう人のために、私は黙ってただいま一つ

のさらに奇抜なる昔話を示しておこうと思う。われわれの祖先の神から授かる子には、かつてはまた田螺の形をしていた者さえあった。しかもそれが堂々として長者の愛娘の婢となり、最後に花のごとき若夫婦となることは、一寸法師も物草太郎もみな同じである。この話は国の南北に一つずつあるが、最初には肥前島原半島の小浜村に行なわれるものを略述する。

昔老いたる夫婦が神に祈って、たとえいかなるものでも子というものがほしいと念ずる。そうすると帰りに田の畔の小路において、おじいさんおばあさん、私はここにいますという者がある。不思議に思つてよく見ると、それは一つの田螺（田螺）であつた。田螺ではしょうがないとは思つたが、授かった子だから連れて帰つて大事に育てる。ようやく年ごろにもなつて親たちは嫁がもらいたいのがさう小さくては来てくれる人もあるまいと歎くと、そのように心配しなされるな、私が行つて連れてくるから、弁当に握り飯を二つこしらえて下さい。そうしてハッタイ（麦粉）を付けて下さいというから、そのとおりにしてやつた。ある村の長者に二人の娘があつて、妹のほうがことに美しい。田螺はその家へ訪ねていつて、玄關から今日は今日といふ。主人が出てみると人の姿は見えず、声のする所を気をつけて見たら、一つの田螺が下駄の齒の間にはさまつていた。それよりいろいろの間答があつて、その晩は長者の家に泊めてもらうことになり、大事な握り飯を預けて、もしこれを食べたものがあつたら私の嫁にするという。そうして夜ひそかに妹娘の口の脇にハッタイの粉をぬり、握り飯は自分が食べてしまふ。翌日は約束だからしかたなしに、長者の美しい娘は田螺の嫁にもらわれていく。田螺は花嫁の袂の中から、道を教えながら家に帰つてきた。それからいよいよ鬼が島を征伐に出かけることに

なつて、縫針の剣に麦屑の柄轡をこしらえて腰に佩き、笹舟に帆をかけて海に乗り出した。鬼が島では鬼が昼寝をしているところを見すまして、鼻の穴から飛び込んで、中で大いにはばれたちまち鬼を殺して宝物を分捕りしてきた。そのいろいろの宝物の中に打出小槌がある。それを打つて願ひ事をすればなんでもかなうから、まず最初にそれを手にとって、「りっぱな男になれ」と言つて打つと、はたして長者の美しい娘にも、過ぎるくらいりのりっぱな花嫁になつた（神木敏君報）。

いま一つの話は陸中の中部で採集せられたもので、この地方では田螺をツブといっている。東北の採集事業はすでに進んでいるから、一番早くこの例も手にはいつたのではあるが、もちろん分布は決してこれだけにとどまらぬことと信ずる。

昔ある処に長者どんの田を作つて、貧乏な暮らしをする百姓、貧乏はしかたがないが四十を越すまで子のないのがさびしいと歎いていと、女房もそれを悲しがつて、お水神様に願掛けをした。やがて妊娠して生まれたのが小さなツブ（田螺）の子であつた。夫婦は驚いたが、これはお水神様に授かつた子供だと、欠腕に水と砂とを入れてその田螺の子を中に入れ、大事に神棚に上げておいた。こうしてざつと二十年もたつたが、ツブの子はちつとも大きくならず、いつも欠腕の中で遊んでいた。そうして父と母とはその間にすつかり年をとつた。秋になつて年貢米を馬に付けて長者どんへ持つていこうとして、爺はひとり言をいふ。せつかくお水神様から授つた子供は、なんという事だか、あんな小虫の田螺だ。あれがあたりまえの人間であつたら、こういう時に俵でも付けて助けてくれるだらうにというと、婆も本当にあんな子供をな

して、おら父さ申しわけがないと、とどもに不運を悲しんでいた。そうすると不意に神棚の欠腕の中から、とどもかがもう歎くな。おれもはあ欠腕の中にいるのがとっくりといやになつた。これから一つ腕から出て、うんと働いてやるべ。どれどれ、今日は旦那様の処さは、おれが行くべえや。おれをその馬の中荷の上へ載せておくれあれと、つぶの息子が言い出した。夫婦はこれを聞いてたまげたけれども、とにかくこんな子が物を言うようになったのはうれしいと思つた。それにお水神様の申し子だから、どんな事をするかしのれない、物はためしだと思つて、つぶを欠腕の中から拾ひ上げて、三匹の馬の先立ち馬の中荷の上に乗せてやつた。ツブの息子は馬の背から、はいはいと言つたり、しししと言つたり、溝や小橋にくるとどうどうと声をかけたりして、まるで人間のとおり上手に馬をばつていった。やがて街道の松並木にさしかかると、よい声を張りあげて馬方節などをとろと歌つて通つた。そうすると馬も勇んで、鈴がころりんころんと鳴るし、鳴輪もじゃがじゃがと鳴つた。田圃や往来の人たちはそれを見て、不思議なこともあればあるもんだ。この馬は田の尻の誰それ爺様のことのだが、あの声は誰だか知らない。それにまた姿も見えない。ほんとうにこれは、なんたらしいことだべといつて、総立ちになつてこれを見ていた。ツブの息子はそんなことには頓着なしに、どんな馬を追うて長者どんの玄関まで行つて、大きな声で申し申しといった。長者どんの下男どもは、そらまた年貢米が来たぞと出てみると、荷を付けた馬ばかりが三匹立っている。あれあ、見れば田の尻の爺様とこの馬だが、何して馬ばかりよこしたべや。それでも今確かに申し申しと言つたようだったと騒いでいると、中荷の上からおら田の尻の爺とこのツブの息子だ。馬は

ぼつてきたども、俵をおろすことができない。申しわけないが手伝つておくれやと言つた。下男どもは驚いてその声のするところをのぞいて見ると、いかにもべあこ（小き）な田螺が中荷の上にいばりかえっている。たまげて、やいやいみな出て見るであという、奥から旦那様だのかが様だの娘だのが、どれどれと総出で出てきてそれを見た。そのうちにツブの息子は指図をして、米の俵を残らず馬からおろして、そこへ積み重ねた。長者どんでは珍しがって、まずまず昼時にもなつたからと、ツブの息子を台所に入れて膳を出すと、食うのは見えないが、いつの間にか腕の中の物がなくなる。そうするとお代わりを出し、しまいにははいお湯っこを付けてがんせなどといった。それをみながおもしろがって、めいめい手のひらに載せてみたり、つまんでみたりして喜んだ。長者どんの旦那様も脇からそれを見ていて、つくづく希代なことだと思つた。ツブどんツブどんお前はいくつになる。はいとつて十八になりました。それを聞いて旦那様が、これはいよいよ不思議なことだ。お水神様の申し子だということは聞いていたが、それが馬を引いたり物を言つたり、またこんなにも発明だ。これほどの器量持ちなら、今にどんな事でもできるだろう。これは家の宝にしたものだと思つて、ツブ殿ツブ殿、お前の家とおら家とは、祖父様の代からの出入りの中だ。おれには今娘二人あるが、そのどつちかを嫁にもらつてくれなやかと言つた。そうするとツブの息子も大喜びで、それでは今日にもあね様をもらいますべと言つて、急いで家に帰つて年寄にその話をする。とどもかが喜んでけてがんせ。おら長者どんのあね様を嫁にもらう約束をしてきたと言つた。なんたらどこの世界にそんな話があるもんであと思つたけれども、何しろお水神様の申し子のことだから、なぞな事がある

ろうも知れぬと、隣の婆を頼んで問合わせてみると、長者どんでは確かにそのとおりの約束をしたという返事であった。長者どんの旦那はその晩二人の娘を呼び、おれはお前たちのうちどつちでも一人、田螺の息子の嫁にやる約束をした。どつちでもよいから行ってけろやいと言った。それを聞いて姉娘のほうは、誰があんな虫けらのおかたになるものかと、面をふくらせてぶい立ってしまったが、妹のほうはとど様とど様、心配してがんすな。うちの宝になることだから、私があのツブの息子の所に行きんと答えた。それを聞いて旦那様も大喜びで、やがて目をきめて美しい妹娘は、赤いの（衣類）を着飾って、ツブ息子の家に嫁入りした。嫁御の荷物には簞笥が七棹、長持が七棹、手箱や小道具が七駄と片馬で、荷物は家の中に入れきらぬから、庭のさきに積み重ねたが、七匹の馬は立てておく処がないので、隣の婆様のあいた厩を借りてつないだ。花嫁こはまめまめしい親切な嫁こであった。朝も早くから親たちと一しよに、野らに出てよく働いた。そうこうしているうちに春になり、桜の花が咲いて、卯月八日は村の鎮守のお薬師様の祭礼であった。嫁こは簞笥の中から赤いのを出して着て、田螺の夫をば帯の結び目にはさんで、お祭を見にいって。途中でも仲よく話をして、そこいらの模様を夫に言いつて聞かせながらあるいていると、往來の人たちはそれを見て、あれあれあのあね様は気が違つたと見えて、あんなに一人でしゃべくことをして笑っていくであ。ほんとにもぞやであと立ち止まって言い合つた。そのうちにお薬師様の一の鳥居の前まで行くと、帯の結び目にはさまっている田螺が、これや、ちょっと待てと嫁こを呼び止めた。おれは少々わけがあつてこれから奥へはいられないから、おれをここの田の畔に置いて、お前ばかり行って拜んでこ。

ほだらちよつとここに待っていてけてがんせ。おら急いでお詣りをしてくるからと、夫のツブを田の端に遊ばせておいて、一人でお社に参詣した。お薬師様、お薬師様、どうか夫をあたりまえの人に直してけてたもれ、ああとうだい、ああとうだいといつて拜んだ。そうしているうちにも気にかかつてならぬので、すぐさま引返して一の鳥居の処に来てみると、夫の田螺はそこに見えなかった。はてこれはどうしたか。田の中にでもすべりこんだのなかべかと思つて見てあるいたが、いかにも田の中に数あまたのツブはいるけれども、尋ねる夫はいなかった。田ごと田ごとのツブの数を、一つ一つ手に取つてみても、みんな自分の夫のツブでない。嫁こは歎き悲しんで、

つぶ殿や、つぶ殿や、わがつまや

ことしも春になつたれば

鳥という馬鹿鳥に

ちつくりもつくり刺されたか。

こう言つて歌いながら、がぶがぶと田の中をこいであるいたから、嫁この美しいのは泥だらけになり、美しい顔は泣いて泣いて泥まみれになった。お祭の人たちはそれを見て笑つた。夫をなくしては、とどこにもかがに申しわけがない。これはいっそのこと、田の中のやじまなぐ（濁眼）にでも入つて死んでしまふべと思つて、じりじりと泥の深みに沈んでいこうとしていると、後の方からこれ嫁こ嫁こ、何していると声をかける者がある。振り返つて見れば水のたつような美しい若者が、深編笠をかぶり腰に尺八を差していた。どこのお方だか知らないが、

私は大事の夫をなくしたので、どうしても死なねばならぬと泣いて話すと、お前の夫のツブこそはこの私だ、さあ早く上っておれの顔をよく見れと、嫁こをやじまなぐから田の畔に抱き上げた。おれはお水神様の申し子であつたゆえに、今まではツブの姿をしていたけれども、今日という今日は、お前が薬師様に参詣してくれたので、こうしてようやく人間の姿になることができた。喜んでくれと手に手を取り合つて親の家にもどつてくる。家では父と母とがそれを見て、あれや、姉こはどこの和子様をお連れ申した。いや、この人はどこの和子様でもない。うちのツブ殿が今日こうなつたますと、くわしくわけを話して聞かせると、二人の親は天地がひっくりかえつたほど喜んで、急いで長者どんに知らせる。そうすると旦那様もかが様も飛んできた。そして花のような智殿を見て、これはまたなんたらええ事だ。おら必ずこんなことが、いつかあることだと思つていた。何がなんでもこんなりっぱな智殿を、こんな古家の破れ家には置かれなと、すぐさま町に広い町屋敷を買つて、そこに見事な家を建てて、若い夫婦を住ませ、二人はそれから商いをはじめた。そうするとツブが人間になつたという若者を見たさに、町中は申すに及ばず、近郷近在の人たちもたくさんに買物にやつてきて、店は繁昌してたちまちのうちに大きな身代になつて、ツブの長者といえは誰知らぬ者もないほどの、有名な御大家の先祖になつた（佐々木喜善君報）。

できるだけ私は省略を試みたのだが、それでもこのとおり長話になつたのは、土地で今お形をととのえて語り伝えられているためである。しかもその形はいろいろの点から見て、決して古くからの文句のままではないのであつた。田螺を水の神の神の使令と見る信仰は、切れ切れには今でも山中の池沿に残っているが、はたして竜蛇と同じく人間の美女に智入りする話が、それにもものうて広く行なわれていたものかどうか。現在はまだむろん肯定することはむづかしい。ただしこの話の末にある「つづぶ殿つづぶ殿」の歌ばかりは、ずいぶん多くの土地において、ほとんど意味なしに児童によつて口ずさまれている。それがもし最初からこの話の中の歌であつたならば、これはその一つの痕跡と認め得るのである。それから東北ではいま一つ、いわゆるシンドレラ系の昔話の終わりに、継母の実の子が姉の嫁入をうらやんで、田に落ちて田螺になつたと語られることが普通になつてゐる。これもあるいは「つづぶ智入」の、移されて零落した姿ではないかと思うのである。

「桃太郎」の昔話が昔から日本にあつたといふことは、単なる推定以上の何ものでもない。しいて記録の徴証を求めようとすれば、『本朝神社考』巻五に秦河勝化生の事を説いて、昔大和国洪水の折に、初瀬川大いに漲り、大なる甕一つ流れ来つて三輪の社頭にとどまる。土人開き見るに玉のごとき一男子あり云々。後にまた小舟に乗つて播磨に著し、大荒明神となるとあるなどが早いほうである。それから以前に筆録せられたものは、「一寸法師」であれ「物草太郎」であれ、ないし竹取の翁の小さき姫であれ、事蹟も出現の形式もいぢるしく遠ざかつていて、ただその中間に地方採集のいくつかの口承説話を置いてみて、はじめて両者の連絡を知ることができのみである。いわば他に反対の資料がないかぎり、一応は前からこのとおりと想像するを許されたのであつたが、今はとにかくに新たな証跡によつて、中古次々の語り改めがあつたことがわかり、したがって何が不変の要点であつたかも、ほぼ明らかになつてきたのである。要点の一つは

貴き童児が信心ある者の希望に應じて与えられることであつた。おそらくは最初その信心の試みとして、ほとんど人間の空想しうるかぎりの、あらゆる信じがたい出現の方式が語られたのであろうが、その中でも「桃太郎」の、水に沿うて流れてきたという例は自然に近かつた。桃はともあれ、流れてきたというまでは古いのであろう。第二の要点は、その貴き童児の事業、これもまたわれわれの望んで遂げがたきすべてのものに及ぼうとしたゆえに、だんだんにいわゆる大話お話をのはうに近くなり、後々少年を樂しましむる技術となるにいたつて、さらに快活なる変化を見たのであろう。この点にかけては「桃太郎」は少しも古くない。むしろあまりにも気軽に「一寸法師」以来の型を追うている。第三には、童児が成長の後に最善の結婚をして、類い少なき名家の始祖となること。この点は童話としては必要もないゆえに、わざと脱落せしめて、一段と他の同種の説話との縁を薄くしたが、捜せばまだいくらでもその痕跡は見つけられる。私は現在のところ、まずこの三つの点において一致している説話があるならば、それが外国にあつても同じ系統のものとして推定して、伝播かはたまた異処偶生かを、考究してみる価値があると思つてゐる。そうして個々の民族の孤立した伝承の中には、日本のように類例の豊富な国の研究に俟つて、将来必ず若干の啓発を受けるものがあるだろうと信じてゐる。

(昭和五年六月、「旅と伝説」)

生きてゐる小太郎

小太郎大力の話は案外に分布が広く、かの狐を母とした安倍童子の例を中に置いて考えると、あるいは信太しのだの小太郎の出世譚にも、連絡があるかとさえ想像せられる。なんにもせよこの話をした人は各地に住んでいた。単なる縁組や交遊によつて、一つの中心から聞き伝えたものでなかつたようである。『飛騨風物記』などを見ると、益田川の流域にも小阪の小太郎といつて、珍しい大力の話が多く伝わっているほかに、川の辺には小太郎岩の遺跡があり、小阪観音堂の仁王の大木像は、萩原の方から逆流してきたのを、この小太郎がかつぎ上げたという口碑もある。高根郷むね日和田村のおちんが池において、魚を食つたがために大蛇になつたという、おちんが夫おとこの小三郎などもそれらしい。甲州九一色の竜吉はもう別の話だとしても、水の神が異常の子を生んだという言い伝えは、ただ偶然に小泉郡だけに、持ち運ばれていたのではないのである。犀川の流域でも小太郎という名はなお知られてゐた。それをいつのころからか、人が小次郎と改めようとしていたのである。『信府統記』巻十七には二つの異説を併せ録しているが、その一つには「東高梨の池の白竜王、犀竜と交はりて一子を生む。八峰はふ瀬山せにて誕生、日光泉小太郎と称す」とあり、他の一つには「鉢伏山の権現ごんげん、人倫と現はれて丸山に居住したまふ。そこに不思議の泉湧き出で、味ひ酒のごとくにして人の飢ゑを助け疲れを養へり。まことに不老不死の泉とも云ひつべし。国人悦ぶこと限りなし。かの権現の御子を泉小次郎と号す。生れながら常の人にあらず」云々とあ

つて、今でも土地の者は小太郎でも小次郎でも、いずれでもよくらいに思っている。

私はこれがどういう機会に際して、鎌倉時代の勇士泉親衡の生い立ちのごとく解せられるにいたったかを知りたいと願っている。この誤解にも相応な理由はあったはずで、それがわかってくると、自然にある一つの説話の流伝の実状をも推測しえるからである。『榊巷談苑』は今から二百年余り前の人の随筆であるが、その中には次のような一節がある。

信濃国犀川に犀のすみけるを、頼朝、泉小二郎に命じて取らしめたりと東鑑に見えたり。昔はこの国に犀のありけるにや。又はこともを誤りて犀といひけるにや。

ところが自分の捜して見たかぎりでは、『吾妻鏡』の中にはそういう記事は見えない。『吾妻鏡』の泉小二郎親平は、信州の人であつただけは想像しえられるが、和田合戦の前っ方にちよいと現われて、隠れてしまったきりでさらに消息を伝えていない。しかしこの時代の人物と事蹟とは、曾我の兄弟は申すに及ばず、朝比奈三郎でも五十嵐小豊治でも、永く民間に記憶せられて、後ますますその勇名を成長させた例が多いのである。歴史の泉小二郎がもしわれわれの想像のとおり、信州の郷土の英雄であつたとすれば、ことに越後の五十嵐小豊治と、その形蹟がよく似ている。越後でも五十嵐川の上流に入つてみれば、今なお小豊治の母の出たという村があり、父の大蛇の住んでいた池もあつて、豊後の緒方氏とほぼ同様の口碑が、ここでもごろを巻いてその靈妙なる幼児を、抱え守りまた大きくしているのである。超凡の偉人と奇跡の信仰を結びつけることは、東西古今を一貫する人類の慣習であつた。相異はただこれを疑わざる者の群落の大小だけであつて、この筑摩の泉小次郎のごときは、たまたま統一の力の特に微弱な一例であつた。

私はこの事実の背後から、つとに小太郎説話がこの地方に普及して、羽翼すでに成るという状況にあつたことを推定する。親衡が幕府の命を受けて、犀川の犀を退治したという記事は、たとえ

『東鑑』にはなくとも『盛長私記』という類の、演義の小説の中には出ていたのかもしれない。

しかもそういう新説がとつて代わるべく、あまりに鉢伏権現の縁起などが有力になりすぎていた。もしくは周囲の地においてそのいろいろの類型がありすぎた。とうていある一人の話術をもつて、その神の子を泉親衡たらしむるを得なかつたのである。

あるいはもう一步を進めて、その試みられた改造が、やや不自然であつたからとも考えられぬことはない。いわゆる犀川の犀竜は小太郎が母であつた。そうはいわない土地でも、保護者であり助手であつたとは信じていた。それを退治したと説こうとするのだから、まず聴衆の常識と戦わなければならぬわけである。あるいはこの在来信仰の認識不足から、これを改めようとした人も、土地に育つた者ではなくて、外からやつてきたのであらうという推測が成り立つかもしれない。とにかくに一方にこれを鎌倉時代の勇士の外伝と解する者があると同時に、地方にこれを神とする信仰も、相応に遠く及び、根強くつちかわれていたのである。『北安曇郡郷土誌稿』(二卷三頁)の記述するところでは、近くは弘化四年(一八四二)の善光寺大地震に、岩倉山崩壊して新町

一帯が湖水になろうとした際にも、泉小太郎が犀に乗って現われ、山を突き割り水を涸らしていったのを、避難者たちが目撃したといっている。その時以来新町の人々は、仏崎の観音へ月詣りを欠かさぬことになったというが、この仏崎はまた一つの小太郎遺跡で、ここには上流の鉢伏山麓などより、幾分異なる伝説を保持しているのである。筑摩郡のほうでは、今の中山村という

部落が、小次郎または小太郎の家郷の地として知られていた。自分は行って見ないが山の根に一つの洞窟があり、そのかたわらには清き池をたたえ、かつては鳥居の形をした大木が、洞の口をおおうていたという。今でも知っている人があるかも知れぬが、二十年ほど以前ある人が聞いてきたという話は、途法もなく珍しいものであった。そのころよりざつと三百年前に、この地に百歳にもなるかと思う一人の老人が住んで、みずから小太郎と名のついていたそうである。小太郎は仙人であつて、蜂になつて諸方を飛びあるいたり、または天の川の魚を捕つてきて見せたりした。時の殿様がそれを聞いて、呼び寄せて対面せられたという点まで奥州の清悦と似ていたが、この仙人は御殿からすぐ天へ昇つて、帰つてこなかったと伝えている。それから六、七十年ほど過ぎて後に、またこの老翁の姿を見た者がある。その時は岩屋の中から玉を得たといつて見せた。それから後にも土地の人たちは、小太郎が水を浴び、または祈禱をしているのを見たことがありあるといひ、現に去年の秋なども見た者があるという話であつた。以上はすでに二十年前の記録で、その後はどうだったか氣をつけているがまだわからず、またその筆記者の名も現わしがない事情にあるが、私は別にこれを証拠として、ぜひともこの事実を信じようとするのではないから、その点はどうであつてもよい。とにかくこういふとりとめもない風説が、たとえ片隅にでも伝わっているとすることは、また一つの注意すべき事実といわなければならぬ。三州矢作の淨瑠璃御前なども、牛若御曹司（ぎやくごそうし）の同時代人であり、しかも小説中の人物にすぎなかったのであるが、やはりその遺跡（いせき）というものがこの地方には多いのみならず、往々にして山中にその姿を見たという話を伝えている。これが単なる農民の幻覺であつて、かつて説話の内容を信じた時代の、古い

感情が無意識に相続せられていたのであるか。あるいは人をそういう誤解に誘うような人物が、実際に時々回つてきたのであるか。はたまたなんのよりどころもなしに、こんな作り事をして人を驚かす者があつたのか。自分にはまだいづれとも判断が付きかねるが、いづれにしても、われわれの昔話というものは、これまで世間に承認せられた以上に、別に隠れた人生との交渉があつたのである。この交渉たるや、新たに突然と中世から発生したものでもなかったらう。しからば上古の説話のまだ力づよく、広く民間に活躍していたものは、はたしてどういふ影響をわれわれの文明の上に及ぼしているであらうか。形があるかぎりには必ずその痕はどこかに残っているべきである。それが尋ねてみても見られぬようであつたら、説話研究の意義もまだ決して大きいとはいわれぬ。

五分次郎

『因伯昔話』(三六頁)に採録した鳥取市の一話は、同じく小き子古伝の童話化した形であるが、これも妻（めかけ）の個条を省略した点は、現在の「桃太郎」と近く、書伝の御伽草子の「一寸法師」とは異なっている。

昔ある処に爺と婆があつた。子供が一人もないので親音様に願掛けをすると、七日目の日から婆様の左の拇指がだんだんにふくれてきて、七日七日のおしまいの七日目には、かわいらしい小さな男の子がその拇指から生まれた。身の丈がたった五分しかないので五分次郎という名を付け

た。五分次郎は元気な強い子供になったが、体だけはいつまでも五分しかなかった。笹の葉で造った舟に楊枝の棹をさして、毎日川へ乗り出して遊びまわっていた。ところがある日、水が増して瀬が強かったために、押し流されて海まで出てしまった。それでも平気で、

さっさ五分次郎は

笹の葉で舟をして

楊枝でぐいやさ

と歌いながら遊びまわっていると、大きな鯛が現われて笹舟とともに、五分次郎を呑んでしまう。これは困ったと思っていると、運よく漁師がこの大鯛を網で捕って、やがてある家へ持っていつて売る。組の上に乗せて料理をしようとする、五分次郎は腹の中から声をかけて、

五分次郎がいるからそろそろと腹をあけよ

といい、家の人が不思議に思っ腹をつけて腹をあけると、ひょっこり中から拇指ぐらいの五分次郎が飛び出した。そうしてわけを話して家へ送り届けてもらった。それからますます力強くなって、爺さん婆さんに暇乞いをして鬼が島征伐に出かける。犬・猿・雉の家来もつれずに、たった一人で鬼が島に渡った。鬼の頭領がこれを見つけて、つまんで一口に呑んでしまうと、腰にさしていた縫針の剣を抜いて、鬼の腹の中をそちこちと突き刺す。鬼は痛がってすぐ降参し、鬼が島の宝物をみな献上する約束をする。そんならよしと言って、鬼の頭のほうへ上つてくると、鬼は急に鼻の中がかゆくなって、くしゃみをして五分次郎を鼻の穴から出した。それで宝物を馬に積んで、自分もその上に乗って、喜び勇んで帰ってきた。そうして爺婆もいよいよしあわせよく、

安楽に世を渡ることができたという。

この五分次郎が一寸法師の次にできた名ということ、容易に察しえられることであるが、後者もまたたしかにある時代の流行語であった。『嬉遊笑覧』巻四にも多くの例をあげているように、以前この言葉を珍重して俳諧の句にも用いていたのは、おそらくはそれがまだ新奇なる意匠であった間の事で、すなわちまた草子の名の「一寸法師」が、古い小ざ子説話から改案せらるべき機会でもあったらうと思う。その一つ以前の形らしい「小ざ子法師」という語も、今なお童児の唱えごとの中にはかすかに残っている。『用捨箱』その他の書にある、

隠れんぼうにまじらぬ者は、ちいちゃこちや桂の葉

などという童詞は、意味がまったく不明になってもまだ行なわれている土地は多く（『日本民謡大全』京都・伊勢・越前等）、それが「ちやや子持や」となり、または「槌や小槌や」と変わっているのを見ると、「槌や辛夷や桂の葉」であろうといった足薪翁の説は、あて推量にすぎようである。木曾の小ざ子塚のことは本文の中にも一言してあるが、あれは宝暦七年（一七五七）に成った『吉蘇志略』の記述を、後に名所図絵が丸写しにしたのである。きわめて簡略ではあるが、これ以上の伝承はもう保存せられてはおるまいから、これも一つの例証として引用しておく値があると思う。

〔吉蘇志略巻三〕黒川村、陵墓。小子塚、野中にあり。里人相伝ふ、木曾殿に胚子あり。その長僅かに尺二寸。故に小子と名づく。里民をして養はしむ。あるときは白の中に匿し、覆ふに蓆笠をもつてすればその形を見ず。その矮きことまた知るべし。卒する後ここに葬る。その傍

に長櫃塚あり。相伝ふ、宝物を埋むと。今に至るまでこれに触るれば立ちどころに病む。里人惧れてあへて犯さず。(原漢文)

この黒川村には箕作翁という長者があつて、童観翁という長者と財宝競べをした話、および山姥が里の子供を捕えていくので、石を餅だと偽ってだまして退治した話があったことも、同じ書物の中に見えているが、ともにもう破片であつて連絡の有無をきわめがたい。

かしこ淵

蜘蛛が人間の少女と縁を結んだ話は、いま一つ北国のどこかにあつたと思うだけで、他には類例をまだ聞いておらぬが、これもかつては蛇体と同様に、水の神霊のかりの姿として、想像せられていたらしい痕跡は顕著である。わが国でよく発達している怪談の一つに、私たちが「食わず女房」または「口無し女房」と名づけているものがある。昔ある桶屋が、もしくは一人の職人が、飯を食わぬ嫁ならもらいたいものだといっている、私は飯をたべないからといって押掛け女房に來た女がある。なるほどちつとも食わないが、それにもかかわらず米や味噌がぐんぐん減るので、不思議に思つて外へ行く顔をして、そつともどつてきてのぞいてみると、たちまちに化の皮が現われた。私の集めてみただけの材料では、この化けの皮のむけ方に地方的の変化がある。まず大体に日本の東半分、奥羽や関東で聞くところは、女が多量の飯を炊ぎ汁を煮て、それから髪を解くと頭の真中に大きな口がある。その口の中へいくつでも握り飯をほうりこみ、何ばいとな

く汁をそそぎ入れて、後でちゃんと髪を束ねて、いわゆる何食わぬ顔をしている。それを知った亭主はそれ恐ろしくなり、なんとかしてこれを離別しようとする事になつてゐるのだが、この頭のつべんに大きな口があるというのは、どうやら女が蛇体であつたことを意味していたらしい。現にかけ離れた岩岐の島などでは、女房が頭だけ蛇になつて、蔵の酒を飲んでゐたというふうにも語っている。ところが多くの話し手はどういうわけか、これを山姥の化けたのであつたといつて、蛇だということはもう忘れてしまい、島根県でも山姥は人を見る所では飯を食わず、人の知らぬうちに頭の上にある口から、幾日もの食事を一度にたべるものなどというさうである(高木『日本伝説集』一五二頁)。しかし中国以西に行なわれるものは、頭の口で飯を食つたということはいわぬほうが普通である。たとえば備前上道郡の一例においては、亭主の留守に多勢の人が集まりきたり、それが蜘蛛になつて麦飯をたいて食つてゐた。亭主がこれを見つけて肝を消し、夕方に帰つてきて、口実を設けてその女房を掃きとすると、別れに風呂を立てて亭主を入らせ、上から蓋をして風呂桶のまま、多くの蜘蛛がかついでいく。それが途中で古寺に入つて休んでいるうちに、神々に祈つたら桶の縄が解けて、危い命を助かつて逃げて帰つた云々といつてゐる(『岡山文化資料』三卷一号)。肥前の有馬でも同様に男を風呂桶に入れてかついでゐたが、道ばたにさし出した木の枝に取り付いて、ようやく抜け出して逃げもどる。するとその女がまた帰つてきたので、一生懸命になつて打ち殺すと大きな蜘蛛であつたといふ(『旅と伝説』二卷六号)。この木の枝に取り付いて、風呂桶からぬけ出したという点と、蓬、菖蒲の陰に隠れて怪物の追跡を免れたという点とは、二つともに全国の「食わず女房」説話の、最も数多く共通している部分で

あるが、丹波では五月節供に菖蒲と蓬とを軒に葺く由来として、昔悪い蜘蛛が風呂にはいつてい男を風呂桶のまま背に負うていこうとしたが、菖蒲と蓬との叢にはいつて、ささえられて進むことができず、その間に風呂の中の男は助かったという話を伝え（「なら」一八号）、阿波の山中でもある男が行水をしていると、山女が来て盥（あら）いのまま頭に乘せて山へつれていこうとしたが、路上の樹枝をよじて身を脱し、そつと跡をつけていつて立ち聞きをしていると、おまえには所詮人間の聲は取れまいという声をする。なに私が今夜も一度、蜘蛛に化けていつてきつと取つてくる。そんなことをいつても人間はかしこい。もし左の腋（わき）を打たれたらどうする、という問答の声を聞いて、これはよいことをおぼえたと思つて待つていると、はたして夜になって恐ろしい蜘蛛がはいつてきたので、さつそくその左の腋を打つて殺したという昔話がある（「郷土研究」二卷六号）。三河の山村にある話も、女房ではないが、どこから来たとも知れない一人の作男が、長らくよく働いてさて帰りがけに、給金はいりませぬから家で一ばん大きな籠を下さいといい、それをもらうとさつそく旦那をその籠の中に押し入れて、背に引つかつて了た山奥へはいつていく。幸い路傍へ木の大きな枝が出ているので、それをとらえてかううじて籠から出る。するとどこからか声がして、おい人を捕つてきたか。うんたつた一匹だけ捕つてきた。今見せてやるぞといつて籠を下すともういいない。ああしまった、逃がしてしまった。よし今夜また蜘蛛に化けていつて捕つてやるといつたので、旦那は急いで帰つて、たくさんの松明（たいまつ）を用意し、その大蜘蛛のいつてくるのを待ち伏せして焼き殺した。夜の蜘蛛は親に似ていても殺せ（ころせ）という諺（ことわざ）は、この時から言いはじめたものだという（「旅と伝説」昔話号五六頁）。蛇の罎（いり）入りがだんだんに忌むべく恐るべき

ものと解せられ、末には相手の滅亡をもつて、めでたしめでたしとしたと同様に、かつては異常の霊児を人界にとどめて去つたことを、骨子としていた竜宮女房の説話も、あるいは零落してこんなものすごい形にまでなつていたのである。これを山姥の化けてきたものとしたのは、たぶん後代の変更であらうと思うが、蜘蛛というほうだけは新たにいつてくる理由が考えがたいゆえに、なお私はその原因を古い処に求めようとしているのである。水の神のものと姿は、今とても実は瞭然（りょうぜん）としてはいない。これをオロチと呼び、またはミヅチといつたところで、はたして陸に棲む蛇類と同じものかどうか確かなでない。単に外国の感化がしだいにわれわれの空想を、そういう方へ導いていつたのみである。蜘蛛はことによるとその一つ以前の、われわれの迷信のなごりであつたかもしれない。

それにはいま一つの手がかりとして、かしこ淵の伝説というものが注意せられる。この伝説も分布はきわめて広く、ほとんど国の南北の端々にまで及んでいる。むかしある人が大淵に臨んで釣を垂れていると、いたつて小さな蜘蛛がたびたび水の上に往来して、自分の足に糸を引っ掛けて去る。それを怪しんで糸をかたわらの大きな柳の木などに移しておくと、やがて水底からその糸を引く者があつて、見る見るその木が根株から抜けて、淵の中へ陥没（かんぼく）してしまつたといふのが普通である。九州では阿蘇の大谷川のおとろしが淵、ここでは草履の緒に糸をからめつたといふ、今でも釣にいく者は必ず角結びの草履をはき、草鞋や素足で行くのはあぶないといつてい（「郷土研究」一巻五号）。四国では阿波名西郡鬼籠（おろ）野村の女郎淵もその一つであり（「名西郡誌」一六頁）、中国では伯耆小鹿村の弥六淵、足の拇指にかけられた蜘蛛の糸を、はずして大木の根に巻

きつけておくとも知らず、弥六覚悟という声とともに、その大木を碧潭に引き込んだといっている『地方叢談』。『撰陽群談』に有馬湯山の蜘蛛滝の話、『高原旧事』に飛驒下之本村の木数淵の話、『裏見寒話』に甲州国中の某淵の話として、古く書き残されているのもみな同じ例であった。近江の湖北地方では、池の堤に昼寝をすると、ガワタすなわち川童が蜘蛛に化けて足に糸を巻き付け、水中に引き込むという俗信を伝え（『民族と歴史』七巻五号）、武蔵の秩父山村でも洪水の際などに、川端に休んでいると蜘蛛に糸をかけられ、その糸が見るうちに荷繩のごとく太くなる。それを鎌で打ち切って、かろうじて命を全うしたという話もあって、それをまた川童の所行といっている（外秩父槻川村）。東三河大荷場川の瀬戸が淵でも、赤い蜘蛛が来て糸をかけたという話があり、やがて淵の底で、やあとという掛け声がしたかと思うと、糸を移しておいた木の株が引き倒されたといひ（『三州横山話』一〇五頁）、甲州芦川の岩桶という淵でも、やはり釣人の草履の鼻緒に糸をからんだのを、蜘蛛が水底にはいつているうちに、そっとかたわらの木の根に移しておいたら云々という話がある（『甲斐昔話集』一二三頁）。奥州のほうとしては花巻の付近、北上川の尼平の淵で、中村紋右衛門なる者が釣をしていると、小蜘蛛が水から出ては編笠へはい上がり、次にちょん髷に糸を掛ける。それを不審に思っではずして柳の枝につなぐと、たちまちにしてそれが細引ほどの太さになった云々と、八角翁の『塵袋』には記している。伊達の半田沼の話は『信達民譚集』一一〇頁に出ていたが、これは伝説というよりもだいぶん昔話に近く、蜘蛛が足の指に糸をかけていくと、やがて水の底で次郎も太郎もみなこいこい。えんとえんやらさアというかと思うと、大きな株根っこはばきんと折れたなどと伝えている。仙台のかしこ淵の話は高木

氏の伝説集（一二四頁）にあるが、これなどもよほどまた形が整うている。小さな蜘蛛が何か黒い物をくわえて、淵から出てきてはたびたび釣する者の足の先に付ける。汚いと思ってこれを取ってかたわらの柳の根にこすりつけておく。しばらくするとえらい音がして、その柳の大木は水底に引き込まれる。男が驚いていると淵の中から、賢い賢いという声がした。それでこの淵の名を賢淵というのだと結んでいる。妖怪の国語は別だといえはそれまでだが、今だって智慮のあることをカシコイという者は少ない。以前はなおさらそういう意味を持たなかった。仙台のかしこ淵はすなわち肥後のおとろし淵である。畏怖し謹慎すべき霊ある淵という言葉が、いつしかこのような愉快なる説明説話を、発生せしむるに至ったのである。

新井白石の『折焚く柴の記』に、誰でも覚えていて一つの昔話がある。河村某という富人が彼を婢にとり、三千両の黄金を与えて学問の料となさんといった時に、譬えを設けてこれを辞したという条である。

我むかし或人の申せしことを聞きしに、夏の頃霊山とかに遊びし者どもの中、池に足浸し居けるに、小なる蛇の来りて其足の太指を舐しきるあるが、忽ちに去りては又忽ちに来りて舐る。かくするがうちに其蛇漸うに大きくなりしにや。後には其大指を呑むばかりになりしかば、腰より小刀を取出して刃の方を上になして大指の上に当てゝ待つ。又来りて大指を呑まんとする所を、あげざまにさし斬りたりければ、うしろざまに飛去るほどに、家にかけ入りて障子をさす。伴なひし者ども何事にやといふ程こそあれ、石走り木倒れて地震ふこと半時ばかり過ぎて後に、障子を細めにあけて見けるに、一丈余の大蛇の、唇の上より頭のかた迄一尺余り切られ

たるが、斃れ死したりといふことあり。その事のありや無しやは未だ知らねど、今のたまふことに似たる所の侍るなり云々。

この話は最初才藻に富みたる若き白石が、作り設けた譬えごとのようにも思われ、さもなくばシナの書物に出ていたのを、霊山の池の夕涼みに托したものくらいにわれわれも想像していたが、実際はそのころすでに知られていた語り草であつたらしいのである。ことに東京の周囲の地では、今でも知っている人がおりありあつて、たとえば私の住所から程遠からぬ北沢村などでは、これがある一つの小池の伝説として語り伝えてゐる。昔この池の畔で、農夫が一疋の蛇を見て、鎌をつきつけおどしたところが、その蛇たちまち形相憤怒して見てゐるうちに大きな蛇になった。農夫夢中になって鎌をふりまわし、大蛇の腿の骨を切り落としたというのは、どうやら話の順序が逆になってゐるような気がする。大蛇になつてしまつてから腿を斬り放すなどは容易な仕事でないからである。とにかくにこの北沢村の小池が、井の頭のお池と、地下に通うてゐることはこの時にわかつたのだそうである。腿を斬られた大蛇は、その水路をくぐつて井の頭へ逃げ帰つて死んだ。そのためにこの池の清水が三日三夜の間、真赤に色を変じたという話である。新宿の町に接した柏木の村にも、これと全然同じ話があつて、柏木と中野との境を流れる小川の岸、立間山という所でこの事があつたという。立間は今ちやうど東中野の電車駅のある辺であつた。二村の伝説はいずれが正しいとも決しがたく、たぶん両方とも本物でないのだらうが、とにかくに北沢村ではその大蛇の腿の骨を、中野の宝仙寺へ納めたと称し、柏木のほうでもこれを二つに分けて半分は宝仙寺に、他の半分の上腿は柏木の円照寺に納められて近年まであつた。村の雨乞

い時には井の頭の池の水を汲んできて、この蛇骨に供えて祭をした。そうして村中を持ち回ると雨が降つたともいつてゐる（以上、山中共翁談）。雨乞いの行法には昔から深秘が多く、寺僧はなるべくこの類の俗説の、いろいろ流布することを望んでいた形跡はあるが、これなどはあるいはそれ以上に、かれらの作為が加わつてゐるかと思われて、寺の名は忘れたが他にもまだ、同じような来歴をもつた蛇の頭骨を、什宝としてゐる寺がいくつかあつた。つまり新井氏がこれを譬喩に引用するところには、もう関東ではだいぶん有名な話であつたので、それゆゑに『折焚く柴の記』にも、

此事をも父にておはせし人に語り申しければ、珍しからぬことなれど、よき喩にもありつる哉と笑ひたまひたりき。

といつてゐるのである。大蛇が小蛇の姿を仮つてきたというだけならば、ずっと古くからも話は多かった。それが小さいために人にあなどられて、思わぬ侵害を受けたというなども、いわゆる白竜魚服以来いろいろの形で伝わつてゐる。ただ私が注意するのは、何度も水の中から往来してゐるうちに、だんだん大きくなつてきたという話法である。かしこ淵の霊怪譚が全国に分布して、そのほとんど全部がこの点を共通にしてゐるのは、あるいはまた一つの新しい暗示であつた。これもいまいちだんと古風な形があつて、水の神が蜘蛛になつて人間と交通したことを、信じて説いていた時代があるのかもしれぬ。蛙や田螺の例はすでに本文にも列記したが、なおその以外には、蟹なども多くの怪談を持つてゐる。そうしてしばしば蛇体のヌシと、水底の主権を争おうとしたという伝説があるのである。

田螺掣入

森口多里君の『黄金の馬』一三二頁に、また一つの別様なる田螺つづの掣入譚が出ている。前に千刈田、後に千刈田の田主があった。ひでりの年にその田がすらりとかわいてしまったので、沼のほとりに行つてこいうことをいった。どの田螺でもいいから今夜一晚のうちに、おれの田に水をかけてくれるものがあれば、三人の娘の一人を嫁にやろうといった。そうすると次の日にはその田に漫々と水がたたえられて、田螺が美しい和子様になつて嫁迎えにきた。そうして三人ある末の娘を、水の底のりっぱな家へ連れていった云々。それからあとは、今その本が手元がないので引用しえない。蛇の掣入りの話でも、父の約束の理由はいろいろあるが、いちばん数多くかつ古い形は、これと同様に稲田の水の必要からであつた。それを童話の猿掣入りでは、牛ご勞ぼを抜くのを手伝つてもらつてといったり、または蛇の場合でも、蛙を助けてやるなら娘をやろうといったなど、もう最初から笑うような話にしてしまつてゐるのである。田螺に田の水をかけてもらうなども、突拍子もないことのようなのであるが、越後などには今でも山の池の白田螺に、雨を祈るという習俗が残つてゐる。

肥前の島原では、この蛇掣入りの昔話が川童の掣になつてゐる例がある（榊木敏君、「旅と伝説」二卷八号）。むかし北有馬の庄屋の田に、どうしても水がかからぬことがあつた。氏神に願を掛けると夢のお告げがあつて、これは美しい一人娘を、有馬川の川童が嫁にほしがつてゐるのだ。娘

を川童にやれば、すぐに水はくるとのことであつた。それで心配をして娘に話すと、娘は承知をして一つの瓢箪を持つて川童の所へ行つた。嫁になりますから早く田に水をあてて下さい。この瓢箪は私の魂です。これが沈んだらいつでも参りますといつて、それを有馬川に投げ込んで帰つてきた。そうすると庄屋の田には水がみち稲が繁り、その以後は秋の稲の稔るころまで、一つの瓢箪が有馬川の淵に、浮いては沈み沈みでは浮きしてゐたのである。他の地方の蛇掣入りの話にも、瓢箪を持つて嫁入りしたという例は多く、猿掣入りのほうではこれが一転して木の臼の話にもなつてゐる。そうして『日本紀』の仁徳紀十一年に出ている備中県守淵の瓠の話などが、この肥前の例と比べると似過ぎるほどよく似てゐる。神を試みたという説話はもうあつたのである。

隣の寝太郎

一 治水拓土の功績

昨年春ごろのことであったか、「大阪朝日新聞」の山口版に、長州厚狹駅あきまの寝太郎ねたろう荒神こうじんの由来談が、木像の写真添えて詳しく掲げられていた。寝太郎は三年三月の間寝通して、貯えの穀物を食いつくしてしまったなまけ者であったが、人の知らぬうちに大川の水を引く工夫をこらし、千町歩の荒地を開発して、たちまち大福長者になったという偉人である。二百十歳まで長生したなどとも伝えられる。寝太郎荒神はその寝太郎をまつたともいえば、また寝太郎の守り神であったともいって一定せぬが、とにかくに百年余りも前からその名の社があったことだけは、文政六年（一八二三）の温山紀行にも明らかに見えている（『大日本地名辞書』）。それが近ごろになって急に名高くなったのは、一つにはこの地が萩線の分岐点として、多くの旅客が足をとめることになったのと、いま一つは名物寝太郎餅の宣伝であらうと思う。

私はこの餅の起こり、ないしはどうして餅と寝太郎とを結びつけることになったかを、誰よりも熱心に知りがっている。その理由はこれから述べてみようと思うが、事によるとこれも「桃太郎」の泰団子、もしくは「蛙の智殿」の袋の餅などと、同じ「話の種」のかすかなる痕跡かもしれぬからである。寝太郎荒神は、また庚申と思つて拝んでいる人も多かった。御神体の木像は福相で、むしろ庚申よりも大黒様のほうに近かったが、以前は此地方の農民たちが、葦で製した猿を奉納して農作を禱ったというから、祭日もおそらく庚申の日であつたろう。この日はわれわれの昔話のためにも、特にたいせつな日であった。庚申待と称して講中の人々が、当番の家または堂宮に集まって神を祭り、夜通しおもしろい話をして明かすことは、全国農村の近いころまでの風習であった。すなわち多くは昔話はこの庚申講の夜と連想せられていたのである。

次にはその社のある処を寝太郎屋敷、土地を寝太郎町という人があつたのも、もし寝太郎長者が実在の人物でないとしたら、はなはだ不可解のように見えるかもしれないが、私には格別意外とも思われぬのである。一言でいうならば、寝太郎の話をよくする人が、住んでいた屋敷または町であったと、解しておいてさしつかえがないのである。ただし土地へ行って、も一度確かめてみたほうがよいが、私の聞いているある一人の報告では、寝太郎はよく寝るゆえに付けられた縛名きづなであつて、本来は悪七兵衛景清の後裔ということになつてゐたさうである。これがわれわれにとって、また一つのたいせつな手かりであるわけは、日本には景清を元祖とする盲人の一群があつて、久しくいろいろの民間説話を管理し、またこれを町田舎に配達してゐたらしいからである。かれらは『平家物語』や『三田村』という類の長い戦記を表芸とはしてゐたが、その合間には珍しい多くの昔話を覚えていて、おもしろくこれを語り、また時々少しづつ改作を試みて、聞く人の機嫌を取り結ぶことを職業にしていた。そうして村々の庚申待の宵には、かれらは欠くべからざる御伽の人数であつたのである。

二 長者の智

寝太郎が稀代のなまけ者でありながら、ほとんど日本の全土のどこにでも知られており、また往々にして土着して伝説に化しているのは、かりに全部が悪七兵衛の末流の所業でないまでも、少なくとも話そのものが、始終旅をしていた証拠といふことはできる。自分が幼時播州の田舎で聞いていたのは、こまかな部分はもう忘れてしまったけれども、寝太郎が何一つ能のないのらくら者のくせに、一朝智謀をもって富貴の望みを達したというまでは、長州厚狭の例と同じであった。しかもその手段というのがまるで別種のもので、そのいわゆる「昔々或処」は、明白に山口県下ではなかったのである。播州の寝太郎は隣が長者で、美しい一人娘をもっていた。寝太郎は夜中にその長者の枕元に近よって、「隣の寝太郎を聲に取れ」というと、長者がその声を神のお告げと信じて、娘をこのなまけ者にくれるという筋であったが、どうしてそれを信ずることになったものか、それまではもう記憶していない。ただこの一句だけが、今でも強く耳の底にこびりついているばかりである。

前にも桃太郎についてすでに考えてみたごとく、水士平定というがごとき世の中のためになる労苦と、完全なる花嫁をもらって家をおこすということは、昔話の英雄の二個の記念すべき大事蹟には相異ないが、それはその家筋の者の立場から見た時のことで、外部から考えるならば第一のほうがちろん重要である。しかるにこの寝太郎の話ばかりは、ただ一つの長州の例を除くほ

か、妙に求婚手段の成功のほうに力を入れて説くものが多い。私の想像では、これは此説話がつとにまじめなる信仰生活から脱出して、もっぱら好笑を目的とするおどけ話の領域にはいつてきたため、話術発達の二つの経路は、偶然にこの方面からもうかがい知ることができると考える。以前はただ田螺の子や一寸法師のように、人間の目からはとうてい物になるまじく見えるものでも、天分神意ないしは隠れたる約束の存するかぎり、かほどの難事業をやすやすとなしとげたという例であったのかもしれないが、後にはかえってその信じがたい「意外」に興味を感じ、さらに一段の誇張を添えて、いよいよ空想の新たなる自由を、楽しむことになったのかと思う。越後八石山の豆の木が日をおおうた話、もしくは鴨取権兵衛が鴨とともに空を飛んだ話などは、いかなる上代にも神話として受け入れられたわけがない。それが少なくとも今日の形にまで成長したのは、聴き手も話し手ともにたくさんの実験を積んで、人生が必ずしも神話の説き示すとおりでないことを、知りきってから後のことであった。いわば醒めたる者の新しい夢であった。寝太郎立身の昔話のごときも、おそらくはまたこの昔の信仰の隙間から、萌えいでたる文芸の芽ばえであって、問題は単にどれだけがもとの姿、何を種にしてこういう類の大話^{おとぎばなし}が、波のまにまに生い茂ることになったかにあると思う。

ウソにも一定の限界のあったというのは、考えてみるとおもしろいことである。なまけ者が突如として長者の聲になるといふような、極度に不可能なる空想にまで、なお全国共通の順序様式のごときものがあつたのは、つまり話を聞こうとする者の要求が、最初は今よりもはるかに強く話をする者を拘束していたからで、うそつきは特に実害をこの世に残さない用心から、できるだ

け、容易に人がウソだと心づいて、ともどもに笑いうるような話をした。これがわれわれの昔話のいつまでも同じ筋を走って、こういうありうべからざる滑稽の中からでも、なお最初のまじめなる姿を、髣髴しえられる理由であらうと思う。

三 奥州のならず者

座頭がおどけ話の改作に参与したことは、少なくとも近世普通の例ではあったが、はたしてそれがいずれの時代からはじまったかは、どうもまだ確かに知ることができない。そうしてこの話の国中に流布したのは、ずいぶんと古くからの事実であった。奥州では寝太郎という代わりに、ある一人のならず者がといっているが、長者をあざむいてうまうまと一人娘の嫁になっただけは一つである。『老嫗夜譚』の第六十四話に、

昔、大工の庄五郎というならず者、村の長者が観音堂に夜参りをして、どうか娘によい嫁をお授け下さいと、毎晩夫妻で願掛けをしているのを知って、ひそかに物蔭から作り声をして、お前たちの嫁になる者は、大工の庄五郎のほかにはないと言った。それを長者が観音のお告げと信じて、さっそく大工の庄五郎を捜して、娘をもらってくれと言ってきた。

それでめでたく縁談がととのい、ならず者たちまち長者となるというのであるが、これには注意すべき一つの挿話をともうている。大工の庄五郎はこの事を朋輩の博打どもに話すと、一同がやってきていろいろと世話を焼く。当日は落端すかばたに行つて砂を多くの俵につめて、今翌殿の米船が

着いた。嫁御の荷物も運び入れねばならず、やれ忙がしやと大騒ぎをして見せる。それを聞いて嫁も喜び、舅も安心をしたというのであるが、この友だちの助力ということとは、同じ話についてまわっているのみならず、終わりに言おうと思う八戸はちのへの蕪焼かぶやき笹四郎さししろうのほうともつながっている。単に嫁一人の才覚では、目的を達しがたかったというだけの理由ではなかったようである。

大工の庄五郎というのは、たぶんそういう道化者があって、おもしろくこの話をした記念であることは、豊後の吉右衛門なども同じかと想像する。『江刺郡昔話』(五〇頁)に採録せられた一話では、長者のほうにばかり名があって、嫁は単にあるのらくら者がとある。そうして朋輩の援助がこれにはいま一段と適切であった。

昔、二人ののらくら者が、生まれ在所では誰も相手にしてくれぬので、二人連れ立って南部へやってくると、ちょうど熊野沢の要左衛門長者の家で、一人娘に嫁を捜している。それを聞いて二人は談合して、近所の地藏堂に入り込んで、一人は地藏になって物を言い、他の一人はその評判をしてあるく。それがたちまち流行はやり地藏ぢざうとなって繁昌する。熊野沢の長者もそれを聞き伝えて、娘の縁談をうかがいにいくと、地藏が長者にこう言つて教えた。いつ幾日の夜明けにお前の家の前の杉の木の上へ、天てんから若い者が一人おりてくる。それは天てんつこ神の子だから、迎え取つて娘の嫁にせよと言った。長者はそれを信じて待ち受けていたところが、はたして門前の杉の木の上から、そののらくらの一人がするするとおりてきて、さっそくに翌殿になってしまふという話。

地藏が物を言うなどは、あまりばかげているようだが、東北の村の人にはこれにも特別の興味

があった。かつて『日本の伝説』にも書いておいたごとく、多勢の若い者が一人をまん中に入れて円陣を作り、歌や唱歌をうたへてはやし立てて地蔵を遷^{うつ}かして、いろいろのうかがいを立てる遊びが東北にはあった。われわれの知っている「中の中の小坊主」と同じく、最初はこれも信仰の行事であつたろうが、近ごろはまったく一種の慰みになつてしまつて、わざとんでもない間いをかけ、おどけた事を言わせて笑うのを目的にしていた。相手が地蔵であり、寄り集まる者が若い男女であるゆえに、題目は自然に縁結びのようなことを主にしていたろうと思う。長者の娘がのらくら者を聲に取るなどは、特にこの地蔵遊びと連想せられやすい、滑稽なる作りごとであつたのである。

四 沖繩の睡虫

それよりも自分の珍しく感ずることは、聲が天から門前の杉の木を伝つておりてきたという一条である。これを直接に『日本書紀』の、海の宮の門の前なる百枝の杜樹^{ももき}に比較しようとしたら、人は必ずその不倫をいきどおるでもあろうが、この二つの極端の間には、なおいくつかの「失われた鍵」が見いだされるので、決してある一つの地方でばかり、偶然に取り入れられた新しい挿話ではないのである。たとえば佐喜真君の『南島説話』第八十七話は、琉球にもこれと半分以上、一致した例のあることを示している。曰く、

昔ある処に貧しい男があつた。心は非常によかつたが、貧乏は言語に絶し、頭を入れると足が

出る、足を入れると頭が出るような小さな家に住んでいた。この男が天人に教えてもらつて、一本の爆竹を持つて村の長者の家の前の大木に登り、大きな声で自分は天人であると言つた。

さうして何の某をこの家の聲にしなければ、このとおり家を焼いてしまふぞとおどして、爆竹の火をあげて見せた。長者がつつしんで承知の旨を答えて後、そつと小屋に帰つて寝ころんでみると、はたして長者が多勢の下男を連れて、この貧しい男を迎えにきた。それでめでたく大金持の聲になつたという話。

この話の中でも、小屋へ戻つて寝ころんでいるということが、なんでもない一条のようであるけれども、やはり物草太郎の伏屋の住居と一貫している。それから天人が爆竹を与え、策を授けたという点は、おそらくまた奥州でいう博打仲間^{ばくち}とともに、そういう成功が自分一人の智謀でなかつたことを、必ず語り添えていたなごりであろうと思う。沖繩では今から百五十年ばかり以前、民間の説話と伝説とを集録した『遺老説伝』という漢文の一書がある。その中にもすでに同じ話を載せているのであるが、それから以後の話し方の変化か、ただしはまた当時早くも系統を異にしたものがあつたか、とにかくに今では同じ話ともいへぬくらいに、いくつもの相違をもつて伝わっているのである。文章が長くてまたむづかしいから、ここにはただ要点だけを引用しておくことにする。

昔、首里の町に、いたつて貧乏なる老夫婦があつて、次良という一人の息子を持っていた。次良は世にも稀なるなまけ者で、食つては眠り覚めては食い、少しでも老いたる親の労苦を助けようとせぬので、人は嘲つて睡虫という綽名を付けた。ある時その睡虫が何を考えつつか、

突然母親に向かって白鷺を一羽買ってくれという。わけを尋ねても黙って答えない。親はふびんに思つて、しいて工面をして白鷺を求めて与えようと、大いによろこんでそれを隠しておき、一夜ひそかに神仙の容貌を装うて、鷺をかかえて隣の金持の家の、庭前の大榕樹の梢に登り、天帝の勅諭があるから急いで出てこいと、大きな声を上げて呼んだ。長者夫婦が榕樹の下に行くと、この家には十六になる娘があるではないか。その翌になるべき者は隣の次良よりほかにない。すみやかに彼を呼び迎えて家をつがせ、親どもを養つてやるがよい。今こそ世間からあなどられてはいるが、彼は誠実でまたかしこい男で、後には必ずこの家を繁昌させる。天のお教えにそむいて遅慢するならば、その罪は決して軽くないぞと言つた。長者は驚きまた喜んで、いかにも御仰せのとおり、睡虫を罎にいたしましたしようと答えると、それではその由を天宮に復命すべしと言つて、かかえていた白鷺を放したので、鳥はたちまち大空に向かって飛びあがり、夫婦はいよいよ尊信の念を加えた云々。

それから計画のごとくたちまちにして長者の翌となり、同時にまた生まれ変わったようによく働く若者となつて、めでたく家富み栄えたことは、すべての寢太郎と異なるところがないのである。この話が沖繩一島に偶然に発明せられたものでないことだけは、次の一例がまた明らかにこれを証拠立てる。ただ何びとがその分布に参与し、どうしてわかれわかれに保存せられていたかという点のみが、将来の考察にゆだねられているだけである。九州では豊前築上郡上城井の山奥に、寒田^{さだ}という部落があつて、古くから知られていたが、その住民を主人公とした一団のおどけ話が、寒田嘶と呼ばれて周囲の平原に流布している。もちろんその大部分は寒田の人たちが、

聞いたら怒るような失礼な話であつて、むしろ伝承者のかれらでなかったことを示すのであるが、少なくともこの地を熟知する区域以内に、昔話を統一して管理しようとした機関の、かつてあったことだけは推測しえられるのである。寢太郎智入譚はこの中にも一つあつて、それが沖繩の『遺老説伝』とよく似ていた(『国学院雑誌』三卷四号、坂根道治郎氏)。

昔寢太郎という男は、明けても暮れても寝てばかりいて、三年にたった一度しか目をさまざなかつた。ある時起きて見たら年の暮れであつた。母が正月のお醬油を買つてこいといつて、金を持たせて町へ使いにやると、醬油は買わずに、その金で野鳩を一羽と鈴を一つと買つて帰つた。母がそれを見て小言を言つたが、かれはただ黙つて笑つていた。寢太郎の隣は大きな財産家で、美しい一人娘があつた。正月元日の明け方に、寢太郎はその野鳩に鈴をゆわえ付けて、隣の屋敷の境の大きな棕の樹の梢に登つて隠れていた。そのうちに長者の主人が起き出して、顔を洗いに棕の木の下へやつてきた。そうすると木の上の寢太郎は作り声をして、おれはこの地の氏神である。娘には必ず隣の寢太郎を嫁に取れ。そうすればこの家がいつそう繁昌するぞと言つて、かかえていた野鳩を放すと、鳩は鈴の音をさせながら空を舞つて、やがて鎮守の森をさして飛んでいった。長者はこれを見て驚きかつ喜んだ。そうして寢太郎がそしらぬ顔をしている処へ、にわかにたくさんの米や餅を持参して、嫁入りの相談にやつてきた。この相談はむろんすぐにまとまり、それから寢太郎も一生懸命に働く人になつた。

従来^{従来}のいわゆる伝播論者は、伝播はただなんでもないことのように考えていたが、こういう実例になるとそう簡単には説明ができず、しかも旅行をしなかつたものとする、とうていこれだ

けの一致はありえない。私はこの話の運搬者の誰であったかを尋ねてみる前に、まず白鷺と野鳩と、二者いずれがもとの形、いずれが後に改まったものかを決したいと思う。古い記録には鳩も鷺も、ともに神の使いとして信ぜられたことが見えているが、片方はわざわざ鈴を付けないと通しなかったのだから、簡単な方が前だと見てよからう。白鷺は人を見てもすぐに逃げず、いかにも落ち着いていて、その上にこわい目をしている。そうして夜の明け方に茂った木の中から、ふわりと飛んでいく挙動なり羽の色なりが、特に霊異の感をいだかせたものと思われ、人がこの鳥の来集に驚いて、祈禱や占いをしたという話は多いのである。はたしても私の想像しているように、鷺が前だとすれば沖繩へはよほどまた早くから、「寝太郎」の話が渡っていったのである。あるいはあべこべに向こうの群島から、渡ってきたともいえるようなものだが、実際はそういう場合が想像しえられず、また他に類例もないばかりか、話の本州における分布と変化とは、とうていそのような一隅の根原を想像することを許さぬほど、ひろく久しくまた細かいのであった。

五 「物草太郎」の草子

その変化の実例としては、幸いにここに「物草太郎」の一卷がある。この有名な御伽の草子とわれわれの民間説話との関係は、もとより『遺老説伝』が島人の口碑を拾載したような簡単なものではなかった。第一にこれには話を長くかつおもしろくする試みがあった。そうして首尾の形をととのえ、またおそらくはこれを上品なものとするために、舞台を花の都に移すという類の、

いくつかの小さき改定を加えたことは、ちょうど今日の地方の才人が、昔話をいわゆるコントたらしめんとすると、同じような苦心であったらうと思う。しかし二、三の文学史家が臆断したごとく、これがある時代の文芸の創作とし、他のいくつかの民間説話はすなわち粉本をこれに採ったものとすることは、いささかも根拠のないことである。草子の「物草太郎」にもしなならかの新しいものがあつたとすれば、それは昔の物語絵にならうて、話を一卷の目で見るものにしたこと、および今まで行なわれていたいろいろの話し方をよせ集め、それに筆者の思いつきをもつて、なおいくつかの文句を付け添えたらしきことで、話そのものは突如として考案せられるほどの筋でもなく、また前々から聞いて親しみを持つ者だけが、格別おもしろさを感じるような潤色と誇張とに満ちている。物語の骨子は依然として誰にも認められなかった大なまけ者の器量才覚が、不思議の良縁に成功して、はじめて世に現われたというだけの簡単なもので、それをよけいな滑稽が幾分か引きゆがめていることは事実であるが、なお今までの一寸法師、ないしは蛙・蛇・田螺の出世譚と一貫して、すぐれた聖殿は往々人間のあなどり軽しむる者の形を仮りて、通うてくるものだという古代人の信仰の、痕跡だけはとどめているのである。

今ある草子の「物草太郎」が、いつのころいずれの地において編集せられたかは、単に伝本の系統をきわめたばかりでは、これを推定することがむづかしいように思う。『諏訪絵詞』の奥書にもすでに例があるごとく、田舎の口碑を文章に書き表わし、ことに美しい手跡と彩画とを賞翫しようというには、これを京都に持って出て芸術の土に依頼する場合が、多かったらうことはもちろんであるが、はたしてその際に新たに編述する必要があつたか否かは、まったく口碑そのも

のの種類・性質によることであった。社寺の縁起や靈驗記のような、伝説の部類に属すべきものならば、人は単にその実質だけを持ち伝えてゐるのだから、順序なり話し方なりは時によって一定せず、したがってそれを筆にする者の技能は随所に發揮したであらうが、これが民謡であり、もしくは何曾である場合には、文字はただ忠実に既存の口語に写し出せばすなわち足るのであった。そうして昔話は、ちょうどこの二つのものの中ほどに位していた。次々の話し手が自分の才智、もしくは誤解や記憶ちがいをもつて、改めていく部分はむろんあったが、その前後の形式と大体の結構とは、踏襲しなければならぬものが多かった。今日のごとく人が「その話なら知つとる」といって、二度は聞こうとしない世の中になつても、なお少しく新しみをだしすぎると、もう昔話ではなくなつてしまふのである。ことに話術の洗練を旨とする講釈師・話し家にいたつては、型にはまるをもつて上達と心得る者さえ多く、凡庸なる多数は枕から入れことまで、いさゝいがつさい師匠の口写しを守り、聴衆は単に声と調子との、善悪を品等しているだけである。すなわち外形はやや自由になつたように見えても、これを暗記しまた伝承しようとする者の態度にいたつては、いささかも淨瑠璃その他の以前の語り物に対すると、異なるところはなかったのである。場数と練習とをもつてたたき上げた者には、一般にこの機械的傾向はあるが、ことに記憶力を生命とし、伝授のやかましかった盲人たちの間には、説話が変転し進化する原因が乏しかったように考えられる。だから現存の「物草太郎」が純乎たる書きおろしであるか、はたまたこれが一卷の書に筆録せられる以前、すでにほぼこの形に固まつていたかは、結局は昔話をもつて職業とする者が、その流伝に参与していたか否かによって決すべきで、私は今のところは、た

ぶん参与していたらうと思つて居る。

ただしことわつておかねばならぬことは、中世信州の盲人たちが、説話によつて活計を立てていたという、直接の証拠が見つかつたわけではない。今ではまだ推測の範圍を出ないのであるが、筑紫琴とか三味線とかの民間楽器も普及せず、『平家物語』が東北の田舎に歡迎せられるまでに、諸国の交通が発達しなかつた時代には、かれらの芸術もおそらくは地方的に割拠し、後日全国を風靡したような大きな話題を持ち合わせない土地では、いきおい付近の神社仏閣によりすがつて、その信仰の宣伝を助け、または利用する生活方法に、技能を傾けようとしていたことは察せられる。もつともそういう業体の者は他にもあつて、どれまでが盲法師、どれから先が巫女や神なぎの仕事という区別も立てにくく、また事によると相互に融通していたのかもしれぬが、少なくともこの輩の力によらなければ、かくまでは分布もせず、また変化もしなかつたらうと思ふ口承文芸は、すでにいくつともなくその例があげられるのである。草子の「物草太郎」が生国は信濃で、筑摩の郡あたらしの郷という処に、四本の竹の柱を小屋にして住んでいたというだけなら、あるいは都の文人の筆まかせとも考えられるが、それが出世の後信濃の中將となつて在国し、富貴長命をきわめて、終わりに穂高の大明神となり、女房は朝日の権現となつて現われたまうというにいたつては、こういう道化たる話には不必要な結末で、前に定まつた一つの形が、その故郷においてすでにある程度の作りかえを受けてから、持ち出されたものなることを想像せしめるのである。

「毎日一度この草子を読みて人に聴かさん人は、財宝に飽き満ちて、幸ひ心に任すべしとの御

誓ひ也、めでたし／＼とある最後の一句なども、おそらくはまた古い形式の引き継ぎであった。すなわち物草太郎の奇跡が、いま少しくまじめな驚きをもって迎えられていたころから、すでにこれに近い言葉が付け添えられてあったのを、そのまま記録に採用しているのから見ても、これが創作でなかったことがわかるのである。

われわれはむしろこの偶然保存せられたる記録の一篇によって、説話がおいおいと単純なる娯楽用に化してきた経路を尋ねべきである。「物草太郎」の滑稽が幾分か濃厚に失し、押し問答が妙に理窟ばっているのは、それがもと盲人の所管に属していたからだと見るのは、私一個の直覚かもしれないが、少なくとも説話には道化たのとまじめなものと二つの種類があって、それが男女の両性の間に、分業になっていたことだけは事実である。法師と歌比丘尼などは知り合いであった場合が多く、また活計のためには方々の昔話を拾い集め受け売りにして、必ずしも本山の正しき所伝ばかりを、守ろうとしなかったことも同じであるが、しかも二者の間にははやくから、いちじるしい傾向の相異が現われていた。ひとり合戦や変化退治のような荒くれたもののみといわず、いわゆる大話の旧来の信仰を裏切り、もっぱら聞く人の笑いをうながそうとする類の語りごとにも、必ず男がするものにきまっていた。これは単に女性の氣質や教養が、一般にそれに向かなかったというだけであるか、ただしはまたかれらが一段と神仏に接近して奉仕していたことと、何か隠れたる関係のあるものかは、まだわれわれには容易に決しかねるが、とにかくに技芸の分離独立すなわち昔話の自由なる発達はまずこの方面にはじまり、各種の浮かれ坊主の狂言綺語を弄する者が、年とともにその数を加えたに反して、婦人のこの業にたずさわる者だけは、なお久しい後

まで信仰と縁を絶たなかったのである。信州の「物草太郎」が他の多くの「桃太郎」系説話と共通に、非常に明るい結果をもつて「瓜子姫」系のさびしさと対立する以外、さらにその求婚方法に関して、山田白滝譚の歌問答の形式を採用していること、それから団子のころんだのを地頭殿に、馬から下りて拾ってくれと頼んだという一条が、後世の笑話にもしばしば現われてくることなどは、ともにこの草子の本文の伝承者が、やはり長門の寝太郎長者の場合と同じく、悪七兵衛景清を元祖とする盲目の徒であったと、解して見るならば格別の不思議はないのである。

六 博打掣入りの事

問題はそうした自由なる改作者、説話固有の趣旨を脇にさしおいて、もっぱらそのおかしみにのみ力を入れ、できるだけそれを誇張して、信仰なき俗衆によるこび聞かせようとする者が、はたしていつの世からわれわれの国に出現したかということである。田舎はともかくも、京にはその風が早くはじまるべき理由もあり、また記録の徴証もあるわけであるが、私はまだあまり古いものに心づいていない。もちろん昔話の種類によって、特に笑話に化しやすいものと、そうでないものとがあつたには相違ないが、ずいぶんまじめな話でも、いったんわれわれのこれを迎える態度が変われば、いかようにも滑稽に取り扱われえたことは、江戸その他の近代都市の、民間文芸の趣向を見ても察せられることで、要は世の中の需要と、それに応ずる技術の進歩とにあって、最初からある一面のみに限らるべき新現象ではなかったはずである。「情け者の掣入り」が後

世の新作でもなく、また輸入でもなかったという例証は、少なくとも『宇治拾遺物語』（国史大系本一九四頁）の中に一つある。筆録の年代は少なくとも四百年ほど、「物草太郎」の草子よりも前だろうと思うにもかかわらず、このほうがはるかに今日の諸国の「寝太郎」に近く、しかも造意をもって神話の写実味を排除している点は、かえって長州厚狹の治水開土談より前へ出ている。私はこの事実によって、『宇治拾遺』という書物が成った時代に、すでに男性の説話を職業とする者が、（盲人ではなかったかもしれないが）存在せしことを想像しているが、それはもとより今後発見せらるべき旁証の多少によって決すべきことである。はたしてこの想像が確かだったとすると、神話はひとり一個の神子出現譚のみならず、他のまったくこれと関係なきものまでも、もうこの時代よりも以前から、そろそろ変質して、今日のいわゆる昔話になりかかっていたとまではいえるのである。

試みにこの『宇治拾遺』の「博打掣入りの事」を、今日の言葉に引き直してみようと思うが、これにはただ一つ、婚姻習俗のその後の改廃が、ややわれわれの諒解を、妨げていることをあらかじめ注意しておく必要がある。

昔々、醜い顔をした一人の若い博打^{ギョウ}があつた。二人の親はどうすればこれに嫁を持たせることができようかと案じていた。ところがある長者の家にたいせつな娘があつて、男ぶりのよい掣を捜していることをこの博打が聞きつけて、自分は天が下の顔よし、すなわち日本一の美男というふれ込みで、とうとうその娘と契約をしてしまった。何日かの後、暗れて舅^{しゅう} 姑^{しゅうとめ}と対面する日になって、はじめて醜い顔を人に見せなければならぬのに苦心をして、ばくち仲間の

者に相談して策略をめぐらした。当日は夜の内からその仲間の一人が、ひそかに天井裏に上っていて、大きな声で「天が下の顔よし」と三度呼ぶ。そうすると掣が思わず知らず返事をする。家の者が驚いて聞いている前で、その天井裏の鬼が、この娘は三年も前からおれが領しているのに、その方はどうして通うぞという、そんな事は少しも知りませんでした。どうかおゆるし下さいと掣がいう。にくいやつだ、命と顔とどちらが惜しいか。一つだけは取っていくと鬼がいう。掣はわざと返答に困っていると、そばから嫁の親たちが命のほうをうがたいせつだ、顔はしかたがないというので、そのとおり返事をする。さらばスフ／＼と鬼は唱えごとをして、ずしずしと天井を歩んで帰っていく。あらあらといつて掣は伏しまろぶ、人々寄り集まり紙燭をつけてはじめて顔を見ると、さしも天が下の顔よし、目と鼻と一しょに押し付けたようなおかしな顔になっている。「ただ命をこそというべかりけれ」といって花掣は泣く。これもいたし方がないと、かえって親たちの方で慰めて、それから大いに優遇して、よい家を建てて榮々と暮らせるようにしてくれた。めでたし。

多くのこれまでの求婚冒険談では、小さいか、貧しいか、醜いか、なまけ者か、いずれか一つでも美人の妻を得たことを奇蹟としていたのに、この話の若者は現にその三つを兼備していた。それでも福分あり、智慧があれば、優に成功するということを、ここでは長者の愚鈍を餌にして実現させているのである。鬼が島の鬼が非常に弱く、宝物交換譚の天狗や狐が、法外に浅慮であったのと同じく、つまりはこれも実世界に不満の多い凡人たちを、楽しませるための空想であつたと思う。

それからこの幸福なるなまけ者を、寝太郎だの睡虫だのという代わりに、博打ちのしよりのない者であったとしているのも、近ごろ奥州ではじまったことではなくして、古くからの話術であったのである。単なる愚か者が突然として賢くなり、世にも稀なる長者となったというためには、そこに前兆なり隠れたる力の導きなりが、あったことを説かなければならなかったのであるが、その点が次第に常人には信じがたくなると、話はどうしてもこういう方へ出ていくのほかななかったのである。今日ならば「なまけ者」にもいろいろの種類があるが、中世にはおそらく寝る賭博をする以外に、人にきらわれて除け者にされる生活が、そうたくさんはなかったたのである。その上にまた博打ちの賽さいというものには、特殊なる神秘があった。それゆえにひとり長者の毘びになる話だけでなく、妖怪変化をあざむいて成功した話などが、これにもとづいて際限もなく発達したのである。「桃太郎」や「御曹司の島渡り」においても、敵の宝物をまき上げることが勝利の手段であり、「一寸法師」でもまず打出小槌を手に入れて、それから立身が思うままであったごとく、われわれの宝物交換譚には、法師や易者が秘伝の品だと称して、なんでもない贗物を狐に渡す話と、博徒の持つ賽ころを天狗などが所望する話との二通りがあるが、前者はたぶん第二次の転化であつたらしい。賽と取り替えられたという天狗の宝物にも、羽団扇はやうせんと隠れ蓑笠かぶととの二種があつて、双方ともに今は落語のような結末をもつて笑わせているが、これにもかつては「めでたしめでたし」の、本式の形態があつたのではないかと思う。信州北安曇郡などの「隠れ蓑笠」の話では、博徒が賽と交換してきた天狗の隠れ蓑を、女房が知らずに焼き棄てたので、その灰を身に塗って酒屋に忍び込んだというまでは、他の地方に行なわれるものと同じことであるが、

ここではそれがちょうどいづれの話にもよくある中途一回の危機であつて、それを通り越して結局はその妻の智慮ある援助によつて、その博打ちの吞助が金もうけをしたということになつてゐるのだから、すなわちまた最初はあなどり軽しめられていた者が、実は英雄であつたという説話の、進化してきた路筋がうかがわれるのである。妻の援助が古くからの要素であつたらしいことは、これから後にもなお説明してみたいと思つてゐるが、それとは別にいま一つの重要な援助者があつた。奥州でも『宇治拾遺』でも、それは博打ち仲間ということになつてゐるけれども、本来はもう少し深い意味あるものの痕跡であるらしいことは、他の類話において何がその地位を占めてゐるかを、綿密に比較していけば必ず心づかすにおられぬ。前に「瓜子姫」の物語において、私が動物の援助といったのもそれであつた。現に九州沖繩の寝太郎話においては、鷺や野鳩がその任務にあたつてゐる。そうして神仏霊鬼の隠れたる意思を代表したことは、双方に共通であつたのである。単なる博徒仲間の義理というだけではなかつたのである。

七 せやみ太郎兵衛

草子の「物草太郎」が新しい改名であつたことは、別に言語の側からもこれを察することができる。古語のモノウシが、名詞形のモノウサを中に置いて、モノグサシというようになったことは、少なくとも京都においてはそう古くからの訛誤ではあるまいと思うが、それが普通になつた後に物草太郎という語が起こり、その新語の興味はまた、改めてこの昔話をして生命あらしめた

らしいのである。一寸法師も以前の日本語はチイサコであったのが、妙に新語の一寸法師が人氣に投じて、諺にもなれば俳諧の連歌にも用いられた時代があった。昔の赫奕姫にもその後の桃太郎にも、ともにこの名称による復活というものがあつたように思う。現に今日でも話はいいこのおもしろい名において、記憶し保存せられているのである。

出羽の庄内の「せやみ太郎兵衛」の一例は、最近に堀維孝氏の好意によって知ることができた。セヤミは「背病み」であつて、われわれの「骨惜しみ」に近く、東北六県を通じてなまけ者の意味に用いられる方言である。そのセヤミ太郎兵衛が西日本の寝太郎と同様に、やはり不思議な事から長者になつたというのである。

昔々せやみ太郎兵衛という男があつた。毎日毎日寝ころんでばかりいて、何一つ働こうともせず、食う物の用意をするのもめんどろだといつて、前の畠にたつた一株の菜が生えていたのを、一葉ずつ欠いては食つていた。だんだんに菜の葉がなくなつて、おしまいに引き抜いて見たところ、その根の穴の中から酒の泉がわき出した。せやみ太郎兵衛はこれによつて、たちまちにして大金持になつたという話。

庄内ではあるいはもう「これでどんどん払い」であつたのかもしれないが、この話はもとはお複雑であり、またひろく行なわれていたかと思ふ痕跡がある。たとえば「老嫗夜譚」の山の神が赤子の運を定める話にも、後に長者になる女房が畠の大根を抜いて食うと、その穴から泉酒がわいたという一条がある。以前、中道等君が報告した南部の豊川村の蕪焼^{わかしやき}笹四郎の話（旅と伝説二卷一〇号）なども、今になって考えてみると、やはりまた一つのセヤミ太郎兵衛であつた。笹

四郎は親譲りの畠の蕪ばかりを焼いて食つて、米の飯をうらやもうとしなかつたということになつているが、自身農作に働かなかつたは同じである。そうして中道君の記述には見えないが、ここでもその畠の蕪の穴から、酒がわいたと語る人もあるように聞いている。しかも似た点は單にそればかりでなく、この笹四郎もまた一種の智術をもつて、長者の掣になつていたのであつた。豊川村の若い者どもは、蕪焼に一つよい嫁を見つけてやろうと言つて、毎日山から白土を掘つてきて、これを大川に流し入れた。そうするとついに大川の水の色が白く濁つて、川下の湊の町の人々が不審をする。湊一番の金持に娘があつて、それを笹四郎の嫁にもらいにきた。若人たちが大川の水の色に急に白くなつたのは、今年はじめて酒を造る笹四郎の酒倉で、数多の下女・下男が米をといだ水だというので、それにだまされて縁談を結んだと伝えている。これもちやうどまた閉伊郡のならず者の友人らが、砂を俵につめて米俵と称して運んだというのと同じである。

すなわち蕪を食つて日を送るような生活から、突如として酒屋になるという段は偶合ではなさそうである。ただしこの話も前の大根畠の話も、ともに花嫁の助言が縁となつて、不意に黄金を堯見したという炭焼長者譚の系統に属している。「炭焼長者」は普通には女性の管理する語り物となつていた。「寝太郎」「物草太郎」のやや皮肉なる滑稽をもつて、中古の盲法師、もしくは少なくとも男芸人の所業と想像している私には、これはまた非常に興味深き新聞題といわなければならぬ。すなわちこれらの説話を今日まで保存してしてくれた村々の伝承者には、よくこの男女二種の話術者の説くところを調査して、一つの話とするだけの力を持っていたか。そうでなければ同じ一つの題材を、最初からボサマもイタコもともに利用していたものか。あるいはまた双方

各自の語り物を複雑にして長くするために、おいおいに隣の領分にあるものを採り入れたか。こまかく比較していくうちには、三つの原因のいずれが主であったかを、やがて明らかにしうる時がくることと思う。なんにもせよわれわれの神子信仰を基礎とした一つの説話が、いたってわずかしが外国の影響は受けずに、過去千数百年の間、国民の目の前において、成長し分化しつつ互いにいちじるしい差異を生じつつありしことは事実であって、それをうながしたる最も大いなる動力は、特に職分としてこれに参与した者の氣質・教養、ないしは生活の必要如何であつたらしいのである。こういう事情は形こそちがえ、いずれの民族のいずれの説話にも、当然にあつたはずである。それをかえりみないで出しぬけに末と末とを比べてみようとすれば、その結論のしはば空中樓閣に帰し、何度でも顛覆すべきはむろんである。しかるにその外国における学説の競争を後生大事と観望して、少しでも目下はぶりのよさそうな者の後に付こうとするなどは、まことにはや気の知れぬ筒井順慶^{*}である。

八 信州の信の宮

そこで立ちもどつてもう一度、「物草太郎」のもとの形ということを考えてみよう。私がこの草子の筆者の文芸能力を大割引して、それが主として信州出の法師くでんばらの口伝になるもののごとく推測したのは、理由はむろん最後の一節に穂高大明神の示現しげんを説いている点に存するが、さりとてこの説話の故郷が必ず有明山麓の村であり、もしくは発源がこの旧社の信仰であると見たの

ではなかった。それよりもむしろこの異常童子が、善光寺如来の申し子であつたという条に、日をつけなければならなかつたかもしれないのである。というわけは、単にその点が話の芽であつたというのみでなく、つとにいろいろの旅の法師、ことに盲人がこの大寺のもとに、庇護せられていた形跡があるからであつて、諏訪^{すわ}と善光寺との年久しい対立なども、中間に多数の宗教的漂泊者を置いて考えてみないと、いわゆる地理と歴史だけでは説明することがむづかしいと思う。もつともこの関係は必ずしも同国たるを要せず、あるいは江州大岡寺だうきやうの観音堂のために、甲賀三郎が諏訪の明神と示現したことを説いたような例もあるが、普通には遠く他国に出ている職業的話し家のほうが、どうしても故郷の著名なる神々を引き合いに出す場合が多かつたことと思われるのである。

とにかくに説話がもと京都その他の遠国に発生したものであつたら、善光寺の如来の申し子とまでは空想しえたか知らぬが、筑摩の郡あたらしやの郷や、穂高明神を説き立てることはできなかつたはずである。そうすると第二段に問題となるのは、この申し子奇瑞の最も奇抜なる一種、すなわち物草太郎立身の話などは、これもまた信濃国の土産であつたか、ただしはまた入用に臨んでの輸入品であつたかといふことである。神仏に授けられたたつた一人の子が、異形異類であつたり、極端に小さかつたりする以外に、とうてい見込みのない役に立たずであつたという話は、もとより他の地方にも行なわれていた。現に奥州のツブ鯉入譚においても、十八になるまで神棚の欠椀の中で、ただ遊んでいたという話になっている。しかし私の想像があたつてゐるならば、信州は特にあの草子の世に出る以前から、すでに物草太郎の昔話が流布していた国であつて、そ

れは必ずしも善光寺ばかりに固定した口碑でもなかった。前に引用した小泉郡こゐまぐんの小泉小太郎も、十六歳まで大飯を食って、毎日々々遊んでばかりいたというが、かれは大蛇の生み残した子であって、その後裔には代々横腹に蛇の斑があった。これから尋ねてみたらまだ方々に似た話があるのかもしれないが、現に穂高大明神の信仰圏内にも、その実例は一つ残っているのである。最近に世に出た『北安曇郡郷土誌稿』口碑伝説篇の第一冊に、次のような一条が採集せられている。

この郡会染村林中区の南部を、今でも久兵衛分といっているが、昔この地には久兵衛という金持が住んでいた。その総領（または一人息子ともいう）に信太郎という若者があって、やはり有名ななまけ者であった。ある日松川村の多羅尾の山中に笹刈りにいって、笹は刈らずに昼寝をしているうちに、頭に二本の角が生えたので姿を隠してしまった。一説には信太郎は自分の姿の醜きを恥じて、山に隠れたとも、天狗になったともいう。そうして三年の間、夜は帰ってき寝をしているのを女房が見て、うちの仕事はもういいから、そんな姿で来てくれるなといってから、ふつりとこなくなってしまうた。

これと同じ話がまた隣郡の『南安曇郡誌』にも出ている。ただし場所だけは有明山の東麓馬羅尾谷ということになっていて、そこにはこの若者をまつたという信の宮が、山に正面し里に背を向けて立っている。この信太郎は、ある時友だちと笹刈りに入ってきて、不意に巨人に化してこの谷を一またぎにしてどこへか行ってしまったと言い伝え、それから三年の間、夜中にもどって

きて、一夜のうちに家の田残らずを、植えたり刈ったりしてくれたというまでと同じで、昼寝をしたという一条のみは落ちてゐる。小泉の小太郎も小泉山の萩を、二束に刈ってのけたという大力量であったが、安曇の信太郎はその上に農作の功勞を残し、神として今も敬われているのである。これが長門ながとの寝太郎荒神と似ていないのは、単に話し手の力を入れて話す部分が、時代と地方と人によって、一様でなかったためではなかったか。たとえば信州にも信濃しなの巫と称して、女性の昔話を携えて旅をする者が住んでいた。もしこの簡単な話の種が、かりにこれらの手にかかる場合があったとしたら、あるいは秋田の八郎潟の口碑のごとき、恋心の豊かなものに変形してはいなかったかどうか。この私の想像があたっているや否やを確かめるものは、今後の採集とその綿密なる比較のほかにないのである。自分が故意に都合のよい材料だけを拾い集めて、ただなんでもかでも、もとはみな一つの話だと強弁する者のごとく、誤解せられずんば幸いである。

（昭和五年七月、「旅と伝説」）

山田の露

昭和五年の春の郷土舞踊大会に、備中白石島の女たちが日本青年館に出てきて、山田の露という口説節の盆踊りを踊った。その歌の章句は「民俗芸術」三巻四号にも出ているが、私が今からちょうど五十年前に、播州の故郷で聞いていたものと、筋はまったく同じで言葉が少しずつ変わっているのみである。

縁は不思議なものにてござる。

父は横萩豊成公よ

姉は当麻の中將姫よ

妹しらたき二八の姿

一のきさきにそなはり給ふ。

ここに津の国山田の谷に

治左衛門とてかしこき男

内裡しらすのやに取られつつ

塵を拾うて勤めて居たが

みすの恋風吹きまくりつつ

一のきさきの白滝さまの

つぼねまるねのおん姿をば

ひとめ見るよりはや恋となり

けふかあすかの病となりて云々

それが結局は和歌の応酬によって貴人を感じしめまつり、姫を宿の妻に賜わって故郷に帰り、子孫繁昌したという一条の物語である。以前兵庫踊りの名をもってこの物語の流布していたのは、少なくともまた百年の昔のことであるが、その内容には格別の変化はないものと見えて、現に『摂陽群談』巻八に記述せられる山田・白滝贈答の歌なども、

雲だにもからぬ峰の白滝をさのみな恋ひそ山田をとこよ

みな月の稲葉の末のこがるるに山田に落ちよ白滝の水

となっている。これを備中の小島や私の生国などでは、意味がわからぬゆえに、ただ少しずつまちがえて歌っていただけである。「桃太郎」の説話の研究者として、注意しなければならぬことが三つある。その一つは、これほど久しい間、定まった形をもって流伝していた説話でも、やはり中世のある機会に、誰かの手によって改作せられ、潤飾せられたということが、和歌によって確認し得られる点である。おもしろい歌には相異ないが、「雲だにも」の一首は、とうてい撰集時代のお姫様らしい物の言いようではなかった。これでも通用したということそれ自身が、文学のいま少し荒々しい階級まで、普及してから後の作であることを推定せしめる。かりにこの点が足利末ごろなどの時世粧であったとすると、残る部分の常民がおもしろく珍しい言葉の力によって、すぐれた配偶者をえたというだけが、一方には「寝太郎」「一寸法師」等の多くの等類を引くの

みならず、他の一方にはまた遠く『更科日記』の著者が、武蔵の竹芝で採集してきた民謡とも、別種とはいわれない一致を認めることになるのである。『今昔物語』巻三〇の大納言娘被取内舎人語、および同じ話を略出した『大和物語』巻下に、これをかの「安積山影さへ見ゆる山の井」の歌を詠じた上臈の物語として伝えているものも、すでに『万葉集』一六の註記がある以上は、仮託であった。そうしてまたこういう古歌の存在にもとづいて、新たに結構せられそうな説話でもなかったのである。ところが諸国の山田白滝話においては、摂津の丹生山田の栗花落家伝をはじめとして、姫が水鏡を見て身の衰えを歎き、あるいは身を投げて死んだという泉の跡が、往々にしてこれとものうているのである。そうすると今は二つが別々のものになっているが、かつてはこんなもの悲しい結末をもった「長者の聲」説話もできていた時代があるので、それが第二の名歌譚の付き添わってから後まで、なお消えきらずに残っていて、偶然にその系統と沿革とをわれわれに暗示してくれるのかもしれない。昔話が和歌を中心として記録せられる結果、一度この部分に改作が行なわれると、話全体が大きな変化を受けることは、いたって普通なるわれわれの経験であるが、それが幸いにしてこの山田白滝のごとく、新旧重なり合って数多く分布している場合には、なおこういう中からでも、前代を貫通した一つの要点を、見つけ出すことが不可能ではないのであった。

第二に注意せられるのは、この幸運または多智なる聲がねの説話が、国の全土に流布しようとした勢力、ことにすこしでも所縁のある処には、必ず土着して伝説と化せんとした傾向である。単にこの一話が著名であり、もしくは人望があったという事実だけでは、これをわが土地の昔の

史実だったと信ずるにいたった理由を解説するにはまだ足りない。いま一步以前の状態にさかのぼって考えてみなければ、人がこのような口碑を尊重しはじめた動機は尋ねがたいのであるが、それには何よりも事件の中心であったという家筋を、明らかにする必要があるかと思う。山田はわが国ではいたってありふれた地名であるにもかかわらず、その名の土地があれば、多くはこの昔話を過去の歴史のごとく語り伝えている。それが私などには家の祖先を高貴ならしめたいという要望がまず存して、流布の物語はこれに供与せられた一つの便宜であったとしか解せられぬのである。現在知られている二、三の例をあげるならば、能登では鳳至郡鶴川村に山田という山中の部落があって、そこを流れる山田川の辺には、藻淵・産田・若宮神社等の旧跡があった。むかし三田の四郎右衛門という者、京に上って禁裡の御庭掃きを勤め、掃除いとまある時には箒を持って踊った。それを姫君が簾の中から見て、田舎の黒鳥とあざけったところが、即座に四郎右衛門一首の歌を詠んだ。それは、

羽根うちそろへてたつ時は中将姫も下に見る

という妙な歌であったが、中将姫の母は姫の不謹慎をにくんでこれを追い出したので、故郷へ同道して帰って夫婦の語らいをした。山田川の藻淵は、姫が山村に食物乏しきを憐んで、海から採ってきた一房の藻をこの淵に投げ入れたのが今でも繁茂するといっている（『郡誌』一一六〇頁）。上野国では山田郡川内村に山田という在所があって、ここにも白滝神社と山田男との伝説を保存している。『山田郡誌』にもこの事をするしてあるそうだが、私はまだ見ない。『上州郷土研究』という書物の桐生市荒土の条には、この白滝神社の祭神は、この地方の人に機織る芸を教えた白滝

姫であるといい、和銅七年に桐生の人山田朝臣なる者、九重に奉仕してこの姫を恋慕い、名歌の徳によって姫を賜わって、帰ってきた云々とあって、その応酬の和歌というのは前にあげた『撰陽群談』ないしは『京童跡追』などに出ているものと、二首ながら同じである。京から下った上臈に綾錦を織ることを教えられ、後にその女性を神に祭ったというだけの口碑ならば、那須の綾姫や信夫の小手御前等、東北にはいくらもその例があつて、これにもいろいろの語りごとをとものうてゐるが、ただそれには「物草太郎」同系の求婚譚はないのであつた。上総国では山武郡千代田村にも、山田という部落があつて、清滝姫の御手洗という三つの小池と同じような口碑が残っている。むかし孫三郎という男が役夫にさされて京に上り、ある上臈を見そめて恋わずらいをした。そのこと貴人の耳にとまつて、妻に賜わつてともない帰つたのが清滝姫で、その守り仏を本尊にして金光寺という寺を建てたことになっている。歌は伝わらぬが山田だから一つ話であらう。しかもここでは兵部卿某、京から流されてきてこの里に住し、その一子が孫三郎であつたといつて、男系のほうまでも凡人でなかつたことにしているのである。三つの小池についても、もう少し話があつたのかもしれない。今はただペロ井戸の名に呼ばれて、そのやや褐色をおびたわき水を、口中いっさいの病にきくといつて汲んでいく者があるだけである（『山武郡郷土誌』）。それからなお一つ、陸中上閉伊郡の海岸にも山田という町があるが、これにちなんだ昔話は、すでに百八十年も前に、『遠野古事記』巻一の中に載録せられてゐる。昔諸国より千人夫とて、三年の丁を京にのぼせ、また一國十人の采女を奉りし代に、閉伊の山田の左内という男が、役夫に選まれて京に上り、官女清滝を恋して一首の歌を贈る。

雨降らで植ゑしさなへも枯れはてん清滝おちて山田うるほせ
女返し、

及びなき雲の上なる清滝に逢はんと思ふさなへはかなし
男また、

かけはしも及ばぬ空の月口だに清き穢れの影は隔てぬ
女また返し、

よしさらば山田におちて清滝の名を流すとも逢ひてたすけん

「それより忍びて逢ひ、伴なはれて男の古里に下るとて、遠野東禪寺村の奥山に隠れ巖窟に住す」云々とあって、女やがて身まかり、塚のしるしに石を建て、その石が麓の里から猿か石かと思へたゆゑに、猿が石川という川の名がはじまつたとも記している。この歌は御覧のとおり少しばかり文人の加筆があつて、いよいよ変な形になりきつてゐるが、とにかくに東北は今でも盆踊りに口説節は用いない習いだから、これを運んできた者は別に誰かあつたのである。話がラジオなどのごとく空に放送しうるものと考えてゐる人は世間に多いようだが、文字の媒介のあまねからぬ時代には、ただの狂言綺語とて、そう手軽には遠くまでひろまりえなかつた。ましてや我も他もともに信じて、これがある昔の史実として説きたるまでを、自然のなりゆきと見ることは無理である。一方にはもちろんこうした話を持ちあるいた者と、それを正しい語りごとのごとく受け入れようとした者のあつたことは想像せられるが、なおその以外にもかねてなんらかの因縁の、これをわが土地につなぎとめんとしたもののがなかつたとはいえない。摂津の丹生山田庄の栗

花^い落^り左衛門という旧家では、家のかたわらに弁財天女の社があって、そこに栗の花ちる五月雨のころになると、新たにわき出づる不思議の泉があり、これを説明するために貴女降嫁の伝説があったことは、はやく京洛の地にも知られていたようだが、これを中将姫の妹といい、もしくは名歌の奇特によって、無謀なる妻問いに成功したという話までが、はじめからこれにものうてあったものとは認められぬ。つまりこの間には二度以上の増補があったのである。五月田の水の最もたいせつなところに、毎年きまってわき出す泉を奇瑞として、神をその地に祭ったというだけの言い伝えならば、今ある浪華^{なみは}曾根崎^{そねざき}の露天神社をはじめ、京にも田舎にもその例は乏しくない。それからその霊泉の所在地について、ある貴種の子の埋葬を説くのも、珍しい口碑には相違ないが、われわれはすでに遠州久留女木の「竜宮小僧」において、一つの類型を見たのである。家の裏祖^{うらそ}と水の神との婚姻にいたっては、これは日本にあまりにも数しげく、またあまりに著名の伝説であったがために、かえって省略して印象を微弱ならしめた場合が多く、その結果は往々にして新たな修飾を必要とすることにもなったかと思う。たとえば摂州丹生山田の千年家などでも、単にわが家の初代夫人が、尋常農民の子ではなかったこと、およびその霊を永く清水のかたわらに祭っているというだけの漠然とした記憶をもって、満足していることができたならば、いかに興味の深い昔話であろうとも、卒爾^{そぜん}に入りきったってこれと結びつくようなことはなかったろう。ただにぶんに家伝は物足らず、これには必ずまいちだん^{まいちだん}のいわれ因縁があったはずだと、まず聞く人々が期待するようになって、いつとなくそういう機会を供与したもので、説話そのものはかねて久しくこの界限に浮遊していたことは、ちょうどまた関東 奥州の山田という土地に

行つて、再び土着するにいたつた事情も同じであらうと思う。歌によってよい女房を得たという話は、いずれ菖浦^{あやう}の源三位頼政、もしくは梶原源太などがこれよりもはるかに古い。これを換骨奪胎することは素人にもできたことかも知れぬが、なお自分などはこれを当麻の中将姫の妹ということから、たぶんは専門の歌比丘尼の所作であつたろうと想像する。こういう女性の神気^{かまけ}がそうて語れることは、事実またたいの田舎人には信用せられたのであつた。

さて最後にいま一つ、特にわれわれの注意をひくことは、説話が一国のしかもわずかな年代の間において、次から次へと変わっていく足どりの早さである。山田白滝の踊り音頭のように、一方にあればひろく久しく型にはまって行なわれているものが、なおいつの間にか新しい衣裳を着せられて、また別方面の聴衆の好みに合おうとしていたのである。能登の山田村では白滝落ちよの綾言葉はすでになくなって、ただ黒鳥の警句を興ずるのみであるが、それでも中将姫の下に見るとあるだけに、なお前の話との連絡は認められる。越後の南蒲原郡^{かみはら}に存する二つの例では、一つは白滝姫とあって、山田の稲は枯れ果てるという歌も残っているが、他の一つの方は男の名をモクズといい、贈答の歌はまったくちがっている『加無波良夜譚』一五二、一六〇頁。よっぽど変なものだが、本文のとおりを抜き書きすると、娘が男をあざけて詠んだというのが、

天より高く咲く花に何とて恋かくもくずさん
モクズはこれを聞いて、

天より高く咲く花も散ればもくずの下になる

と返したので、旦那もなかなかよくできたといって、娘を嫁にくれたという話である。『日本童

話集』(二六八頁)に「三人男の望み」と題した一話は、石井氏の『国民童話』を転載したものであって、しかも肝腎な点を誤って写している。昔、丹波国の大百姓の下男が三人集まって、おの身の望みを言い合った。一人は三日でよいから旦那のような暮らしがしたいと言い、いまい人は籠に三杯の銀がほしいと言った。三人目の下男は李蔵もくぞうという名であったが、これは主人の娘の桜花を女房にしたいと言った。旦那はそれを聞いて、前の二人には望みをかなえてやり、次に李蔵の望みを娘の桜花に話してきかせると、娘はおこつてこういう歌を詠んだ。

天より高い桜の花を心がけなよこら李蔵

そこで李蔵はその返歌として、越後で言っているのと同様の歌を詠み、それに主人が感心してしまつて、さっそくに娘の嫁としたというので、わかりきったことだが、モクゾとは塵芥のことであつた。それは李蔵という男の名にひっかけたところが、下品ながらもこの昔話の山であり、また聴衆の興を催す点であつた。しかるに松村君の童話集のごときは、わざわざ男の名だけをかえて末蔵としている。それでは何に感心したやら、話の筋はいっこうに通らぬわけである。この種の昔話は昔とても、実は決して童話ではなかつた。ただある時代の村々の李蔵階級にとつて、いわゆる高根の花が散つてモクゾの下になるといふことが、かなり愉快なる空想であつたために、遠くは北国の田舎までも、この形をもつて行きわたつていたのである。播州の加東郡などにもこれと同様な李蔵求婚譚は行なわれているそうだが、『旅と伝説』四卷三三号、別になおそれと併行して、摂州山田村の源右衛門の話というものもあつた(同誌三卷七号)。源右は京に上つて、ある貴族の家に仲間奉公をしていた際に、庭掃除をしながら二人の朋輩と願ひごとを語り合つた。そ

れを殿様が立ち聞きして、一人には一樽の白味噌を、いま一人には簀ざいばいの小判を望みどおりに取りらせ、この家のお姫様を女房にほしいと言つた山田村の源右衛門には、姫と歌合戦をして勝つたなら願いをかなえようと仰せられた。その時の名歌というのがまた超越しきつたもので、内容はほぼ能登国の例と似ていた。

なにをくそ、くそがらす、高きの空に目をかけるな

これがまず姫御前のほうの歌であり、源右はその返歌として、

くそ烏とて空飛ぶときは九重の塔も下に見る

という一首を詠じ、首尾よく姫をとものうて在所に帰つたというのだが、この勝負には負けても、姫もまたすぐれた歌人であつて、後に山田村の大早りの時に、歌を詠じて雨を降らせたことがあるというから、すなわちまた梅雨井の口碑を背景として、成長した説話であつたことがわかるのである。説話文学の系統同異に関しては、従来人によつて思ひ思ひの意見が立てられている。私はつとめてそういう水かけ論の連衆に加わることを避けているが、この「山田白滝」の一例にいたつては、たとえ人の名や歌の文句がこれだけちがつておろうとも、それだから別種のものだと言ひうる人はなく、またはくそ烏やもくぞの下のほうが、古くからあつたのだという者もよもあるまい。だからわれわれの採集は常にこういう弁証を絶する境まで、事実の確認を持つてく必要があると思つている。ただし話法の新たな変化ということは、必ずしもその中に保存せられる古い分子の減少の度とは、比例しなかつたことも考えておかねばならぬ。三人の下男が三段にその望みを語つて、その最後のものがことに重要であり、また適切であつたという点は、兵庫

踊りの「山田の露」からはすでに落ちていたようだが、これなどは確かに古い形である。息子が三人あつて、末の子のした事は最も大きく、姉仲二人の娘は蛇の掬入りを拒絶して、末の娘のみが父の教えに従うたという類の話は、われわれの昔話には数限りもなくくり返され、たとえば「米倉法師」のようなおどけきつた笑話にも、なお三つの願ひ事は、興味をこまやかにする手段として利用せられている。これが年久しい慣例のままに、後に山田男の妻問いにも応用せられたか。もしくは以前には聴衆の心を統一するために、あらゆる説話の主人公は、常に二人の介添えを前に立てて出てきたものか。はたまた水の神の処女を妻とするこの説話が、特にこういう形をもつて語られるを習いとしたのが、偶然に閑の多い田舎の夜話だけに、以前の面影をとどめることになったものか。遠く離れた奥羽、九州の実例が、なお数多く集積せられた上でないと、われわれは三者いずれともこれを断定することを許されぬのである。人が幸いに信じてくれるゆえに、勝手放題な現在の見込みを言つて聞かせ、後で誤っていると知つても知らぬ顔をしているという事は、私などにはとてもできない芸当である。

妻に助けられた

丹生山田の千年家の家伝には、また天国の宝剣の話があつた。近世の歌舞伎の連想からいうと、これこそはまさしく遊行文芸の潤色であつたように見えるが、その実はかえつて芝居のほうが、趣向を民間の信仰から導いていたらしいのである。駿河、遠江の山村をあるいていると、今でも

ときどきはアマグニのツルギと称して、鎗の穂のような物を持ち伝えていた話を耳にする。その家宝の威徳と伝来については、きわめて茫漠たる解説を存するのみであるが、少なくとも目に見え形をとどめるある物体によって、家の古さとその主張の正しさを証明せんとした点は、塚や神木などと趣意を同じうしていたかと思われる。天国という名も今日の鑑定家のいうような、この世の刀鍛冶の通称ではなかったのかもしれない。とにかく山田白滝譚の本文においては、名剣は娘が故郷の地から携えてきたものであつた。そうしてこの稀世の宝を永く伝えたということ、姫の福分が夫の家業を支持して、子孫繁昌の基を築いたということとは、かつては相結んで家の伝説の本体をなしていたのである。

だから桃太郎がただ鬼が島の財宝のみを運搬して、お姫様を連れてきたとはいっておらぬのも、私には童話化時代の脱落としか考えられぬのであつた。それと同様に近ごろようやく人に知られ、はじめて記録に上つた民間の説話でも、この二つの要素の組み合わせ、もしくはその取り扱い方のどうあるかによって、意外に成立の古かつたことを推定せしめるものがあることと思つている。中古の読み物であつた「御曹司の島渡り」は、姫と宝物とをあわせて得たことになっており、同じく「一寸法師」はまず打出小槌の力をその身に試みて、いよいよ婚姻を幸福ならしめたといふのだが、これではまだ女性の働いた部分が少ない。グリム童話の「愚か者ハンス」、もしくはペンタメローネの「うつぼ舟」の話などのように、あるいは「炭焼長者」の黄金発見のごとく、妻に教えられ、または導かれて、新たに運命を開拓したのではなかつた。ところが奥州で採集せられた「蛇の掬」「田螺の掬」および奄美大島の「蛙の掬」などでは、この花嫁の参与が絶対に

必要であつた。説話はただ単によき女房を得たことをもつてめでたしとはせず、さらにその力によつてはじめて三国一の掣殿はでき上がるのであつた。もちろんこの変化の段階をもつて、ただちに説話分立の順序とは認められぬが、少なくとも後に口頭の伝承から採集した文芸にも、なお数百年の齢をもつ記録より、より古い多くの要素を含むものがあるただけはいえる。

一つの思ひきつて新しい例をあげると、今でも話し家が笑わせている「王子の狐」、狐や天狗の類をあべこべにたぶらかして利益をしめたという話などは、同じ征服談の中でもよくよく相手を愚にしたもので、いわばこのような存在を無視する者の仮構としか見えぬのだが、それがなおなまけ者立身の古来の様式から、全然超越した自由の作品とはいへなかつたのである。狸を茶釜や太鼓などに化けさせて、売って金にしたという話はやや複雑だから、一括してその由来を説くことは見合はせる。通例われわれの名づけて宝物交換譚というものにも、その相手の天狗や狐が損をして泣き悲しみ、または自滅したというのを結末とするものは除いて、他の一方の宝物を手に入れた人が、それからどうしたかということを書く話にも、二通りの種類があつて、ともに最後には「隣の爺」の失敗をしているのは、つまりこの説話がはやくから、ただ滑稽談としてのみもてはやされていた結果である。しかるにこうした大笑いの話の中にも、まだ主人公の幸福なる婚姻という点が保存せられていた。たとえば一方の横着なるくでなしが、狐、天狗をだましてまき上げた宝物が、朱色の篋であつたり羽団扇であつたりした場合にも、これで人間の鼻をそつとあおぐといくらでも鼻が高くなる。または尻をなでると際限もなく尻が歌をうたう。それをまた逆さに使うと鼻は低くなり、もしくは尻の音がはたとやむ。横着者はこの宝物の力を借りて、まず

長者殿の娘を困らせ、後にこれを治してやる約束で、うまうまと婢になつてしまふということになつてゐる。いま一つのほうの話はその宝物というのが、隠形自在の隠れ蓑笠であつた場合だが、これにもまた偶然ならず、一人の女性が参与してゐるのである。土地によつて少しずつの差異はできているが、詳しく説述するの必要もないほどに、多くの青年は今でもその話を記憶している。主人公は通例始末にいけない博徒であつた。それが負けて丸裸になつて帰ってくる路で、これだけは身を離さなかつた一つの賽ころを取り出し、何度どころがして見ては一人で勝手な空想をしゃべつてゐる。それを高い木の上からじつと見ていた天狗が、ついつりこまれておりてきて所望する。そうして博徒のでたらめを真に受けて、たいせつな隠れ蓑と交易してしまふと、こっちはさつそくその蓑を着用して、もうどこにゐるか姿は見えない。失望落胆して天狗殿は帰つていき、博徒は隠形の術によつて、したい放題な事をしてある。信州北安曇郡に行なわれている一例においては、今まで少しも働かずにはいた男が、急に朝早くから家を出て、おそくまで外で働くようになったので、女房が不審をして気を付けてゐると、ときどき箆筒をあけては、にこにこ喜んでいる。これはおかしいと思つて留守に行つて見たという点は、奥州のヨケナイ話なども似てゐる。そうしてこのきたならしい蓑笠はなんだと、取り出して焼いてしまったというのである。これはたいへんなことをしてくれたと男は悲しんだが、もはやいたし方はないので、その蓑笠の灰を身に塗ると、奇瑞はまだあつて、これでもやはり体は隠れて見えない。それで酒屋の倉へはいりこんで、上等の酒を腹一ばい飲んで、ぐっすり寝てしまふ。そのうちにしずくが足にこぼれて灰が落ちて、そこだけ身があらわれ、足の化物がいききかいて寝てゐるといふ、店中大

騒ぎをしたというまでは、どこの地方も同じだが、ここでは博徒ばくどの女房がこれ聞きつけて、私
がまじないをしてやるからといって倉に入り、そつと亭主を呼び起こして逃がしてしまい、酒屋
からはまたたくさんのお礼をもらったというふうに話している（『北安曇郡郷土誌稿』一巻一八六頁）。
この種の昔話は、どうせ誰だって本当の事だとは思っていない。したこうて話者の才覚で、その
場きりのおまけを添えたことも想像せられるので、これあるがために最も古い形とまでは断言す
ることはできぬ。しかもかりに復活であり、または転用であったにしても、由緒なしにはこうい
う一条は插まれえなかった。ことに蓑笠を焼き捨てて灰にしたということはどこにもあり、それ
が必ず母であり、女房であったというなども、これともなういま一回の女性干渉があるために、
はじめて偶然の一致でなかったことが知れるのである。寝太郎が突如として長者の聲になったと
いえば、もうそれ以上の解説は不用であったかもしれぬが、こちらはあまりに實際から遠い空想
であった。それゆえに他の多くの同系統説話にあつては、幸福なる婚姻は必ず宝物をとめない、
または女房が自身の力をもって、しだいに家を楽しく、また富裕にしたことになっているのであ
る。なお山寺のひとり法師が狐と問答して、狐は和尚の衣を借りて、法師になってあるいて見あ
らわされ、法師はまたその狐の隠れ蓑を着て、人の家の土蔵にはいつてとらえられた話は、万治
二年刊の『百物語』巻下にも出ている。近ごろしやればはじめた話ではなかったのである。

絵姿女房

一 黒川能の起こりと瓜子姫

最近にまた一つ、出羽の黒川村に伝っている瓜子姫説話の、やや変わった形のものを見せても
らった。これは爺婆の申し子としては育てられずに、姫が急速に成長して美しい上臈じやうになったと
いう例である。ちょうどその問題を考えてみようとしていたところであつたから、まずできるだ
け簡単に、その話の要領を書き抜いて、それから比較を進めていこうと思う。

昔々、黒川村の孫在家まごいけという所に、孫三郎という一人の百姓があつた。ある時川端に出てみる
と、上から瓜かみが流れてきた。それを拾つてきて神棚に上げ、後で食べようと思つて楽しみにし
ていると、不意に赤子の泣き声がするので、驚いて神棚を見たところが、めぐえ女の子が生ま
れていた。その子を大事に大事に、ふつふつと言つて育てたら、たちまち大きくなって美し
いお姫様になった。孫三郎はお姫様があまりに美しいので、毎日その姿をながめているばかりで、
少しも働かぬようになつてしまった。それではならぬと、姫は自分の姿を絵にかいて、それを
どこへでも持つていつて働くことにさせた。ある日その絵を畠のかたわらにひっかけておいて、
それを見ながら仕事をしていたところが、不意に大風が吹いて空高くこれを巻き上げ、どこへ

行ったか見えなくなりました。お城の殿様の庭の高い松の木の枝に、何やらた麻たのようなものが空から舞ってきてひっかかっている。殿様があれは何かと取りおろして見られると、世にも稀なる美人の姿絵であった。このような美しい上臈がどこにいたのであろうかと、だんだん家来に尋ねさせてみると、それは孫在家のいやしい百姓の女房であった。さっそく呼び寄せてむりに奥方にしてしまおう。孫三郎は諸処方々と姿絵を捜しまわって、手をむなしくして帰ってくれば、当の本人のお姫様ももういない。どうぞして一目でもよいから会いたいと思って、毎日お城の門まで行ってみるが、門番がしかりとばして入れてくれなかった。そこでいろいろと思案した上で、姫が大好きであった栗を売りにいってみようと思い、栗売りに姿をかえ、たらの山たらのの柴栗柴栗と大きな声でふれながら、御城のまわりを三度まわってみた。一方、お姫様の方では、むりに連れてこられて奥方になったが、まだ一度でも笑い顔を見せたことがなかった。それがこの日ちょうどお城の窓の下を、大声で栗を売ってあるく男の姿を見て、はじめてたつた一度にっこり笑った。それで殿様が太急ぎに栗売りを呼び入れさせ、なんと男、その栗はみな買ってやるが、その代わりにこちらの言うことをきくかとなる。何かと思うと、殿は自分の衣服をぬいで、取り換えて孫三郎のきたない着物を着て、柴栗の袋を背に負い、門を出てお城の窓の下を、何度も何度も栗々とふれてあるいた。そうしていま一度姫の笑顔を見たいと思っているうちに、日が暮れて城の門は閉ざされ、にせの栗売りはもう帰ろうと思っても、門番が入れてくれない。にせの殿様の孫三郎は、出ようと思っても門が堅く閉ざされていたために、とうとう殿様となって、御殿の中にとまってしまった。しかしいつまでもここにはおりたくな

いので、翌日は姫をともないいろいろの宝物を持って、黒川の村へ帰ってきた。黒川明神の御宝物の能の面をはじめとし、金の茶金や金銀細工の道具類は、いずれもこの折にお城から持ち出したもので、孫三郎はそれから明神の杜家となり、また能楽の座頭となって、子孫は明治のはじめまで、連綿としてつづいていた（国分剛二君報、大正三年採集）。

右の黒川能の根原に関しては、今ではかぞえきれぬほどいろいろの伝説ができていて、これはただその一つというにすぎぬが、それにしても孫在家の草分けという孫三郎男が、一方には肥後の米原長者、すなわち都の姫君を嫁に娶って、たちまち黄金を発見したという大幸運の賤夫と、同じ名であったと同時に、一方には川から瓜の姫君を拾い上げた多くの昔話中、たった一つの独身者の例であったのは珍しい。姫と孫三郎とは親子のようでもあり、また終わりには夫婦とあって、その境目が明らかにはなっていないが、これがちょうど竹取と余呉の天女、あるいはまた丹波の比治山の昔話と、伯耆の羽衣石山の伝説などとの中間に立つもので、前者はたぶん神童の生い立ちから説こうとしたのが、後にその急激の成長ということに興味が薄くなって、しだいに話をはなやかなる最終的一幕に、持っていこうとした過程を示すものであろうと思う。「桃太郎」と「羽衣」と、こんな二つの昔話の間にも、なお一筋の脈絡はたどられるのである。

二 桃売り殿様

孫三郎栗売りの昔話は、もちろん羽州孫在家の土に生えたものでなかった。誰が遠い国から運

んできたかということ、その家伝の能の面以上に、尋ねがたい前代の交通史であって、それを説明する史料はまだ十分に豊富とはいわれぬのであるが、例によって手近のものから比べていくと、岩手県には紫波郡の昔話の中に、次のような一話が採集せられている。

ある百姓の若者が、夏の日川の辺を通ると、三人の天女が水を浴びている。その一人の羽衣を木の蔭に隠したので、一人だけは天に登ることができず、家についてきてその若者の女房になった。若者は毎日女房の顔ばかり見ていて、百姓の仕事を顧みない。それほどに私が恋しいなら、絵姿を描いてあげるから、それを畠に持って出て、見ながら働いてございと言って、女房は一枚の絵姿をかい取ってくれた。それを竹にはさんで畠のあぜに立て、向こうのあぜを打つときは向こうに持っていく、こっちのあぜを打つときはこっちへ持ってきて、ながめたりさわたり、物を言いかけたりして働いていた。ところがある時、不意に巻風が吹いてきて、竹もろともその絵姿をどこかへ持っていくってしまった。それが殿様の御殿の庭に落ちてきた。こういう美しい女もこの世の中にはあるか。なんでも捜し出して連れてくるようにということ、役人は国々をめぐりあるいて、とうとう尋ねあてて御殿へ連れていった。天女は家を出ていく時に、桃の種を三つ夫の百姓に渡して、これを植えて三年すると桃がなるから、その実を採って御殿へ桃売りにきて下さいと言った。そうするとはたして三年目に実がなって、紅く熟した。それをかます俵に入れて持って出て、御殿の近所で、桃売ろ桃売ろと大きな声でふれた。天女は御殿に来てから三年の間、ただの一度も笑ったことがなかったのが、この声を聞くとこにことして、その桃売りが見たいと言った。それを呼び入れてお庭先を、桃売ろ桃売ろとふれあ

るかせると、いよいよ天女は機嫌よく笑うので、殿様も大きに喜び、今度は一つおれが桃売りになってみよう。その方はおれの座に上っておれと言って、自分の衣装をぬいで若者に着せ、自分は桃売りのきたない衣類を着て、かます俵をかたいて、桃売ろ桃売ろと、庭中をあるきまわった。天女はもとの夫がよい衣装を着て並んで坐っているのがうれしので、ますます大きな声を出して笑うと、殿様はそれを自分のする事が気に入ったのかと思って、だんだん調子に乗って門の外まで出ていく。門番の役人はびっくりして、この桃売りの無礼者と、うんと打擲して追い出して門の戸をしめてしまった。それで百姓の若者は殿様になったままで、永くこの御殿に天女とともに、仲よく住んでいることになった。

説話が外国から既成品として輸入せられたという想像は、誰でもこういう話を聞けばいさかずにはおられぬであろう。かりに絵姿といい、掛け図というものが、大昔から日本の田舎にあったものとしても、百姓と殿様との身柄のすりかえ、なにか皮肉なる諷刺を含むかと思われるようなこの奇抜なる貧富幸不幸の裏返しは、到底日本の農民の普通の空想ではありえない。私は今なおあてもなく捜索しているだけではあるが、あらかじめこれが唐天竺のいずれかの記録の中から、その先型の発見せられるのを期している。しかもわれわれの先祖が喜んでこれを聞き、時としてはこれを事実として信じようと思えたのは、単なる話し方や地名・人名、さては桃とか栗とかいう細部の改造のためではなく、別に以前から伝わっていた他の昔話と複合して、むしろその叙述の様式のごとくに、利用せられたからであらうと思う。羽衣と瓜子姫とは、根原においてこそ同系かも知れぬが、もうこのころには明らかに二つの説話であつたらう。それが二つとも

繪姿女房の奇譚とつづいているのを見れば、複合はまず疑うところがないのである。問題はただこの新しい後日談を取り入れることによって、切つて捨てられたる以前の叙述があつたか否か。次にはまたいずれの点が継ぎ目であり、なにがそのセメントの役をしていたかということであるが、これもおいおいに他の地方の例を比較していけば、まるっきりわからぬこともないようには思われる。私が昔話の今後の採集を祈念してやまない動機も、同時にまたこれによって諸君に認められるであらう。

三 エンプの果報

「繪姿女房」の類話はまた九州にもあつた。豊前築上郡などでは、その幸福な婢の名をエンプといい、これにとものうてエンプガフーという諺も行なわれているのである（『郷土研究』三卷九号）。エンプは中部日本の方言のエンバと同じく、偶然または予期せざることを意味する語、エンプガフーはすなわち「こぼれ幸い」のことだらうと思われるが、それがやや不明不用になつたために、すなわち主人公の名の如く解せられることになつたのである。

昔エンプという貧しい百姓があつた。家柄もよくまた親孝行であつたので、ある長者の美しい娘が、みずから望んで嫁にきた。エンプは愛情の余り片時も女房のそばを離れがたく、稼業のために働きにいかぬようになった。父親はこれを憂い、いろいろ考えた末、名ある絵師を頼んでその女房の姿を描かせて与えたところが、エンプは喜んでその絵像を持つて出て、田のあ

ぜにかけておいて、それをながめつつ耕作をした。ある日にわかに風が吹いてきて、絵像を空中に捲き上げて、国王の庭の前に落とした。ちょうど国王は天下に美女をもとめていたところであつたゆゑに、これを手がかりにして国々を捜しまわり、ついにエンプの女房を見つけた。都に連れていった。エンプは悪いことがれてその跡を追ひ、都に上ってきたけれども、城門の中にはいることを許されない。ところが一年にただの一日だけ、数多の菖蒲売りの中から、はじめの三人を宮中に呼び入れて、国王みずからその菖蒲を買い上げる習わしがあることを知つて、菖蒲売りになって、夜明け前から御門の外に待っていて、呼び入れられて御殿の前へ出た。それを見ると、今まで一度も笑顔を見せたことのない妃がにっこり笑つたので、また次の日も、もう一日同じ菖蒲売りと呼ばれた。そうして妃の笑顔を見たいばかりに、しいて菖蒲売りと衣装を取り換えて、国王は自身庭に下りて菖蒲を売るまねをした。そのうちに退城の時刻が来たので、何も知らぬ衛士どもは、国王の菖蒲売りを門外に追い立ててしまった。それゆゑにエンプははからずも国王となり、その最愛の妃とともに永く城内に住むことになった。

前の東北の二つの例に比べると、これはほとんどその話の翻訳であることを、隠さなかつたかと思ふような話し方である。それでも菖蒲売りだけはなお和製の装置らしいが、この点はたぶん蛇蛻入りの昔話に、菖蒲湯に浴して蛇の子をおろしたといひ、または「牛方山姥」の逃竄説話において、蓬菖蒲の叢の中に身をかくすと、山姥がその香に迷うて人間のありかをかぎ出しえなかつたといふのと同様に、最初菖蒲をめでたい植物とする由来談として、すなわちもつぱら五月五日の節供の日ばかり、この話をしたなごりではないかと思われる。それはとにかくこの三つの話の、

出所が一つであったことだけはもう明白であって、そうするとわれわれの昔話は、南北数百里の大旅行を、何者かに付いてするものだということだけは、断言してもよいことになるのである。神木敏君の報告によれば（「旅と伝説」三卷五号）、肥前の南高来郡（たかき）にもこれと半分だけ似た話があった、おもしろいことにはそれは「ハナタレ小僧様」の前段と複合していた。詳しく引用する必要もないが、肝要な部分だけはやはり並べておいたほうがよい。

昔貧乏な男が年の暮れに、譲葉と裏白とを売りに出たがちっとも売れない。帰りにそれを海の中へ投げ込むと、翌日竜宮からお使いが来て、招かれて竜宮に行つて、美しいお姫様を嫁にもらってくる。その嫁女があんまり美しいので、働きに出ることがもういやになった。それでも働きに出ぬわけにも行かぬから、絵師に似顔を描かせて、それを竹にはさんで畑の脇に立てておいて、一鍛切つては一月ずつ見て楽しんでた。それが大風に吹きあげられて、殿様のお庭に落ちるまでは例のごとく、それから後がまるで別で、殿様はいろいろ難題を言いかけて、それができなければ女房を差し出せというのだが、そのたびごとに女房の智慧才覚をもって、その難題を解くのでどうすることもできず、夫婦は仲よくいつまでもともに暮らすことができた。私は最初、庄内黒川村の「瓜子姫」が、いかにして外国の輸入らしい「絵姿女房」説話と、結合することになったのかを知らうとしていたのだが、それより前にまた一つ、これと栗売りや菖蒲売りの話とが、やはり継ぎ合わせであることを発見したのである。そうして後にもう一度説明するが、日本の記録に現われたのは、かえてこの「殿の難題」のほうが古かったのである。したがうて国の南北の三処に分布する三つの昔話は、いずれもそれよりは後の形、すなわち貧しき

農夫が話と衣裳を換えて着るという、一種の衣裳哲学観のごときものが採用せられてから、新たにその国内の旅行をはじめたものと想像しえられるのである。

四 安積山の糠次郎

ところが一方には、土地で昔話を独占しようとする傾向、他所の類例をもって模倣となし、もしくは冒瀆と見ようとする態度も古くからあったゆえに、なかなか容易にはその本源を突きとめることができない。昔話の伝説化については、すでに「白米城」の例について、自分の意見を述べておいたが、手短かにいうと聞き手と話し手との、説話に対する考え方が食い違っていたのである。話し手には学んで外国の例をさえ活用しようというほどの文芸心があつたに反し、聞き手はどこまでも「語りはまこと」とする古風な好意をいだいていたゆえに、できるだけ近くの地にその記念物を見つけようとしたのみならず、つとめて話の信じがたい部分を排除し、また時としては善意の改訂増補さえ試みたのであった。だから十分に昔話の実状を知った上でないと、多くの伝説の成り立ちを考えてみることはできない。単に伝説ばかりを専門に見てあるいていたのは、だめなわけである。

諸国の「白米城」の伝説においては、すでにその親であった昔話が見つからぬために、私の意見が幾分か空な想像のように聞えるけれども、孫在家の孫三郎の家の伝説だけは、幸いにしてほぼ証拠があつた。単に瓜子姫成長の一点を除いて、残りの三分の二は三個処の昔話であり、さら

に絵姿の部分だけならば、なお三つ以上の例があつて、その二つまではまた伝説化しているのがあつた。それを考えてみるならば、昔話の隠れたる力がわかるであらう。福島県では郡山市の近在、安積郡片平村の大町という処に、山の井の清水があつて采女の身を投げた故跡と伝え、そこにまた一つの「絵姿女房」昔語りがある。貧しき百姓の名は糠次郎、しかもその清水の傍には、今では「影さへ見ゆる」の歌の石碑さえ建っているのである。

昔糠次郎という貧しい子供が成長して、長者の美しい娘を嫁にもらつた。女房を愛してそのそばを離れず、少しも働きに出ようとしなかったために、田畑は雑草におおわれてしまつた。女房はそれをいさめて、みずから鏡に映してわが姿を絵に描き、それを竿にはさんで夫に与えたので、糠次郎はやつとこれを携えて畑の脇に立て、ながめながら働くようになった。ところがある日旋風が吹き起こり、その絵を空高くまきあげて、奈良の都の内裡の庭に持つていつて落とした。葛城王という皇子がこれを拾い上げ、それを携えて奥州に下り、方々捜しまわつて糠次郎の女房を発見し、それを采女にして大和の京へ連れていつた。その時糠次郎が妻の別れを悲しんで、長く行方を見送つたという故跡が、今でも踏張の松と名づけられて、この口碑の作りごとでないことを示している。一方采女は奈良にあつて旧里の恋しさにたえず、ある夜宮殿を抜けて衣を猿沢の池の柳に引つ掛け、はるばる安積の郡にまで帰つてきたが、夫の糠次郎は歎き死にに死んだ後なので、落胆のあまり自分もこの浅香沼に身を投げて死んだ。奈良の方ではそれを知らぬから、猿沢の池を替えはしてみたが姿は見えない。そうして陸奥の安積の沼に采女の亡骸が浮かびあがつたためにここにこ二つの水は遠く地下に通うものと言ひ伝えられ

るようになった(『地方叢談』菅野桃井二氏報)。

近代の伝説の中には、こういうふうに興廃を重んじ、記録と最大限度の調和を保っているものが稀ではない。むしろ学殖の豊かな神職・僧侶の参加があつて、はじめて望みうる難事業であつたが、それでも姿絵が千里の空を飛んだ点と、男の名が糠次郎であつたという点だけは、なお土地の人の古く持つものを無視することができなかったのである。糠次郎は八戸の蕪焼笹四郎の如く、若い貧しい農民の綿名であつて、糠を食べて露命をつないでいるほどの貧人であつたことをいつたのだそうである。以前『海南小記』の中にも書いておいたが、奄美大島の屋喜内方にも、湯灣五郎またの名を糠五郎という男、まったく偶然の幸運によつて、沖繩へ渡つて立身して貴族となつた話が伝わっている。いわゆるエンブの果報がなかつたならば、第一こんな糠次郎に美しい長者の娘が、嫁にくるはずもなかったのである。それから考えていくと、これらの貧しい青年が女房のそばにばかりへばりついて、田畑が草になるまで働きに出なかつたということは、また一種の物草太郎であつたかもしれない。そのように貧しく、かつなまけ者ではあつたけれども、かねて定まる女房の縁に引かれて、意外なる理由をもつて危難を乗り越し、末には榮えて長者の祖となつたということが、もとはこの説話の骨子であつて、絵姿の一条などは、ただその「意外」の新しき例として、最初から話し手の自由なる空想に、ゆだねられていた部分であつたゆえに、こうして次々に珍しい話の種を、呼んでは取り付けることになつたのかと思う。この仮定の正しいか否かは、次の「殿様の難題」の変化を比べてみても、またよほど明らかになつてくる。安積山の今ある口碑が、他の類例と反して、悲劇をもつて結末を付けていることは、これは近代伝説

の癖のようなものであったが、そのために糠次郎立身の快活なる昔話の興味を、まるまる埋没させてしまうことは、まだ幸いにしてできなかったのである。

五 般若寺の般若姫

「繪姿女房」の物語が、終わり悲しき伝説として残っている例は、周防室津半島の箕山の周囲にもいま一つある。それがわれわれの寝太郎荒神の旧跡と、程遠からぬ地であったということは、自分には偶然でないように考えられる。この伝説は口に筆に、実にいろいろの形をもって世になわれているが、今日麓の村々で人が説いているものは、比較的簡単な無邪気なものであった。昔用明天皇が太子の時、ある日大きな風がどこから飛んできて、お庭の松の枝にひっかかった。その風には美しい女の姿が描かれてある。かような美人もこの世にはあるかと、さっそく国々をお尋ねなされると、それは豊後国の満能長者という者の一人娘であった。お召しになるけれども長者夫婦、惜しんで姫を差し上げようとしな。太子は恋慕のあまり御姿を賤いやしの夫にやつしたまい、その名も草刈三藏と改めて、はるばると西国に下り、満能長者の家に入ってきた。この山の麓の大島の瀬戸、一名を小鳴戸ともいう難所において、姫は竜神に見入られて乗船がくつがえり、かろうじてこの地上陸して命絶えた。その迫害のために箕山に寺を建て、姫の名にちなんでその寺を般若寺はんやじと号した。豊後の見ゆる処に埋めよという遺言によって、山の

頂上には般若姫はんやひめの塚があり、後には用明天皇の御陵をもここに遷したとさえいつている（同上、井上弘氏報）。

この豊後の満能長者は、記録にはまた真野長者とも書いてあって、すなわちまた一個の「物草太郎」、炭焼小五郎の立身した後の名であった。周防般若寺の縁起をはじめとして、海の此方に伝わっているいくつかの伝説には、すべてこの長者の由来記を認めているばかりか、後に発明せられた誇張までが対岸と一致している。たとえば豊後のほうには『真野長者一代記』と題して、長者の伝記を完全に軍書化したものがあるが、周防にあるものも些少の相違があるだけで、やはり百済国の軍師が出てきたり、海賊が貴人の船に攻め寄せたりして、ただその末に般若姫臨終の哀話が付け加えられているだけである。般若姫という名も、実は寺の名のほうがもとであって、周防で言いはじめたことかと思うが、近ごろ豊後で出た『炭焼小五郎伝記』という一書にも、やはり姫の名をそう呼んでいるのである。この両岸の一致を説明する一つの材料は、草刈氏の移住ということであった。炭焼小五郎の後裔は苗字を草刈と称して、近世まで豊後の海岸近くに居住し、家伝の花炭というものを焼いていた。ところが周防のほうにも、一時はかなり勢力のあった草刈という旧族があつて、それが対岸の豊後地から、分かれてきたように伝えているのである。この家と箕山の般若寺、ないしはその周囲に住む伝承保管者と、はたして関係があつたかどうかは、私にはまだ言うことができない。しかもかれら自身の説くところによっても、少なくともここでは九州の説話が、この路を通して本州に持ち込まれたことだけは認めているのである。

草刈氏の子孫は今でも両国に分布して、相応なる門地を保持している。それが歌物語の流伝に参与した比丘尼・座頭の一類であったかのごとく想像することは、とうてい我慢のできぬことであらうが、ひるがえってその家号のよってきたるところを尋ねれば、これは天皇潛幸の昔語り、笛吹く山路童の草刈りということ、かつて信じていた結果というのほかはない。そうなると直接この家が説話の保存と運搬とに任じなかったまでも、少なくともこれを伝説化する最も熱心な聞き手のほうの側に立っていただけは否みえないであらう。別の言葉でいうと、山口県東部の海岸には、それが草刈家の門統であったか否かは別として、とにかくに豊後の炭焼長者一生の奇跡を、詳しく知る者が来て住んだだけは事実である。問題として残るのは、美人の姿を絵に描いた大きな風の話が、かれらが周防国に渡ってから後にできたものか、ただしはまたこれも本国からの持ち越しであったかということであるが、それには九州に現存する前掲の二つの例の異同が、あるいは若干の暗示ではなかつたらうかと思う。

六 六十六本の扇

真野長者の物語は、むろんおいおいに語り添えられたものに相違ないが、大別してこれを前後の二期とすることができ。前半はすなわち貧しい炭焼青年の婚姻を中心として、長者発祥の因縁を語るものであり、後半はその長者のまな娘、後の玉世の姫の都登りを、もっぱら叙述せんとしていたものである。この両部はもと同系の神話の二様の説き方であって、ともに女性の力をも

ってよく尊神をあらわし祭ったことを伝えたものらしいが、それが重複して何びとも異としなかったのは、つまり一方がすでに廃れて後に、他の一方がついで起こったからで、その発生の順序としては、前の「炭焼小五郎」のほうが一つ古いかと思われることは、かつて公表しておいた私の意見であった。ところが近世の民間説話においては、このほうがかえって分布ひろく、国の南北の果てにまで行きわたっているに反して、記録の上においては新しい。第二の部分、すなわち用明天皇が草刈り童となつて、姫を迎えにお下りなされたというほうの話は、これよりもずっと古くからあるのであつて、すなわち同じ一つの故郷を前後して旅立ったかと思う説話が、一度もめぐり合わずに離れ離れの境遇に飄泊していたのである。

たとえば東北では気仙高田の武日の長者、または二戸郡の田山の長者などが、絶世の美女を娘に持つて、後に禁裡に召されたという物語を伝えてゐる。柴田郡田邑の白鳥明神、または亘理郡矢付の了鬘山などには、山路の牛飼童の故跡というものさえ残っていた。単に満能長者のまな娘というだけの話ならば、まだこのほかにも村々に行なわれているのである。炭焼立身の奇談はこれと入り交つて、また数多く奥州に分布していたけれども、出先では始終別々の言い伝えとしてとりはやされ、誰ひとりこれが一つづきの豊後の話だということに心づかなかつたのは、おそらくは各部その管理者を異にしていたためかと思う。しかもその管理者がまた時と地方とによって、おりおりは移り変わっていたらしいので、離合集散の跡はいちだんと尋ねがたくなり、したがうてこれを正のままで外国から輸入したかのごとき、荒らっぽい独断説をさえ許容したのであつた。そんなにあわてずとも、やがて系統はおおよそ判明する時がくる。種はどのような渡り物であら

うとも、とにかくに日本の土に根をさして、芽を吹き花を咲かせたのがわれわれの民間説話であつた。必ずどこかにその花園はあり、土かい水そいだ人があつたはずである。

現存の記録の中で、「真野の長者」と「草刈り山路」の物語を書きとめているものは、舞の本の「烏帽子折」などが、おそらくは最も古いものであらう。これには美濃の青墓の宿の遊女の長が、酒宴の席においてその長物語をしたことになっているが、それはいわゆる画中画の一つの趣向として、偶然に取り入れられた挿話であれば、これによつて、かつて傀儡の徒が語り伝へていたことを、推定しえないのはむろんのこと、ただ少なくとも幸若隆盛の時代に、この説話の遠く東国まで知られていたことと、あるいはすでに用いられなくなつていた舞々の古曲の中に、以前この一篇が独立してあつたことまでは、想像してみてもよいかもしれぬ。私がそういう想像をいだく理由は、「烏帽子折」曲中の「草刈り山路」は、叙述が精細でやや長たらしく、ほぼ独立した語り物の体裁を備えているからであるが、問題の「絵姿女房」は、もうすでにこの中にもその形を現わしているのである。特にわれわれの参考になる部分だけ、本文のままで引用しておくほうが都合がよい。

昔我朝に用明天皇と申せしは、十六にならせたまふ迄、后の宮もまします。ある時、公卿・殿上人集らせたまひ、扇を六十六本折らせ、絵女房を描かせ国々へ廻し、如何ならん賤の女・賤の子なりとも、此扇の絵に似たる女房やある。いそぎ内裏へ参らせよ。一の后にいはふべしと、日本国をぞ触れられける。それ物の美しきをば絵女房とこそ申せ、日本広しと申せども、絵に似たる女房は一人も無くして、扇は都へぞ上りける。然りと申せども、筑紫豊後の国、

内山里と申す所に長者一人あり。

四方に四方の倉を建てて住めば、万の長者と申せしを、人の申し易きまゝに、まの殿と申す。子の無きことを悲み、内山里の聖観音に詣り、申し子をこそしたまひけれ。祈誓のしるし早有りて、御宝殿の内よりも、宝珠を賜はると北の御方御覧じて、御着帯の身となり、なゝ月の類ひ九月の苦しみ、十月半ばと申すに産の紐平かなり。取上げて御覧すれば、玉をのべたる如くなる姫にておはします。御夢想によそへ、玉よの姫と名付け、いつきかしづきたまひけるに、かの姫十四の年、この絵扇の下りたるを引合せて見てあれば、もの言へば扇の絵が妬むべくぞ見ゆる云々。

以上が物語の第一段であつて、それから禁裡の難題の条につづくのだが、これは分割して次の節で述べてみたい。前に出してある周防般若寺の伝説と、同じ物語がこれだけまでは変化しえたのである。風が庭上の松の枝にかかるというのは、あまりにもあどけない空想であつた。それに美人の姿絵が描いてあつたのも、なんのためとも説明しがたいから、あるいはこれ二つだけを比べてみると、舞の本を原型とも言いうるかしらぬが、一たび目を転じて、東北の三地、および九州の二国に共通する旋風が掛け物をまき上げた話を見わたすとき、はたして足利時代の記録があるゆえに、このほうが古い形と言いきることができるかどうか。私は少なくともまだそれまでの勇氣がない。双方絵の芸術の実際にうとく、大そうもない機能をこれに持たせようとした平民らしさは同じであるが、六十六本の扇は少し空想に走りすぎている。これに比べるとなまける花嫁を働かせるために、絵を描いて竹にはさんで蟲のそばに立てさせたというほうは、昔の信心者の仏に仕えた話などにもありそうない付きであるのみか、実際また本尊が風にひるがえて、空

よりおりてきたと伝えている例もあるのである。なんにしても話はこのほうがはるかにおもしろく、かりに後々話しかえたものとすれば、それは改造以上の腕前であった。これが日本の北と南の田舎に、このようにひろく分布していることも、あちらをもとの形とすると説明が困難になる。それゆえに自分などは、舞の本の六十六本の扇の話より以前、すでにつむじ風に吹き取られたという絵女房の話が、存在していたものかと思っているのである。

七 殿様の無理難題

あるいは単に二つのやや似寄った姿絵の話があつて、それが偶然に周防の海岸において、混同してしまつたのだらうという説も起こりそうである。それはずいぶん例もあることで、頭から否認してかかるわけにもいかぬが、われわれの「絵姿女房」説話と舞の本の「真野長者」との一致は、もう少し前のほうまで進出しているのである。長者はたった一人の娘を奉ることを惜しんで、ご辞退を申し上げると、その儀ならば今日一日のうちに芥子の種を一万石献上すべし、それができなければ娘を参らせよとの致命がある。これには少しばかり当惑をしていたところが、長者の女房がそばから、それは私が何かの用もあらうかと乾の隅に萱の倉を建てて、年々の芥子の種を取り集めておきました。それが十万石ばかりはあらうと思ひますというので、さっそくその中から一万石の芥子を積み出して、せっかくの難題が造作もなく解決したとある。これと榊木君の報告せられた、肥前小浜の竜宮の花嫁の話とは、明白に同じものであつたのである。

ただし後者においてはその殿様の難題というものが、もう笑話の中に足を踏み入れている。肥前の殿様のほうでは、一石六斗の小鳥を明日までに持参せよ。それができぬようなら女房を取るに仰せられる。さような無体なご注文がなしとげられるであらうかと、非常に心痛をして家に帰ってくると、女房はそれを聞いて、そんなことはなんでもないと、次の日は二羽の鳩を夫に持たせて、はい鳩（八斗）が二つで一石六斗の鳥を持参いたしましたと言わせる。これには殿様一言もなく、今度はヒューヒュードンドン袖かぶる、エイヤハッチ、ヤレタマランという物を明日までに持参いたせ。それができなければ女房を出せとある。これも女房が心配するに及ばぬ。私が竜宮に行って持つてくると言つて、翌朝何かは知らず三つの箱を亭主に渡す。それを殿様の前へ持ち出して、順々に蓋を開くと、一の箱からは小人が出てきて、笛を吹き太鼓をたたく。これがすなわちヒューヒュードンドン。第二の箱からは、無数の蜂が飛び出して、居合わす人々を刺そうとするから袖かぶる。第三の箱からは剣を抜いて、また多くの小人が出て、エイヤハッチと切つてかかる。ヤレタマランと逃げまわるうちに、殿様も斬られて、もう難題をもつて夫婦を苦しめる者がなくなつたというのである。

この類の頓智機智は、今では豊後の吉右衛門というような人の、逸話として伝えられるのが普通であり、あるいは和尚と小僧との問答となつて残っているだけである。佐々木君の『老嫗夜譚』第四五話にも、鳩を二羽にゴリという小魚を二尾、瓢箪ひょうたんに入れた濁り酒（このわけは不明）を買ってきたという話がある。われわれにはいっこうおかしくもないが、こういう判じ

物や言葉のあやということには、聞き手の能力がすぐに反映するためか、昔の村の人は、多大の興味を持って聞いていた。だから時としては、山寺の妖怪退治というような、九死一生の際にすら、なおこの種の問答の話があった。それをだんだんと手輕にして、「和尚と小僧」の話に引き直したか。ただしはまたそちらから借りてきて、これをまじめな話に挿入することになったものか。いずれにしても昔話が民間の娯楽になってから、おいおいとその流行がひろまったことは事実である。自分らの解するところでは、この語りが説話の最も自由な部分で、むしろ時には何か珍しいものと入れ替えて、注意を新たにする必要があったゆえに、末にはこのような滑稽が全体のまじめさを損なうようになったものと思う。同じ『老嫗夜譚』の笛吹藤平の話などでも、美しい女房を殿様が取り上げようとして、いろいろの難題を言いかけることになっている。それは灰繩（はいじょう）を千把に、打たぬ太鼓、天の雷神九つ（かみなり）の頭を差し出せというのだが、これも女房が天に登って、一人で才覚してきて、殿様をへこませる。『紫波郡昔話』第九五話では、美しい女房は天人のお姫様であったといっているが、羽衣を隠されて帰れなくなったという点はない。これも笛吹藤平と同じように、夫が殿様の無体な命令に弱っていると、それをいと容易にその女房が解決してくれる。最初はやはり灰繩千把の献上、次には天の雷神を連れきたれとの仰せで、よもや今度は降参したろうと思っていると、あにはからんや、天上がお里であるので、さっそく箱に入れて、その雷神を持参する。細目に箱の蓋をあけると、カラカラ、コロコロ、こいつはおもしろいともう少し聞くと、ガラガラ、ピカピカといつて小雨が降ってくる。もうこの以上は開いてはいけないというのに、しいて蓋を取り放させたら雷が御殿中をあばれまわった。さすがの殿もこれには恐

れをなし、以来は難題を申し付けぬから、どうか連れて帰ってくれとあって、それで夫婦の者も安堵したことになる。すなわち単に絵姿飛来の中間の一節を除けば、話はいちじるしく九州の西端にある「竜宮女房」と似てくるのみならず、一方にはまた正史に採録せられた、小千部（こさへべ）栖輕（せいき）の家の伝えとも、一線の脈絡を引いていることが知れるのである。鳩が二つで一石六斗などの悪譚は、たしかに後代の笑話化ではあるが、なんにせよ、話はそもそもの最初から、ここをある種の空想の遊び場としてあったのである。

八 白介の翁

外来の話の種が歓迎せられ、新たななる複合のつぎつぎに起こった事情は、おそらくこの方面から尋ねられると思う。いかに簡単であり、また粗野であらうとも、前からなんの伝えごともなかったところへ、外国の話がはいってきて無意識に採用せられるなどということは、たとえ百人が説こうとも私には信することができない。今は発見せられていないというだけで、伝播にはまず引力があり、次には新旧のものを結び合わせるだけの、紐なりセメントなりが必ずあったのである。豊後の「真野長者」に絵女房の話が来て加わったのは、直接にはこの殿様の難題、その一つ前には草刈り笛の優雅なる情緒が媒介であつたらしいことは、偶然に奥州の二つの話が暗示するのであるが、その点は他日別に考えてみたい。石井研堂氏の『国民童話』の中に、相州小田原付近に行なわれる葱（ねぎ）売りの正助という話は、たぶん「話の世界」という雑誌（大正八年三月号）に報告せら

れた虎杖の名笛、すなわちこの地方の小賀沼村の筑井氏の昔語りとして、巫女が雨乞いの折に話をしたというものと、同じ口碑の変化であらうが、これにはただなんとなく残っている葱売りということがある、前に比べてみた菖蒲と桃と栗との、かすかなる連絡を心づかせてくれる。その話の要を抄出するならば、

昔、葱売りの正助という貧乏で正直な男が、年の暮れに銭がなくて、ぼんやりと川の面をながめていると、亀が出てきて背に乗せて竜宮へ連れていく。竜王が美しい姫を嫁にくれたので、ともに帰って仲むつまじく暮らしていると、国司がその妻を奪おうとしてむりな難題をかける。白胡麻を船に千艘、黒胡麻を船に千艘、あすの昼までに持参すべし。それができなければ女房を出せとある。困ってもどってきて相談をすると、女房が例の川端に出て、とんとんと手を打つと、二千艘の胡麻船が到着した。これには国司も我を折ったけれども、今度はまた一つ手を替えて、コレハコレハというものを持ってこい。それができなければ罰として女房を取る。さてもご無体な国司殿だと泣いてもどって女房に話をしたところが、少しも心配したまうなど、針箱の引き出しから小箱を一つ出して、その中へ私を入れて差し上げたまえて、煙のよななものになって、自分で小箱の中にはいった。これがご注文のコレハコレハでござるという、国司はさっそくその蓋を取ってみる。そうすると中から大蛇が現われて、はたしてコレハコレハという国司の頸を巻いて、しめ殺した。そうして屋根伝いに前の川にはいつて、そのまま竜宮に帰って行き、正助はもとの葱売りになって一生を暮らした。

「羽衣」にも「竜宮女房」にも、別になお一つ絶縁譚があることは、知っている人が多いであ

ろう。この話はその形がこれへまぎれこんでいるのである。しかも二千艘の白黒の胡麻の船が、真野長者の一万石の芥子の種と、同じだということだけは争うわけにはいかぬ。私は前年「遊牧記」という雑誌に、果てなし話のことを書いて、閑の多く話に熱心な昔の人たちが、際限もなくこういうたわいもない題目を、くり返していた時代を想像してみた。殿様の難題なども二つ三つに限らず、いろいろな小さな判じ物をつぎつぎに並べていつて、最終にまじめな奇瑞を叙述したので、雷とか大蛇とかは一篇の眼目になっていたことと思う。舞の本の山路の語りでも、一万石の芥子の真きがとどこおりなくすんで、さすがは長者と感歎せられたことになっているが、さらにその上にも一つは無理な命令が下される。「蜀紅の錦をもつて、両界の曼陀羅を二十尋に七流れ」、織りて参らせることがかなわずとならば、姫を内裏に参らせよと、重ねての勅使が立つ。「曼陀羅は仏たちの浄土にて、蓮の糸をもつて織りたたまふものと承る。人間の身として何としてかは求むべき」。この上は姫を参らすのほかはないと、夜とともに管絃の宴になごりを惜しみ、曉方にしばしまどろみたる夢に、「内山の聖観音は枕上に立たせたまひ、いかに長者、汝が娘は自らが申し子也。惜しむところの不びんさに、もろもろの仏たちを集め申し、長者が中の出居にて、錦を織るぞ聴聞せよ」とあって、テイ・ホロロの音も清く、ほどなく二十尋七流れの曼陀羅が織り上げられてあった。それで第二の難題もまた、ききめがないことになったと語っているのである。

山路太子の笛の旅は、こういう絶望を経験してから後に、改めて計画せられたことになっているが、これは確かに二つの話のつなぎ目であると思う。無理難題の失敗ということは、一つの物

語の終局にふさわしい形であった。だから私のあげた多くの例は、いずれもこの最後の奇瑞を説くために、準備せられた叙述といつてもよかつたのである。信州はさすがに物草太郎の本国であつたといわれるだけに、さらにこの類例のいま一段と濃厚なるものが、更級郡新長谷寺の縁起として伝わっているのである。『三國伝記』が最初の記録かと思うが、手もとにその本を持たぬので、かりに『東方仏教叢書』第二輯八巻を引用すると、

昔、信濃の山中に白介翁という貧しい行者があつた。善光寺の御本尊の利益を受けて一願を果たした後、さらに弥陀如来の靈告によつて、生身の十一面觀世音をお迎えに、姥捨山下を發して大和の長谷に行き、三年の山籠りをした。明日下山の途について最初に逢う女を妻とせよとある。示現むなしからずして美しい女房を得、ともない帰って仲むつまじく暮らしていた。王城の大殿という人がその女房をほしがって、白介翁を招いて遊興を催し、わざと小弓の勝負をいどんで、翁が勝てば千両の黄金を与え、負けたら美しい妻を見る約束をした。翁しきりに觀世音に祈請すれば、小弓は勝ちになつて、千金はたやすく手にはいつた。次に大殿は相撲の勝負をいどんで、自分方が負けたらば、翁に領家代の職を与えよう。勝てば女房を取るといふ約束をする。それが氣になるので、女房に話をする、少しも驚く氣色なく、召使う童子を大和にやつて、相撲人を求めさせた。程なく童子は年六十ばかりの、瘦せた男を一人連れて帰つてきた。(という所におかしい趣向がある)。それがやすやすと相手の力士を負かしたので、不思議に思つて帰つていつた跡をつけさせると近江の大山寺の仁王様であつた。白介翁は約束のとおり領家代になつて家富榮え、五万長者という名を後の世に残した。

さて女房は大和の泊瀬山の滝蔵権現の化身であつた。形見に留めて置いた金色の片手が、新長谷寺の本尊十一面觀音の御手に用いられた。それゆゑに左の片手ばかりは、永く女の手のように温かく、また柔らかであつたという奇瑞譚が添うている。これが法師が歌比丘尼か、とにかくに善光寺付属の者の口から出た話であることは、想像してもよい理由がある。この白介翁もまた物草太郎と同様に、由ある都の人の信濃に流されたものの子であつて、幼少にして親を失ひ、貧しい土民の生活をしてゐた。父母の菩提のために千日の湯をわかし、毎日一本の卒都婆を立てて供養しようと思つたが、導師もなければ布施物もないので、善光寺に詣でて七日七夜の祈願をこめると、満願の朝に一人の貴き僧あつて、かれのために導師となろうと言つた。よろこんで請ひ来つて千日の湯に入れると、異香薫じみちて浴室の隙が洩れるので、怪しんでうかがい見れば金色の阿弥陀如来、端然としておわしましたという、また一つの物語も伝わつていて、それで前の文には、「二願を果した後」とあるのである。渡辺敏翁の『佐々礼石』には、山口の白介翁とあるが、何によられたかを知らぬ。あるいはかの寺第二期の大檀越と称する丈部家の山緒を語り伝えること、あたかも豊後の内山觀世音において、寺の開基の草苅氏を説いたのと同じではなかつたかと思う。

これが往古の史実であつたか否かは、今ではもう問題でない。われわれが事実として認めなければならぬのは、外来教法の応驗を語りある人々が、必ずしも説話の輸入者ではなかつたことである。むしろやや不自然に見える程度にまで、古くからあつた型にとられ、これをただわずかず改造して、目前の用に供してゐたことである。たとえば「殿様の難題」は厄難の新しい

趣向として、後々流行しはじめた外国種であったとしても、不思議の女房の智慮才覚によって、結局長者になったという要点ばかりは、どこまで行ってもものとおりであった。大和の泊瀬山の滝蔵権現などは、たぶん竜神であろうから、まだそれでも竜宮女房の話と近い。それが一方にははるばる都から下った高貴の姫君であり、もしくは近郷に隠れなき長者のまな娘であったという場合でも、あるいはまた大蛇の変形であり、鮭さけの化身であったというような場合でも、必ず愚直にしてかつ貧窮なる若者を、富貴にする力をそなえていたことは同じであった。

その中でも自分の注意をしているのは、最も羽衣の説話に近い「鶴鳥女房」「鶴鳥女房」が、希代の錦を織って親または夫に与え、決して安い価をもって売ってはならぬと無欲の男に教えるのを普通としていたことである。今日の瓜子姫説話などは、さしも出現の奇瑞を説きながらも、単にアマノジャクとの闘争のみをもって終始しているが、これにもかつては機織りの技芸によって、大いに家をおこしたというような後日譚があったのではあるまいか。そうでなかったならば、絵姿や栗売りの挿話がこんなにやすやすとこれに結合して、ある旧家の由緒を飾ることにほならなかったろうと思う。記録文学のはなはだふるわなかつた足利期は、特に各種の民間芸術の活躍した時代でもあった。雪の山国の荘内の黒川村に、新たな能芸がはいってきて根づいたように、説話の外形が新奇の話術によって、いちじるしく改造せられたのもこの際のことであつたかと思う。これにはもちろん職業として携わった者の、しだいに数多くなつたことを想像しなければならぬが、一方には土地にもこれを招き寄せるだけの需要と、これを利用しかつ旧伝と調和させるだけの、能力はすでに発生していたのである。別の語でいうとこれらの昔話はやや古くさくなる

うとしていた。ゆえにこれに活を入れて、もう一度おもしろいものとする必要があつたのである。もしものものしい名称が使いたければ、これを説話の芸術化時代といつてもよい。とにかく、昔話だから昔もこのとおりと思つて、ただちに輸入や国際伝播の穿鑿せんさくにとりかかすることは、これら興味あるいっさいの地方的変化に、わざと目をつぶっておられるだけの度胸のある学者でない、とうてい企てられない難事業である。

髪長媛

舞の本の「烏帽子折」において、六十六本の絵扇という上品な物語になっている一条が、周防の民間伝承では、羽前黒川村の孫三郎の昔話などとやや近く、単に美人の姿を描いた大風が飛んで、大内山の松の枝にひっかかり、御門の御目にとまったとなっていることは、本文にもすでに述べておいたが、これもどうやら草刈氏の移住にともなうて、対岸から携えてきたもののようである。近ごろ公刊せられた『豊後伝説集』八五頁の「炭焼長者」に関する口碑の中にも、この内山の人たちが、磐若姫の似顔を絵にかいた風を揚げているうちに、糸が切れて遠く禁中のお庭に落ち、尋ね捜してその美女の内山長者の娘なることがわかったけれども、たびたびのお使いにも父の長者は承知せず、それでいよいよ山路の笛の、はなやかな御旅はじまったと伝えている。話のこの形態が紙鳶に絵をかく今日の習慣よりも、早いものでないことは説くに及ばぬが、さりとてはまた同じ話の種が前には存せず、または空に女の絵を扇に描いたというのから、こう転じてきたものとも考えにくい。

同じ伝説集には、徳川氏の驕児、越前宰相忠直、一伯様と呼ばれて豊後国に幽居していたころ、一枚の姿絵が落ちてきたのを拾い上げて見ると美しい女であった。それを府内の町に捜し求めて、召し抱えたのがお蘭という愛妾であったという話を載せている。すなわち風でない語り草が、またこの地方にも流布していたのである。奥州南部の「蕪焼笹四郎」は、豊後の「炭焼小五郎」か

ら変化したかと思われる昔話であるが、これにも女房があまり美しいので、旅に出ることが出来ず、絵姿を携えていったら、峠の上で風にまき上げられ、それから殿様に女房を取られたというのがあった。朋輩に教えられて、柿売りになってお城に入り込み、衣裳を殿様と交換するまでは他の例も同じだが、こちらは女房の知恵によって本物を追い出し、自分が殿様になってしまったという点が違っている。さらにいま一つの類話には、赤鬼丸という犬がその城の門を番していたといい、人が忍び込むとたちまち花の数に現われる花園があるといったりして、鬼が城冒険の話とよく似たのもあった（以上二、「聴耳草紙」。これがまた後に説こうとする「天人嫁入り」の説話との、一つの連鎖であるように私は考えている）。

いわゆる「絵姿女房」の話は、また越後の南蒲原郡でも採集せられた（加無波良夜譚第二話）。単に栗売り・桃売りが五月節供の朝の花売りと変わっているのみで、他の部分はいくり返す必要がないほどよく一致している。姿絵が風に飛んだというだけの話ならばその分布はまたずっとひろいのであるが、これと殿様・百姓の衣裳交換とをあわせ説くものだけでも、私はすでに奥羽から九州にかけて、五つまでの例を列挙することができたのである。しかしそのためにこれが中古の舶来だろうという私の想像は衰えない。ただ舶来ならば、一度は文字を経、読書人の手にかかったであらうに、どうしてそれが再び口承の文芸となつて、田舎の隅ばかりにひそんでいたかを、知りたい念慮の強くなるだけである。将来の問題はむしろ数限りもなく輸入せられた外国の説話の中で、何ゆえにその二、三のもののみがかように根強く、また遠くまで行きわたって残り伝わり、他の大部分が消えて跡形もなくなったかであつて、それには他の多くの技芸も同様に、国民

の選択があり、もしくはちょうどその話をいれてもよい空隙があつて、民族の需要はおのずからこれを歓迎したのであることを、やがて証拠によつて答えうる時がくると思つてゐる。

もちろんシナから持ってきたようにしても、疑えばまた疑われる。はつきりとした書証は、あるいはいつまでも得られぬかもしれない。ただ直覚はなんの値もないようなものだが、自分にはこれを常人自然の所産とは考えられず、いわば書冊の気臭をこの中から感ずるのである。以前非常な労苦をもつて蒐集せられ、今なお写本のままで打ち捨ててある『奈良県風俗志料』の中に、吉野郡賀名生村の口碑として、大略次のような一条が載せられているという。

むかし唐^かにケイオウとヨウキヒという夫婦の者が住んでいた。男は女房と離れるのを厭うて、島に出て仕事もせぬので、女房は自分の姿を絵にかかせ、島の脇に立てさせることにしたが、ある日風が吹いて、その絵が空へ舞いあがり、城の御殿の庭に落ちた。国王はこれを見て、この絵の美人を捜し求めさせ、ヨウキヒはついに宮中に上がることになった。そうしていつまでも帰されなかったために、ケイオウもヨウキヒとともにこがれ死にをしてしまった。それから幾年かたつて、宮中の女が正月の祝の七草をつみに畑へ行くと、玉のように美しい一匹の虫がいた。それを取つて帰つて針箱の引き出しに入れておくと、その虫はばりばりと針の折れを食うて大きくなり、後には釘を食い金棒を食い、しまいに牛ほどの大きさになった。国王は食ひ物に困るだらうと思つて、矢で射、刀で斬つてその虫を殺そうとするが、手ごたえがない。火の中へ入れたらとけようかと思つてこれを試みると、虫は赤くなつたまま火の中から出てきて、触るものみな焼けて城はついに滅びてしまった。その虫はケイオウとヨウキヒとの亡魂であつ

た。これを見つけたのが正月の六日であつたから、今でも七草は六日にはつまず、五日の日につむことになつてゐる。七草をたたく時の唱え言に、唐土^{からと}の鳥というのもこの二人の亡魂であるという。

この話の慶王と楊貴妃とはむろん借り物であつた。原書がかなたにあらうと思つて、捜したら必ずむだをするであらう。しかし少なくとも、姿絵の風に飛んだという趣向がどうやら日本の土に向かぬことを、昔も感じていた人があつたという証拠にはなるかと思う。そうしてまた若干の漢書の知識ある者が、今ある昔話の成立に干与した場合が、時にはあつたということもこれによつてうかがわれる。それが桃とか菖蒲とか七草とかいうように、とかく節供の日の由来を説こうとしたのも、あるいはひとつの輸入学者の趣味であつたのかもしれない。

しかも私はそれが突如として民間に入り込んで、そのまま居つたのではなからうと思つてゐるのである。そんなら下地にどういう因縁があつて、これを引き寄せて土地のものとしたかという、まず想像に浮かぶのは上流の恋、すなわち昔も貴人と有力者のみは、わが住む土地以外に婚姻を求め、名を聞いてはるかに懸想する習いがあり、それをまた家々の誉れとして語り伝える者が、いずれの田舎にも多かつたことである。この種の伝説の説くかぎりにおいては、皇子と神の御子との堺すらも明らでなかつた。たんに尋常隣保の間からでなく、遠い異郷の人を掣せしめつけたということが、ただちにわが家の少女のことに清く、すぐれて美しかったことを推測せしめえたのであつた。こういう気風が現実にながの婚姻制度に影響して、しだいに今日の慣行を作り上げたことについては、別の機会において詳しく説くつもりである。ここで述べたいことは、

中古以前の恋愛文芸が、ほとんどその総前線をあげて、ただこの一部分の特殊婚姻を基調として展開していたことと、さらに近世の小説までがその遺習をうけて、ひとえに才子佳人の氷月奇縁のみを、題材として悔いなかったこととである。絵姿飄揚の新しい趣向が、人望あるローマンズとしてこの間に歓迎せられたのは、ちつとも意外なことではない。

「絵姿女房」の一つ以前の形として私たちの心づくのは、驚くべき長い髪をもった少女の話である。菅江真澄の『筆のまに／＼』巻四に、紀州淡島の加太神社の神主阪本左膳の伝えるところとして、次の話を録している。「白鳳の頃、禁中の御簾に二丈八尺ある黒髪一筋、烏くひもち来りて引掛けたり、之をいと怪しきことと思ひ召すに、陰陽博士占なひて申すには、紀国に端正なる処女あり、是こそ其女の髪云々と奏しければ、やがて御使をたまはりて召されて天武天皇の御后に立ちたまふと也。其美女がいでし家は兄海士（うみし）の家なり。九泉郎は故由ある家ながら、世につれて今は御坊となれり。其御坊の家の妻娘などは、世にいふ市子（いちこ）・口寄（くちよ）・県神子（あがたみこ）の業をなせりと」（以上）。いわゆる兄海士・九海士（くみ）の家のことは、『統風土記』にも載せておらぬが、この御社の神主の前田氏、代々女子相続で入婿（いりむこ）を取っていたという旧記はある。ここから諸国を宣教してあるいた人々が、以前はこのような語りごとを持ち回っていただけは想像しえられるのである。ところが東北の田舎に行くと、これがまたある別の旧家の、伝説として保存せられていた。たとえば閉伊郡の宮古浜などでは、某という家の娘が三月三日の潮干に行ったまま、三年の間帰ってこなかった。三年目のちょうど同じ日に、身もちになってもどつてきて、やがて一人の女の子を生み落としたが、その子の父の誰であるかはいわなかった。女の子は生まれながら髪長く、やが

て十七、八の美しい娘になるころには、その長さが七尋（ひら）と三尺もあった。都では時の御門が、春の日に右近の桜という名木の花を御覧になっていたと、その木の枝に珍しく長い髪の毛が三筋ひつかけていた。安倍晴行という博士、これは人間の髪に相違なしと占なったので、しからばその女を捜し出せということで、すなわち猿楽（さるが）という者を仕立てて、京から西東へ手を分けて尋ね求めさせる。東の国々を回っていた猿楽の一組は、行き行きて閉伊郡山田の湊のほとり、小山田という里にさしかかって、ある峠の上で猿楽を興行し、土地の女たちを招いて見物させると、その見物の数多い群れの中に、七尋三尺の髪の毛の娘が、その長い毛を桐の箱に入れて背に負い、母とともにまじっていた。それを見つけて猿楽はすぐにやめ、娘は都へ連れていかれた。土地ではこの女性を今も「うんなん神」とまつり、都の人が猿楽を舞った処を、永く猿楽峠と呼ぶことになったという（『聴草紙』第一六話）。

沖繩諸島の浦島説話には、長い髪の毛を説くものが多い。たとえば『遺老説伝』に「宮古島の瀬間の伊嘉利、天川崎の浜辺に出て水際に三筋の髪の毛の漂ふを見る。長さ七、八尺許、奇として之を収むれば忽ち一美女来りて曰ふ。吾昨夕此地に遊び一髪を失へり。拾ひたらば之を返せと。乃ち返し与ふれば海中に帰り去る。翌日同じ所に行きて又美女に逢ひ、竜宮に連れ行かれて留まること三日」、家に帰って見るとすでに三年であった。その折に鼓練（つづみ）の古曲をはじめ、なおいろいろの神祭の行法を教えられてきたといっている。また同書に南風原間切与那覇村の人、与那久の浜に出でて髪一つを拾う。常に異なり。驚き怪しみてこれを返そうとすると一神女きたって受け取り札を述べ、ともなわれて竜宮に行つて淹留すること三月、家に帰って問えばすでに三十三代

を経ていた。決して開くことなく携えてまたきたれと教えられた紙包をしいて開くと、中にはただ白髪があったばかりで、それが飛び起って身にひつつき、忽然として衰老の翁となって死んだ云々。『琉球国旧記』巻六にも、この島の羽衣談として著名なる安謝の若刈子、一日田を耕し帰り、泉に臨みて手足を洗おうとしておち、髪長さ七、八尺ばかりなるもの水上に浮かぶを見る。驚き怪しんでよく見ると、天女が衣をぬぎかけて沐浴していたとあって、後段は余吾湖や羽衣石山の古譚とも接近している。

内地の多くの神社に伝わっていたという七難の揃毛なども、かつてはまたこれと類似の言い伝えをもっていたのかもしれぬ。七難の揃毛のことは、早く江戸期の学者によってさんざんにもてはやされ、今さらその跡を追うのも知恵なしな話だが、なおその名称のみは注意して見る必要がある。誰でも知っているのは、『本朝国語』や『和漢三才図会』に出ている箱根権現の什宝悉難が揃毛、下総石下村東光寺の七難の揃毛、江州竹生島の七難の毛は、『塵塚物語』に出ているといひ、信州戸隠山にあるものは、「鬼女紅葉が毛と称して、色紅黒く縮みて長さ五、六尺ばかりあり、丸く輪となして壺の中に納む」と『信濃奇勝録』にもある。『閑窓瑣談』には、今の群馬県多野郡上野村新羽において、慶長年間の洪水に、長さ三十三尋ある黒い毛が神流川を流れてきた。同村野栗権現の流したまう陰毛の由、湯立ての巫の告げであったゆえに、これを宝物となし、六月十五日の祭礼に神輿とともにこれを渡すといひ、『四神地名録』には、江戸より近い葛飾郡新里村の毛長明神、もとの御神体は箱に入れた髻であったのを、いつのごろかの別当が、かかる不淨の物を神体とするはあるまじきことだといって、出水の際にこれを流し捨てた。その沼を今も毛長

沼というところとある。ずっと離れて、徳島県三好郡加茂村猪内谷の下宮のことは、『阿波国式社略考』にも『阿州奇事雜話』にも出ている。この社の神毛は麻桶に入れられて一筋あり、常はただ一筋なれども、神慮おだやかならざる時には、その毛に二岐ができて大いに延び、桶の蓋を押し上げ、おびただしく余ったとある。日向児湯郡西米良村の米良神社にも、なお一つの髪長媛の例が近いころまであった。『明治神社誌料』のしるすところによれば、この毛は元禄十六年（一七〇三）の洪水に流れ、社殿のみ数町の川上に逆流して今の地に止まった。神宝の毛存せし間は、神威最もおごそかであって、他所の人を忌むことはなはだしく、ことに下日向の者は一歩も神領に入ることができなかった。祭神は岩長媛と御父山神を祭るといふが、媛が懷患の末にこの地の淵に入りたまうと伝えたのは、おそらくはまた水の神であったろう。中央部の大和国にも、以前この物語を伝えた社寺が多かったことは注意に値する。布瑠の御社にも大いなる髪毛一筋、その名をソソゲというものがあつたと、前に引用した阿波の『式社略考』には見え、天野氏の『塩尻』巻二には、「興福寺の宝蔵に光明后の髪といふもの長さ一丈余、吉野天の川とかやの弁才天祠に八尺ばかりの髪、白拍子静の髪といふ。又此外に五丈もある毛、七難が陰毛といふ。熱田社にも此類の物あり」とある。『扶桑略記』治安三年（一〇二三）十月十九日の条に、藤原道長、高野詣での途次、本元興寺に立ち寄って宝倉を開き見たという、この和子の陰毛というものも、おそらくはまた同日の談であって、白拍子静などよりはなお何百年も前のころから、種々の俗説をとものうた長い毛が、すでに珍重せられる風だけはあつたらしいのである。

これがはたしていかなる事実の誤聞であつたか、物がもうないのだから、これを考えてみるこ

とはむつかしいが、これだけ多くの場合に共通して残っている、七難または悉難という言葉には意味があると思う。京都西郊の吉祥院村に、菅公の遺址と伝える七難田（『近畿遊覧記』）、越前の平泉寺村の泰澄大師の母の故事を説いている七難の窟（『大野郡誌』）、美濃の根尾川の水中にあって、能郷白山の登路にあたる七難岩、さては東海道蒲原駅の少し東にあって、浄瑠璃御前の塚処と称する七難坂のごとき、いずれもあるいは巫女とちなみのある地名であって、かの「往古に異婦あり、七難と名く云々」という記事を、幾分か形跡のあるものと推測せしめるのではあるまいか。伊豆の大島にはシツナ様、またはシツナ神という信仰があったそうだが、今ではそのなごりがありあらかずかであって、これと髪の毛との関係などは尋ねがわめることができない。しかも私はなお手がかりはこの方面にあるように思っている。

喪葬令の『集解』には遊部の君の初祖、手足の毛の八束毛を成すまで遊べとの仰せをこうむった記事がある。三十三尋というがごとき長い毛はうそだとしても、神に仕える者には、時あって異常に長い毛をもつ女性があったという語り草があり、またその特徴によって資格を認められたという類の説話が、かつては絵姿に先だつて流布していたのではあるまいか。現代もなお各地に流布している俗信に、婦人が端近く出て髪を梳くを忌む風がある。その理由を問うと、万一にも鳥が抜け毛をくわえて、神の木に巢を作るようなことがあると、その毛の当人は気ちがいになるから、または縁が遠くなるからと言っている。気ちがいというのは神氣が副（かみけ）くことであった。神に誓願する者が毛を切つて捧げたのも同様に、髪を召されることはすなわち身を任せ申すことであつた。それゆえにまた紀州淡島の口碑のごとく、髪の長さによって貴人の妻問いを受けたとい

う昔語りも起こつたのであらう。藤原非想翁の談によれば、羽後の生保内にも「絵姿女房」の昔話はあつたが、これは姿絵を風に吹き揚げられるのではなく、鳥がくわえて飛んでいつて、殿様の庭に落とすことになつていたさうである（『旅と伝説』三卷十一号）。鳥は神使であり、その挙動は神意であつたことを、感じ得た人たちの所伝であらうと思う。これが単なる偶然の風の所業となるまでには、順序もありまた素地もあつたはずである。いくら珍しくとも外来の絵姿女房は、ただでは日本の昔話とはなりえなかつた。すなわち伝播にはあらずして採択であつたのである。

山路の笛

さんが草刈る夜の笛は、幾度となく後代の語りものにくり返されている。舞の本の「烏帽子折」はまず長々とその由緒を述べ、「十二段の草子」にも御曹司みずから、このごろもてあそぶ草刈笛と申すべしといっているが、それがかように有名になつたのは、必ずしもこの二種の文芸の力でなかつたと思われる。その理由は、第一にここでそういう笛の名を持ち出さなければならなかつた趣意が、まだちつとでも説明せられてはおらぬからで、つまり当時すでに「山路の笛」という語り草が、流布していることを想像せしめるまでの、資料というにすぎなかつたからである。だから山路というような珍しい牧童の名の起こりを、『娯遊笑覧』の著者などとともに、今でも尋ねてみようとする人のあるのもっともであるが、かりにその点が手軽にわかつたとしたところで、なおそれだけでは一天万乗の若き現人神（あらむしがりかみ）が、はるかにこれを携えて筑紫の果てに下ら

れたという語りごととは解しがたく、さらにまた牛若丸がこの技に堪能であつて、そのつぎつぎの海道下り、近くは京の五条の橋の上から、いわゆる音に聞きし千島の都まで、いつでも笛を吹いて征服の目的を遂げたという、多くの冒険譚の生まれた由来は知ることができない。どうせ記録にも出ていない人の事蹟を想像するほどならば、むしろ笛を義経に売ったという淀の津の弥陀次郎などの身の上を、考えてみるほうが近路のように私は思う。

私は最初、この山路の草刈りの著名になった原因は、古くから伝わっていたおもしろい舞の手の印象であらうと考えていたが、今はそれよりも強い力が、これにともなう笛の曲に、あつたのではないかと思うようになった。すなわち昔も人類文芸の最も興味ある題目として、ことに傾聴せられていた美女と英傑との婚姻譚の中に、必ず篠笛のあるきまつたメロディをもつて、人を異常の昂奮に誘うを例とするものがあつて、たまたまその一つの型が舞の本、もしくはこれをうけついで「浄瑠璃御前」の物語に、保存せられていたように考えられてきたのである。笛が端的にわれわれの恋の音楽であつたことは、日本ではなおあざやかな記憶である。今でも夏の風がそよそよと闇を吹くころになると、私の住む村でも近きあたりの青年たちの、おぼつかないセレナーデを聞いて微笑することが毎度ある。しかし山路童子が黄牛の背によつて、夜深く吹き澄ましたという笛の曲は、もとよりこのようなしどけない、かつ凡庸なものでなかったに相違ない。もとを忘れてしまった後代の作者にも、なおこれを神の王子の妻もために託して、解説しなければならぬような一種神秘の音調が、いつの世からともなく取り伝えられてあつたことは推測しえらる。私は韻律にかけては誰よりも耳が悪いが、それでも神楽や能の舞の、いつもきまつた個所に

くり返される笛の音を聞き知って、必ずこの中には上古わが国の神婚姻の神話を、裏つけていた音楽の破片が保存せられ、それがやがてはまたその笛の調べから、探りあてられる日のきたるべきことを、信ぜずにはおられないのである。言葉に表わす途は知らなかったけれども、多くの昔の人たちは心にはこれを記憶していた。単なる記録文字の表示する以上に、この山路の草刈りや海道下りの古曲が、大きな感動を与えていたのはその結果であつたろうと思う。

われわれの持ち伝えている民間説話の中には、また他の一面から、この以前の心持を推測せしめるものがある。近ごろ採集せられた越後森町村の昔話に、むかし笛吹きの上手な男があつて、その笛の音が天に届き、天上の国から美しい嫁をもらうことになったというのがあつた(倉倉市郎君)。殿様がその女房を横取りしようと思つて、三つの無理難題を笛吹男に言いかける。それを三つともに天人女房が解いてくれるのである。ところが幾山川を隔てた陸中の上閉伊郡に、笛吹藤平の話として行なわれているのがこれと同じであつた。藤平の持つ笛は、日本の三管という名笛の一つで、それを吹きつつ唐天竺をまわっているうちに、家では二親がなくなつて、こわれた手桶一つが残つていたというだけは越後のほうにはないが、これも美しい女房が天から慕うてきたとあり、さらにその三つの難題の一つは、灰繩千把の上納、二つには、打たぬ太鼓に鳴る太鼓の御用、三つ目は、天の雷神九つの頭を連れてこいというのが、三つながら一致しているのみか、いずれも妻の才覚によつて造作なくこれを弁じ、最後に雷神が大いにあはれて、殿様を閉口させる段までも同じである。これとよく似た話は九州地方にも分布しているが、これもその話の前段がやや違い、たとえば肥前の南高来郡の例では、暮れに譲葉と裏白の残りを海の神に上げたので、

竜宮から招待せられてお姫様をもらってきたとあり、その美しい女房の姿絵を、かかせて蟲のそばにひっかけて働いていると、風に吹きあげられてその絵が殿様の庭に落ち、それからいろいろな難題をかけられたことになっている。笛吹藤平の話のほうでは、天人女房が男の貧乏を救うために、糸を買わせて三十三観音の曼陀羅というものを織り、それを町へ持って出て三百両に売らせた。その事が殿に聞えて難題をもって、その女房を取り上げようとすることになるのであった。この部分は通例は「鶴女房」、または「裸鶴」の話として独立して行なわれている。鶴が命を助けられた恩に報いるため、または男の孝心にめで、美しい女房になってきて、鶴の毛衣を織ってくれる。後に姿を見られたので、泣きながら帰っていったというふうには話されるのだが、笛吹藤平にはそれまでが復合している。越後の笛吹男の話にはそれはない代わりに、別に後日譚として天国へ親見舞に行った際に、鬼にたいせつな女房を盗まれて、それを捜して取りもどすのに、たいへんな苦勞と冒険をしたことが付け添えられているのである。おもしろいことには、同じ陸中の『紫波郡昔話』には、ちょうどこの双方の余分をみな合わせたまた一つの例があった。それが御伽の「蛤の草紙」と、はじめの半分までが似通うていたのである。

その荒筋だけをかいつまんでいうと、むかし学問のすきな若者の所へ、天から天人のお姫様が押しかけ嫁にやってくる。毎日機を織って三年かかって一匹の布を織り上げた。それを夫に町へ持って出て、おら家の見たくなしのおかたが織ったタダソ布売ろうと触れてあるかすると、町では誰も買ってくれなかったが、殿様がそれをサイマンダラという貴い織物だと知って、高い値で買ってくれた。その代わりにぜひこの女房を取ろうと思って、できそうもない二つの難題を言い

かける。まず第一に例のとおり灰繩千把、それを差し出さぬにおいては女房を参らせよ。次には打たぬ太鼓だけはなくて、やはり小子部こしべ栖す軽かろと同様に、今度は天の雷神を連れてこいとの仰せだ。これも天人女房の力によって、天から呼び下して箱に入れて献上すると、はじめは細目にあけた箱の蓋の隙間からカラコロビカビカ、すべて全部を開けさせると、御殿は震動して大雨が降り、やれ許せ、もう持って帰ってくれと、殿様が我を折ったおかしみがあって、そこでいったんの結末は付いているのだが、この説話ではさらにその後、笛吹藤平のほうにはなくて、越後南蒲原郡の笛吹男にともう話がつづいている。

これも「御曹司島渡り」などと関係があるから、大要だけをいわねばならぬが、男は天人女房に勧められて、天の舅殿へ礼にあがると、いろいろ馳走があった後に、一粒食えば千人力のつく米粒と、二千人力のつく米粒とを引出物に贈られる。それから屋敷の内を見まわっていると、金の太い綱につながれた一匹の赤鬼が、岩屋の隅でしおれきって泣いている。あまりふびんに思っ、千人力の米粒をやったら、鬼はそれを食うや否や、金の綱をぶつりと切って、どこへともなく飛んでいってしまった。それはまことに、とんだことであった。あれは姫が七歳のころから、しいて懸想をしてつけまわすゆえにつないでおいたのだ。今ごろはさだめし下界に行つて、姫を盗んでにげてしまったろう。急いで行って見よとのことで、帰ってきてみると、はたして天人女房はもう家にはいなかった。それから困つてしまつて、日ごろ信心をする内神様に、三七日の心願をかける。夢のお告げがあつて、汝にこの笛を授ける。これを吹いて西の方に向かつていくならば、再会の望みはかなうべしとあつて、ここにはじめて一管の笛が出てくるのであった。そ

れからあとは大江山のごとく、また島渡りの草子の大とう丸のように、鬼どもはその笛の音に心を許しているうちに、千里走る車に乗って逃げて帰ってくる。それを二千里走る車で追っかけてきて、あべこべに敵の鬼は退治せられてしまうのである(詳しいことは『紫波郡昔話』一八六頁以下)。

私が子供でもない読者に、こんな昔話のおさらえをする趣意は、もう一度記録の古さと話の古さとを、比較してみてもらいたいためばかりである。舞の本の「烏帽子折」の山路の語りを読んで御覧あれ、あの中にはまず姿絵の悲劇があって、次に芥子(さいし)の種一萬石の難題となり、さらに両界の曼陀羅二十尋に七流れ、蜀紅の錦をもって織りつけて参らせよとの仰せがある。それを内山の聖観音が、かりに織女と現じて一夜のほどに織らせたまうとあって、それから始めて山路の君の、笛の妻問いは必要になってくるのである。豊後と周防と相對する双方の海岸には、さらに御掃路の船中において、異国の兇徒が攻め寄せたという逃竄(とうざん)説話も、なお幾通りか伝わっているのである。これがある貴き賢太子の外伝と信じ、ないしはある仏閣の創立史と見る時代はとくに過ぎた。もしも根無し草の波のまにまに、流れつつ花咲く姿と考えるならば、たとえ奥州と筑紫と、西東千里の江山を隔てておろうとも、この四つの点の類似はただに看過することができぬ。そうしてまた同じ話の種の排列の順序如何によって、おおよそどの形のものが先に行なわれていたかを、判別する材料もないわけではないのである。

相州小田原在の小賀沼村というのは、今の足柄上下郡の何村の内になるのか、私にはまだ捜し出せない。「話の世界」の大正八年三月号に、この里の旧姓筑井氏、虎杖の名笛というものを家

宝とし、雨乞いの折には巫女がその笛の由来を語る例になっていたことを、山本芦水君が報じている。その話の大筋は昔この家の先祖に笛の上手があつて、大蛇これを慕うて美女に化けてきてこの人の妻となつた。やがて一子をもうけて産の紐をとく折に、必ず産屋の中をのぞくとなつて成めたにもかかわらず、ひそかに隙見をしたために、蛇体を現じて帰りに去つた。その時一人子のために千両箱を残しておいたのを、成人するまでに人に盗まれた。それで海の辺に出て、母をよんでもう一度それを乞うと、あの千両箱こそは実は私の片眼だ。いま一つやれば私は盲になるが、わが子のためならば、それも惜しくはない。ただ日の見えぬ母の手引きに、一つの釣鐘を鑄て鳴らしてくれと言つて帰つたといふのである。

この話の草子になっていることは、私はまだ知らぬけれども、いわゆる口承文芸としてはすでに全日本に分布している。ただ大蛇の遺産を千両箱とした例を、この土地以外では聞いたことがないだけである。さしあたり知っているいくつかをあげるならば、まず高木敏雄氏の『日本伝説集』に二つ。その一つは、天竜河畔の巖水寺の子安尊の縁起として伝えるもの、これは『遠江風土記伝』にもはやく見えて、緑児の父を田村將軍とするもの、すなわち「立烏帽子」の舞や悪玉御前の物語と、系統をひく伝えごとであった。他の一つは、遠く津軽の大鰐あたりに行なわれていたもので、これはまだ伝説として土着もせず、ただ近江の三井寺の鐘の由来を説く昔話であった。蛇がある人に命を助けられ、その恩に感じて、姿をかえて妻になり、子を産む。これも産屋のタブーを破つたばかりに、縁が尽きて一つの珠を残して帰っていく。後にその珠を殿様に取り上げられて、浜に出て手をたたくと母が現われてまた一つの珠を与える。わが子のためには盲に

なるはいとわぬが、どうか三井寺に鐘を上げて、夜昼の境を聞き分けさせてくれと言ったとあるのは、どうやらこの哀れを語っていた旅の盲女の、出処素性も知れそうな話であった。

他の地方に伝わっているものはこれと大同小異で、ことに九州の果てにある話のほうがかえって一段とこの青森県の例に近かった。たとえば陸中の江刺郡で、峯寺の鐘の由来として伝えるもの(『聴耳草紙』)などは、子の名が坊太郎で、母の残していった左の眼玉をなめて飢を養い、大きくなるまでにしやぶり上げてなくなった。それで父親が山奥の沼に行き、わけを話して右の方の片眼をもらってくる。もうこれで夜明けも日暮れも知れなくなった。どうかこの沼の岸に鐘を釣って、明六つ暮六つを教えてくれと頼んだのが、峯寺の鐘であったと言いつつ、なお坊太郎がその盲の母と再会したとあるのは、やはり「三井寺」の痕跡であったらしい。紀州では西熊野の日置の宝勝寺の僧孝順、深田の奥の大蛇と契って子を生んだという話がある(『牟婁口碑集』)。生まれた一人子が盲目であったゆえに、母はわが目の球を抜いて子の目にはめ、もとの姿になって山の奥に帰っていったとあって、これにももの悲しい明け暮れの鐘のいわれを説いている。九州の例というのは『豊後伝説集』に、大野郡沈墮の滝の口碑が一つ、「旅と伝説」(二卷一ノ号)には肥前の島原半島において、百四十年前の雲仙の山焼けと、結び付けた話が二つあり、念入りに捜せばまだいくつももありそうな様子である。これがいずれもみな殺されようとする蛇を助けたら、それが美女になって嫁に来たことになっている(ただし肥前の方のは海蛇とも、普賢の池の白鰻ともいう)。それからその蛇女房の残していった珠を、殿様にまき上げられたことも津軽の話と同じく、しかも第二の珠までも強奪されてしまったので、水の主は激怒して、父と子とを遠くへ

立ちのかせ、山を突きくずして思いきった復讐をしたように、今日では説かれているのである。

この目なしの大蛇の悲劇は盲人の作為らしく、座頭ざとうは水の神様と古くから関係があったらしいのだが、それはまた他日の談とする。ここに考えてみたいことは異類の婚姻、すなわち天上の国からまたは水の都から、特に人間の貧しいやしい一人を見立てて、嫁入りをしてきたという因縁は何にあったかで、それには越後や相州の笛吹男の話がまた一つの暗示にはなるのである。今ある「葛の葉狐」のいくつかの院本をはじめとし、鳥にも魚にも命を救われた報恩に、女房になつてきて家を富ませてくれた話は数あるが、これはおそらくは後代の複合であった。恩に対する報謝は異種間の交誼であり、血を合わせ縁をつなぎ、新たに栄える家を立てることは、また一つの別の制度であったからである。これには正直にして親孝行なる者、または朴訥単純で、一見魯鈍にさえ見える者が、不思議に神霊の目にはよろこばれた例もあり、または田村利仁や小野頼風のように、器量武勇の拔群であった者が、自然に幽界の恋を引き付けた物語も伝わっているが、なおその以外に特に笛の曲に精妙であった若者が、かかる超凡の婚姻に成功しうるもののごとく、以前想像せられていた時代があったように思われる。

この問題の奥行きは際限もなく深い。われわれの祖先がかつて竜蛇の幻を友としなかった人種であったならば、こういう昔話の種は、おそらく国内には萌芽しえなかったろう。しかも口をもつて吹く大小の楽器によって、周囲の自然を制御する技術は古く存し、今もまたひろく利用せられている。琵琶のこの国に運び入れられ、さらに民間に流布する以前にも、盲という不幸な者はなお生きなければならなかった。かれらが笛を吹いたということは史書にこそ見るところはな

いが、その管理に属した語りものには痕跡を留めているかと思う。もちろんこれから多くの資料を集めて、おいおいとこの仮定を確かめていかねばならぬが、少なくとも目を失うた水の母が、最初に笛の音に誘われて、遠く塵界の人にといいできたという伝承は、私にとっては大いなる興味がある。笛を神降^{かみくだり}しの曲に用いた習慣は、近代においてはその範囲がいたってひろい。それが一つの信仰または経験の拡張であるか、はたまた最初からこのとおり多元のものであったかは、軽々しく断定してはならぬが、山路の物語だけは、とにかくに水の神と縁があった。すなわちこれが背景になっている宇佐八幡の神伝には、竜女婚約の記事が残り、さらに大隅の正八幡にあっては、素女^{すめみ}の目光の矢に身ごもった物語、およびうつぼ舟に載せられて海から漂着した母子のそれがあった。さればかすかにその遠き神話の目の感動を記憶していた民人が、いわゆる大和竹に目をあけた草刈り笛のある一つの調べによって、そぞろに十六歳の少壮天子、遠く稀世の美女を訪い寄りたもう昔語りを思い浮かべ、もしくはこれをもって深秘きわまりなきその夜のよろこびを語るものと解したとしても、それもまたいたって自然なる海の国の居住者の、幻覚であったということができるのである。

(昭和七年八月、岩波版「文学」)

狼と鍛冶屋の姥

一 産杉の伝説

土佐の東境に近い野根山の峠路、公の台帳には高知県安芸郡佐喜浜村字大道南山とある国有林中に、産^{さん}の杉^{すぎ}と称する有名な古木があった。明治三十二年の暴風に、根もとから吹き倒されてわずかに古株を存するのみであるが、土地の人たちには今なおその伝説とともに、珍しい木の形を記憶する者が少なくない。世間普通の杉の木と異なっていたのは、地上四メートルほどの高さでその幹が横に屈曲し、そこが平らになって優に五、六人を坐せしめうるくらい広かったことである。そうして昔旅の女がこの木の上で産をしたという伝説は、今でもほぼ信じ伝えられている。倒れて株ばかりになった後まで、人がその杉の木片を削って、安産の護符として持っていく風があったのは、必ず右の伝説と関係のあることであろう。山中の通路に保存せられる異形の樹木に向かつて、子安^{こやす}・子育て^{こどもだ}の祈願を掛け、さてはその一部を呪物として尊重する慣習は、わが国にも決して稀なる例でないと思うが、それが、次に説くごとくいわゆる人狼伝説と結合して行なわれているのは、かなり珍しい事実だから、こまかく考えてみる必要がある。

幸いなことにはこの杉の木の伝説は、つとに県外の人も注意し、また採集した記録も幾とおり

かある。寺石正路氏が『土佐郷土民俗譚』に載せられたものは、主として『南路志』の記事に準拠せられたようだが、この以外に石井氏の『国民童話』、松村氏の『日本童話集』に出たものも、少しずつ話が違っており、なお他に四とおりの報告を私は見ている。それがいずれも完全に一致しないということは、むしろ興味がある。口碑の要点は、佐喜浜村の鍛冶の老母が、いつの間にか狼の化けたのであって、それが産婦をこの杉の木に襲うて、切られて正体をあらわしたというにあるが、説話としてはいちばん人を動かすべき部分、すなわち前に来た狼どもが人語して、「それでは鍛冶屋の婆様を頼んでこい」と、いったという条を脱落したものもあり、あるいはまた刀で切り下すと、カンという音がした。それは古狼が鍛冶の婆であるだけに、鍋を兜にかぶってきて刃を防ごうとしたのであったという興味ある一挿話を、忘れたのか知らぬが説いておらぬものもある。

ことに伝説を信じやすくするために、通例まず問われる固有名詞と年代、すなわち伝説の歴史的分子とも名づくべきものが、まだいっこうに具体化しておらぬのである。昔ある浪人が身持ちの妻を連れて、日暮れてこの山中を通りかかった時に、にわかに産気づいて云々と説く例も一つあれば、また一人旅の女性が臨月に、山の夜路をしていたように伝えるものもあって、第二の場合には、そこへ通りかかったのが武勇の士であったともいい、また『南路志』のごとく、それが飛脚の者であって、杉の木の間もとに女の泣き声を聞き付け、立ち寄り介抱して男の子を安産させたともいうのである。しかも何ゆえにこのような山中を孕み女が通っていたかは、何びとも不審としたことであるが、ひとり『四国老樹名木誌』に載せられた一伝だけが、長曾我部氏が阿

波の由岐城を攻囲していた際に、部将某の妻、その夫を陣中に訪わんとする途すがらの出来事と説明するのみで、その他はことごとく、ただある時一人の女がといっている。この点は少なくとも昔話の形式のほうに近く、まだ完全に伝説とはなりきっておらぬようにも感じられる。

伝説のまだ書巻に登載せられざる間、もしくは文字の知識がひろく常人に及ばざる間は、こういう口頭伝承の異同は最も自然のことであって、それを比べてみて、いずれかの一つが正しく、他は誤っていることと決定することは困難だ。記録が古いというのは、もうその時代から、こういう形の伝え方もあったことを意味するだけで、その後書き留められたや別様の口碑が、以前はなかったものだとする証拠には十分でない。地誌や縁起などの有力な記録が世に出ると、通例無学者の空覚えはこれに譲歩して、自然にその形に固定する傾向はあるが、写本の世の中では、まだ今ほどの統一は望めなかったのである。まるまるそういう記録のすでに一方にできていることを知らず、家々各自の聞き伝えを守って、互いに異同をあらためる機会がなかったのも、ずいぶん久しい間のことであったように思われる。だから採集と比較とは、今後においてもなおますます必要になってくるので、われわれは単にこの伝説統一の過程において、特にいずれの部分が変え動かしやすく、又他のいずれの部分が一貫してつとにきまっていたかを、明らかにすることを一つ一応は満足しなければならぬのである。

この有名な野根山の伝説においては、少なくとも今まで共通にいずれの記録にも見えている個条が三つある。(一)杉の大木の梢で産をした婦人のあったこと。(二)それが群狼の危難に会って、かろうじて助けられたこと、および(三)狼の巨魁は鍛冶屋の姥であったことが後にあら

われたこと。この三つの特徴は結び付いて、今ではもうその一を欠くならば、産の杉の伝説ともいえぬまでになっている。ところがその中でも一と三との二点は、現に山中に年経る杉があり、また佐喜浜村にはその鍛冶の屋敷と伝える地があって、故人の考え方からいうと争うべからざる証拠が、儼として存していたのだから、受け入れないわけにはいかなかったろうが、残りの第二の狼に襲われたという部分だけは、いかにして土佐で伝説として信じられるに至ったのであるうか。これがわれわれの桃太郎説話の普及と関連して、考究してみずにおられない問題の一つである。

二 犬梯子と猫の智慧

いわゆる千匹狼の説話の起こりに関しては、すでに南方熊楠氏がいろいろの類型をあげて、そういう口碑の発生しうべく、また流布しうべかりし事情を説いておられる（『民俗学』二巻五号）。説話の移動ということは日本一国だけでも、十分これを信すべき証拠があるが、ただその根源を記録の古今のみによって、推定することはむりだと思ふゆゑに、自分らはひるがえって末端のほうの現実から、逐次にその渡来の方角を考えていこうとしているのである。土佐の東の境の山地に、千匹狼の説話が分布しているということは、まずその理由をきわめねばならぬ眼前の事実であるが、これには幸いにして必ずしも普通でない三とおりの特徴をそなえている。その一つは被害者が産婦であつて、しかも最後に難を免れて平産したこと。第二には狼が化けていたのは鍛冶

屋の姥で、その家跡は今でも残っていること。第三は最も重要な点で、ここではこの説話が伝説と化し、杉の木の本根をけずって安産の護符にする習俗と結び付いて、今もかつてあったことのように考えられていることである。私の新たに考えてみようとするのは主としてこの点で、それだけはまだ南方氏も触れていなかった。

簡単に自分の仮定を述べると、この伝説は前に説話として諸国を流転している間から、すでに幾回かの複合と変化とを経たらしい。そうしてその最も縁の深い一角をもって、偶然に野根山の産の杉と結び付いたのであつて、その癒着点は数多い他の地方の類型中に、普通はともなわれておらぬ狼の子育ての話であつたろうと思うが、その以外にも元来この昔話には、大木の梢に登って難をのがれたという個条が必ずあるところから、山の峠路の崎形の木などに付着して、幾分か伝説と化しやすい傾きを持っていたとは言ひうる。土佐に限らず、他の国々の例においても、これを国境の某峠の上において、あつたことだと伝えているものは多く、また一般にその話法がやや伝説のほうに近くなっている。最初からもしこのとおりだったら、そうひろく分布することはできなかつたはずである。

察するに説話としての興味の中心は、ただの野獸の群れには似つかわしからぬ策謀があり、それを不思議なことと思つていると、やがてかれらの語によつて、その最も老獪なる首領が人間の姿をしていたことを知るといふ点にあるものが、まず一つはあつたのである。犬梯子もしくは人梯子^{いんじ}子^こというのが、おそらくはもとの昔話の名称であつたろうと思う。この点はいわゆる逃竄説話の多数のものに、共通した趣向であつた。人は時あつて魔物におびやかされ、生死の危険に臨

むことがあるが、元来耳がさどく、また判断に敏なる者であるゆえに、ついにはこれによって身を全うし、相手を退治することもできるというところに、聞いておもしろがられる話のヤマ（要点）があったかと思う。日本にはいくらかもある古寺の化物退治、中にも大足二足小足八足だの、または東野の馬骨西竹林の一日鶏だのと名乗ってきて、たちまち本体を見あらわされる話は代表的であり、また蛇鰻入りの話で、奥山の岩穴の口まで跡つけていくと、内にうめく声があった、子種を残してきたから死んでも本望だと一方がいう。いやいや人間というものは賢い者だ、もしも蓬と菖蒲を湯に入れて、行水したらどうするというのを、立ち聞きして帰ってきて、当座の難をのがれたとあるなども同工異曲であった。ただし犬梯の千匹狼のほうには、某家の何々婆様と人の名をさしていることになっているために、どうしても話が固定して、ある地に土着する傾向は強かったらうと思われるが、しかもこれと大木に登って難を避けたという二つだけでは、土佐の野根山の産の杉の伝説は、まだ現在の形に成長することはできなかったはずである。

前掲南方氏の論文の中には、格別深い注意を払われなかったように見えるが、この狼の群れが梯子を作って、樹上の旅人を攻め登るといふ話には、明らかに二つの系統があったのである。土佐と同様に後からやってきた親分の怪物も、やはり狼であったという例は、北国の一部に限られている。『新著聞集』に採録せられた越前大野郡、菖蒲池の孫右衛門が女房という一例の他に、伯耆日野郡の奥のある山路であった事というのが、六、七年前に刊行せられた『因伯童話』に出ており、それからちょうどこの二地の間、やや異色ある但馬養父郡の、高木加門の妻の話があるのみである。これは後のほうにまわしてまず伯州の話を用いると、

むかし米子の山臥が狼の群れに襲われて、大木の梢に上ってその難を避けると、二、三十四の狼が背懸ぎをして登って来たけれども届かない。もう一匹だけ足りぬ、五郎太夫婆を呼びにやれといい、やがてやってきて先頭に立ったから、脇差を抜いてその大狼を切ると、一同は退散してしまった。翌朝里に出て、五郎太夫の家に行ってみると、婆は木から落ちて怪我をしたと称し、人々が疑いをかけているうちに行方知れず云々。

とあって、これはたしかにその婆も狼になっている。雑誌「民族と歴史」（七巻五号）に、瀬戸源蔵氏の報告したのは、若狹と越前との境の山、椿峠の中の曲り、三本松という処の伝説であるが、刀禰の婆と呼ばれて、後から来て切られたのは、大きな犢ほどある銀毛の怪物とあって、はたして狼の年経たものだったか否か、どうも十分に明瞭とはいえず、ここより遠からざる近江柳が瀬峠の虎が婆の伝説は、これと同じだと、同誌（八巻三三）に報ぜられているが、これは「郷土研究」（三巻十一号）の福田文月君の説によれば、古く柳が瀬村の狼神社の由来として伝えられたもので、はじめ梯子になって登ってきたのは狼連であったけれども、招かれて後から手助けにきた太郎婆だけは、古猫の姿に化けていたのであったというふうである。

婆が狼であり、また猫であることによって、話を二種別々のものだということはもちろんできない。しかもこの二つが双方いっせいに出現するということもありえないから、今はまだ断言はむづかしいまでも、いずれか一つが先に行なわれて、後に理由があって他の一つに、改まったことだけは推定しないわけにはいかぬ。人が狼の姿になって、飛びまわって害をした話は、西洋ではあまりにも有名な奇聞であるゆえに、あるいは幾分か高木君たちの先入主を養ったかとも思わ

れるが、日本においては、そのほうの例はほとんど絶無、狼が人に化けていたというの、この以外には稀であるから、私は猫の婆のほうが前ではなかったかと考えている。そうしてその証拠とはいわれぬまでも、多少の参考になりそうな材料はいろいろある。消極的には山の中分婉の話が土佐以外にはないこと、積極的には鍋をかぶって刃を防いだという話が、土佐の場合にもものうていっていることなどは、その中でもぜひともその理由を尋ねてみなければならぬ点である。

三 鍋かぶりと茶釜の蓋

その前に、今日世に知られている若干の類話を列記してみると、まず伯耆国の例と地理的に接近しているのは、雲州松江藩の家中小池某の下男、古志原の親元から夜分に帰ってくる途で狼に襲われ、大木に逃げ登ると、肩車をして後から登ってくる。わずかの処まで来て届かぬので、はよう小池の婆を呼んでこいと狼どもがいう。やがて来たのを見れば犬ほどもある古猫であった云云。これは高木氏の伝説集に載せられた清水兵三君の報告のほか、近年の『島根県口碑伝説集』にも出ておって、一部分の異同がある。前のほうの叙述では、脇差を抜いて切り付けると、金物の音がした。逃げていった跡には、小池の家の茶釜の蓋が落ちていた。それを証拠に持ち帰って、いよいよ主人のお袋様の猫であったことが露顯するのである。

土橋里木君の『甲斐昔話集』に録せられた一例は、右の茶釜の蓋はないが、全体に昔話らしい

話し方になっている。昔甲州の太物屋が、富士の裾野の遠く原で日を暮らし、枯草のにおにむぐり込んで寝ていると、夜中に多くの山犬が出てきてかきまわすので、木の上に登ってこれ避けた。山犬はただその木の回りをおろくばかりであったが、そのうちに行って孫太郎婆を呼ばれてきて、なんとか勘弁をしてもらわざアといって飛んでいった。孫太郎婆というのは一匹の虎猫の古ったれであった。こりや大梯を掛けるんよからずといって、山犬に教えてだんだんに肩を踏んで登っていかせる。その大梯が近よってくるので、商人はもつと高く登ろうとするが、何か巢のようなものがあって、もう上へは行かれない。それで脇差を抜いて、そこを突きくじってみると、中に熊が寝ていたのが、尻を突かれて下へ落ちる。それを追かけてみて、熊だと知って山犬どもはいまいますがり、はや夜が明けるから、今夜の細工にやいかぬと言って去り、商人は命を助かったというのである。

これも最初からこんな結末ではなかったかもしれぬが、とにかくに婆が狼でない点は、遠方の出雲と一致している。のみならず、さらに陸中上閉伊郡の例にいたっては、話はいまいちだんと徹底して猫であった。佐々木喜喜君の『聴耳草紙』(三四一頁)に、昔旅人が旅から帰ってくる峠の路で、猫が寄り合いをしているのを見て、そつと木に登って様子をうかがっていると、まだ某のお頭が見えぬという。その某というのが自分のことであった。そのうちにわが家の古い三毛猫がやってきて、仲間にさしずして木や草の陰に隠れて待ち伏せをさせる。そこへ武士が通りかかって、その猫どもと戦い、最後に頭領の古猫が切られて逃げ散る。その血をつなぎつつ二人で家に帰って見たところが、先刻婆様が氷ですべて、肩間を割ったといつて寝ているので、い

きなりそばへ行つてこれを切り殺すと猫の正体をあらわした。幾年か前に本物の老母を食つて、自分がその代わりに化けていたのだったというので、ここではもはや純然たる赤岩一角式になりきっているのである。

土佐と奥州と、土地がこれだけ離れ、話がこれほどに違つていても、なお南北別々の由来をもつて伝わったものと、いかにしても考えられない理由はどこにあるかというところ、つまりは全国の話を書く者の興味が、主として怪物の秘密が偶然のことから発覚し、人間はその手柄によって、永く絶大の危難を免かれたという点に集注していたためで、したがつてその発覚の手がかりなどはなんであつてもよく、話をする人の空想と技倆次第、新しいものと取り替へてもよかつたらうと思うが、前代の伝承者には神話以来の久しい習性を保つものがなお多く、知りつつ昔の型を改めてみようとする人が、今日のように輩出しなかつた。これがいろいろの細部の一致のなおしばしば認められて、かつはわれわれに潮原の便宜を供し、かつは時々誤つた推測に、人を誘おうとする混乱にもなつたように考えられる。

一つの要点は婆に化けていた白毛の古狼が、鍋をかぶつて悠然として登つてきたということ、『南路志』にもすでに見えており、『国民童話』のほうにも釜を兜にかぶつてきたといい、さらに他の二つの筆写の報告にも、鍛冶屋の婆を呼んでこいという一条はなく、単に血をつないで佐喜浜の民家に至るとあるのみであるが、やはり金物の音がしたのは鍋をかぶつていたからだというところを知つたとあり、またいま一つのほうは、婆の寢床の中から血にまみれた釜がころがりだしたと記している。これなどはもしも雲州の小池の婆の話に、家の茶釜の蓋が紛失していたとい

う例がなかったならば、あるいはさつそくになるほど鍛冶屋だから、店にあり合わせの商売物を持ち出したのだらう、ありそうなことだとも、またはうまく考えた趣向だとも、思つてしまふ人があるかもしれないが、実はこの挿話は化猫にともなうて、かなり広く行なわれている一つの型であつた。南方氏も以前から集めておられるようだが、熊野などにはことにいろいろの変化をもつて伝えられている。他の地方にもおりおり聞く話は、たいていはその金物をもつて矢とか鉄砲玉とかを防いだことになっている。たとえば狩人が茶釜の蓋で弾丸を丸めているのを、そばで家の猫がじつと見ている。そうして一回ごとに前肢でつるりと耳から顔をなで下げる。それを不審に思つていたところ、次の朝、その猫と茶釜の蓋が見えなくなる。それから山に入つて怪物に出会ひ、鉄砲を打ったが、はね返るばかりで、ついにあるだけの丸をみな使つてしまつたら、何やらチャリんと音がして、地に投げ棄てたものがある。そこで取つて置ききの護身の丸をこめて改めて打つと、そこには昨夜の飼ひ猫がたおれており、また紛失した茶釜の蓋も落ちていた。丸めた弾の数をかぞえておいて、それだけを打たせてしまつてから飛びかかろうとしていたのであつた。

早川孝太郎君の『猪・鹿・狸』には、三河にあつたこととしてこの話を伝えているが、これとはほぼ似た例は『甲斐昔話集』にもある。二十歳になる古猫が片眼をつぶされて主人を恨み、弾丸を作つてゐるのを見て、一度ごとになすづいてゐる。これも十三の用意の丸を打ち放すと、もう安心してゐるので、別の護り弾をもつて射倒した。死骸の脇にわが家の釜の蓋がころがっていたというのである。能登の八ヶ崎のどうの川のちつきんかぶりという怪物の話は、『鹿島郡誌』にも詳しくは載せておらず、またチックンというのはどんなであつたかわからぬが、

与助惣左衛門の抜いた刀
鞘は竹でも身は本ものや

という俚語が伝わっているから、これだけは別にもう一本の刀を隠しておいて切ったというような話があったのかと思う。九州では近ごろ出た梅林君の『豊前民話集』に、釣鐘をかぶって銃丸を防いだ狸の話というのがこれであった。讃岐では仏生山（ぶつせいざん）の町の伝説に、昔閑の池の大蛇を退治に行く勇士が、矢の根鍛冶に矢をあつらえると、大蛇が美しい女になって、その矢の数を聞きにきたというのは、熊野の一本だたらが鳥に化けて飛んできて、刑部左衛門の矢をかぞえたという話と似ている。それも釣鐘をかぶって、八十八本までは矢を防いだが、いよいよそれをぬいで飛びかかろうとした時に、金銀の隠し矢というので射取られた。それで国分寺の鐘には鏝の痕があるのだともいっている。果然この失敗した策略は、土佐の狼婆の発明ではなく、むしろこのほうは脇差で切り下されてなお疵を負うたという点に、幾分か取って付けたような不細工ささえ目につくのである。

四 猫と狐と狼

しかも麓の佐喜浜の町に、もしも鍛冶屋の古屋敷と称するものがなかったら、はたしてこの話が土着して永く伝わることになったか否かは疑問である。伝説はとにかくにある時代の住人が、実際そんな事がかつてあったと信じて、語り伝えていたものである。単におもしろい昔話を聞い

たというだけでは、それをこの地の出来事だといっても、我も人も承知しうるはずはなかったのである。人によっては一度どこかに似寄りの昔話さえあれば、それがただちに同系伝説の分布をも解説しうることく、思っている者もないとは限らぬが、それは少々荒っぽい断定である。むしろ、かたからそんな話を知らなかったら、めったに独立して同様のことも言い出すまいが、かつてこの木の根もとにとか、あの家の婆がと言い伝えるようになるまでには、別にまた新たな事情動機（じやうどうき）の付け加わることを必要とし、したごうて話はここで若干の屈曲を見ることになるのである。出雲で小池の婆といい、越前で菖蒲池の孫右衛門が女房といったのも、でたらめではよもやなかったらう。できない相談かもしれぬが私だけは、まずその理由を調べてみたいと思うのである。

いちばんやっかいな問題は、狼の群れの頭領ないし相談役が、どうして猫であったかということと、それがもしいま一つ前の普通の型であったなら、後にどうして土佐・越前のごとく、これまでが狼と入れ替るようになったかということであるが、一方の理由が解しくくなれば、第二の改訂は自然にも起こったかもしれぬ上に、こちらにもまた別にそれだけの因縁があったようである。順序として第一の場合を考えてみると、獣が人の隠れて聞いているとも知らず、人間の言葉を使って身元があらわれたという話は、狼には他に例がないようだが、猫にはある。猫が黙々として始終会話の席に侍する様子が、かかる想像を生じやすかったからであろう。近世の世間話には『新著聞集』にもあるように、梁木からおちて南無三と口走ったとか、院主様が悪いかから今夜は出られぬと、答えたとかいうふうに実際化しているが、普通にある型では、猫が荒寺の庭

などに集まって踊を催し、どうして何々屋の三毛殿はおそいぞといっているところへ、やがてその三毛がきて、こういうわけでおそくなったと、家の内証事を語るの、はじめて猫の忠義を知ったり、もしくは反対に恐ろしい害心のあることを、心づいたりする結末になっているものが多い。もう一つさかのばれば、あるいはいわゆる公治長説話、すなわち人が禽獣の語を解して利益を得たという話から、系統を引いていることがわからうも知れぬが、少なくとも近代の奇異譚の中では、物を言って素性を暴露する話は、主として化け猫の管轄に属していたのである。

猫が年を取っていずれへか姿を隠すという事実は、今でもまだ不思議がられている。それだから魔物だ、油断がならぬという俗説は、昔話の外にはみ出して、時としてはこれを信じようとする者さえある。家に飼われる猫は、犬だけの群居性を持たぬにもかかわらず、野良猫には往々一処に集まっている場合のあることが、以前にも観察せられたものと見えて、常陸の猫島や肥後の猫岳のごとく、かれらの社会が別に隠れてあったという話は、方々に伝わっている。ゆえに今日では猫が群れをなして人を襲うたということが、あまりにも想像しがたいことになっておろうとも、それだけでは話の発生までを疑うことはできない。事実そのとおりのことがあったかなかったかは、われわれの取り扱おうとする問題のほかであるが、少なくとも猫に対するわれらの考え方は変わっていたのである。あらゆる天然現象の解説が改まってきたごとく、人がかつては今とまったく異なる態度をもって、愛し敬いまたは忌み恐れていたものは、ひとりこの一種の小動物のみではない。狼についてもまた同様に、かれらもし記憶あらば、今昔の感にたえぬであろうと思うほどに、わずかな年代に人間の信用が衰微したのである。これは文献のがわからずとも、まだ

若干の旁証が得られるかと思うが、狼をシナ風に兇猛無比の害敵とみたのは、そう古くからのことではなかった。以前は畏敬もすれば、また信頼もして、人と狼との珍しい交際があったことは、本篇と関係があるからぜひとも後に述べなければならぬ。

動物の歴史の研究がもう少し進んだら、あるいはこの点も明らかになるであろうが、かれらの環境も近世に入って変化している。これがもしその習性の上に影響して、人に新たな経験を与え、しだいに狼婆の恐ろしい空想を発生せしめたものとする、産杉伝説はひとり説話分類の上にたいせつな資料を供するのみならず、かねて自然科学のためにも興味ある一個の新目標を立てたことになるのである。

狼の群れが夜行く旅人をおびやかすということだけは、少なくとも近代にはいつて、幾度か実験せられた現象であつたらう。したがうて猫の寄り合いという俗信がややすたれて、狼がこれに代わって説話の序幕を占めたのは自然である（しかもこれと反対に、狼の群れの話が東北に行つて、猫に改まったということは想像しにくい）。ただ奇妙なのは狼の群れの指導者として、猫が招かれてやってきたということであるが、これも自分は猫ならば、そういう話もあるうと思ふのである。猫と狼とが交りを結んだ話はまだ知らぬが、狐とはしばしば一しょになって遊んだというわさが残っている。西田直義翁は九州の学者だが、その随筆の『笈舎漫筆』に、ある人月夜に猫と狐とが、並んで踊っているのをまさしく見たという話を載せている。中道等君の『奥隅奇譚』にも、外南部の大畑である家の猫が、黄昏に水屋から手拭をくわえ出し、それを裏庭に待っていた狐に与えて、ともに両手を宙に揚げて踊ったのを目撃したという話を載せ、そうして「虎

子が来ぬえば踊コはすまね」という言葉が、諺のようになって行なわれていたことを記している。佐々木君の『聴耳草紙』にも陸中の遠野で、猫と狐の踊っていた話を幾種か採集し、やはりその狐がひとり言に、「虎子どのが来ない踊にならねア」といつていると、やがて手拭をかぶってその虎猫が来て踊ったとある。これらも前に掲げた江州柳が瀬峠の、「虎が婆を呼んでこい」の話などと、まるまる無関係でないことだけは想像してよからう。

この『聴耳草紙』の怪猫譚の中には、例の茶釜の蓋と、弾丸をかぞえた三毛猫との話が一つあるが、それよりも珍しいのは狐と踊った虎猫が、義太夫節を語って一人留守をしている女房に聞かせた。ある時その事を主人に告げ口すると、さっそくその女ののど笛を食い破って、行方知れずになったという話をとものうていることである。現在の話し方は世間話に近くなっているが、その分布は案外に広い。陸前牡鹿郡の例は「民族」に、久慈の平岳の主になっているおとら猫の話は、八戸市の「奥南新報」に掲げられ、津軽のは内田邦彦氏の『津軽口碑集』に、鹿角郡のは「旅と伝説」昔話号の内田武志君の報告にあつて、ともに内容はほぼ一つであった。福島県北部の某村でも、むろの木という大きな榎があつて、そのムロは怪猫の名だといつていた。話はまた同じで、婆様をかみ殺した後、榎の梢に昇つていたのを鉄砲で射ち落とされた。その時にもかゝんという金属の音がしたが、落ちてきたのを見ると、大猫が鏡を手に持つて死んでいた。やはりいったんはその鏡をもって弾を防ぎ、しかも終わりには退治せられたのである。鉄砲といひ義太夫といひ道具は新しくなっているが、話にはもつと古い伝統があつたかと思う。伊予から土佐へ越える何とか峠の神木には、女が狼の群れに襲われて食い殺された伝説があつた。樹上に鏡を手

にしてその光を狼にさし付け、登ってくるのを追い下していたが、狼が偽って退き去るのを見て、あらうれしやと鏡をからんと投げすてると、たちまちもどつてきて女を攻め殺したというのである。誰が見ていて語り伝えたかもわからず、またいつのころからこうなつたのかも、私にはまだ突き止められない。

五 高木加門の妻

土佐と越前との狼女房の伝説において、また一つ不当に看過せられている特徴がある。佐喜浜の鍛冶屋は、今では屋敷跡だけであるのに、子孫代々背中に毛がはえていたと伝えられている。越前でも葛蒲池の孫右衛門方では、代々の子孫背筋に狼の毛がはえていたと記してある。むろん先代の家刀自が狼であつたからというのであろうが、これは退治せられたということと、いかにも両立しがたい言い伝えであつた。緒形の一門では東国に移住した者の末までが、土地で本家と立てられる者の限りは、いずれも身の内に鱗に似た痣があるのだ、一部分ざらざらとしたところがあるのだといううわさを、格別迷惑がりもせず承認していたのは、古い信仰のなごりであつた。池の主に見込まれて嫁入りをした娘の家などというものが、今でも存外に知られて榮えているのは、これもいわゆる竜婿・蛇婿に対する前代の考え方が別であつたからである。最初から「かちかち山」の狸同然の言い伝えであつたなら、かりにその怪物に実子があつたとしても、こういううわさは公けには否認せられたであらう。だから私は右両地の伝説が、かつては今ある

ものとだいぶ異なっていたことを、これによって推測しようとするのである。

それにはちょうど似つかわしい類例が一つある。但馬は越前といろいろの点において、関係の深かった国であるが、かしこには養父郡の宿南村という処に、加門塚の伝説なるものが残っている。現在民間に流布する形は、自分にはまだ確かめる機会がない。『加門記』という一冊の記録があつて、これは稗史風に書きのぼしてあるが、大要はそこの中からでもうかがわれる。高木加門という郷士の妻、ある時山路において、わなにかかった狼の命を助けてやったところが、狼はこれを徳としてその女の死後、継母を食い殺してその姿を仮り、いじめられていた先妻の子を愛撫する。それからいろいろの葛藤があつて後、突如として例の犬梯子の事件が起こるのである。ある一人の武者修行の士、夜中狼の群れに襲われて、木に登つてこれを避けると、狼は肩車をして迫りきたつたが、一匹分だけ届かぬ。それでは加門殿のかみ様を呼んでこいといつて、やつてきたのが古狼であつた。それを樹上に待ち受けて切り殺し、やがて高木家を訪ねて、はじめて狼が母に化けていたことを知つた。その狼を葬つたのが加門塚といい、これは実子でないから、むしろ背筋の毛の話はないのである。

『加門記』には名刀の紛失などという趣向があつて、どこまでが筆者の文芸であるのか、またそれだけが以前の口碑か、実際は明らかに区分することがかたい。しかし少なくとも路傍の加門塚は存し、いわゆる千匹狼は隣国にも行なわれている話だから、全部が作り話でなかつたことのみは確かである。名古屋の菱屋半七翁の『筑紫紀行』(巻九)、享和元年六月十日の条にも、偶然にこの地の記事がある。すなわち但馬の養父宿を過ぎて、

一丁ばかり行けば、左の方に水谷大明神の宮あり。こは神名帳に但馬国養父郡水谷神社とある御社か。坂を登りて、隨身門のあるより入りて拝す。門は草葺、拝殿本社は檜皮葺なり。左の方に猫さまの社とて小さき宮あり。宮の下なる小石をとり帰りにて、家に置くとときは鼠を辟くといふ。又しばし行きて五社明神の御社あり。是は神名帳に但馬国養父郡夜夫坐神社五座とある神社なるべし。今は藪崎大明神と申すなり。また一丁ばかり奥の方に、山の口の社といふあり。是は狼を神に祭る御社なりといへり。故に此神は狼を遣ひたまふといふ。社僧の居所は水谷山普賢寺、本尊は薬師如来なり。さて大道を帰りて五六町行けば藪崎村、養父宿より是まで二十五町云々。

といっている。このお猫様を末社に祭つたというお宮は、どうも式内の水谷の神社ではなさそうである。実地に行つて見ぬゆゑ詳しいことはわからぬが、『但馬考』には式内の水谷神社は、これより一里余り東の山手の、奥米地という部落にあると出ている。ところが古く大田文の時代前からこの養父市場の養父神社、すなわち前の紀行文に藪崎大明神とあるものを、養父水谷大明神と称え申す習わしがあつた。そうして狼も猫もともにこのお社に付属していたらしいのである。鈴鹿翁の『神社叢録』には『但馬考』を引いて、

末社三座あり。末社のうち山口神社を、俗に狼の宮と称す。麁鹿の田畝を害する時これを祈る。加地屋敷は猫ノ宮と云ふ。鼠の蚕を害することを防ぐ。

と記してあるのだが、その猫の宮の所在が誤りであつたか、または引つ越していたのである。桃井塙雨の『笈埃随筆』は、この『但馬考』よりはよほど前に出たものと思うが、それにもまた同

じ狼の宮のことが載せてある。

この山（妙見山）の後の麓に養父明神在す。狼を使命として宮前に大石をもて狼の雌雄を彫造し、鉄鎖をもつて繋いで左右に有り。諸社の高麗犬の如し。隣国の村々にて猪鹿の為に田畑を荒らさるゝことあれば、此明神へ参り立願して、狼を借り用あんといへば、社人かの繋ぎたる鎖を解いて其願にまかす。然して帰れば猪鹿の荒るゝこと無し。斯くして後又御供神酒を奉りて礼参す。誠に珍らしき事也。

養父の五社大明神と妙見山との関係は、この記事の中にも少しも説いていない。現在はもちろん二処の信仰は分立しているから、おのおのその社伝縁起の文字によって、連絡を見いだすことは不可能であろう。こういう問題こそはもう一度、土地人の感覚について、今のうちに尋ねておく必要があるのである。水谷神社や夜夫坐神社五座は、かりに『延喜式』以来の故跡のままとしても、狼に関する信仰までが、ここに居付きのものとは考えがたい。もしも他から移ってきたとするならば、私はあるいは妙見山の方からかと想像している。中国地方の霊山崇拜は、妙見様になっているものが数多く、その中でも養父と城崎の両郡の境にある妙見山は、自分の故郷あたりでも信徒が多かった。これに関東の三峯出流山、または遠江の山住や春野山と、同種の信仰があったかかったかは、調べてみてもわからぬということはあるまい。他日これによって私の仮定の、あたれるや否やを試験してみたい。なんにもせよ高木加門の女房が狼であったという話には、土地の旧伝を下染めにしていたことは考えられる。いわゆる加門塚の所在は養父の狼の宮から、川と小山を隔てて西北に二里ばかりの処であるが、これも宿南の本村から、三谷という部落へ越え

る山路のかたわらで、あるいは妙見山への一筋の登路ではなかったらうかと思う。三谷は現在にはミタニといっているが、式内の水谷神社はここであつたかもしれない。もしも山奥の伝説が旅人に珍重せられて、おいおいに平地の往還のほとりへ、出てくる傾向が普通であるとしたら、ひとり山口の狼神社だけでなく、またその近くにお猫様の宮があつて、その地が加地屋敷であつたというところも、注意をしなければならぬ一つの事実である。それを地方の人たちが現今はどう説明しているか。仔細に比べて見た上でないと、土佐の野根山だけを断定することはできないだろう。

六 朝比奈氏の先祖

狼を単に山の神の使命とするだけでなく、直接に祭っている社も但馬以外に多い。そうしてその中には小児の保護者として拝まれている例もあるのだから、いよいよもつて加門女房の物語が、ただ一度きりの趣向ではなく、よつてきたところあることを察するのである。たとえば駿州志太郡の仮宿村、東海道の間部駅から十六町ほど離れた岡の上に、内宮権現という社があつた。この地もと岡部の御厨の域内であつて、すなわち神明の社なるべしという学説あるにもかかわらず、俗には狼明神と称し、狼を神に祭るとも伝えていた。これにも街道筋の表向きの話と、在所での話と少なくとも二通り以上あつたが、岡部の宿の若宮八幡の社伝かと思われるのは、昔中納言兼輔卿罪をこうむつてこの国に流寓し、朝比奈川の辺、松山の麓に年を送る。一子なきことを憂えて八幡宮に祈願をこめ、通夜満願の帰るさに小坂を過ぐるとき、狼あつて錦の衣をまとえる赤

子をくわえきたり、この卿の前に置いて去る。これを抱き上ぐるに、肩に狼の齒の痕がある。奇としてこれを館の内に養育したまい、後帰京の際にその子を朝比奈の郷に残し止めらる。成長して吉泰と名のり、武勇俊傑の人なり。かの狼を祭って内宮権現と崇めたてまつり、あるいは狼明神と号すとある。

この条は阿部正信の『駿国雜志』から転載したものであるが、同じ書にはまた、いま一つ別の話が録している。朝比奈氏の本貫はこの郡の朝比奈村で、殿という大字がその故居だということになっているが、そこに代々朝比奈三郎左衛門という旧家があって、みずから朝比奈三郎義秀の後胤と称していた。しかもこれにも同種の家伝があったと見えて、家督の男子には必ず背に犬の齒痕が三つあったということは、豊後の緒形氏なども相類する風説であった。家がわかれば言い伝えもまた少しづつ違っていくのは当然で、そのいずれが正しく、いずれが誤っているかは、今日ではもう問題でない。われわれは単に一門の各家に共通して、永く狼を尊崇する習慣のあったことを認めれば、すなわち足るのである。右の仮宿村の狼明神に奉仕した遊行派の万福寺は、後に大名になった朝比奈家の菩提所でもあった。中納言兼輔卿の拾い児ということは信じがたくとも、この家が狼の徳を感じて、これを祭ったことだけは想像しえられ、したごうて「狼」は「岡部」の転訛だろうという新風土記の説は、こじつけどいことになると思う。この点は今日各地に分散している朝比奈という旧家の、伝承を尋ねてみたら、なお確かになるであろうが、出羽の荘内藩でも、朝比奈忠三郎という大力の武士があった。その家の先祖、ある時狼が喉に骨を立てて困っているのを見て、勇敢に口の中へ手を差し入れて抜いてやったところが、後にその

お礼に赤子を蘆の葉に包んで持ってきた。それから子孫繁昌したといつて、家には狼の祠が祭ってあったことが、鶴ヶ岡の旧事を録した『柳塘紺譚』という書にも見えている。

秦の大津父の出世譚以来、狼が人の恩に報いた話はかぞえきれぬほどあるが、中でも多いのは、喉の骨を抜いてやったという例であった。日本では不思議にそれが家々の伝説に化さうとしている。たくさんさんの例は記憶していないが、近ごろ出版せられた『飛騨風物記』の中にも、益田郡竹原村御厩野の今井弥左衛門方で、延宝元年（一七三三）の出来事であったという。ある朝下女が水を汲み出ると、一匹の老いたる狼が現われて、しきりに憐みを乞う様子をする。主人立ち出でてこれを見るに、のどに何かの骨を立てて苦しむらしい。よって手拭を手に巻いて口中に入れ、これを除いてやったら帰っていった。それから十数日後の夜、門口に不思議な音がするので出て見たところ、先日の狼が轡を前に置いてぬかずいている。あの時の礼であらうが、それにも及ばぬにと言えば、ほどなくいずれへか姿を隠したといつて、今にこの家にはその轡を持ち伝えているとある。同郡中原村の焼石与五郎が妻は、同じような事で狼を救うたところが、その礼に六尺余りの鉄のくさりを残していったとは、妙な音物である。とにかくに今から二百五、六十年前までの狼は、これほどにも律義懇切なものとして信用せられていた土地があった。私は土佐の産の杉の化け狼の伝説を、案外新しい変化のごとく考えようとする理由は、こんなところにもあるのである。以前『山の人生』と題する小著において、すでに片はしは述べたこともあるが、人と狼との昔の交際は、必ずしもこわもてとか、きげん取りとかいう程度の、軽薄なものではなかったのである。その中でも興味のある古いしきたりは、狼の産見舞と名づけて、一年に一度、食物を器に入

れて、山に持っていくて狼のおりそうな所に置いてくることであつた。これが狼に会つて手渡しするのでもなければ、また実際に安産のあることを確かめての上でもなかつたのは、少しくその言い伝えを注意して見ればわかる。東京の近くで有名なものは、武州秩父の三峰さんであるが、これは『三峰山誌』にも、また『十方菴遊歴雜記』（三篇中巻）にも詳しく出ていて、近ごろまで行なわれていた式であつた。ある夜狼の異様にはえる声を聞くと、それで御産のあつたことを知つて、翌日は見舞いにいくのだといい、また山中に特に清浄に草木を除いた一地のあるを見つけて、そこに注連を張つて、酒と食物を供しにくるのもいい、これをまた御産立の神事ともいつていた。『新篇武蔵風土記稿』（巻八十）三峰村大木の行屋堂の条には「是を御大祭と名付けて毎月十九日に行ふ」ともある。十九日は知っている人もあろうが、子安講ともまた十九夜講ともいつて、村の女人が子安神を祭る日であつた。これが後には一年に一度になっただけである。

西国の方ではいかがであるか、まだ聞いていないが、狼の産見舞は東日本では普通であつた。相州津久井の話は、鈴木重光君も『内郷村話』（四四頁）の中に報告している。重箱に赤飯をつめて穴の口まで持参して帰つてくると、返礼には兎や雉子などをその重箱に入れて、夜の間に返してくるそうだという説さえあつた。三河の長篠では今九十何歳の老女、若いころに近所の女房たちとともに、赤飯をたいて山の犬の産見舞に行つたことがあると、話したことを早川君も記している（『猪・鹿・狸』七七頁）。野州那須郡では清水文弥翁の『郷土史話』に、毎年四月八日から月末までのうちに、狐様・山犬様の初衣祝と称して、村内各戸より米銭を集め、油揚げ・わかさぎなどを調理して狐塚に供える。これをするのは狐・山犬が、いたずらをせぬようにという趣意であ

つたところ。この記事はちょっと混乱しているから、もう一度聞き合ふ必要があるが、とにかくに狐だけではなく、狼にも物を贈り、それを初衣祝と名づけていたことはあるらしいのである。陸前の狼河原をはじめとして、狼をよく祭らぬと野獸の害がこわいといつて、食物を供していた習慣は方々にあるが、そのみでは特に人間と同様に産養いの礼儀を守つていた理由は解釈しえない。関西にひろく行なわれている寒中の狐施行にも、稱荷下しを頼んで狐の口を寄せる時、まず御眷属が何人あるかを尋ねて、食物の分量を多くし少なくするのは普通であるから、この二つの贈遺は起こりに似寄つたものであつたらしい。そうして自分はその起原を山の神の信仰と見ていたのであるが、これも『山の人生』にあらまし述べたから、この場合にはあまり深入りをしてはならない。とにかくに狼に御産の連想のあることだけは、少なくとも土佐の野根山のみ偶然ではなく、それが駿河の朝比奈氏の祖先のごとく、人に非凡の子を供与した伝説などのあるのを見ると、鍋をかぶつてきて産婦をくらおうとしたという類の変化譚などは、むしろ後代の複合にもとづく一種の新展開であらうと考えられ、したがうてこれ一つからその由来を断ずることは、むりということになるのである。

七 狼と赤兎

飛驒と山一重を隔てた信州の北安曇郡にも、人と狼の交渉した記録は多く存し、それがないいはまた平和なるものであつた。『北安曇郡郷土誌稿』口碑篇の一・二に載せられたような村々

の話は、今後もなお集積することができそうである。小谷の北境に近い中土村の奉納では、山奥に犬のへやという洞があって、そこには狼が住んでいた。昔は狼のことを山の神様といい、その山の神が子を産むと、ウブヤシネ（産養い）といって団子や餅を重箱に入れて、その穴の口に置いてくる習いであった。そうすると重箱はきつとその晩のうちに、返しにきたものだと伝えられている。北城の村でも狼が子を産んだときは、お七夜には赤飯をふかして重箱に入れて持ってきて、どうか子をふやしても悪戯はしないでくれと言って帰ってきた。それゆえにこの辺の狼はしばしば夜路を行く人を護送して、なんの害もせず去ったという話が多い。ある時村の女房が背の子をこの穴の中に落として、非常に悲しみ憂えて一人で帰ってきたが、翌朝戸を開けてみると、家の戸間口に、ちゃんとその嬰兒がつれてきて置いてあった、というような驚くべき逸話さえも伝わっている。狼の信用は最も厚かったのである。

あるいはまたこういう話もある。美麻村千見区に花戸という沢があって、村の下条家の持地であった。岩穴に狼が子を産んだので、産養いに赤飯を持たせてやった。その下男が狼の子を見て、好い子をたくさん産んだな、おれに一匹くれねえかと口から出まかせを言ってもどつてくると、翌朝は戸口にかわいらしい一匹の狼の子がいた。そうはいくものの飼うわけにもいかぬので、またその子を狼の巣の中へ返しにいったという。この種の世間話の発生した事情を考えて見ると、単なる目の迷いや思い違い以上に、なおこれを受け入れた聴衆の心理にも、今までかえりみられなかった奥深い何ものかがうかがわれる。いわゆる狼の巣のごときは、おそらくは動物学者の管轄すべき知識ではなくて、久しい無意識伝承に養われた一種深山の霊地であったゆえに、容易に人

をしてかかる空想の光景を胸に描かしめえたものと思う。同じ郡社村の丹生子においても、ある家の下男がこの山犬の巣を荒らしたところ、その後この男が入れた刈藪を田から引き出してあったり、馬をひいていつてつないでおくと危害を加えたりした。そこで村の人たちが集まって思案をして、山犬のために七夜の祝をしてやった。まず赤飯を炊いて藁の上に盛り、これを山犬の巣のそばに供え、村では酒宴を開いてにぎやかに歌いはやしたら、それから悪戯をしなくなったといっている。狼のために産屋の日どりをかぞえるなどということはできるものでない。これはなんでも人間の七夜産養いに該当する行事を、かれのためにも執行したということである。しかも他の多くの獣類については少しも問題にせぬことを、特に狼の飲心を求めんとする場合のみに、必ず守ろうとしたのには理由があったはずである。つまりは狼の子ということに、今は忘れてしまっている深い意味が、もとはあったらしいのである。

狼の穴に取り落とした背の赤子を、夜間にくわえてきて家の門に置いていくれたという話なども、今日はすでに実際あった事として語り伝えられ、或は何村某の何代前の息子がそれだっなどともいっているか知らぬが、それはやはり駿州子持坂の、朝比奈家元祖の伝説と系統を同じくするものの、単なる話し方の変化でなかったとはいえない。狼が人間の憂いを察して、かくまでの親切をつくしたとは、よくよくのことだからである。「甲斐昔話集」に土橋君の聞き書きしているものは、これに比べるとずっと自然に近いが、それでも聞く人が、今では昔話としてしか受け取らぬようである。甲州ではかつて炭焼が山にともものうて行っていた二歳になる子を、半纏にくるんだままで狼に持っていかれたそうである。年経て後発見して家に連れて帰ったが、

全身に毛が生えていて山の物ばかり食い、どうしても里の食事になれかねて、再び山に入っていた。あんなのが山男というものになるのであろうと、評判をしたそうである。狼が人間の赤子を掠めて岩窟に入り、飽満してしばらく生かしておく間に、無心に乳などを吸われて母性愛を生じ、そのままわが子とともに育てていた例が稀にはあるということで、現に南方氏は近年インドの某州の病院に、山からそういう子供を見つけてきて、実験したという記事を訳し示された。民俗の根原は大概みな幽玄であって、安んじてわれわれの推定を述べうるものはほとんど一つもない。したがうてこういう新たな自然科学の記録は、もちろん興味多く、また有力なる参考に相違ないが、さりとて狼と小児に関する日本の多くの口碑が、当初いずれも何人かのこれに似た経験に出発し、それが敷衍せられ、また類推せられて、これだけ分布し変化したと考えることも、実例が外国であるだけにいっそう骨が折れる。

ことに但馬の加門塚のように、母に化けてきて子を養ってくれた狼、またはこれと反対に産婦をくらおうとした狼などは、かりに国内にも時々狼の巢の赤子があつたとしても、それだけではまだなにぶんにも由来を解くことができぬ。しいてそう思つて説明をつけようとする、それは邪魔になるいろいろの語り草を、押しつけ軽く見るような気にならぬともかぎらぬ。ゆえにさしあたりは根本の法則がわからぬのもいたし方なしとして、まずひろく現存の事実、すなわち書いたものなり、口でなり、国々に伝わっているものを集めてみる必要があるのである。佐喜浜の鍛冶屋の子孫の背中の毛は、朝比奈三郎左衛門の家の代々の犬の齒形と、ぜひとも比照してみなければならぬものと思う。それはただ単に過去の奇瑞の記念、すなわち伝説の空なものでないこ

とを証する以上に、永くその家には世の常でない特徴の、伝わっていることを意味していたのではなかったか。土佐ではその家がすでに絶えてしまつて、いかに解釈されてもこれを争うこともできなくなっているが、朝比奈のほうではもとの形の保存に努力した跡がある。羽羽荘内の同族が大力の譽れを博したのも、駿州の本家が朝比奈三郎の末と称したのも、ともに狼明神の崇祀と関係のあることで、こういう異常出現の男子の末であるが故に、永く武勇の士を出すことができたのだと、我々人も信じていたことは察せられ、すなわちまた足柄山の山姥の子が金太郎であつたという話と、日を同じゅうして説かるべき昔語りであつたのである。

ただし狼がどこの家の子とも知れぬ子供を、錦の袍に包んでくわえてきたということは、それだけでも十分の神秘はある。もう一つ前にさかのぼると蛇息子や田螺長者のように、異類の姿をもつて世に現われたといい、または狼を生みの母として生まれたといつていた時代もあったかもしれないが、日本ではそれほど久しい昔から、そうまで言つては伝説として成り立たないような文化状態に達していた。そうしてただわずかに説話の一隅において、狼は必ず婆に化け、または養いの母となつていたことが、あるいはいわゆる葛葉信仰の一隅において、狼は必ず婆に化け、または養いのであつた。ローマ人の元祖が狼の乳を吸うて育ち、また突厥の王者が狼の族から出たという類の話は、異国にもさまざまあるらしいが、私はそれをここに並べる必要を感じない。南方熊楠氏のごとく本の不自由な田舎に住み、ひとえに博覧強記の力をもつて思いのままの例証をあげてこそ、大いなる驚歎をもつて迎えられる価値はあるが、なんの東京におり、索引をひねくりまわして、違い記録の片はしを抜き出して見せるなどは、ただ学問をめんどうくさく見せるこけおどし

ではあるまいか。人の空想がしばしば自然界にはせて、いろいろの鳥獣をも祖とし伴としたいうことだけならば、そんな材料がなくとも日本でも証明せられる。それを異民族から学び、または移したということは、そんな材料があってもやっぱりわからない。調べるならば国際的にも、平押しに進んで綜覧しなければならぬのだが、それまでには各地の事実がまだ整理せられておらぬ。それよりも実はわれわれの国内知識が、今はまだ中途半端というところまですらも進んでいないのである。なんの事はない順序が逆だ。

八 荒血山の物語

土佐の野根山の産の杉には、以前はいまいちだんと快活に、かつ勇壮なる伝説があったものとも私は想像している。それが今日のごとく陰惨にして血なまぐさいものに改まった原因は、必ずしも佐喜浜の鍛冶が退転したためばかりではないようである。これには昔話というものの、伝説とは反対にむしろ信じがたい事件のほうへ、走っていかうとする傾向を持っていることを考えなければならぬが、説話の狼婆はこの地方に運ばれて、産の杉伝説の鍛冶の母と結合する以前に、もうよほど近世風の潤色を受けていたと思われる節がある。注意すべき一つの証跡は、『国民童話』に採録した一伝に、狼は産がきらいで、その血のけがれのある者を送ってくるものだである。横田亀吉氏の報告の中にも、狼は女の気を忌み、産室に臨んだ人は無事に通さぬという習性があり、それで山中に妊婦を介抱した武士を襲うたのだとある。『南路志』のほうには記さぬようだが、

土地ではそういう人も確かにあったのである。狼の送るといふことも前に掲げたごとく、その解釈が時とともに変わっている。今日はただ飛びかかって食うためにころぶのを待つといい、その以前には謹慎する者には害なしといい、またその以前には護衛をしてくれるようにもいって、礼を述べ食物を与えて門から返したという話もある。したがうて血の穢れある者を必ず送るといったのも、本来はどういう趣意であったかわからぬのだが、とにかくこれに尋常でない関心を狼が持っていたといえ、話はしだいにものすごい光景のほうへ、展開していくこともありそうに考えられる。

あるいはまた狼は情欲の淡い獣だという説がある。奇妙な実験だが、狼は犬とちがって、雌雄なれむつづところを人に見せぬという話と、関係のあることだけは推測しうる。そうしてこれを見たために、危害を受けたという話も流伝しているのである。川野正雄君の『小豆島民俗誌』の中に、昔話として次のような一条を採集している。昔旅人がある山路を通って、狼のつがうところを見た。宿の主人にその話をすると、それはたいへんなことだ。きつと見た人を捜して仇をするに違いない。こうしてのがれるより途はないと、教えられて松の太木に登り、木の下に盛んに火を燃やしておいた。そうするととはたして狼の群れがやってきて、太い尻尾に水を浸してきてその火を消し、それから松の根をほりはじめたが、そのうちに夜が明けたので、ようやく退散して助かったとある。この結末には、あるいはいまま少しか曲折があったのを忘れたのかもしれぬ。

木に昇って危きを助かるというのは逃竄説話の常の型で、日本では「牛方山姥」、「天道さん金の綱」、また「口無し女房」などにも共通している。だからこれを目標として狼の話を研究する

のはいつこうつまらぬが、狼の秘密を見たという話にまで、この個条が延長しているだけでは意味がある。『岡山文化資料』(二ノ六)の故島村君の報告にも、ある人がこれを見てからにげ帰って、土蔵の二階にひそんでいると、狼の群れが下からカタクマ(肩車)をして登ってきた。窓の鉄格子のお蔭に命を助かったという話を載せ、だから狼のつぼんでいるのを見た者は、さっそくあたりの棒切れを杖に突いて、盲人をよそおうて何も見えなかったことを示さなければならぬそうだといっている。『甲斐昔話集』には左甚五郎が山犬のつるんでいるのを見て、山犬に襲われて宿屋に飛び込み、亭主に教えられて畳を高々と積み重ね、その上に登って刀を抜いて振りまわし、やっと追い払ったとあるのがこの類例であるが、どれにもこれにも「何屋の婆殿」は呼んできていない。左甚五郎はこの名匠が微行をしたという話が、ちょうど他の地方の宗祇法師のように、連鎖譚として行なわれているため、格別狼ということとは関係がないらしい。われわれにも心づかれるのは、山の奥の誕生ということが、特に日本の前代国民にはゆゆしき大事件であって、それがいつの間にか山の犬によって代表せられ、いったん信仰がやや衰えると、しだいにこの種の興味を別途とした説話に展開して、ついにはこのような珍しい形態をも、普及せしむるにいたったらしきことである。もちろん材料がまだ不足だから、精細に変化の過程をきわめることはきたいが、少なくともこれが荒血のけがある者を送ったという土佐などの口碑と、無関係に発生したものという人はないだろう。

是も『山の人生』に一応は説いておいたが、昔は愛発の二字をあてた越前のアラチ山の峠路に、神秘なる神の誕生があったことは『義経記』の流布本と、浄瑠璃の『十二段草子』と双方に出て

いて、二書の筆録には何ほどの年処を隔てたか知らぬが、その間の改訂にはすでに驚くべきものが認められる。要するに物語は古きをいとい、意外をもつぱらとして、しかも今日のごとくまるまる新しいものを持ってきたては聞く人が承知しなかったのである。奇抜ではあるけれども、野根山の産の杉は、やはりまたこの荒血という印象深き語に誘われて、古来幾多の歌比丘尼等に、もてあそばされていた空想のかすであった。近い例としては東北の地方学者が、時々問題にする写本の『恋衣物語』江戸でも種に困った作者たちが、何度か借用していると思うが、臨月の妻を連れ旅の武士が、知らずして悪婆の家に宿を借り、惨虐に母子を殺されてしまう話などは、京都ではすでに『今昔物語』のころから、これを小説化しようという努力は開始していたのである。中央の文人が、田舎にある物を町に持ってきたがるのは、決して今にはじまったことではない。これだけに肝要なる山の中の御産ということが、はなはだ稀薄になっているから、別の起原だろうと見る人もあるが、それは水かけ論になるから、私はもっと中間の例の出でくるのを待とう。しかし少なくとも恋衣譚のいちだんと土佐のほうに近いものが、近世まで辺土には行なわれていたのである。いつでもわれわれの相談役になる菅江真澄翁は、その晩年の著『雪の出羽路』の平鹿郡角間川の条に、次のような口碑を録している。

慶安の頃ならん。ある浮浪人妊める妻をぐして、陸奥より爰に来とて、文字の山中にて其妻頻りに腹やみて子産みたり。すべ無う妻をいたはり、草をしきなど、とかくして日は暮れたり。夜半とおぼしく、しきりに眠萌しぬれば、かたはらなる岩を枕として臥しぬ。物の音するに寢覚めて見れば、己が家に年頃召仕ひとりし下女のさまして、何処よりか若き女の来て、ねもこ

るに妻を助けいたはるは、怪しき事と思ふほどに、産める子も妻もひしひしと咬みぬ。あな恐ろし。こは山姫なんといふものならん。憎きやつかなとだんびら抜放ち、妻子の仇と打掛くれど、そが身に立たず事ともせず、其眼の光ること鏡の如く、身の毛いよ立ち、或木のうれにかき登りて辛き命を全くし、夜明くるを待ちて木より下れば、妻が亡骸は骨のみ残りぬ。未ださるもの隠るひあらんかと爰を馳せ出でて人里を得て、十日二十日とここかしこにさまよひ、出羽国に来て平鹿郡角間川に至り、世の中の行末を思ひて、自らも浄土宗なれば浄蓮寺の弟子となりて名を権斎といふ。風の権斎とは異なるべし。権斎が山姥打ちたりし太刀は無名の二尺九寸にて、そは肥後守国康ならむといふ人あり。今ある人家蔵せり。その山姫と見しは辨などいふものにてやありけん。権斎角間川にて身まかれば、人々塚を築きて近き頃碑を建て、権斎遊士墓と誌しぬ。いづこの人か。九戸の城の落人などにて、名をあらはには語らざりけん。角間川の浄土寺に、遊士権斎が二人あろうとは思われぬから、この話の運搬者は、やがて後人によって話の主人公とも称せられたのであろう。もしそうだとすると『恋衣物語』の安達が原一つ家と同様に、これを文字山中の一本の樹木に結び付けただけが、この人の事業ということになるのである。土佐でも寺石氏の『郷土民俗譚』によれば、土佐郡領家郷の山中の往還に、七分までこれと似寄りの話があった。異なる点はただ山姥が狼の類となっていて、その故跡には老樹の代わりに夜啼石がある。今でも夜ふけに通ると赤子の泣き声を聞くといったのは、これもまたもとの子安神の霊地であったためかしらぬが、これは野根山のようにいわゆるハッピーエンドを持たなかった。なんにもせよこの説話は久しく周遊していたのである。それが一地に土着して、第二次の伝説となったことは、ちょうど花粉が蝶鳥の翼に乗って、次の叢に来てやすらうのと同じであつたらう。すなわちその果実はここに結んだのだから、その地の産といつてもとより可はない。

九 良弁僧正の杉

樹木の伝説は夜啼石などに比べると、はるかにその歴史がたどりやすいかと思う。石だと神代のころからそのとおりといわれてもいたし方がないが、産の杉ならば根株からでも年輪はかぞえられる。何ほど畸形の木でも、それがまだ森の陰の若木であった時代には、まさかその上で産をしたという伝説はともなわなかつたらう。そうすると起こりはまず新しいので、したごうてその一つ以前は何もなかったか、もしくは何があったかということが、当然の問題になってくるのである。私は古来有名なる昔話が、二種以上もここに落ち合つて念入りに結びついているのを見て、これには何かそれだけの因縁が、特にこの地には備わっていたものと想像する。この際新たに起こつたのでなからうと思うのは、佐喜浜の鍛冶屋の遺跡と、山中の安産の信仰とである。その信仰がもし狼をともしない、またある一人の姥を参与せしめていたのであつたら、地味はこういう伝説の根づいて成育するために、十分に肥沃であつたと言ひうるのである。鍛冶は元来木炭を利用する関係から、最も山奥の生活に親しんでいた。そうしてかれら独自の信仰があつて、かつてはその職業の便宜のために、計画的にもこれを常民の間に宣伝したと見えて、かすかながらその痕

跡は今に残っている。それがいかなる信仰であったかということは、以前「炭焼小五郎」の研究において、これを証明してみようとしたことがある。鉄の呪力はたしかにその一つの支援であった。婦女が齒黒めをはじめとする際には、まず金屋神の神威を認めなければならなかったから、これが生殖育児の上に、交渉を持っていたことも推測しえられる。屋久島の鍛冶屋が村一般から尊重せられていることは、たしか古い「人類学会雑誌」にも出ていた。若い子が魔物の種を孕んだと迷信して不安を感じる場合には、この鍛冶屋に頼んで鉄滓をもらい受け、それを柳の葉とともに煎じて飲むと下りるといつていた。今はその風も絶えたであらうし、他の内陸の方にはまだ類例を捜しあてぬが、これはもう少し根気よく、またややまわり遠い方法をもっておいおいに尋ね近よるべき問題であると思っている。

だから現在のところでは、まだいたって心もとない仮定ではあるが、私は逆に土佐の東境のような伝説の存するを見て、鍛冶の母なるものが今日の産婆の前身、すなわち半ば信仰の助けを借りて、婦女産褥の悩み憂いを、軽くする役目を持っていたのではないかと考えている。そうしてその祭式にもなる語りごとの中に、山の神が丈夫なかつ幸運の赤子を授けたという、古い伝承をくり返していたのが、かれらの零落とともに、その内容もまたしだいに荒唐無稽に墮したのではないかとも思っている。とにかくこの場合はかりは、山中の御産は安産であり、また特に男の子が生まれたと伝えているのである。そうしてその婆の子孫に狼のしるしがあつたということも、古い話のなごりとしてならば存在しうるのである。丹後の由良の長者を山莊（産所）太夫と呼んだように、話の主人公と話し手とはよく混同せられる。すなわち極端なる汚名を後に留めた

佐喜浜の狼婆なども、実は狼の話をするただの婆であり、また一種の権者遊士であつたかもしれないのである。

狼が子をくわえてきたという話は、狼に拾われてその乳で育つたという話とともに、どうしてもいま一つ以前の形が、なくてはならぬような奇瑞である。人間が鳥獣の腹から生まれるはずもなく、またいったん動物の形をもって世に出たものが、中途から並みの人に変わるものでないという考えが起つて、日本でも早期にこの口碑は改定を受けているらしいのである。昔話は誰だつて信じて聞いた者がいないから、それが分立して流布するまで残っていたならば、「田螺息子」や「蛇太郎」の説話のように保存せられたかもしれないが、われわれの信仰はそれよりも前に改まって、少なくとも中央の社会では、狼は人間の子を生まぬことになつていたのである。別の語でいえば「葛の葉」や「竜宮女房」の話と手をわかつていたのである。鴛が人間に子供を供給した話は外国にもあるということ、ボルテ・マッケンゼンの『昔話辞彙』にも例を並べているが、わが国ではまた別種独立の発展をとげている。たとえば南都東大寺の良弁杉は一本しかないのに、鴛につかまれてきた赤子の産地は、山城の多賀に江州の志賀、または相州などと数処にある。そのまた相州というものも『新編相模風土記』には阿布利山の伝説を採用し、今日はこれがいちばんによく知られているが、『新編鎌倉志』や『鎌倉旧蹟地誌』では、由井長者の染屋太郎太夫時忠の子であつたといひ、その出来事の場合も鎌倉であつたようにいう。ところが良弁僧正の異常誕生と母子再会は、古いというのみで、また一種の「恋衣物語」にすぎなかった。台本を持たない以前の語り手は、行く先々でありそうな近くの地名に挿しかえていたので、その残形は今で

もまだ口伝に伝わっている。『甲斐昔話集』では場所は駿河国、茶つみの時に畠のあぜに置いていたらいい、その子は大和国の東願寺の小僧になっていたといっている。『聴耳草紙』の長須田まんこの話は、飛んでも陸中国より外へは行かず、やはりまた十三年目に慕峠の地獄山という所で再会しているが、その子がやはり名僧の未成品であった（ついでだからたった一言、この話の母の名をマンコといっているのは、『曾我物語』に対する有力な暗示である）。それからこの話の前半だけならば、内田氏の『南総の俚俗』にも、クラッコ鳥の由来として、鶯に取られた子の母の悲しみを説いている。それは普通の聴衆にこの部分がことに印象深く、たまたま鳥（オウソウ）の生（ナマ）の説話と結合して再現しただけで、別にそのような伝えが独立してあったのではないことは明らかである。

奈良の良弁僧正はこれに比べると、ただいくぶん改訂が少なく、人望はるかに多くて、よりひろく行なわれていたというまでである。『気仙郡誌』に採録されている竹駒村の羽繩（ハヅ）氏の家伝では、牧場の牛を襲う大鶯を防ぐために、主人が牛の皮を身にまとうていすると、鶯がつかんで遠くの離れ島へ持っていったと落としたとなっており、鮭の魚の背に助け乗せられて、再び家にもどってきたといって、むしろ鮭を家の神とした説明に付随した形であるが、これにも家々の少しずつの変化があつて、中には鶯にさらわれたのは娘であり、その鮭の大助にかたられて女房になったという話もあるそうだ（『聴耳草紙』三五〇頁。作菴溪翁の『閑田次筆』には、摂州高槻の落士鶯津見某、鶯に掴まれて助かった子を祖先とする。今ある鶯見七郎太夫はその子孫らしい。泉州堺の旭蓮社の開祖玄恕上人も、鶯にとられて助かりし人なり。たぐいある事にこそなどとい

っているが、この比類は遠く『日本霊異記』の世にはじまっていたことには心づかなかつた。『霊異記』の「汝鶯瞰残云々」は、『今昔物語』（卷二六）には「己は鶯の食ひ残しぞかし」と出ているから、地名はわずかわるが同じ話の和訳なることは疑いなく、『水鏡』の皇極天皇の条にも同じ話が転載せられている。どうして一つ伝えのみがこう永く珍重せられたらうかは、文献の系統を調べただけではたぶん解しえまい。おそらくこれがあの時代久しい間の、かなり有名な民間説話の一つであつたために、かえつてこのように記録の根拠をたいせつにしたのであつたらう。

良弁僧正の伝説が起つて後も、奥州の片田舎はもとより、都に近く住む鶯見某の家でも、家あるかぎりはおおこの昔語りを捨てることができなかった。これがまた伝説の文化史料として、最も丁寧な取り扱いを受けなければならぬ理由で、われわれはこの幾多の近代式合理化の背後にも、なおその最初の動機を見つけうる場合が多いのである。

最後にもう一つだけ、この説話と文献との關係を述べておきたい。伊豆三宅島の『三島大明神縁起』に、伊予の神様がこの島に渡つてきて、地を乞うた一条を載せている。その詞に「我は是れ凡夫にては伊予国三島郡に立花の清政と申せしが、四十に余るまで子を持たず、大和国初瀬の十一面に籠り願すれば、夢の御告に汝に於ては子とては無けれども、我が持つ所の宝に換へて子種を与ふとありしより、男子一人設けて喜びする所に、伊予国しやくの浦にて鶯に取られ云々。十六年の間山中に籠り、我身に願のあるまゝに、人の願を叶へんことを仏神へ祈りしに、其功積りて垂跡となる」云々とあるのである。これが室町期の多くの語り物、古くは安居院の「甲賀三郎」から、末々何の本地の名をもって文筆に保存せられてあるものと、様式において一つである

ことは誰の目にもわかるのだが、三宅島ではこれをたいせつな社伝として信じていた。人と神靈との仲介を業とした者が、同時に多くの説話の運搬者であったことは、しばしば純朴な人の住む土地において、意外なる伝説の改造をなしとげていたのである。伝説と説話との相違は、昔の田舎者とても知らぬはずはなかった。現に家々の祖父、祖母の昔語りは、それ自身愉快なる空想の開展を示している。ただ新たに外から持ち込まれた説話のみは、しばしば古風のままだに信じうべき形をもつて説かれたゆえに、聴衆は当然にこれを信じたのであった。一個猫、狼の旅人を襲うて破れたという民間説話が、ある地では半ば以上伝説と化して信ぜられ、また他の方面では、依然として昔話のままでてはやされているのは、主たる原因は話者の相異と、これを受け入れたる土地の事情で、一々の場合に必ずそれ相応の変化が生じたのである。そうしてそれはことごとくみなわが日本国内の、中世以後の国民の所為であった。知らずテオドル・ペンファイ*の流を汲んで、今なおインディアニストの口吻をくり返そうとする学者たち、これをしも書冊文字のただ一片の蘆の葉に乗って、はるかに西天より漂したものと、断定するの勇氣ありや否や。

(昭和六年十月、「郷土研究」)

古屋の漏り

猫から狼への話の移りかわりは、どう考えてみても珍しいことであった。将来この問題を解こうとする人のために、もう少し材料を寄せ集めて、あらかじめ二重の労力をはぶいておくことも必要であろう。

姥が狼であったという例は、越中にまで及んでいた。『肯構泉達録』(卷一五)婦負郡駒見村の条にいう。「昔此村にヨウユウといへる者あり。其家に久しく使ひし姥、狼の化けて人となりをしと也。或時山伏の夜ふけて呉服山古阪を過ぎ来りしに、狼の群来り山伏を纏はしければ、山伏怖れて喬木に攀ち上りけるを、狼あまた重なり、其上に姥跨がりて山伏を引下さんとす。時に山伏短刀を抜き、姥が肘を打落しければ、重なりたる狼ちりぐになり遁失せたり。夜明けて山伏樹より下り、駒見村を見かけ暫く休らはんと立寄り、ヨウユウが家に入りけるが、彼姥傷の痛みけるにや、呻き号び打臥し居たりしが、山伏を見るや否や逃げ出し、それより行方知れずとなる。是れ御郡の旧記に在り」云々。腕を切られたという点は羅城門などにも似ているが、話がただこれだけであったならば、姥が狼であったということも知れないはずであった。何かこの以外にも言い伝えはあったのである。同じ事実を『越中旧事記』には、また次のようにも記している。

「駒見村、此里にユウユウといふ老尼あり。夜は大となりさま／＼妖怪をなしけるが、或時山伏に足を切られそれより此里に住まず。其後三年ほど経て、射水郡あら山と云ふ所より、駒見の八

右衛門といふ人の方へ書状をこしたり。犬の手跡なりとて人皆之を見たりとなり」とある。二書はともに百数十年前の旧著であるが、そのころすでにこのように漠とした話であったのである。

磐城刈田郡七ヶ宿村は、伊達から米沢へ越える通路であった。「信達民譚集」(九六頁)は「昔この村湯の原の峠に、一人の鬼婆が多くの狼を手下にして住んでいた。旅人が通りかかると、まず狼を出して襲い殺させ、おのれはその衣類所持品を奪い取っていた。ある日旅商人が日の暮れにこの峠で狼に襲われ、急いで側の大木によじ登って難を避けると、狼は肩から肩に乗ってだんだんと追ってきたが、旅人が木の頂上まで登ったので、狼は数が足りないために届かなかった。その時どこからか白髪の老婆が走ってきて、狼の頭に足をかけて梢に達し、商人を捕えようとしたので、商人は刀を抜いて上から切り下すと、老婆は真逆様に落ちて死し、狼の群れは逃げ去った」とある。これも老婆が山賊の頭であることを知るまでには、まだこの記事以外の言い伝えを必要としたはずである。

安芸の可部峠の七つぎの松の由来談は、隣国石見の昔話として伝わっていた(「旅と伝説」四巻七号)。むかし江戸飛脚が朝早くこの峠の辻の宿屋を立ち、少し峠をくだりかかった時に、後から七匹の大きな猫が追っかけてくる。驚いてかたわらの松の大木に登ると、七つの猫はつぎつぎをして手を延ばしてきた。刀を抜いてその手を切り落とすと、七匹はみな逃げてしまった。飛脚はその手を風呂敷包に入れたまま江戸に行き、帰りにまた同じ峠の宿屋に泊って、ぜひとも家のお婆さんに会わせてくれと言って、しいて寝間に行つて会った(というのは何か心あたりがあったのである)が、そのことは話の中にはない。それからどうしても手を出さぬのをむりに出させてみ

ると、片手はなくて自分の包の中の手とびたりと合う。そこで即座に婆を切り殺すと猫の正体であらわした。三年以前にこの茶屋の婆を食い殺して、自分が婆に化けていたのであった。この事あって以来、その旅人のよじ登った松の木を、可部峠の七つぎ松と呼ぶようになった。安佐・山(やま)県二郡の境にある峠である。親方も子分も全部猫であった例が、こうして奥州以外にも存しているのであった。

越後弥彦の弥三郎が母の話なども、通例は空から襲撃をしたことになっているのだが、それにもまた狼と結託したものがあつた。「加無波良夜譚」第四八話などは、その点を除くと、他はまったく今までの弥三郎婆のとおりである。弥三郎は綱使い、すなわち田圃に出て鳥を捕るを業とする者であつた。ある日四頭の狼に襲われて松の木に逃げ上ると、狼はおいぬつなぎをして、次々に肩の上に乗ってきたが、一番下の狼が腰が弱くて、何度でもおいぬつなぎがくずれるので、今日はだめだ、弥三郎婆さんを頼もうと、一匹の狼が走っていく。はて弥三郎婆さんといったら、うちの婆さだかと思つていううちに、にわか西の空が大荒れして黒い雲がおおいかり、その雲の中から大きな手を出して、弥三郎の首筋をつかむ。やけになつてその手を押えて、腰の鉈を出して力まかせにぶったぎると、血がだらだらと流れる。おいぬはそれを見てかなわんなわんと逃げていく。そして大荒れもやんだので、弥三郎は切り落とした腕をかかえて家に帰ってきた。婆さ今帰つたで、今日は鬼の腕を取ってきたというのと、奥の間でうんうんうなつていた婆が、どれどれはよう持つてきて見せろというから、その針金のような毛のはえた腕を、婆さんの寝ている所へ持つていくと、婆さんはたちまち鬼婆の姿になり、いきなりその腕をひたつて、これ

は俺の腕にちがいないと言いながら、それを血がだらだら流れている自分の腕の切り口にくっつけて逃げていった。鬼婆が弥三郎の婆さを食って化けていたのであった。床の下をめくってみると、鳥獸や人間の骨が積み重ねてあった。『今昔物語』巻二七の獺師母成鬼擬噉子語においては、難に会うたのは兄と弟の二人、母の手は雁俣^{かまた}をもって射切ったことになっているだけで、母の寝所にその手を投げ込み、これは御手かと言ったとある点まで似ているが、ただ狼の群れのみは参加していない。そうして話のつなぎ目もこの「おいぬつなぎ」のように、まだ満足にはつながっていないのである。

私のいわゆる話の種の複合は、昔話全盛の世には決して珍しいことでなかった。ただそれがある職業者の作為でなく、普通家庭内の自然の変化であった場合に、そこに興味ある前代人心理の史料を見いだすのである。津村正恭の『譚海』という随筆は、かれが天明八年（一七八八）の秋田旅行の後に成ったものと思われるが、その中にはかなり珍しいあの地方の見聞が録せられている。同書巻九にある次の一節などは、また一つのやや意外なる暗示であった。

仙北郡の人、薪を伐りて山より帰るとき、夕になり雨降り出でたれば、辻堂の縁に雨やどりせしが、堂の中に人声きこえて賑はしく、暫しありて太郎婆未だ来らず、こたびの踊出来難からんなどいふ声せしに、又暫しありて婆来れるとて踊りはじめんといふ。婆のいふやう、暫し待ちたまへ人やあるとて、堂の格子の穴より尾を出しかきまはしたるを、此男尾をとらへて外より引きたるに、内には引入れんとこずむに合せて、尾を引切りてもたりければ、怖ろしくなりて雨の霽るゝをば待たず、家に還りて此尾をば深く蔵し置きたり。其後隣家の太郎平なる者の

母、持起りたりとて打臥してある由、此男見舞ひに行きて見れば、誠に心わるく見えける。如何にといへば痔の痛む由をいふ。怪しくて夕に又件の尾を懷に匿して見舞ひに行きてければ、尚心あしとて居たりしかば、それは此様なことの煩ひにては無きやと、尾を引出して見せければ、此母尾をかなぐり取りて、母屋を蹴破りてうせぬ。猫の化けたるにてぞありける。その母の骨は年経たるさまにて天井にありけるとぞ。

以上の話を聞いてすぐに思い出すのは、今も不思議に全国に行き渡っている「古屋の漏り」という寓話めいた一篇である。私の『日本昔話集』にもその例を載せておいたが、これが土地によって詳略の二種になっている。雨の降る晩に虎狼という獣が、人を食おうと思って、とある古屋の軒に立ち聞きすると、内では老二人が寝もやらず話をしている。「虎狼よりは、モリ殿こそこわれ」というのを聞いて、さてはこの世の中には、自分よりも強いモリという者がいるのかと、にわかには恐ろしくなって逃げ去ったという話。私などが幼年のころに聞いていたのは、もうこれだけをもって終わっていた。ところが九州でも、また奥羽の遠い田舎でも、話はさらにその後段があつて、このほうに小児は心をひかれていたのである。ちょうどその晩に馬盗人があつて、たった一匹あるこの家のやせ馬を盗もうとして忍び込んでいた。それが狼の足音を聞いて、馬が離れたと思つて、いきなり狼の背に飛び乗る。狼のほうではそれを「古屋の漏り」という怪物だと心得て、足を限りに逃げ走っていく。そうして空井戸に落ち、または路傍の辻堂の前で乗り手を落として、そのまま辻堂の中に飛び込む。そのあとが話はまた二とおりにわかれていて、狼が尻尾を盗人にとらえられ、恐ろしさに夢中になって尾をひつ切つて逃げたというものが一つ、いま

一つはその場へ狼が来合せて、狼々そこで何をしている。いやモリという天下一恐ろしい獣が、今おれに乗りかかってきて、この中に飛び込んでいるという。何がそのようなものがこの世にはあるうぞ。どれ私が見てやろうとござかしい狼は、長い長い尻尾をその中に差し入れて探ってみる。空井戸の盗人は上りたいために、また辻堂の中の盗人なら恐ろしさのあまりに、格子の目から入った尻尾をしかとつかんで放さない。狼は苦しがつて強く引くうちに、その尾が根元からぶつりと切れて、今のような形の尾になってしまった。すなわちまた狼の尻尾はなぜ短いのか、いわゆる「なぜ話」の一つの形になっているのである。

いわゆる「古屋の漏り」が狼よりもおアかない話などは、禅家か心学の説教にでもありそうな話で、その思い付きから見ても少しも古いものではない。ことに小児輩には貧窮の味などはわからぬから、そんな皮肉な寓意に悦喜するはずはなかった。それでは是非なく後段のおろかしい葛藤は付け添えられたものと思うが、しかも昔話らしく語るためには、やはり古来の格調を踏襲しなければならなかったのである。狼の尾はなぜ短いの本筋の話というのは、誰でも知っているように狐にあざむかれて、寒中氷の底で魚を釣ろうとした話である。これも狼の少ない北の方の田舎に行くと、狐が川獺にだまされて尻尾を水に垂らし、氷に閉じられて抜けなかったことになっているのだが、狐は現在あのとおり太い尾があるのだから、話は単なるある一個の冒険談になって、これを聞く者の胸にそのおもしろさが映らない。そこでどうしても狼とか猫とかのような、実際に尾のない者の古い歴史としたほうが、感動を与える力が大きかったのである。狼と氷とを一つ話に取り合わせえた国は、たぶん日本ばかりだろうということは、かつて私が説いた(昔話考七

九頁)。北欧の諸国の動物説話中には、尻尾で魚を釣ろうとした話は最も著名であるが、だましたのは例のとおり必ず狐、だまされて尾を失った者は熊より他にはなかった。アイヌの類話に於ても亦当然に熊であり、どうやら跡をつけたらこの両所の連絡は知れそうである。しかもわが国に入ってから狼の尾の釣りとなり、古屋の漏りの結末となり、さらに秋田県の仙北郡のごとく、踊ってしゃべって、身元を露顯した猫の話とも複合しているのである。これを尾が切れたという一点の一致によって、たちまち輸入と説くのが在来の比較神話学なるものであった。結果はあたっておろうとも、なおでたらめの責は免れない。それが「古屋の漏り」などという近世寓話を、発せしめたのではないからである。

右の津村氏の『譚海』より、わずか二、三十年後にできたかと思う『江戸愚俗徒然噺』を読んできると、江戸でも古猫が踊ったという話が、もう飽きられてもよいほどに古くさいものになっていたらしい。

我前かたの事、或家に行きければ、其時に前にいふ鍛冶屋の婆様といふ猫の踊ををどるを、武者修行の者退治せし咄をして居る所へ行合せ共に聞き居たる時、猫を殺す人の名を忘れて、は何とか申す修行者でござつたがと考へるとき、聞き居たる主人の申す様、それは毎度聞いたことが有りました。たしか古木花四郎といふ名の人では無きやと謂ひければ、いえ左様の名ではござりませんと考へて居たるは、全く自分誠と一図に咄すのと見えたり。主人の言ひたるは古き咄だらうとの名也。慎むべし。

と記している。猫の踊るという話に、もう鍛冶屋の姥を引き合いに出していたとすると、彼女

が産婆であり、狼の話の管理者であつたろうという、私の想像説は少し弱くなるが、一方に「何屋の婆さ呼んでこい」という狼群の人語が、かの「虎子どのが来ないば踊にならねア」という類の、猫の踊りの話からの借り物であることだけは、やや明らかになった。すなわちこの家畜の夜出て踊るという話があまり古くなって、おいおいとその兇惡の相を変化あらしめたものが、末すなわち芸州可部峠の猫のつぎつぎであつた。猫の爪の構造が木に昇るに適するか否かの動物学上の問題ではなかつたのである。猫が夜分に古辻堂の前などに集まつて、踊りを踊つたからとて、退治するまでの必要はない。それに堂々たる武者修業までが参与したということは、もうこの話の内容が少しずつものすくなくなつてきかかつていたことを反映する。狼はもとより踊りは不調法で、ただそのいちだんと殺伐の舞台にしか、代わつて現われることはできなかった。だから猫の話のほうが古かろうと思うのである。しかもこちらにも何かこれと近い言い伝えがなかったら、突如として二話の混同してしまうことはなかつたこともまた明らかで、これにも私は猫の話と同様に、かつてはいま少し無害平和なる昔話が、久しく流布してゐてこの複合の素地をなしたことと考えてゐるのである。

狼と鏡と火

狼が血に飽こうとする獣でありながら、不思議にそのけがれを忌むという口碑は方々にある。

伊予の北宇和郡から土佐へ越える杖立峠の頂上に、月のさわりのある若い女が狼に襲われ、高い木に登つたけれども、ついにその害を免れなかつたと伝えて、今も山中の神として祭られてゐる話がある。場所が幡多郡大正村大字折合字上源見山で、前の杖立峠と同じ路であるか否かは知らぬが、とにかくに佐喜浜村野根峠とは、この大きな国の西東の両端であつた。「山林公報」の古い号に、この国有林中のお磯杉の伝説を採録している。今あるお磯杉は百年余の二度生いで、伐株の上に成育しているとあるから、口碑の年輪はかえて産の杉より多いかもしれない。しかも今からわずか百六、七十年前にあつた事だといつてゐる。お磯という孕み女がここを通つていて狼の群れに会い、この杉の木の上によじ昇つて、鏡を出してその光で近よる狼を追つ払つてゐたが、一時にこれを退散せしめようとしてその鏡を投げ付けたために（伊予のほうでは、狼が一時逃げのいたのを見て、やれうれしやとその鏡を捨てたゆえにという）、狼はかえつて怪光の消えたのに力を得て、木に登つてきて磯女を食い殺した。時の人これを憐んで樹下に祠を建て、鏡を安置して磯の霊を祭り、神の名を春日姫と号した。後にその杉は切られて根株となつたが、世人はこれをお磯の杉といつて、今なお安産の祈願に効験があると信じてゐるという。食われてしまった女の軽率な挙動などは、誰が見ていたという者もないのに、こうしてわかつてゐるのはおかしいようなものだが、この時代には死人の霊に身を貸して、口を寄せ身の上話をさせてやる職業の女がおり、またその言を聞く者が疑わなかつたのである。口寄巫の無意識の言説に、再現せられてくる知識には限界があり、また一定の傾向があつた。したがうてほんの少部分しか違つて

いない同種の悲話が、二処以上の土地に記憶せられ、信ぜられていたとしても不思議はないのである。冷静にいうならば、この山中の古木のあたりに、古びた一つの鏡が落ち散っていただけであつた。それを手に取り上げて、ある種の女性が昼の夢を見たのであつた。それを山中の民が大きな感動をもって聞いたのである。

不思議はむしろその自由なる空想が、な何ものかに約束せられずにはいなかったことである。これが獵人を襲うたその家の古猫などの、かねてかぞえておいた矢玉の数を打ちつくさせ、今は安心と湯釜の蓋を投げ捨てたために、別に用意のあつた最後の一発で射殺されたという話と、下に似通うていたのも偶然ではなかったと思える。これはもちろん主客を顛倒した話ではあるが、そういう矛盾の指摘しえられるのは、文字のまんべんなき記録ができてからのことで、早期の聴衆には印象の特に強かつた部分、たとえば金属の器のからんと地に落ちたという類の光景が、いつまでも保存せられて、時あつて再現する傾きを持っていたのかと思う。鏡の光で怪物を追いつけたということは、他にもあるかと思うが狼については聞いたことがない。ただ普通よくいうのを火を防ぐがために火をたいていると、夜ふけに谷川の水に身を浸してきて、身ぶるいをし打って煙草を吸い付け、心をしずめるがよいという話などである。ところが自分は狼の話を集めはじめ、近ごろ奇妙に思うのは、数多くの世間話の一致であつた。その一つとして誰にでも気分も一服しようと思つて、近づいて火を貸して下されというところ、それが狼の日であつたとも、ま

たはウォーとうなつたので、びっくりして逃げたともいう話。これなどは私も父から聞き、またどの山村にもたいていは聞くことで、いずれもいふ人は実際あつたことのように話すが、たつた一度や二度ならばとにかく、そう何回もそんな事があるはずはない。それほどまた狼の目玉も、煙草の火とは似てもいらないのである。察するにこれも狼の連想として、始終人の胸に描かれるきらりとした光であつて、後に煙草の普及とともに、この形のみが特に有名になつたのであろう。だから鍋釜をかぶつて刃を防いだという猫の話なども、今ある例証の多さは必ずしも由来の古きゆえでなく、かえつて鏡を出して狼を追うたというほうが、前からあつたものかもしれないのである。猫の踊りに常連が一人おそいので、「鍛冶屋のおばばはどうしたろう」というなども、踊りと鍛冶屋とはあまりにも縁がないから、あるいはまたすでにこの金物を取り落とした話に、かぶれていたことを示すものかもしれない。もしそうだとすると、土佐の佐喜浜の鍛冶の姥の話が、近世変化を受けて、自身人を害する化け狼であつたと説かれるようになったのにも、また一つの新たなる誘因が見つかったことになるのである。なんにもせよ狼と安産の祈願との関係のほうが、いわゆる犬梯や鍋かぶりの挿話よりも、前から土佐の東境の山に、あつたことだけはまず確かだといつてよい。

和泉式部の足袋

一 熊の子鹿の娘

鷲や狼が赤子を持ってきてくれたという話は、日本でも古くから各地に語り伝えられているが、それはそのような事実がかつて一度でもあって、その経験を不精確に、または誇張して記憶しているのではなく、むしろいまいちだんと荒唐無稽なる昔の信仰、すなわち偉人というものが尋常一様の産屋の中からは生まれず、往々にして異類の姿を借りて世に出たものだという神話の、ただ少しばかり合理化して保存せられたものであったことは、今まで集めてみた若干の類例だけでも、おおよそは推論することができると思う。このほかにも形はまったく人間の子のとおりであっても、父とか母とかが霊ある動物であったという伝説は、やはりこの過程の中間から、わかれて出たものと私などは見ている。いわゆる「狐女房」の話は有名な安倍晴明以前、美濃の狐という大力の家の元祖の事蹟というものが、すでに『日本霊異記』の中に載せられているのみならず、つい近ごろまで同じような家筋が、諸国に十箇処以上もあった。これらはいずれも一様に、後日何かの拍子に正体をあらわして、子供を残しとどめて退去したことになるのだが、化けて女房になって住み込んでいた場合のほか、他の動物が母であると、当然にその子を送り届け

てきたように話されていた例がある。たとえば信州の小谷においては、昔、中土村大草蓮の獵人、山中に迷うて熊に誘われ、しばらくその穴に滞留して帰ってきた。そうすると翌年熊は一人の赤子をつれてきて、その獵師の家の軒下に置いていった。その子を熊太郎と名づけ養育すると、成人の後胸に一ぱいの毛がはえた男になったというが、『北安曇郡郷土誌稿』一、これも疑いなく昔話の半ば土着したものであった。

鹿に子をもらった話は、奥州にも一つあったらしいが、この分はすでに鹿の子ではなくなっている。他日完形のものが採集せられるまで、かりに今知られている記憶の破片を引用すると、昔ある奥方が山の奥で産をして死んだ。その子を鹿に托して鹿の角にくくりつけると、鹿は山を下ってある爺さま婆さまの処へ、その赤子を連れてくる。これを鹿娘または鹿姫と名づけて養育し、大きくなってから長者の家の火焚女となつてゐる。それを長者の和子が見そめて、見いだされて出世をすることは、姥皮の話ともよく似ていた。すなわち梅の枝を雀のとまつたまま手折り、引綿の上を新しい草履であるき、または水の上をあるくことのできたりした者がこの娘であったので、ついに引き上げられて長者の花嫁となるといふので、これから想像すると、豊後に行なわれる月界長者の乙娘のごとく、これもこの地方では純然たる一つの昔話であった（『老嫗夜譚』一五二頁）。

ところがこれと発端のよく似た話で、もう半ば以上伝説に化している例もほかにはある。まさか今日ではそのような事がかつてあったらうと思わぬまでも、それがまるまるの作り事だったら、説明しえなかつたらうと思う信仰が、今も残っている土地があるのである。山岡俊明の『類聚名

物考』(卷四十)に、和泉式部の事蹟というものを詳しく記して、終わりに次のような一節がある。

此頃肥前国の僧来りて語りしは、その国長崎のほとりに白石といふ所あり。此辺の杵島郡に和泉村といふ所ありて、そこに福泉寺(済豕)と云ふあり。和泉式部は此後の山にて生れしが、鹿の子にてありきとぞ。この産神の縁起に其事誌したりといへり。浮きたることながら人の云ふに随ひて記し付けぬ。

とある。『鎮西要略』という書にもこの事は書いてあるそうだが、その本はまだ見たことがない。『太宰管内志』肥前の部(巻七)に注記しているのは、たぶんこの寺の所伝によつたものと思うが、こればかりは鹿を猪としているのは、聞きそこないではなかつたろうか。

昔此寺に猪一つ来て、常に仏の茶湯を捨つるを飲みけり。後には人に馴れて猪よと云ひて茶湯を捨つれば、やがて駆け来りて飲みなどしけり。或時仏殿の後にて赤子の啼く声す。衆徒不思議の思ひをなし、此声を尋ねて見るに、かの猪人の子を生みて乳を吞ませて居たり。衆徒等肝を消して、是必ず此山の法師など、誤りて畜生道に堕ちけるならんと云ひて、先づ是を頭はさんとて、各彼堂に集まりつゝ食議まち／＼なる中に、或僧火石を取りて廻さんと云ひ、既に其場に臨む。其曉に藤津郡塩田庄大黒丸と云ふ夫婦に同夢の告げあり。即ち老僧頭はれて云はく、汝年頃子を祈れり。今汝が子福泉寺の堂の後に有り。行きて取るべしと云ふと見て夢醒めぬ。彼夫婦この寺に來りて見るに、衆徒等火石を取らんとす。大黒丸夢の仔細を語りてかの女子を所望しけり。衆徒等争ひを止めて彼子を大黒丸に与ふ。是を和泉式部と名付く。九歳の時都に

登りて宮仕へして終に帰らず。里人の語り伝へに、かの式部錦の浦を思ひ出でて、都より歌をよみて送れり。其歌に、

古郷にかへる衣の色くちてにしきのうらやきしまなるらん

大正年間に編纂せられた『寺院総覧』を見ると、此寺の所在は佐賀県杵島郡錦江村大字田野上字泉、本尊は薬師如来、長者大黒丸が信心によつて一子を得たこと、および和泉式部の自筆の短冊を伝えることを記して、やはり和泉は白鹿の子であつたといっている。獸類を一般にシシといった古語の痕跡は、今でも九州の田舎には、まだ時々見いだされる。町にいた学者が耳でこの話を聞いたとすれば、猪とまちがえたのもありそうなことだが、前の一文をよく読んでみると、鹿ならその挙動が目に見えが、猪としてはよほど恰好がおかしい。しかしそれはいづれであつても、私の意見には変わりはないので、むしろ猪の異例もあつたほうがおもしろいくらいだから、こんな点では別に論証の必要を認めないのである。

二 浄瑠璃御前の生い立ち

それよりもぜひ知りたいと思つていたのは、現在かの地方民間の口碑が、はたして『類聚名物考』の時のごとく、またこの福泉寺縁起のとおりであるか否かということであつたが、これにも幸いして一つの実例を接手することができた。もとはあの地方一帯にかなりひろく知られてゐた話であるらしい。搜したらなお比較の資料の見つからぬこともあるまいと思う。馬場武彦氏の

若いころに書き留めておかれたものによると、昔この隣郡藤津郡五町田村に、老いたる夫婦の者、子のないことを悲しんで、村の観音堂に祈願をこめると、杵島山の中腹にある福泉寺の薬師如来に参詣して、寺の和尚にもらえとのお告げであった。さつそく行つて頼んで見たが、和尚様もいっこう心あたりがない。その夜お寺に一泊していると、ふけて赤子の泣く声が聞える。その声を尋ねてみれば、一頭の牝鹿が小さな子に乳を吞ませていたという。よるこんでその子を乞い受けて家に帰り、育ててみると玉のような美女になった。ただ足の指のみが二つにわかれて人間のようでなかったが、読み書きにすぐれ、歌に巧みであったゆえに、六歳にしてその名都に聞え、はるばる召し出されて後に和泉式部となった。和泉式部はその足のゆびを隠すために、常に足袋というものをはいていたそうである。この福泉寺は前には真言宗であったが、再興以後は臨済禅宗となり、今でも山上には女人を住せしめない。それにもかかわらず寺の後には産の神の社があって、安産の願掛けに多くの孕み女が、方々の村から参詣してくるといふのは、少しばかり土佐の野根山の産の杉とも似通うている。

鹿が和泉式部を生んだというなどは、思いきつて奇抜なる話ではあるが、ここに一条の足袋の挿話があったために、われわれはほぼその年久しい流転の路を跡づけることができる。ということとは、これだけ具体的な因果譚、鹿の子なるがゆえに足の指二つにわかれ、それを包むがためにわれわれの五本の指を、二つに分けてはく足袋というものを考え出したという類の順序だった話を、各地無関係に独立して説きはじめたとは言いがたいからである。早川孝太郎君の『猪・鹿・狸』（二一三頁）に、今から三、四十年前まで、東三河の村々にうたわれていた「浄瑠璃御前」の

一代記というものがあつた。その節はすでに絶えて、話の内容だけが切れ切れに記憶せられてゐる。昔矢作の兼高長者、子なきを憂えて鳳来寺の峰の薬師に願掛けして、一七日の参籠を企てたところ、満願の夜の夢に薬師如来、大いなる白鹿となつてあらわれたまい、汝に授けべき子種とてはなけれども、願いの切なるゆえにこれを与うとあつて、一頭の球を賜わると見て身ごもるといい、あるいはまた薬師が白髪の前と現じて、汝に鹿の子を授けべしと仰せられたともいっている。やがて月満ちて生まれたのが浄瑠璃姫であつた。容顔花のごとく光りかがやく美女なれども、一つの欠点は、足の指が二つしかないことであつた。親の長者は深くこれを悲しんで、それを隠すために布をもつて足をまとうておいた。これがわが国の足袋というものはじめだと言つていたそうである。三河と肥前の杵島とは、中間に二百数十里の山川がある。そうして双方ともに他の一方に、同じこの話のあることを知らなかったらしいのである。

足袋は本来が皮製の軽い靴であつた。これを木綿で作り、またはその前に麻布でこしらえた時代は、文献のほうからでも明らかにしうるであらうが、とにかくにそう古いことでない。したがうてこの一挿話の新たに付加せられたのも、おおよそいつのころからということが推定しえられる。すなわちそういう足袋の常人にもやや知られてきた時代に、この話は三河のほうから旅をしてきたのであつた。いやいや肥前国から三河へ出かけたのかもしれないかと、揚げ足をとろうとする人がもしあつたら、その仁はたぶん失敗するであらう。三河の鳳来山にはこれよりもずっと前から、鹿がすぐれた上臈を生んだという伝説があつて、浄瑠璃御前などは実はその伝説の、一つの派生にすぎなかつたからである。古くから伝わった口碑は、一般に感覚が粗笨で聞き

苦しかった。峰の薬師の寺でも、はやくからその潤色と合理化とを心がけたようであるが、それでもあまりに有名で世にひろまったものは包みえなかった。記録の中にもいくつとなくすでに現われている。昔利修仙人がこの鳳来寺の山で修行をしていた際に、岩窟の外に出ており小使をしたのが、かたわらの薄の葉にかかって、鹿が来てこれをなめ、そうしてはらんでしまつて美しい女の子を生んだ。それを仙人は故郷の奈良に送つて、ある貴人の家の門の外に捨てさせた。その子が拾われて成長して後に光明皇后という御方になったなどと、とんでもない無茶なことがちゃんと寺記の中に書いてあったのである。鹿の胎内に宿りたましいゆえに、生まれながらにして足の指二つに裂け、あたかも鹿の爪のようであった。皇后これを嘆きたまひ、宿業消滅のためにその鳳来寺に祈願をこめ、親筆に寺の扁額を書いてお納めなされたとも伝えている。

この種の乱暴な寺伝がいつのころに起こつたかを私は知らないが、少なくとも浄瑠璃御前の語りものより、前であつたことだけは想像してよからう。これをもしある一人の寺所屬の者が、虚構したのであつたらもとよりにくむべきいたずら者であるが、私たちはこれもまた伝説の普通の法則に随つて、粗より精に入り、空な話がおいおいに具体的になつて、固有名詞などは後にいつとなく、取り付けることになつたものと思つてゐる。そうしてその背後には、やはり一種の説話の、かかる謬信の種を供したものはあつたのである。説話がある時代に入つて新たに輸入せられまたは翻案製作せられるようになって後まで、一方にはなお古来の習癖にとらわれて、これを事実として受け入れようとする者の多かつたことが、この種の伝説の土着するに至つた主たる原因であつた。縁起の記録のごときはむしろその昔からあるものを、無意味にすまいとする手加減と

も見られるので、人は直接にこれによつてだまされるほど、最初から無関心ではなかつたものと思ふ。私が近ごろの文献派なるものに対して容易に許さない理由は、主としてこの日本の常民をでくの坊のごとく、なんにでも欺かれる者と見ようとする速断の点にあるのである。

三 鹿母夫人

鳳来寺の利修仙人の伝記というものが、かの『今昔物語』巻五の国王入山狩鹿見鹿母夫人為后語の、もとになつてゐる説話を知つていた人の、言いはじめたものであることは疑う余地がない。鹿が山奥に行をする聖者の子をはらんだ因縁だけは、かれとこれとまつたく一つであつて、確かに一方の天竺の所伝を知らなかつたならば、日本で単独にはかような空想は浮かばなかつたに違いない。故芳賀博士の『攷証今昔物語集』に、この話の出所として指示せられた『雑宝藏經』の説話は、ただに東三河の人々によつて読まれていただけでなく、さらに十分に利用せられていたことも証拠があるのである。同じ早川君の大著『花祭』の後篇一二頁以下に、北設楽の村々の神楽の歌、「若子のしめ」という長篇の数種を掲げてあるが、いずれも右の鹿母夫人の終わりのほうの一節、すなわち天竺の国王長者の北の御前が、蓮華のつぼみを産み落としたことを語つてゐる。これが鳳来寺山僧の学問によつて、導かれて里に行なわれたとまでは断定しえないだろうが、必ずしも『今昔物語』の和訳を仲介とせず、すでに原書についてかかる山村には似つかわしからぬ空想を、歌にうたう程度に受けついでいたことは事実である。しかもそれが單純なる受け売

りではなくして、かれには五百人の王子が、五百の蓮の葉毎に出現したとあるのを改めて、これには蓮のつぼみを池の上に投げ入れると、次の日は葦立ち八つの花弁開いて、その中から五人の神楽男が生まれたとあって、これをわが土地の神祭りの由来に、結びつけようとしているのみか、一方にはその異常生誕の原因として、きわめて日本風なる申し子の夢を叙しているのである。

七日の夜半の頃なるに

紀の国熊野三社権現

枕がみに立たせたまひて

六尺二寸の鉄の杖の三尺二寸になる程

三尺二寸の鉄の足駄の一尺二寸になる程

唐土天竺日本吾朝

国を尋ね巡り候ひけるに

汝に与ふるみたまは無きとて

はちすの花の蕾みしところを

左の袂へ移させ候ひければ

其時こくわう長者も夢さめ

かつばと起きふし七度の礼拝めされて云々

ここにミタマといっているのは、後々の説話に子種というのと同じもので、これは申し子の語りの最も普通な型であったが、こういう部分はもちろん『雑宝藏経』には出ていないのである。

私たちが問題としているのは、いわゆる利修仙人の小便の話が、天竺を水上としているか否かではない。その点はもうとうに決している。明らかにしなければならぬのは、この外国の智識が到着する以前、三河の山間には鹿母の説話なり、また伝説なりがまったくなかったかどうかである。別の語でいうと異種民族の文芸なるものは、一つの触角も出さず、なんらの沃地を求めずとも、いきなり放題にどこにでも根をさして、花咲くことのできたものか否かである。この海外から無数にはいつてきたものが稀に残り、広い国土の間にある境にのみこれを保存しているのを見れば、よもやしかりと答えうる人はなかりうと思うが、当世の伝播論者の説を聞いていると、とんとみなそう思っているようなことを平気で言うのである。私だけははばかりながらそうでない。もちろん前にどういう話があったから、それからんで次のこれこれの新話が参加したと、片っぱしから立証することは容易でないが、時と場合によつてはずいぶんと無造作に、今ある口碑の蔭からでも、かつてその背後にあったものをうかがい知ることができる。肥前福泉寺の和泉式部などもそれであるが、たとえその原型は文獻の上から、光明皇后以上にはさかのぼりえずとも、それがはじめの形だとは考えることができない。これと同様にインドの仏説を採ったことが明らかであっても、それだけでは峯の薬師の靈山に、このような話の珍重せられた動機は、少しでも説明せられてはいない。疑つてなお探つてみるのが当然である。

私は何よりもまず異常誕生の説話が、古今わが国には数豊かに、その中でも最初身を鳥獣の姿に托していたという例の、いろいろと変化して伝わっていることを考え、さらに家々がその古伝を尊重して、緒形氏の尾の形や三つの鱗という類の特徴を、注意するのが普通であったことから

おし進めて、光明皇后ないし淨瑠璃御前の伝承にも、なお若干の日本分子の残留があることを認めるのだが、それよりもいっそう看過しがたいのは、布の足袋が世に行なわれると、すぐにその形によって足の指が二わかれになっていたという挿話を付け加え、それをまたおもしろがってどこでも喜び聞こうとした、わが同胞の敏活なる文芸技能である。『義経記』以来の語り草であった矢矧長者申し子の話が、後に鹿母の奇譚と継ぎ合わされたものとして、これもまた一つの適切な例証たることを失わぬが、一方に神様から田螺の子を賜わり、もしくは蛇の子を産んだという昔話も伝わっているのを見ると、あるいはずっと古くからわが国にも、そういう話し方ができていたものとも考えられる。鹿の子が和泉式部になったという肥前五町田の村などは、前にも述べておいたごとく、同時に蛇の申し子の話のある村でもあった。足袋のはじめということは後に輸入せられたものだが、その前にすでに異類誕生の話だけはあったのである。三州奥設楽の山村で、五人の神楽男の由来を語るのに、蓮華のつぼみという經典の所説を利用したもの、同じく古人の氣ばたらきを示している。要するにわれわれはただ口移しに、よその説話を受け売りするようなへばな国民ではなかったのである。『今昔物語』はもともとその編纂の目的が、珍しい説話を存録するというよりも、むしろ専門の説話業者に、種を供給するを主としたように思われるが、それすらもなおインドの原型を取捨して、自由に興味の中心をこちらの好むところに移した形跡は随所に見られる。これを要するに上古以来、説話には話者の空想の活躍しうる部分があつて、その部分には時々^の補充と改訂とが要求せられ、それが職業化し技芸化するとともに、大規模に外来の資料を採択する風も起こり、しかもこれを弟子門流の間に、踏襲する傾向も生じたのであ

る。だから現在の説話の目に立つ特徴の一、二によって、ただちにその全部の伝来を推論しようとするのは誤っている。十数世紀の間の民間文芸の展開過程と、説話そのものの起源とは歴史が別である。後者もその悠遠なる発端においては、あるいは伝播であり、いわゆる文化接触の所産であつたかもしれない。ただしそれを尋ねる用意はまだ整っていないのである。なんでもかでも説話といえば天竺から運ばれ、欽明天皇の十三年以前は、日本人は黙ってただ顔を見合っている人民であつたか、もししからずんばいっさいの古い話を忘れて、珍奇に走ったモダンボーイであつたかのごとく、考えてしまうにはまだ少し早いのである。今日はこの源頭をきわめるに先だつて、一応その中流以下にきたり合したものを、見分けていくべき時代である。

四 南無業師

私は最初海の神を少童と書いていた思想が、日本の田舎ではおおよそいつのころまで残り伝わっていたらうかを考えてみるために、「桃太郎」の桃や「瓜子姫」の瓜が流れ下ってきた川上の方に思いをはせていた。この国の固有信仰の中には、すぐれた小子を神より賜わって、それをたいせつに守り育てて、下界の生活を美しくしようという希望の強かつたことだけは、変転零落したいろいろの説話をつらぬいて、今もなおこれをうかがい知ることができるのである。第二の仕事としては、そのわずかに保存せられている古代人の心意と、これに影響した後世の文芸生活の種々相が、はたしてどういうふうに骨折つたなら、一つ一つ引離して観測することができようか

を説いてみる気であつたのである。和泉式部の足袋はちやうどその練習の、最も簡易なる一つの機会であつた。こういう話になると、大昔からそのままとはいえぬと同様に、かりに三百里を隔てても、独立して二処に偶発したものと何びとにも考えられない。もし偶発でないとするれば、運送した人があるのである。誰がそういうご苦労なことをしたか。説話の成長ということを明かにするには、これは実際手ごろな初歩の問題であつた。

肥前と三河と、二個所の足袋の由来を比べてみて、誰にも気のつくのは双方ともに、御本尊が薬師如来であつたことである。これがわれわれにはなんらかの手がかりを与へはしないだろうか。和泉式部が生まれたという土地は、肥前の杵島郡を西のはしにして、他の一端は陸中の和賀郡まで、京を除いても全国に七箇所、注意をしていたらなおこれ以上にもあらわれてくるかもしれない。伝説の和泉式部は若狭の八百比丘尼^{はつやくに}、または大磯の虎などと同様に、たいそうもない旅行家であつた。その足跡は決して熊野や播州書写山だけに限られてはいなかった。記念の念仏塔などを墓じるしと誤り伝えただけならば、あるいは死んだという土地の多いのは説明しえられようが、この地で生まれたという所がこう多くては、ただ事ではなかつたのである。しかし研究者にとつて一つ都合のよかつたのは、肥前の福泉寺に彼女自筆の歌と称して、「錦のうらやきしま（杵島・黄綱）なるらん」という一首が伝わっていたように、奥州にもまた因幡の湖山池^{うみいけ}にも、それぞれ

の歌が記憶せられていた。信州の諏訪でも和泉が立身の糸口に、詠んで賞められたという名歌が残っていたらしい。それらの名歌がいつの代のものであつたか。はたしてこの式部の才藻に成ると言ひうるか否か。是を決するくらいは、今日までの日本文学史でもできそうなものである。そ

うするとこれがまた第二の目標にもなるわけであつた。

和泉式部の葬処と伝えるものは、有名な京の誓願寺の誠心院をはじめにして、今わかつてはただが日本に十五箇所ある。中にはよほど頼りないものもあるが、九州のほとんど行止まりの日向法華嶽寺の麓の里にあるものなどは、この山が性空上人留錫の靈地であつただけに、土地の学者はこぞつてその史実なることを認め、われわれの敬慕する山田清安翁などにも『和泉式部事蹟考』の一著があつたそうである。ところがこの寺の御本尊も、三河の鳳来山、越後の米山と共に、日本の三薬師と称せられる瑠璃光如来であつた。そうしてここにもまた珍しい二首の歌が伝わつて、その伝説の真を証明しようとしているのである。『三国名勝図会』（卷五十五）の文を抄出すると、

上東門院の女房和泉式部、癩病を患へしが、種々の医療驗無き故に、京都清水の観音に参籠しけるに、米山鳳来寺法華嶽寺、三所の薬師に祈るべき夢告を受く。於是米山鳳来寺に至つて参籠せしかども其驗無し。因つて遙かに日州に下り、法華嶽の薬師へ参籠すと雖其応驗を得ざりければ、此世の業縁は是までなりと思ひて、身を墜して死せんと志を定め、辞世に、

南無薬師諸病悉除の願立て、身より仏の名こそ惜しけれ

と詠じ、既に合掌閉目して千尋の崖より墜ちけるに、不思議に救ひ助けられ、一異人式部の眼中に現じ、其手を取りしと覺えて、

村雨はたゞひと時のものぞかしおのが蓑笠そこにぬぎおけ

といふ声の下に、数年の宿病忽然として平癒し、玉貌瓊姿に復し再び京都に帰る。

こうは記してあるが、その帰りに、もしくは後年再びやってきて、この国に歿したといつて、鹿野田^{かのた}という村に墳墓がある。そうして法華嶽寺には、和泉式部の琵琶と髪掛け柱、式部谷・腰掛け松・身投げ岡・杖取り阪等の故跡を存するのである。

この薬師如来との贈答の歌なるものは、かなり近代式な俳諧であつたが、その代わりこれを聞いた人には、心持はよくわかつたろう。つまりは蓑笠^{みかさ}を身の瘡に掛けたのが趣向で、少々ばかりな秀句も即吟しかねぬ才女と目せられていた。『金葉集^{きんえしふ}』に出てくる鴨神主忠頼との贈答、「千早転載したもので、実際この女史の即吟であつたか否かはおぼつかないまでも、とにかくに歴代の選集に和泉の作として録せられたものは多く、近代になるほどずつその数はいよいよ加わっているのである。したがうて彼女が信心の恍惚の間において、そういう返歌を感得したというならば、それでもあるいは通用したかもしれぬ。ところがこの薬師如来との歌問答を、和泉式部の逸話との歌になつてゐるのである。それがたまたま九州のある霊場に移されて、鹿野田の村に居たこの女性に、託せられることになつたのは、私には意味のあることのように思える。三河の鳳来山下に於ては、淨瑠璃御前の足袋であつたものが、肥前で和泉式部になつてゐる事情も、ことによるとこれから類推しえられるかもしれない。

五 雨乞い小町など

上臈が悪疾に悩んで、都を離れ旅に流寓したという話は、いかなる理由からかわが国には最も例が多かつた。法然上人の伝記の片はしを占める松虫・鈴虫なども、もとはそういう形に語り伝えられたものがあり、その他にも特殊の部落の根源を、これに結び付けたものがいろいろあつたようだが、この南無薬師の歌物語ばかりは、不思議に小野小町に託したものが普及している。きわめて簡単に今わかつてゐる例を列挙して見ると、まずやや近い所では伊予温泉郡小野村に小野薬師、この話は『伊予温故録』、久米郡北梅本村正観寺の条に見えてゐる。昔小野小町が吉吉の神の教に従ひ、ここに参詣して病をいのり、一百日の参籠をしたところ、満願の日に歌のお告げがあつた。

春雨の降ると見えしが霧^{きり}れにけりそのみのかさをそこにぬぎおく

とあつて、その病たちまち癒えた。よつて三年の間この地に寓居し、新たに薬師仏を刻して、歌を御像の頭の中に納めて、ここに安置したとほしてある。

次には備中都窪郡清音村大字黒田の昼間薬師、これは『備陽記』巻九、『備中巡礼略記』、その他の書に述べてゐる。是も日本の三体薬師の一つで、東国には朝間の薬師、今は峰の薬師という。夕間の薬師は九州のいずれかの地にあり、これはその中央の昼間の薬師だといつてゐる。歌は記録によつて少しずつの相異があるが、趣向だけはみな一致している。昔小野小町瘡疾を發し、こ

の御仏に立願していのれども験なく、恨みのあまりに、

南無薬師衆生悉除の願立てて身より仏の名こそ惜しけれ

と詠みければ、すなわち御堂鳴動して薬師の返歌、

村雨はただ一ときのものでぞかしそこに脱ぎおけおのがみのかさ

そうしてまたたちまちに平癒したというのである。

次には美濃山県郡蔽美村大字岩井の薬師堂、本尊を鹽薬師（たいてい）と称し、因幡の岩井山の湯の薬師、ここに飛来したまうと縁起に見え、現在には国宝に編せられている。一名を俗に瘡神といい、小町夢のお告げを受けて、堂の東三町ばかりにある名水に浴して瘡の疾を治したと伝え、今なお婦人の疾をいのり、またこの泉に汲む者が多い。しかも小町が祈願中に、不平を訴えた歌として、南無薬師衆病悉除の願しめて仏を祈る身こそつられ

これに対して、如来の御返歌、

村雨はしばしばかりのものなるにおのがみのかさそこに脱ぎおけ
という二首を伝えている。

次にいま一つ、上州北甘楽郡小野村大字後賀の塩薬師堂、小野小町此地に居住し、塩を奉納したと言ひ伝え、その他小町にちなみのある口碑がいろいろとある。文政十三年（一八三〇）の二月、この村の住人塚本忠右衛門、これを再興して記念の石碑を建てた。そうしてその石の面に次のような二首を刻んでいる。

南無薬師先づは諸願の叶はずば身より仏の名こそ惜しけれ

むらさめは只一時のものぞかしおのがみのかさここにぬぎおけ

同じ話は他の地誌にもあったように思うが、私はこれを『北甘楽郡史』から抄録した。

五国五箇所の薬師のうちで、四つまでが小野小町ということになっているが、それは単にこの二人の女詩人が紛れやすく、かつ小町の方がより多く有名であったためかしらぬ。少なくともそれだから実は小町の逸話だったということもできぬようである。江戸には其角の「田を三廻りの神ならば」の句もあって、小町の雨乞いの歌はよく人に知られているが、これがまた以前は和泉式部の名吟として語られたこともあった。たとえば安楽菴策伝の『醒睡笑』巻八に、

勅によって和泉式部雨請

日の本の名に合ふとてや照すらん降らざらば又あめが下かは

日の本というから照るのであるが、そんならまたあめが下というのだから降るのがあたりまえだという意味で、滑稽としても下品であることは同じだが、これを一方の「さりとては又あめが下とは」に比べると、いわゆる文法の誤っていないだけでもまさっている。しかも尋常の聴衆には前のほうの歌は意味がとりにくく、後の「ことわりや」のほうがよくわかったという時代もあったらしいのである。説話の人物の固有名詞のごときは、決してそう固有のものではなかった。単に昔々ある歌の上手な上臈があつてと、話していたもののひき続きにすぎなかったのが、何か因縁があつて小野村なら小野小町、泉という部落なら和泉式部と、いったん具体化してしまうともう変えられなかった。そうしてわれわれのようにそれを昔話だという者をにくんで見たり、もしくは伝説とは歴史のことだと、考えたりするようにもなったのである。

実際こういう場合でないとな誰にも心づかぬ一事は、記録文字というものが持っている本當の意義である。私たちにっては、金石文の存在という現前の事実は、ただ単にそれがこの世に出現したある時点に、それに書き表わしたようなことを信じている者が、若干あったということだけしか意味していないのであるが、今までの学者はこれにその何倍かものを認めようとしていた。上州小野村の文政十三年の石碑なども、あれがもう三、四百年も古く、かつ他に法華緣寺などの類例が見つからなかったならば、石に刻して世に伝えるくらいだから、南無薬師の歌は小町の作に違いないという者が、決して群馬県の考古家だけでは無かったろう。まことにあぶない話であった。熊野本宮路の伏拝の石塔なども、路傍ではあり、昔深く古びていたから、ほとんど信じない者の通行を許さぬくらいであったが、式部が「月の障り」の歌を詠み、権現が「塵にまじはる」の御返歌をなされたということが、はじめて記録せられたのは元応三年（一二三二）の『続千載集』である。彼女が世盛りであつたろうと思うころから、もう三百年の月日は経過している。江戸では大田蜀山人在世のうちから、あの有名な「蚊はどうるさきものは無し」の狂歌を、この翁の作だと信じていた人が多かった。なんぼ中世の無事な社会でも、三百年の間にはいかなるうわさだつて發生しうる。ましてや歌を中心にしたいろいろの説話、説話を語りやすくまた記憶しやすかった和歌の、あのとおり流行した時代である。古いからとて片っぱしから、記録を丸呑みにすることはとうていできない。しかるにこういうものばかりを資料にして、和泉式部の伝を書いた文人がついこのごろもあつたのである。おついでにこの南無薬師なども、よろしく願いたいものである。また御伽草紙という一つの記録には、「昔和泉式部と申してやさしき遊女ありけり」と、

書いてあることも知らせてやりたいものだ。

六 誓願寺と鳳来寺

今ある謡曲末百番は、元禄十一年（一六九八）の江戸開板であるが、その行なわれていたのはむろんそれよりもよほど古からう。その終わりのほうにある歌薬師の一曲は、やはりまた同一の昔話を潤色したものであつた。シテは比叡山の鎮守薬師如来、ワキはこの寺の住侶であつて、子方には菊光殿という喝食かつしきの児が、重病に臥してあまりの苦しさにとりあえず、「南無薬師衆病悉除の願なれば、身より仏の名こそ惜しけれ」と書き列ねて、これを寢床の下に敷いて寝たところ、後に見ればその歌の文字は消えて、其紙に秘文あらたに見えたまうとあつて、瘡の病ではなかつたゆゑに「みのかさ」の御返歌は脱しているけれども、やはりたちまちに本復したと叙べている。「身より仏の名」というのは、自分はどうかあつてもよいが、それよりも薬師如来の御名声にかかわりましようというので、こういうくねつた歌を案じ出すのは、むしろ若道やうだうの児たちに多かったようである。如来こそよいご迷惑であつた。

次に寛文十二年（一六七二）に出た『一休閑東話』、これは著述だから、そう古いものの採録ではなかつたろう。外題には「峰の薬師へ狂歌を遣はさるゝ事」とあつて、

三河峯薬師、靈驗あらたか也。矢矧に瘡を病む者、七々日の願を立て、既に四十余日詣つれども其しるし無し。如来を恨み奉り散々に悪口す。一休狂歌一首遊ばし、今晚まうでて之を読む

べしとのたまひければ、頃しも五月中の二日参る人多し。深更を待ちて之を讀上げる。なむやくし衆病悉除の願なればと、読みも果てぬに内院震動して、村雨はたゞ一ときのものぞかしおのがみのかさそこに脱ぎおけ。起きあがりて見れば身の瘡無し。骨髓に徹つてすぐに発心して諸国を廻る。

とある。これは関東咄だから、三河鳳来寺の有名な薬師の名を借りたとも見られるが、ただなんでもなく矢矧の里の住人といったのを考えると、前からこのあたりに行なわれていた話を採り上げたもののようである。発心して諸国をめぐるのもありふれた型ではあるが、旅の僧尼がまず語るのは発心の因縁ときまっていたから、この歌一つを暗^{くら}んじてさえおれば、薬師の靈場は巡拝しやすかったわけであり、それにはまた全国に名の知れた峯の薬師と、矢矧の里の住人とを説くことが、便宜も効果もともに多かったらうと思われる。ただしそれなれば叡山の児の話と、式部小町の女性の瘡の疾と、いずれが前からあったとするかという点、これは今だけの材料からでは決したい問題であるが、この歌はこれでも文学であって、一休なり誰なり都の人を頼まなければ、田舎者にはややむづかしい芸であった。あるいは現代の文化何々といった商品と同様に、都で改良を加えて再び原産地へ、逆輸出したものかもしれない。

とにかく足袋の由来といい、みのかさの歌といい、三河の鳳来寺を一つの起点としているらしいのは、私には意味のあることに考えられる。そうしてその二つがともに和泉式部の逸話として伝えられている理由も、いま少しく心がけていたら、やがて明らかになるような気がする。南無薬師の説話の最も古い記録は、前にも雨乞いの歌に引用した『醒睡笑』の巻六であった。これ

には元和九年（一六三三）の自序があるから、『一休関東咄』より五十年古い。ただ文筆に表われる以前、どのくらい久しく行なわれていたかが不明だが、これはこの老僧が少僧の時から話を、聞いて覚えていて書き集めたものだといっている。

山門北谷に児^こあり。悪瘡の至りに根本中堂へ参籠す。七日済すれども敢て効無し。うち恨みて下向に、短冊を内陣に投入れ参らせたり。

南無薬師衆病悉除の願ならば身より仏の名こそ惜しけれ

即ち内に御声ありて、

村雨の降るとは見えて晴れにけりそのみのかさをそこにぬぎおけ
本坊に還れば瘡みな痕無し。

この説話集は編者が僧であっただけに、ほとんどその半分近くが児と法師との話であり、かつその大部分が叡山での出来事になっている。だから謡曲の歌薬師と半分ばかり似ていても、かれがこれを採り、もしくはこちらがかれを焼き直したとはいえないことは、あちらには「みのかさ」の返歌のないのを見ても明らかである。文献上の証拠として認めうることは、今から三百何十年の前に、すでに京都にもこの話があったというだけで、これが九州・四国等の各処の薬師に、女歌人の伝説として存するものの、もとの形であったとすらも言いきれないのである。三河では鳳来寺の峯の薬師を中心にして、一群の説話の久しく繁栄していたらしきことは、このごろ早川君などの骨折によって、おいおいに判明しようとしている。かつて浄瑠璃の名をもって全国を席巻した語りのものの、ここが最初の発祥地であったのみならず、その薬師如来の申し子なる姫の伝

記は、記録以後さらに幾段かの展開をとげて、今もこの地方にいろいろの断片となって伝わり、またそのあるものは伝説に化して土着している。海道往還の便宜を利用して、これが東西に分散したことも想像しえられるが、一方この霊山の南麓の村々には、あるいはその家筋の者ではないかと思う旧家が少しづつ残っているようである。だから『醒睡笑』などの存在をまるで知らなかった人たちが、別に独立してこの方面から、南無薬師の説話を持って国々をめぐっていたとも考えられぬことは無いのである。

ところがここにただ一つだけ、京と三河との連絡を認めさせずにはおかぬ史料は、九州の和泉式部であった。和泉式部と京の誓願寺との関係は古い。新旧二つの縁起をはじめとして、謡曲にもこの事を主題としたものがあって、後に誠心院がなんらかの事情のために、本寺と分立してしまつてからも、なお誓願寺は和泉式部の寺であった。そうして『醒睡笑』が右の薬師の歌以外に、いくつかの和泉式部の話を載せているのも、偶然ではなかったのである。という理由はその編者の安楽菴策伝こそは、実はこの誓願寺の前住であった。策伝七十に及んで、この八巻の草紙を淨記したところには、寺の乾の隅に在る竹林院というに隠居していたが、「小僧の時より耳に触れて面白くをかしかりつることを反古の端に留置きたり」というのも、また六十二、三のところに板倉周防守父子のためにその話をして聞かせたというのも、ともにこの寺の住侶であった時のことらしく、それというのが元来誓願寺が、説話を業とする法師・比丘尼の、出入りする寺であったからかと思う。これはこの寺のみずから伝える歴史なり、諸国の同名の寺との交通なりを調べていけば、しだいに明瞭になることであるが、このたびはまだその詳述の用意が整わぬゆえに、単に

仮定としてこれだけの事を言っておく。少なくとも和泉式部に関する近代の雑説だけは、すべて誓願寺が本元であった。そうして歌薬師の物語も、すでにこの寺には知られていた。だから日向の法華嶽寺の伝説は、いったん京都を通ってきたことが推測せられるのみならず、肥前の福泉寺のそれも、ことによると、直接に三州鳳来寺から持ってきたものではなかった。諸国の薬師如来の霊場に一貫する歌物語が、学び習うことなくして自然に相同じきこと能わずとすれば、もとはおそらくは誓願寺のいわゆる和泉式部塚、および花の枝を手に持った美しい尼の木像と、なんらかの関係をもっていたのである。そんなら何ゆえに遠国では小町・和泉の話のみ多く、ひとり本山の『醒睡笑』だけが、叡山北谷の児の瘡となつているかという、それはただ話者の安楽菴策伝が、比丘尼でなかったゆえに男の話のほうを知っていたと、解説するのほかはあるまいと思う。

七 清少納言の亡霊

同じ一つの趣向になる昔話を、男女二群の旅人が持ち運んでいたことは、こういう種類の目に立つ一致がないと、めったに推論することが許されない。だから土地の人が章句を忘れてしまわぬうちに、できるだけこの比較を進めておく必要もあるのである。東北ではイタコの夫が、往々にして浄瑠璃座頭であつたけれども、かれらはいつも別々の物語を語っていた。夫婦の語らいはしても、互いの伝承には加担しなかった。それが南無薬師においては、僧も説き、比丘尼も話しまわっている。誓願寺か安居院か、まだ確かに突き留められないが、何かよく有力なる話の

間屋が、中央に一つあったらしいのである。この事をほぼ暗示しているのは、京都で元禄のころに刊行せられた『人倫訓蒙図彙』などであろう。この時代には人があまってきたか、いわゆる職人の種類はたちまち前代に数十倍し、門付けの歌念仏にも法師がまた携わっている。一方にはまた理のつんだ話などと称して、御伽の子供噺以外にやや方面の変わったもの、ことに若干の文学的暗記をまじえた語りごとを、珍重する風がおいおいに普及して、明治の代になるまで、これを情操教育の一つにかぞえるありさまであったことは、いきおい諸国修業の徒をして時の好尚を追者であったかもしれぬが、これを到るところにおいて伝説に化せしめたのは、かれらばかりの活躍ではなかったように思われる。

というわけは、伝説は一つの主張であり、公けに外部の人に向かって、少しも恥じらわずにこれを説く者を要したからである。それでなくては少なくとも記念碑などは建たない。そうして今日はいくつもの有形無形の記念碑が建っているのである。なるほど伝説の解釈は普通にはまちがっていただけの進歩であった。とにかくこの氣風を誘致して、今日の新国学の素地を点定したことは、一言に要約すれば太平の化、すなわち男に弓矢と兵糧の煩果がなくなつて、昔話をもてはやす心の余裕のできたことである。伝説は確かにこの機運に乗つて、日本では近世第二次の発展をとげている。そうしてこの方面にもまた男女の協力があつたのである。その例を一つここにあげて、もう「和泉式部」の一篇をとじめようと思う。

阿波の撫養浦を中心にした清少納言の伝説は、あまりにも奇抜で、また粗野であるために、かつておもしろがってこれを評判する者が今でもあるが、その起りはまた一団の念仏比丘尼から出ていた。故三宅博士の発見せられた『以文会筆記』巻五に、寺居菊居という人がまじめにこの問題を取り扱っている。里浦の漁村にある尼塚と称する塚を、清女落魄して、ここに來て世を終つた墓であるという。上臈が浦人に苦しめられたという話は『太平記』以来であるが、ここではその祟りで悪疾を煩う者が多く、その霊を慰めんがために塚の前に祭をするが例となり、尼念仏というものが久しく伝わっていたという。蛤の貝に穴をあけたもの七、八つを糸に貫いて、これを塚に掛けて祈る習いもあった。かの貽貝の由来などというお話にもならぬ話が、これと無関係に発生したものでないことは想像しうる。そうして同じ女性の遺跡というものは、さらに傍近の地にまでひろまっているのである。

宝永年間のことともいい、あるいは享保中の事実であつたともいふ。讃岐の金比羅山の麓の寺で、鐘樓を築くために、昔から清少納言の墓だという土地に工事をしようとしたところ、和尚の夜の夢に美しい官女が現われて歌を詠んだ。

うつなき跡のしるしを誰にかは問はれんなれど有りてしもがな

意味はおおよそ知れるようだが、言葉はなんだか変で、清少納言のためには冤罪のはなはだしきものであつたが、それでも感歎してこれを後に伝えている。この記事は『笈埃隨筆』『閑田耕筆』『提醒紀談』等の各書爭い載せ、すでに動かすべからざるものになっているかと思うと、現在には夢を見た人が、某という町の商家の主人で、そのゆえに今もこの家を告げの茶屋と称すとも

伝えられる。そうして同じ話がまた遠方の土地にもあったのである。たとえば『一話一言』(巻四八)に、近江国にも清塚という古墳があって、これを掘り移そうとしたら、また村民が夢を見た。都の女房とおぼしき美女、紅の衣しだけなく着なして、短冊を前に置いていった。夢の中にその歌を記憶していて人に告げたというのが、

うつなき跡のしるしを誰にかも問はれしもがな忘れもせず

これもよほどのかた言だと思いが、京都ではこれは清少納言の墓のよし、公卿衆議あってそのままにさし置かしたと、土地の医者らしき人の筆記に残っていたという。それから東に向かうと、話はまいちだんと突拍子になっている。『宮川舎漫筆』(巻二)に、甲州韭崎付近の某寺に古墓があった。それを取り払おうとしたところが、寺僧の夢に一人の貴女現われ、歌の短冊を残した。後に古筆家の鑑定したところでは、赤染衛門の筆蹟のよし云々とあるから、この短冊は実物であつたらしいのである。

なき跡のしるしとなれば其まに問はれずとても有りてしもがな

これなどは琴平のほうの歌を知らなかつたら、あるいは趣意をさともむつかしいくらいだが、さりとてわざわざ拙くまねるということもなかつたらう。それに移植にしては、少しばかり距離が遠過ぎる。これもたぶんはまたこれを一本の花の枝として携えあるいた者と、植えて根づかせた者とは別人であつたことと思う。夢に上臈が来て歌を詠んだという話の、最も古くかつ弘く行なわれていたのは、かの阿曾沼の鴛鴦の哀話である。これは『著聞集』と『沙石集』との二つを比べてみても、すでに話し方のいちじるしい差を認めるが、今日では野州・奥州以外に、

十数個の何沼の歴史になりかけている。それを一方の沼の伝説として聞いた者が、うらやんでわが土地へ横取りしてきたと考えることは、いかに人間を不正直なものとする人にも、本当はできない話である。ただ藪から棒にそんな事を言い出しても、周囲が承知するはずはなかつたからである。たとえやや漠然とでもかねてその話の存在を知る大衆があつて、はじめて伝説はもつともらしく作り上げられうるのであつた。すなわち清少・赤染のごときは、最初からそう固定していたものでもなかつたのである。

八 横山の禰宜

享保七年(一七二二)に版になった井沢長秀の『広益俗説弁殘篇』(巻四)に、「俗説云、むかし阿波の鳴門甚だしく鳴りけるに、和泉式部一首の歌を詠す。其歌に、

えのこ草おのが種となるものをあはのなるとは誰かいふらん

それよりして再び鳴ること無し」とある。この歌は別にまた清少納言が作だという説もある。それから何に出ていたかちょっと失念したが、和泉の作というのがいま一つあつて、そのほうが意味はまだ解しやすしい。

えのこ草種はおのれと有るものをあはのなるとは誰かいふらん

すなわちエノコグサと粟とは穂がよく似ているが別物で、「あはのなると」というのはまぢがいだというので、これも「おのがみのかさ」同然のはなはだしいこじつけ歌ながら、いわゆる俳

諧の秀句時代には、喝采せられそうなる即興体であった。それを奥州宮古の横山八幡宮などでは、またよっぽどまちがえて伝えていたのである。南部領の旧地誌、『邦内郷村志』(卷三)に「此社、火災に遭つて縁起喪失す」とあつて、しかもこの事を記したものが広略二本あり、前者は漢文で延享三年(一七五〇)に高橋半左衛門という人が書いてゐる。その大要は昔阿波の鳴門が天地もとどろくように鳴つて、朝廷これを受けてさまさまの祈禱をなされた時、この奥州横山の神官が夢に神様から一首の歌を授けられ、これを唱えるならば、鳴門の音はたちまち止むだろうといふことであつた。

山畑に作りあらしのえのこ草あはのなると誰かいふらん

さっそくその歌を携えて現場に行き向かうところ、女官の和泉式部がまた勅命を奉じて鳴門の音をしずめにやってくる。そうして一夜旅館に横山の神主を訪ねて、だましてその神歌を聞き取ってしまった。次の朝、早天に和泉はかれに先だつて洲先に進み出で、昨夜盗み聞いた歌を改作して、「種はおのれと」云々の歌を詠じ、つづいて横山も出てきて、「山畑に」の歌を唱へたので、どちらの歌の徳で海の響きがやんだのかを決したがつた。それで京都ではかれを嘲弄して、

歌つくるのみなかなをねとられてむなく帰る横山の禰宜

という歌も行なわれた。けれども結局は御神徳が認められて、横山の禰宜は宮古という地名を頂戴して奥州にもどり、その折阿州から杖についてきた銀杏も、地に刺して成長して神木となつて榮えている。だから今でも阿波の船がこの港へくると、わが国の鎮守様だとこの御社を尊敬する

のだとある。

この記録は同じ延享三年に、土地の人が京都に持参して、社格昇進の運動をした証拠材料であつた。それから十五年後の宝暦十年(一七六〇)には、江戸の学者井上蘭台は、これにもついで『重修横山八幡宮記』を書き、さらに五十年後には駒井常爾という人が、その「山畑に」の神歌を石に刻して、境内に記念碑を立てた(『旅と伝説』二巻二号)。すなわち由来は年久しいけれども、根源はただこの二首の歌の暗記にすぎない。そうしてわれわれにゆかしく思われるのは、主としてこの言い伝えの奥南部に入ってきた事情のみであつた。むしろ阿波船などの載ってきた話ではなかつたろう。この横山の禰宜は旧家で、猿丸太夫の子孫だといふ伝えもあつた。奥州の猿丸太夫は会津でも小野氏であり、横山という神官はどこへ行つても小野氏であつた。小野氏は絶代の歌人小町を出し、又淨瑠璃十二段の作者と伝えられる小野於通をも出している。南無薬師の歌が東国では小町の作であつたとく、和泉・清少の「えのこ草」の歌にも、小野氏はまた参与していたのである。歌を中心とした物語に長じた者が、この一門の流れを汲む女性の中からも輩出し、また巡国していろいろな形跡はかなりいちじるしいのである。現在知られている足袋の発明者は、和泉式部と矢矧の長者の女とのほかにまだないが、これがそうなつてしまつた事情はほんの偶然であつて、その他に多くの非凡なる童女が、人間の婦人を母とせず、異常の誕生をもつて世に現われた話は、竹の中の赫奕姫以来久しくつづいてゐる。その異常の童女を有名ならしめた理由、すなわち男の武勇に対立して、女を高名優越ならしめたものは、美貌の他には「さかしい言葉」であつた。しかるに小野氏の両女は、今日の俗伝によれば、ともにこの条件を具足している。ゆ

えにその子孫のこれを永く世に伝えんとするものが、行く先々でまたどのような珍しい語りごとを作り、かつおもしろくこれを流布しているかはわかり知りがないのである。だから採訪は今後の事業であり、比較はなおいくつかの材料の出現に待たなければならぬ。私などの研究は実はただ不安定なる予言にすぎぬ。いかなる遠見博識の士でも、目下の乏しい実例によって断定をしうとする者は、なんと名乗ろうとも決してわれわれの同志ではないのである。

米倉法師

一 盲と文芸

盲がわが国の民間文芸の展開に、よかれあしかれ、すこしでも関係をもっていたらうということは、もし証拠がなかったならば、今はもうこれを想像する者もあるまい。文学はすでによく上品なものになりきっている。そうしてこのいたって謙遜なる以前の参加者は、最初より他人の剽窃を予期して、署名をもってその著作権を確保しようとはしなかったのである。かれらの遺産の片はしがお伝わっているのは、一つには盲人の趣味気質のいくねりくねりについて、容易に門外漢の占有に向かなかったため、いま一つは人に幼なき日の悦楽を保存する念慮があつて、なんでも古い形のままで記憶することを心がけたために、自然にいくぶんか現代と調和せぬものが、残って目に立つことになったのではないかと思う。

私がこのごろ問題にしているのは、何ゆえに盲が日本の中世において、かようにまで活潑に文芸に働きかけることになったかという点が一つ、これには瞽女と座頭との智能・境涯の相異を区分して考えてみなければならぬが、大体に信仰はかれらの最初の庇護者であつたのみならず、またかれらを支援し激励して、その隠れたる才分を発揮させたようである。第二には、こういう並

みでない人たちの影響が、はたして一国文芸の主流を変化せしめることなく、たとえば水に木の葉などの散り浮くがごとく、痕形もなく過ぎ去ってしまうものかどうかも問題であるが、これはどうやらその反対の事実が認められるようである。いちばんに気になるのは笑いの文学のように、言葉の自然の力と群れ共同の作用とによって、効果を思慮のほかににおいて収めんとするものが、盲のごとき自分は笑い能わざる不幸なる傭兵から、代を払って笑いを買い取っていたことであつた。これでわれわれの滑稽が時勢にもおくれず、また人情の要求にもとることなしに、すらすらと成長してきたらうということは、なんととても樂觀することがむづかしいのである。

しかしこの点を深く考えてみようとする、あらかじめまず人間のむやみに笑いたがる習性とくぶんか安物の笑いを高く購おうとした癖のあつたことなどを説かなければならぬが、そんな堅苦しい議論はまだ私には準備が足りない。それでさしあたりは過去の盲の事業の中で、今日まだ埋もれずに伝わっているものを拾い上げて、少しづつその発生の源を尋ね、またその感化の及ぶところを、考えてみる資料に供したいと思うのである。おこわりをするまでもないことかは知らぬが、かりに現代流行の大衆文芸なるものに、以前盲が設定した窮屈なる約束の、なお若干は残っているものがあるとしても、私には近世の史論家のある人々のように、その発頭人ばかりを責める気はまったくない。かれらの追隨者が無意識に、ただ文芸とはこんなものと心得ていたと同様、盲人もまたこの途しかあるいていくことができなかったのである。かれらの杖としたものは生存であつた。島国の文芸が盲などを手引きと頼んだために、ついついこんな方向に深入りを

していたという事実は、ただわれわれに向かつて別にいくつかの異なる道の、今なお聞かれずにあるということを教えるまでであつて、企ててはとうていできなかったこの珍しいわが国の実験のごときは、悔いる理由もなければ、またその利益もないのであつた。

二 笑話の分布

盲の道化というものは、全体にいつもやや技巧に過ぎていた。かれら自身は鏡というものを知らず、人の笑い顔を見て参考にすることができぬためであらうか、今でもかれらの愛嬌笑いには努力の痕が見え、なにか一抹の苦味とも名づくべきもののただようているのが感じられる。それと同様に笑いの手ごたえを、常に聴衆の声だけから探り出そうとした結果、自然にその手段のいくぶんかていねいに過ぎるきらいがあるのであつた。目の見えぬ者から笑わせてもらおうとしたわれわれの失策は、かなりよくできているという作り話の中からでも、なおこれをさとることができるのである。桃太郎童話の一つの傍系として、私の集めてみた「米倉法師」の話なども、やはりよく見ているとただの人の趣向には浮かんでこぬものであつた。昔々ある一人の心素直なる親爺、水の神の御意にかのうて、靈妙不可思議のみどり子を授かり、または黄金を降下する小さな動物、もしくは打出の小槌の類の宝物を拝領してもどつてくる。それを欲深な隣家の爺がうらやんでまねそこない、あるいはわが家の女房が心得ちがいをして、まことに飛んでもないことになつてしまったという話。これらはいずれも遠い昔の世から、その後段の失敗がわれわれの笑い

の種であつた。純なる敬虔の情をもつて謹んで前半の奇瑞に耳を傾けようとした人々も、なおこの禍福、幸不幸のあまりに顯著なる対照に触れて、われ知らず高笑いをせずにはおられなかったかと思われる。これがわれわれの想像しうる上代の俳諧であつた。ところが神話を支持していた国人の信仰はやくこわれ、人はただこの種の語り事を目して、敵を設けざる嬉笑の具とするにいたつたのである。中世の平和時代は、それほどにも笑いの乏しい期間であつた。それゆえにとめて話法を平易かつ珍奇にし、特に笑いの動機に関しては、競うて新意匠を出陳しようとしていたのである。われわれの昔話が笑話に化していった事情はここに存し、かの人生の最も笑いがたき部分を歩む者が、やとわれてこの技芸を錬磨することになったのも、起こりはまたこれにあることは想像しえられる。

熊本県では北の境の南関の町に、古風なハナタレ小僧様の一話が今も行なわれているに對して、他の一方の端に近い八代郡松求麻村のあたりに、これと前半分を同じゅうする米倉の話が、すでに發達していたことは前にも述べておいた。一方が海老の膽の目供を怠ったがために、海の神に賜つた幸運を取失うたというに反して、こちらは單なる言葉の誤謬から揚げ足を取られたことになっているのも、もうはや盲人の所為らしい考えすぎた改作である。なるだけ手短かにその話の筋を述べると、

昔ある処に一人の爺があつて、師走の町に門松を売りにいったが、一つも売れぬのでその帰り路に、橋の上からその松をみな水の中へ投げ入れた。そうすると川の中から人が出てきて礼を述べ、竜宮へ案内してくれて、そこでたいそうな御馳走になった。そうしてお土産に頂戴し

てきたのが、打出の小槌という一つの宝物であつた。米というてその槌を打つと米が現われ、それを入れるために倉というて打つと、また忽然として倉が建つた。隣の悪い爺が聞いてこれをうらやみ、しいて小槌を借りて帰つて、わずかな間に成るべく多くの米と倉とを出そうとして、急いでつづけさまにコメクラ・コメクラといつて打つたら、米と倉とは出ないで、たくさんの小盲が現われ、ついにその欲深爺を責め殺したという話になっている〔旅と伝説〕四卷四号昔話号、浜田隆一君。

肥後の松求麻村は知っている人も多いであらうが、久しく肥後檢校という琵琶弾きの徒の住んでいた土地である。そこに小盲の笑話の伝わっていたのは偶然でないが、さりとて私はこれをこの一話の発源地とまでは推断することをあえてしない。近年われわれの同志が採集しただけでも同じ民譚の分布はかなり広い。岡山県では「岡山文化資料」(二卷六号)に、遠江浜松付近のものは「土の香」(五卷四号)に、いずれもやや異なる形をもつて伝わっており、さらに甲州の富士山麓と、奥州ではまた八戸市の付近に、明らかにその破片と思われるものが、半ば伝説に化して伝承せられていた。そうしてその以外にも私たちと同様に、いかにもその話ならば自分も聞いたことがあると、思い出す諸君は必ず多いであらう。一個処の師の坊が運搬してあるいたにしては、この区域は少しばかり広きに過ぎる。作者があつたとすればもう少し中央に近く、かつよつぽど融通のきく本元があつたのでなければ、これだけの地方的変化は望みがたかつたろう。『豊前民話集』に採録せられた次の一例などは、形もよく調い、おかしさもずっと加わっている。これを肥後から輸入したものの焼き直しとは考えることがかたい。

昔々ある一人の男が、子供のいじめている亀を助けてやる。そうすると亀は美しい女になってきて、やはり宝物の小槌をつくれた。その槌で地面をたたいて欲しい物の名をよべば、なんでも三度だけは望みどおりのものが出るということであった。持って帰って女房に相談すると、その女房は欲ばかり深くして、知恵の足りない女であつたゆえに、まずさっそくに雑炊千杯というて打つと、すなわち千杯の雑炊が出た。それから足半草履を千足というて地をたたくと、ちよとまた千足の草履が現われる。さあたはいへんだ残りはもう一度しかない。是で米も出し、倉を出さねばならぬと、大急ぎでコメクラ千・コメクラ千と唱えたところが、たちまち小さな盲が千人出てきて、夫婦のあきれている間にその千杯の雑炊を食い、その千足の足半草履をはいて、さっさとどこへやら行ってしまったという話になっている（梅林新市君採集）。

岡山に行なわれている「小盲」の童話などでも、千人の小盲が「まま食はせ三味線弾こ」といって、隣りの欲ばり爺をいじめ通したという風に話されて居た。あるいは考えすぎであるかもしれないが、これが私には端的にその作者の声であつたような感じがする。そうではないまでも、聴衆はこれを話説する当人が小盲であつたゆえに、思わずどつと笑い、永くそのおかしさを忘れなかつた。それをまた盲のほうでもあてにしていたのである。次の代の子供たちが年とつた祖父母から、いたって鮮明にこの滑稽を伝授してもらつたのも、すでに盲の文芸家の計画のうちであつた。

三 蚯蚓の歌

前代の笑いは、通例はそこに居合わす誰人かを傷つけるものであつた。しいて一座の中から笑われる人を見いだそうとして、ひどい闘争におちいゝたことは、ひとり戦国殺伐の時代だけの歴史ではなかつた。だからその間にある一人のみずから嘲る者がまかりいでて、甘んじて人に笑われようとする場合に、笑いははじめて価値のある商品となりえたのである。盲人の生計などはまことにたよりないものであつて、こうでもしなければ奉公のできぬ場合が、以前は氣の毒にも相応に多かつた。そうして大名が必ずしもそういう専門家を召しかかえておく必要を認めなくなつて、かれらは四散して市坊にその芸をひさぐことになつたのである。今から百五十年ほど前に、出羽と越後との境である旅人の採集した三味線唄が一つある。採集者はこれをくどき唄と呼んでいるから、すなわち亦語りものの新たなる変形であつたのであらう。ちつと読みにくいから振仮名のままで次に転載する。

越後国ぶりくどき唄

新発田御領内の戸頭組の

名主助市の高田の内の

一枚田二枚田三枚田四枚田

五枚目の三角田の一本真狐に

しかとくつついたる小蝦こがへどのゝ願ひ事聞ききやれ

米こめが七八合に錢せんが四五十欲ほしや

温海あつみ湯治たうぢして腰こしを伸のそに。

なした小蝦こがへどのゝ無理いな事言いやる

孫子まご伝つたはるその腰こしが伸のるなら

わしも願ねがひ事ことがござる

錢せんが七八文もん米こめが四五合はほしや

蚯蚓けいりも湯治たうぢして目めを明あけよ。

あるいは今日でもまだこの歌は伝わっているかもしれないが、自分はこの蚯蚓の二字に「はし」と傍訓してあるのを、蚯蚓がみずから語ろうとする「私」の意味に解し、昔からよくある二種の動物の、問答体の歌と見ていたのである。以前はたぶん湯温海の湯治場のつれづれに、村の人々を相手に座頭の歌っていた唄であろう。農民は通例田植えの後の腰の痛さを治するために、僅かな米錢を工面して温泉地に來て寝ころぶのが、何よりも大きな慰安であった。ゆえにこのやや皮肉なる小海老の腰曲りをかこつ歌は、境涯の最も接近したから無学の農夫の理解するところであったのみならず、歌者は同時にまた自分の目というものをためぬ歎息を、田に住む第二の動物の言に託して、相憐れましめんとしていたのである。

蚯蚓に目がないということは、かなり古くからの民間の語り草であった。どうして蚯蚓はあのように声がよくて、それでまた盲であるかということとは、いわゆるなせ話の有名なる一つであっ

て、おそらくこれもまた作者は座頭であった。夏の夕方の庭へ縁台などを持ち出して静かに涼んでいると、どこからともなく蚯蚓の清い音が聞えてくる。あれは蜷蛭けいりであって、蚯蚓は鳴くものでないと、今では誰かが言い出すことになっているが、以前はこういう場合に必ずこの話が出たものであった。記録になっているのは「民族」(二卷四号)に、林魁一氏の東部美濃の例がある。昔蛇は歌が巧みであつて目を持たなかつた。その蛇の処へ蚯蚓が歌を教えてもらいにいくと、その目とならば取り替えてやろうと答えたといつて、かつては蚯蚓が今の蛇のごとく、美しい目を持っていたように話すのがおかしかつたのである。栃木県南部の一例は箕和田良弥君が、その九十歳の祖母から聞いてこれを採録している。『相州内郷村話』にも著者の老母の知っていた話が載せてある。むかし蚯蚓には目があつて声が出ず、蛇は目が無くて歌が上手であつた。目はなくてもよいから美しい声と思つて、蛇に所望してその声とわが目とを交易したというのである。それが同情に値するやせ我慢であつたやら、ただしはまた心からそう思つていたのやらは問はずとよい。少なくともその作者が声清く歌に巧みにして、目をもたぬ人であつただけは想像しえられるのである。

座頭の座の取り持ちが主として音曲であつた時代にも、琵琶や三味線の手を休めると、必ずこゝうい話が出たことであらう。誰しも半ばは愛想に、どうしてそなたはそのようなよい声が出るかなどと、尋ねる人は多かつたにちがいない。それにいちいちまじめくさつて、卑下した会釈ばかりもしてはおられなかつたのである。それにつけて思ひ出すのは、お貞子という奥州八戸はちのへの盲めくら巫子みこは、かつて私の家に来てオンシラ神を遊ばせ申してくれた時に、ほとんど手を休める間もなく、

煙草を吸いつづけていた。これもどうしてそのように煙草が好きになったかを尋ねてみると、私は十三で目を病み出したころには、もう米の飯よりも煙草が好きでありました。煙草を断って心願を掛けるならば、その目はなおしてやろうと法印様は言ってくれましたが、いいえ目は見えなくとも煙草は止めませんといって、今でもこうしてのんでおりますと答えた。これが後々考え直しても取り返しつかぬものだけに、その言うことが私には悲しく聞きなされた。しかし煙草のほう是最初から吸われるためのものだからよいが、蚯蚓などはこうした説明の昔話ができただけに、今でもまだ声の葉だなどと言って、捕って煎じて飲む者が絶えないのである。座頭は蚯蚓にとっては、実はありがたい知音ではなかった。

それからこのついでにもう一つ言ってみたいことがある。ジェデオン・ユエの『民間説話論』を読んでもみると、このわが国の蚯蚓の由来と、半分以上似た昔話がフランスにもあった。Olivetと称する一種の小さな蛇は、やはり日本の蚯蚓と同じように、目をもたぬ蛇だと伝えられている。それがわれわれの鰐と訳しているロッシニオールと、やはり目と声との交換を約したのだそうである。ところがこの話では相手方が不正直なやつで、目を取ってしまつてよい声は渡さなかった。それゆえに両者は今もはなはだ仲が悪く、盲のオルベは黙って憤っているというのである。何か奥深い理由のあることと私は思うが、世界の多くの民族を通じて、動物の説話というものはその大部分が、譌詐と背約との逸事をもつて組み立てられているのである。日本でも「猿の尻尾はなぜ短い」のように、ヨーロッパの獣奇譚とまったく共通のものもあれば、あるいはまた「百舌の沓作り」や「雲雀の借金」、「梟紺屋」だの「蔦酒屋」だのごとく、この国において格別の発

達をとげたかと思われるものもあるが、その大部分が前生の不義理を、今でも覚えていて怒ったりわびたりしているというのは、珍しい事実であると思う。

蛇と鰐とが取引をしたという説話なども、はたして中間になおいくつかの類例が分布していて、かれからこれに伝播した経路を示し、単なる偶然の一致ではなかったことを、証拠だてうるか否かは未定であるが、かりにヨーロッパのものが移ってこにきたり、またはどこかの第三の起点から、東西に別れて出たものと決しても、まだ日本の蚯蚓の昔話が、盲の考案になったという私の想像は動かぬのである。以前だまされて目を奪われたという古い説話があったのを、改めて交易が平和のうちに完了し、蚯蚓も歌とよい声とを受け取って満足しているという形に、話しはじめたのは日本の座頭であつたとも見られるからである。実際この昔話の空想は、空から作り出したにしては、ややとびに過ぎていた。そうして御伽の役の盲人などというものは、通例は旧話の作り替えをもつて能事とし、その聴衆もまた実はまるっきりの新作は好まなかつたのである。文芸の純粋として作者の創案に成るものを、つい近ごろまでの俗人は「昇いて除けるようなうそ」と呼んでいやしんでいた。たいていは今まで聞いていた話をもつと詳しく知りたいために、作り替えや後日譚の出るのを予期していたのである。いわゆる演義や踏襲でない作品というのは、沙翁にだってほとんどないというのではないか。盲ばかりが剽窃していたわけではないのであ

四 盲をからかう話

古人は古い趣向の一端を採用することを、別段に悪い事とはしていなかった。それを気がとがめるのは良心の洗練みたようであるが、実はその部分までも自分の手柄にしようといういやしい心が、隠せるだけはそれを隠していたのである。近代の都府の作者たちが、どの程度にまで淡泊に、種の出処を打ち明けていたかは私は知らないが、種を古書の中から捜して用いていたことのみは事実である。たとえば目の不自由な者をいじめたり、からかったりしたという滑稽、これはその作者が盲人みずからであり、いわゆる自嘲の文学である点に意義があったのだが、そんな事はいっこうお構いなしに、目のちゃんとある人生の驚どもが模倣した。その中でも三馬の『浮世風呂』の柚の都・柿の都などは、舞台を銭湯とし、相手を生酔なまよにしたところにまだ若干の働きはあるといえるが、それだけにまた読者が能の狂言の「猿勾当」を、知らずにいてくれることを祈願した情がよくうかがわれる。ことに一九の『膝栗毛』の塩井川、犬市・猿市の川越しの一条に至っては、あまりにもその叙述が狂言の「どぶかつちり」とよく似ていて、これを古文学の焼き直しということすらもかたいのである。名をしるした記録の文芸においてまで、こんなことをするようになって、剽窃ははじめて悪事であった。

しかし考えてみると、これらの粉本となっている『狂言記』の二篇とても、うぶなる新作書きおろしと見ることはとうていできない。単にそうした滑稽の語柄が、何度でも夜話の席にくり返

されていたというにとどまらず、おりおりはあのころ流行のもののまねとして、当の盲目らのいまいっそう如実なる実演さえあったのかもしれない。それをほぼ順序だてて狂言の番組の中へ、さし加えることになったというに過ぎぬようである。人もあるうにこんなたいいけな片輪者の所業を、三百年も四百年も連綿として、目のあるわれわれが模倣してきたなどということは、知恵のない話のいきどまりであった。こんな重苦しいまた不人情な道化話よりは、むしろこれに盲従していた文人の意気地なさのほうが、よっぽどおかしみに富んでいるように、私たちには感じられるのである。

その上にわれわれはまた時としてまねをしないを思われる。たとえば豊後の吉右衛門咄きつちやうべしというのは、ある一人の吉右衛門咄きつちやうべしというおどけ者をフレムにして、やたらに古今の笑話を寄せ集めた無記録の説話集であるが、その中にも吉右が按摩をからかったという話があり、これとよく似たものは、他の地方にもおりおりは伝わっているらしい。その趣向というのは向こうから多勢の盲が並んでくるのを見かけて、並木の松の枝に棒をぶら下げておくと、それが一人一人の頭を打って、かれらは仲間の者の所為と誤解し、怒って互いに喧嘩をするというだけの筋であるが、これなどもとはこのような簡単なものでなかった。人がその滑稽の真の味を解しがたくなつてから、ただその中の最も下品な騒々しい部分だけを取り伝えたのである。万治元年に刊行せられた『百物語』(巻下)には、次のような一章がある。

或人座頭を好きて、毎夜五人十人呼寄せ長遊びをしけるに、下部ども腹を立て、何とぞ座頭どもに当りて、来ぬ様にと巧みて、門の口に横槌をつりて頭を打たす様にからくみ置きしに、

案の如く座頭来て頭をしたゝかに打つ。めいよ意地悪しき者なれば、又あとに来る座頭に斯くと言はず、座頭八人来て八人ながら物言はず、皆かしらの割れる程打ちける。おのれ一人打ちては口をしと思ひける心何れもあり。さるほどに例の長遊びして還る時、下部とも言ひけるは、さても夜更けて候。座頭の坊なん時ぞと言へば、我等来たりし時八つがしらを打ちしまひたり。はや明け候はんと言ひける。すね者なりとぞ。

すなわちこの書はすでに伝聞の形を保存しているのであって、これも最初の話し手はまた座頭であつたろうと思う。座頭は生得意地悪しき者、またはすね者だということも、おそらくはこれら自身の言い立てたことで、こういうまことに微弱なる反抗を試みつつも、なおあらかじめそれを相手にことわっておかねばならなかつたところに、考えてみれば心細いこれらの職業意識があつた。心の底からの楽しい笑ひをもつて、自然に聞く人を同化せしめえず、かれらの滑稽譚がいつても念の入りすぎたややあくどい洒落に落ちていったのもむりはないと思う。右の『百物語』の一話なども、いわば座頭の自身に対する残忍性であつて、下人らの巧みを知りつつも、わざと腹を立てず、ただ頓狂なる口答えをもつて、暗々裡に復讐をしたという点に、一種のおかしみはあるけれども、その笑いたるや純粹ではなかつた。「八つのかしら」の口合ひの意味が、もう不可解になつて後まで、久しくこんな話をむし返していた者は論外であるが、それを合点しつつもなおげらげらと笑つて聞いていたのは、これもまたよいほどの馬鹿大名らであつた。

それでこの座頭の坊のお得意とした人々が、大部分が今のわれわれのようなエリットでなかつたことも考えてみねばならぬ。ことに何の話でも信じようとする田舎の人に、前もつてこれは戯

れ言だということを知知させるためには、まわりくどいことは絶対に禁物といつてよかつた。しかもどの辺がちょうどよい加減かということ、毎回測量してかかるのも容易でなく、かつたまたできるならば満座の者が、一度にどつと笑うことを心がけていたゆえに、どうしても話は聴衆の最も鈍感なる者の、理解を目標にとるような傾きがあつた。これと同じ事情は、現代でもやはり笑ひの文学の発達を阻害している。よもや自身はこんな事を、おかしいとは思つておるまいと思ふ作者が、売れる本のためには実に下らぬことを言つて笑わせている。当人はおかしくないのに、聞く者だけを笑わせようとすれば、当然に言語の正しい機能を殺して、面をかぶせお化粧をさせなければならぬ。そうしてまた少しばかりは下がかつたことを説く必要さえあつたのである。歴代の盲は技芸としてその術を弟子に伝えた。その盲の文芸が今もなお大いに学ばれている。助かないわけである。

五 餅と座頭

この座頭の口伝の中で、今日の人々があまり珍重しなくなつたものが一つある。それは歌言葉を挿んで談話の効果をあげ、同時にその内容が現世の実事でないから、信用するに足らぬことを暗示する方法であつた。こうした話術の起原はもろん古いが、これを踏襲して最もよく利用し、ことに無害なる多くの笑話を、作り出した者は盲であつたように思う。これは一つにはかれらに観察の機会が恵まれず、自身の経験の中から話題を見つけ出すことがかたかつたために、つとめ

て言葉のあやによってその弱点を補強すべく、やや濫用の程度にまでもこの古来の様式を使役したためであろう。それにはまた周囲の俗衆が、雅語と律語とに対しては完全に無抵抗で、いかに凡庸陳腐なる思想でも、これを三十一文字にして見せると感心するという、宿命的なる習癖も便宜を供していた。たとえば、かの西行法師が吟と伝える野糞の歌のようなものから、宗祇が閉口して逃げてもどったという童児老女の問答の類まで、われわれの家庭の昔話の中には、歌を中心とした説話が無数に発達しているのは、よその民族には見られない奇現象であった。この種の昔話はその中心をなす歌がつたなければ、話にならぬのはあたりまえのことだが、正直なところ十中の九まで、その歌はあきれ返るほどまずいものである。だから少しばかりその方面の鑑賞が進むと、人が相手にしなくなるのもいたし方はないので、不幸なるわが国の前代の盲たちは、こんな未来のない仕事に、文字どおりうき身をやつしていたのである。目の明いた人々ならば、他にもまだいろいろの笑話の種を見つけることができたはずである。だからいわゆる狂歌咄の大多数は、座頭の原作であろうと私は思っているのであるが、これにはまだ証拠とてもないゆえに、しいて水かけ論を主張しようとはしない。さしあたりは明白にこれらでなければ考え出せそうに思われぬものだけを、もう少しここに拾ってみようとするのである。

餅と座頭との交渉は、だいぶん久しい前から、笑話の有力なる題材の一つとなっていた。私はこれをもって、餅の日が座頭のくる日、餅を食うべき宵がまたかれらのおどけ話を、集まって聞こうとした機会であったことを、意味するものと解している。安楽菴策伝の『醒睡笑』(巻二)に、かなりこの系統中の優秀なる一例が載せられている。

座頭の出居でしよに宿を借りていねたるを忘れ、呼びも出さず、搦きたる餅のあたゝかなるを、家内の人ばかり食ふ座敷へ、

餅つくと目にはさやかに見えねども杵の音にぞ驚かれぬ*

これなどはどうやら歌がまずできて、後に小話のほうは取って付けたようにも思われるが、とにかくに作者は盲人であり、また教養のある盲でもあったことがわかる。風雅なる京都の社交界に出入りして、本歌の取り沙汰をもっぱらとした人々と接していたればこそ、こういう話を出しても高笑いせられたであろうが、これがもし『古今集』も知らない百姓の家であったならば、聴衆は黙ってただまじまじとかれの顔を見守ったことであろう。だからそういう田舎の用途に対しては、別にまたいろいろのもっと安直なるものができていた。昭和の今日でも東北地方などに行くと、実におかしいほど、この系統の笑話が流布している。佐々木君の筆に残した『紫波郡昔話』や『老嫗夜譚』、山形県では最上郡の『豊里村誌』、越後で近ごろ集めた『加無波良夜譚』にも、おおよそ同じ型の話があるのだから、決してある土地限りのボサマの即興の作でなく、師資相承して久しく持ち伝えているものであった。しかもその話の手法として、物おしみの夫婦がなにとぞして餅を座頭の坊にくれまいと思つて、いろいろと問答をした文句には地方的の変化があった。それから亭主の足の指に細紐を結んでおいて、夜中にそっと引いて、二人きりで餅を食おうとする、それをまた盲がかんづいて紐を自分の足に結びかえ、引かれてのこのこ起き出して女房とともに餅を食う。そうして夜の明けぬうちにその家を飛び出し、どぶんと横槌を井戸に投げ込んで、身投げと見せかけたというなどはどこでもたいいて同じだが、一方にはまた亭主に名前国所

を尋ねられて、「蓑にかい餅くるみの郡」だの、「瓶の底ぬく一坊でござる」だのと答える点は、一個処ごとにそのでたらめが区々になっていて、誰もかれも自分が子供のころに聞いていた話の方が、最もおもしろくまた正しいように思っているのである。まことにはや小さな事ばかり穿鑿しているようであるが、私の興味をいなくのはこの盲人の機転が、相手次第によって変えてもよい文句は改造し、しかもなお一貫して既定の教理、平たく言うならば座頭には餅を食わずべきものなりという要点のみは、どこまでも保存していこうとしたことである。もしもかれらをして今日の世にあらしめば、必ずこれを名づけてイデオロギーといったに相異なる。少なくとも作者みずからの生活に忠実であった点にかけては、盲の文芸は他の多くの受け売り小説よりも、はるかに花が自分のために匂い、鳥が自分のために歌うに近かった。

ただし一方にはそういう隠れたる趣意を挿んだ文芸を、聞いて無心にうれしがっていた者は、善人であったと言つてよい。盲はこれに乗じて、始終少しずつその地歩を進めようとしていたのである。私の知っている座頭の餅話の中では、特に大胆なるものが秋田県に一つあった。今では土地の人も忘れてしまったかも知れぬが、以前北秋田の十二所という町に座頭の神社があり、そこにまた座頭桜という名木の桜もあって、花都はなつという旅の琵琶法師の霊を祭ると伝えられていた。昔この土地の人々の集会の席で、餅と酒といずれかまさるという論があった時に、この花都坊はなつがおり合せて、ふと一斗搗ぎの餅なら食つて見せるといふ賭をした。もしも食いつくしえなかつたら首を取るといふ約束で、さっそく餅搗ぎの支度にかかったが、その家の女房がいたずらに、相手の目が見えぬを幸いとして、そつと一升だけ余分の糯米ももこめをさし加えて餅にした。もうはや一斗

分の餅は食つてしまったと思うが、まだ少しばかり残っていたのは案外だ。しかしこれ以上はなんとしても咽のどを通らぬ。残念ながらこの賭には私が負けた。さあ切つて下されといつて、首をさし伸べる。なんの御坊の首などを切つてなんにしようぞ。あれは戯れだから氣にかけずにいるがよいといふと、意地張りの花都座頭はいきり立つて、さても突止な土地がらよ。いったん取ろうと言つた盲の首も切りえないとは、よほど腰抜けな話だとさんざんに悪口する。座中の若侍が短氣を起こして、につくい盲めがと抜き打ちにその首を切り放すと、驚くべし咽の切り口の際まで、今食つた餅が盛り上がつて居たという話である。一升の糯米をはかり添えた女房は、これを見て慚愧の念に責められ、かつは亡霊の祟りを恐れて、塚を築き桜の木をその上に植えて、そこに花都座頭を神として祭つたというのは、いかにしても耳新しい御社の縁起であつた。

これが實際そのとおりの事があつたという歴史であるならば、もう別に何も言うべきことはない。ただしそれが作り話であつたとすれば、誰がその作者であつたらうかが、またしても問題になるのである。とにかくに話はよほど古い時代のことのように、土地の人たちには考えられていたと見えるが、そう古いころならば、酒と餅との論もなく、また花都などという旅の琵琶法師がこの辺にくることもなかつたはずである。『筆のまにまに』という随筆にはこの口碑を載録して、その後にこういうことを付加している。ちやうど最初のいわゆる座頭桜が枯れたころに、その地面の持ち主がわけのわからぬ病氣をした。うかがいを立てて見ると、花都の祟りであつたところから、話はすなわちその際にはじめて明らかになつたのである。ところがその地主の息子といるのがこれを安からぬことに思っていると、ある年の冬の雪の日に犬がその祠の上に来て糞を

した。これを見てあのような事をされても、黙っているような神なら、祭るねうちがないといって、祠をこわして捨ててしまったけれども、これには何のさわりもなかった。そうして縁もゆかりもない隣の某という者に、また花都の霊がついて悩ましたので、今度は祠だけは桜の木とは別に、隣地面に再建して祭ることになったのだとある。すなわちその当時からすでに座頭の言を信する者と信じない者があって、完全に一個の伝説となりきることはできなかったのであるが、話が珍しいために聞いた者だけはみな記憶していた。そうしてさもありぬべしと思った者だけが、再び氣病みをしたり、信心をしたりしたのであった。こういう事実を語った者は、普通の女の口寄せではなかったらう。これもまた盲が片意地で、かつ日は見えずともあざむくことのできぬ者だということを、常から主張していた坊様の所業かと考えられる。

六 狐と座頭

座頭は元来が笑話ばかりをもつて、渡世の途を立てている者ではなかった。西国のほうではつい近ごろまで、音曲も療治も二の次として、もっぱら電蔵かきんの土用経をもつて、衆人の帰依をつないでいた盲僧が多かった。その信仰がやや衰えて、はじめて薩摩と筑前との琵琶は起こったのである。平家となんの交渉もない越後などの田舎でも、おいおいと上方の文化が浸潤してきて、後には正月ごとにこの物語を語りつつ、御大家の門を廻礼する座頭が多くなり、古風なテンボガタリという早口の滑稽は、弟子の小言をして型ばかり演ぜしめるまでになっていた。だから北秋

田の「花都最期」のような悲劇でも、段物としてこれを持ち伝えていたものと考えられぬことはないのだが、幸か不幸かかれら永年の癖ともいべき餅食い話をとものうているばかりに、これもまた一種の当意即妙、人を見て法を説いた偶然の改作であることが露顯したのである。すなわちよくよく相手を甘く見るか、またはここでは道化の需要がないと見切った時には、再び持ち合わせた笑話を変じて、こんな大時代なローマンスと化するまでの、技倆をさえかれらは持っていたのである。人間に洒落氣がだんだんと強くなり、いわゆる遊び坊主の商売が繁昌するとともに、古いまじめな説話は片っぱしから、笑話になっていく傾向を示しているが、そんな中でもいま一ぺん逆もどりに、男盲が考察した悲劇というものがいくつかあった。それが北方の郷土の花都座頭の餅のように、いずれも趣向を今までの笑話と共通にしているらしいのは、考えてみるとおかしいことで、もとよりかれらのうそをつく技能が、非凡に習練せられていたことを語るものであるが、同時にまたわれわれ大衆が、泣くにも笑うにも自分と共同でありえない者を頼んで、泣かせてもらい笑わせてもらおうとした氣楽さが、はからずもこういう洩いすっぱい果実を結ぶことになったので、この点ばかりは歴史とはいいいながら、なお将来の参考にならぬことはないと思う。

しかしそういう理窟をこねることなどは、私の最初からの目的ではなかった。それにまだ少しばかり、列記してみたい事実が残っている。盲の文芸でもまじめな悲劇もののほうは、笑話ほどには後の人たちが、まねたり焼き直しをしたりしようとはしなかった。それはお互いの批判が滑稽に対するほど寛大でなく、おまけに普通の奇事珍聞は、その後もあり余るほど発生して、笑い

に飢えたる人々のごとく、がつがつと食い付くにも及ばなかったためと思われるが、なお一方には狭い土地限りで、住民がたいせつにこれを信じ伝え、それをある時代の座頭の作り話であったと聞くと、失望するかもしれない人が多い。すなわちこの方面の文芸は後の複製を許さなかった代わりに、原版として古い文化の痕を保存しようとしていたのである。佐久間洞巖の『奥羽観迹聞老志』(巻四に、牡鹿郡柳目村にある一つの塚が、一時非常に繁昌して持ち主大利を得、後にそれが妖僧の虚構に出たことが露顯したという事実を録しているが、しかもその塚というのは、もと盲人と狐とをともに埋めたという伝説をもっている塚であった。昔この村の路傍に悪い狐が住んでいて、通行人のたぶらかされるものが多かった。ある時一人の座頭の坊がこの田圃路を通っていると、例のごとく狐が出てきていたずらをした。ボサマ大いに憤って、その尻尾をとらえて放さず、夜どおし格闘して翌朝は盲も狐も、ともに戦い疲れて田の中に死んでいった。それを埋葬したのがこの塚だというように伝えられていたが、これもまた記憶以上の史実であって、狐が座頭にいたずらをしたこと、座頭がそれを憤って反撃したことなどは、そばにいて実見し、または報告を聞いた者などは一人だつてないはずである。その上に盲が狐の尾をかた牢くとらえて、ともに斃れているのを見たであらう人とても、別に記録を作つてこれを伝えたわけでもないのである。後年それがまさしき出来事として認められるにいたつたのは、すなわちまた亡霊の言を信じたからであった。問題は誰がそのような奇抜な託宣に参与したかということに帰着するが、意識的にもせよ、また無意識にもせよ、これだけの予備知識をそなえて、そんな口寄せの言をなした者は、座頭以外にはありそうにも思われぬのである。

今日われわれがほぼ忘れかけている笑いの一種に、きわめて原始的なる勝者の誇り笑いというものがあつた。自身直接にその事業には参与せずとも、悪者が討伐せられ、妖魔が退治せられて、もうかなわぬ、ゆるせゆるせという光景を見ては、子供でない者も思わず笑つた。そういう心地よさには一般的の需要があつた。われわれの父老はこれを訓育と勇気の養成にさえ利用していた。そうして盲人の笑話には、いつもこの需要を目ざしたものが多かったのである。その中でいちばん有名なのは、狐が片目の爺に化けてきて、目の右左を取り違えていた話。本尊の阿弥陀様がいつの間にか二体になつていたのを、賢い小僧にすかされて、にたにたと笑つたので、たちまち狐の化けたのが露顯したという話。それからまた、うちの師匠は酔うと袋の中に入つて寝ようというので困るという、狐がついだまされて和尚を氣どり、今夜も袋を出せといつてその中へのこのことはいつてしまふ。それを袋の上からうんとどやしつけた話。こういうのが何度聞いても高笑いせずにはいられぬ昔話であつた。信州北安曇郡の口碑集では、それが大市という小盲法師の手柄話になつてゐる。また奥州の『聴耳草紙』においては、琵琶の合の手をもつて、そのなぐられて啼く狐の声を模している。すなわちこの類のあまりにも素朴なる冒險譚が、本来かの徒の管轄であり、また十八番であつたことを知るのである。これを事実だと思つて聞いた者も少ないであらうが、作者の空想は止めどなく発展してゐた。あるいは山寺の化物退治の話の中にも、妙にペダンチックな南地の鰐魚だの、西竹林の一目鶏だのという名があつたり、あるいは三味線の糸をきりきりとしめると、急にのどがしまつて苦しくなる。さてはこの妖怪は蜘蛛だなどという類の理窟っぽい話もある。あるいはまた行き暮れて野中の一つ家に宿を乞うと、むんずりと

した親爺がただ一人いる。家は八畳一間きりでその畳には縁がなく、のっぺりとした渋紙のようなもので、柔らかで、少し暖かいので、さては狸というような、悪戯に過ぎたるものもあった。つまりは諺にもなっている盲蛇におじず、盲人はかえって化物などには平気だという一種の功名談であって、たまたまそのたった一つが奥州の柳目村において、狐と盲人とともに死すという悲劇に転用せられていただけである。もとはあったのだから、即席にだって作り上げられぬことはない。それが伝説に化して、ある地の住民だけに信ぜられようとした経過こそは、さらにもう一段の興味をもって推究せらるべきものだと思う。

七 狼と座頭

前にも述べたように、全体に盲の文芸は重苦しかった。自分は実験が少なく、耳学問を主とする結果、いつも言葉の外形に拘泥する傾きがあった。国語の活用を裏面から考察しようとする者には、参考になることが少なくない。たとえば佐々木君の採集した一話に、心願をこめて観音堂の縁から飛びおりた男が、日玉が抜け出したのをあわてて拾って、けえっちゃくれに押し込んだために、腹の中の五臓六腑が見えるようになって名医となる。それをうらやましがった隣の爺がまた飛び下りて見ると日は抜けたが、今度はまちがって栃の実を拾って、目にはめたから座頭の坊になったというなどは、その座頭の坊でなければ、なんとしても言われぬことであった。人はよく悪口に、かれらの目をとちまなこなどとはいったが、この比較などは格別あたってまいなかつたのである。鈴木正三の『鹽轡橋』に載せられた昔話で、私が『日本昔話集』の上巻に採録したのもなどもこれに近い。それをもう一度略述すると、

昔一人の盲法師が、山中に迷うて山の神の木の下に野宿し、夜すがら琵琶をひいて、山神に供養をした。そうするといろいろの御馳走が出る。朝になると獵人が一人現われて、里まで送って進めるからこの鞆に取り付きたまえという。そこでその毛鞆をしかととらえて、案内せられて麓まで来ると、それを里の童が見つけて口々に、あれあれ、あの坊様は狼の尻尾を持って、ひっぱられてくるとわめいたので、狼は急いで逃げていき、自分は里の金持の家に行つて、昨夜からの奇瑞を語り合ふた。山の神が座頭の琵琶を賞讃したあまりに、眷族の狼に命じて送らせたのであった。

とあるが、これもまたわれわれならば思い付かぬ趣向であった。座頭は稀に毛の鞆を手にとつて見たことはあるか知らぬが、狼の尻尾だけは触れたこともなかったろう。それを人からまず鞆のようなものだとか聞かされて、さっそくにこんな一話を考え出したものかと思われる。しかもこの話などには捨てられないユーモアがあった。どうせわれわれは盲が正しくあった事のみを語るとは思わぬから、かれの話によつて狼と盲人とが、尻尾でつながつて山から下りてくるほほえましい光景を、胸に描いて見たことを感謝したのである。

ゆえにもしこれが鞆と狼の尻尾との類似という知識にもとづいて、新たにこの一話を考え出したものであったならば、盲人の創意はよほど高く評価してよかつたのであるが、いかんせんそれはただほんのこの部分だけの改作であつて、前から同系統の説話はかなりひろく流布していたの

だった。その最初の形も尋ねていたら、今にわかるうと思うが、まず手近にもこれと似通うたものが『因伯童話』には出ている。因幡国八頭郡池田村の盲人国都、京に上ろうとして若桜の豹山にさしかかり、山中の芝原に野宿して琵琶をひいていると、向こうの山に声あつて之をほめ、また一曲と高野の巻を所望した。それから一人の老翁が現われてきて、馬をひかせて播州の方へ送らせてくれる。播州の戸倉という村で夜が明けると、路傍の子供が集まってきて、あれを見よ、盲が狼に乗ってきた。狐が口を取っていると大声に騒ぐ。それを聞いて馬は国都を振り落とし、口取りもろともに大急ぎで逃げ去ったというのは、これもまた誰が聞いても笑わずにはおられないおもしろい絵物語であつた。すなわち話は狼の尻尾のみについて生まれたものではなかったのである。

それからもう一つ、これは全国によく行き渡っている話だが、やはり中古の改作にすぎなかったと思うのは、これも牡鹿郡の狐退治のように、それに携わった座頭がその場で命を失つたという悲壮なる結末を告げているからである。越後岩船郡の関谷から、羽前の小国へ越える織峠というのが、その中でも最も著名であつたが、同じ峠の裏と表とで、話がはずすに異なるのみか、越後で近ごろ出た二つの伝説集にも、また別々の言い伝えを載せ、その一方は話の主人公を替女だと記している。『越後野志』巻九に見えて居るのが古いからこれを引くと、昔一人の座頭、この峠の頂上に宿して、深山の寂寞にたえず、ひとり琵琶を弾じて心を慰めている所柄、忽然として美しい女性現われきたって、しきりに感歎しかつ曰く、御坊麓の里に下るとも必ず長居するなかれ。われはこの山に年久しく住む大蛇なるが、時至って近々に海に入るので、行きがけにこの

下の一谷を淵にする。今宵一曲のよしみによってそなたにのみは告げるが、人にこれを言うならば即座に命を取るぞと言つた。座頭はこれを聞いて急いで村里に下り、身命を無きものにして村人にその危険を教え、術を構えて大蛇は退治したが、かれもまた立ちどころに死んでしまった。それを神に祭つたのが大倉権現、大蛇も大利大明神と称え、今にその祠が頂上にある。あるいは神宝としてその折の琵琶が置いてあるというかと思うと、出羽のほうの伝えでは、これを三味線堂といい、峠の名も座頭峠、また蛇骨峠と称ぶともあつて『行脚隨筆』巻上、その大蛇がもとは人間の女性であつたことまで、双方でこれを説くが、その話はちつとも一致していない。つまり次の演義が際限もなく展開していっただけで、単に蛇骨だと称する一種の鉱物が、この山上から採取せられることのみが事実であつたらしい。

八 水の神に仕うる者

ところがこれと同様の口碑は、同じ越後でも小千谷の町はづれの茄子崎の地藏堂を中心として行なわれていたほかに、山形県の方でも大石田越の森明神の社にも伝わっていたことが、『黒甜瑣語』巻二に見えている。福島県においては相馬郡の耳谷角落などという土地にからんで、これとよく似た口碑がまた一つあつた。堂房の薬師堂に参籠して、目明きを祈願していた若い男が、日頃修練の笛を吹いていると、やはり美人が現われて、このあたりを泥海とする秘密の企てを語つたので、それを城中に注進して鉄の杭を打ち込んでその大蛇を殺させたが、男もまた帰り途に

黒雲おいかかつて行方知れずになったといい、いま一人の採集者の報告では、男は琵琶一という盲であつて、その芸の上達を祈るために薬師堂にこもり、蛇女に行き会ふたのだといっている。内田邦彦氏の『津軽口碑集』によれば津軽にもこれと近い話があつたというが、いずれの峠であるかを伝えず、また少しばかり要点がこわれている。しかしちょっと珍しいのは、その三味線ひきの盲が峠で会つた女性が、われはこの山中に住むタコというものだといっていることである。座頭は峠を下つて麓の村の酒屋に来て、その話をするやうに死んでしまつた。そこへまたその女が出てきて顛末を語つたというのはおかしいようだが、座頭が秘密を漏らせば即座に命を失う約束であつたゆゑに、そう詳しい事情までを説明する暇がなかつたろうという心づかいからであろう。とにかくに村人は大急ぎで鉄の棒を立てめぐらしたので、タコは帰ることをえずして、蛇体となつて死んだ。そのタコと盲人とを合わせ祀つたのが、今のオシラ神であるといふのはいいよもつて珍しい伝承であつた。タコという名の起こりはぜひ考えてみなければならぬ。魚を食つて水の神になつたという田沢湖の女性も、その名が「たつ子」であつたことは、これと関係があるかもしれない。

それから西日本では、備後双三郡作木村にも同じような話はあるが、これは座頭ではなく山臥だといふから、少しく連絡を見いだすのにめんどろである。三重県では河芸郡上野村、霊現堂の森という処に伝わっているのは、これも主人公が琵琶一という盲で、話は最も福島のものと近いが、さらにいちだんと人を感動せしめる個条は、ちょうど祈願がかのうて両眼の明を得た晩に、村を湖水にしようという神霊の秘密を聞いて、なおかつ一命を捨ててこれを里人に教えたという

ところにあつた。この裏切られた大蛇こそは、すなわち琵琶一の祈つていた霊現堂の神であつたといふのである。単に一夜の宿の行きずりの友ではなくして、現にわが目を開けて下された守り神であつたのに、それをしもお農民の危難を免れしめんがために、鉄の材を打ち込んで殺戮せしめたという点に、この一種の説話の神秘なる歴史はひそんでいるかと思う。東京の近くでは箱根の木質温泉のあたりに、また一つの蛇骨山の話があつた。石井研堂氏の『国民童話』に、昔伊豆三島の宿の按摩の家へ、毎夜遊びにくる小僧があつて、しまいに秘密を告げたというのがその近世の変化であつたが、もう少し古い形は松崎慊堂の『日歴』天保五年（一八三四）三月二十九日の条にも出ていて、先生も木質の湯の滞在中、親しく行つて見たことがあるとさえている。これなども大蛇の秘密を聞いたのは、笛の上手な盲人であつたといひ、琵琶とも三味線ともいつていないのである。「竜宮女房」その他、多くの日本の昔話において、蛇体に愛せられて特別の庇護を受けたという人間は、たいていは笛吹きの名人となつてゐる。そうしてこのほうが私にはより自然であるように思える。笛で長虫を調御することは、今でもインド人の蛇使いなどがやつてゐる。わが国にも『古今著聞集』に俗人助元、笛を吹いて恐ろしい大蛇を退けたという話がある。また夜分に笛を吹くと蛇がくるといふ俗信は、現在もなお各地に行なわれている。これが中世以後の盲人の常の所業でないだけに、あるいはかれらと水の神との關係を説く説話の、古い形の痕跡でないかと思われるのである。今日盲目の輩の祭り仕えている弁天様は、御自身もまた琵琶を弾きたまう美しい女性であるが、琵琶がこの国に渡つてこぬ以前にも、やはり盲という不幸な者はわれわれの間にあり、それが何かの方法で生を営み、もしくは因縁ある守護神にすがつ

ていたにちがいない。だからもし今日の按摩の笛がなんの意味もないただ偶然の残存でないならば、かつては笛を吹いて水底の神靈に仕えていた時代が、かれらにはあったのかもしれない。かきにも固有の水の神との関係が、今ある妙音天女の信仰の基であったとすれば、かれらもまた竜の都の消息を語りうる資格があり、したごうて米倉の笑話も横取りではなかった。ただ単にあのような滑稽に語り改めたという点が、時勢に強いられたる悲しむべき冒瀆であったと言えるのみである。

九 信仰から文芸へ

全体にわれわれの祖先が水の神に対して、かつていっていた信頼と感謝の念は、かなり早くから薄れまた衰えつつあったのである。農民はただ雨乞いの日にばかり大騒ぎをするだけで、常には淵の主は人を取るとか、風雨を起こすとかいって、これを恐れはばかりの習いのみが時とともに増長していったことは、いわゆる三輪式神話の末の流れ、大蛇が美しい娘の聲になって通うたという昔話の、変遷の上にもよく表われている。これは人口の増加と生活技術の進歩につれて、日本人がしだいに高地から下つてきて、水やや豊富に過ぎる低湿の平原を、耕作するようになった経済的原因にもつづくものだろうと私などは考えている。それゆえに以前は沼湖の底深く、隠れて人間の幸福を支配する神霊の存在を想像し、これに奉仕した外戚の親を結ぶことを、家の誇りとするまでの伝説を生じたものが、後には芋環の糸の末に針を付けて、その鉄気の毒をも

って相手の身をそのうたことを説き、ないしは秘密の立ち聞きにより、または保護者の智謀によって、稀有の婚姻を全然無効のものにしたなどと説くにいたつたのである。盲人がこの水神の威望のみに失墜したに乗じて、むしろ信任を裏切つて戦をさかしまにしてこれを排撃せんとしたことは、やかましくいえば生存の必要のために、主義をすてて流俗に迎合したものであった。琵琶法師が大蛇の言を洩らして、命を失うて一村の災厄をすくうたという話などは、ちょうどこの信仰改訂の過渡期を代表している。固有不変の文芸というものを認めないわれわれには、もとよりこれを目して一つの発達としなければならぬが、神話を基礎づけていたある時代の信仰から見れば、これは明らかに零落のあとというのほかなかったのである。

なんにもせよ、今ある蛇骨峠の鉄の杭の話などは、いくら分布がひろくとも新しい分布であった。日本はその地形の上から山津浪の多い国であつて、これを一般に蛇抜けたの蛇崩れだのというようになったことは事実であるが、それをかくのごとき手段をもつて防ぐことは、他には聞かぬのみならず、そのたびごとに一人ずつ座頭が死なねばならぬのはたまつたものでない。つまりなんらか形跡のややこれに近い事件があつて、それにもとづいて発生した語りことではなく、これもまた出羽の花都盲目の靈託と同様に、由あつて次の代の座頭の空想に、浮かびいでた上代以来の夢であつた。そんならいま一つ以前の盲の文芸は、いかなる形のものであつたらうかという、もちろんうぶな姿のままでは伝わってもいいが、捜していたならば少しづつはその破片が拾ひ集められるかもしれぬ。陸前柳井村で死んだ盲と狐と合葬して一つの塚を築き、または大利峠の頂上に大蛇と座頭をとともに祭っているなどというのが、あるいはまたその昔のフ

オクロアの残留ではなかったかと私は思うが、その点はお若干の資料を積み重ねた上で断定したほうがよい。九州のほうでは佐賀県の黒髪山の麓に、かつて梅野の座頭という一部落が住んでいた、その先祖が鎮西八郎為朝とともにこの山の大蛇を退治し、その武功によって、後永く一本の刀をさす格式を認められたように伝えていたことは、前に『山島民譚集』の中にもこれを説いておいたが、この徒が近国を演述してあるいた「黒髪山大蛇物語」というものは、りっぱな読み本になってその幾とおりかが今も伝わっている。かれらにとつてはこれもまた、小規模なる一種の平家物語であった。私の触目した一系統の写本においては、処々に不細工な道化話、またはわれわれが大話と名づけている誇張の滑稽などを挿入してあるのが特徴であるが、その叙述の要部には他の地方と共通のものが多く、すこぶるその由来を思いあたらしめる節がある。たとえば物語の主人公海正坊という座頭の生母が、わが子に立身させてやりたい一心から、化けて大蛇になって切り殺されるという一条のごときは、伊予の上浮穴郡に行なわれていた頼政と鶴の話と同じ異曲であった。頼政の母もまたわが子の射芸を朝廷から認められしめんがために、死んで化鳥になって大内山に飛んでいったあばれたというのである。それはまことにとてもない作り事ではあるが、おそらくはこれもまた盲人の趣向になるものであった。それからいま一つは松尾弾正之助の忘れがたみ、万寿と小太郎との姉弟が登場して、妹の万寿の前は、水の神の牲となつて沈められたというなども、この土地ばかりに語り伝えていた話ではなかった。宇佐の神宮を中心とした大分県の各地に、今でもよく知られている鶴市母子の人柱の伝説においても、これと関係の深い父とか主人とかの人名に、必ず何の弾正という名があり、またその人柱の親子の名も、母が

鶴女で子供は市太郎、もしくは小市郎さまとなっている。そうしてこれがまた古い八幡神話の残りのもの、すなわち神が人間の女を娶ってたった一人の、たいせつな男の子を生ましめられたと言ひ伝えの、末々変化してこうなったものらしいのである。それを詳しく説くことは他日の仕事として、今はただ肥前の梅野座頭なども、わが国に数多い母一人子一人の物語、すなわち神を父とし人間の処女を母として、生まれた霊童を第二の神と崇め、その仲立ちととりなしとによって、天の大神の御恵みを得ようとした信仰に、片はしは参与していたというだけをお話にとどめる。越後大井戸の大蛇と座頭なども、本来はいまいちだんと親密な関係があつて、後者が人類のために現世の生命を絶つて、水の神の怒りをやわらげたという風に語っていた時代が、かつてはあったらうという私の想像も、後にこの比較を進めていけば、そう無茶なものでなかったということがわかってくると思う。

それから最後にただ一言、最も簡単に言い添えておきたいのは、ごぜすなわち女首の管轄した文芸にしても、やはり座頭と同様の自己宣伝があつたことと、それがおいおいに男女相異なる方向に分立していったけれども、古くさかのぼれば唯一の信仰の表裏二つの側面を、撫摩していたものに過ぎなかったこととである。大体に男首が笑いの文学に進出したに對して、替女は聞く人を泣かせる算段ばかりしていたと言ひうるが、それもこれも世間がただ単なる奇理譚のみは聞きたがらず、何かこう身につまされるという類の話、好むようになった趣味の変遷に、順応したものにすぎなかった。だからかの『朝顔日記』の娘深雪でも、さては安寿姫都志王丸の母親でも、気をつけて見るといづれも典型があり、これを悲しくしただけが御前たちの手柄であつた。昔話の

方面においては、継母にいじめられたお銀小銀の父親が、盲になって二人の子を尋ねあっている。またお銀女も目を泣きつぶして、後に不思議に光を取り返したことは、「手無し娘」などと同じである。あるいはいわゆる豊玉姫神話の系統かと考えられる「竜宮女房」の一話においては、母が故郷の水の国に帰っていく別れに、目の珠をくり抜いて生みの児に残していく朱がある。それを無慈悲な殿様にまき上げられて、さらにいま一つの目を惜しげもなく取って与え、これでもう夜と昼との境もわからなくなった。どうぞ明け六つ、暮れ六つの鐘を鳴らして、時刻を教えてくれるようになどと語るに及んで、子を持つ満座の母はみな一様に、はらはらと涙をおとしたのであった。こういう昔話の数多い国は、日本ならずしてそもそもどこにあるか。これでも伝播論者はお外国の説話集から、大きなヒントとやらを得ておれば安心であろうか。われわれの盲女が見えぬ顔をふり上げて、さも悲しげにこんな話をしたのは、なるほど師匠譲りの技芸ではあったろうが、これにもまた人と綿津見の神の宮居との、何千年来の隠れたる交通というものが、凡人の理解を下染めしていたことは争われないのである。ただししかしながら、それを聞く者がなんと受け入れようかには頓着せず、学んで覚えたとおりをそのままに語って、それでもよろしかった時代が永く続いて、神の中居なぐの尊敬を支持した信仰は衰えてしまったのである。かれら盲人がさらにいちだんと饒舌になり、また新工夫にあせって、最初にはまずわが家の由緒と名声とを説き立て、なお進んでは一身の功績から、盲は賢さかしいものだ、粗末にしてはいけないということまでを、露骨にいわねばならぬことになったのも世の中である。遠い昔の代から押んでいた水の神を裏切って、人に神秘を洩らしたのを恩に着せるのはにくいようであるが、これとてもまた生

存の必要からであった。誰が職業文芸の時とともに利己的になっていくことを、罵倒する権利をもっているであろうか。

(昭和七年七月、「中央公論」)

注 釈

元* 五大御伽噺 「桃太郎」「猿蟹合戦」「舌切雀」「花咲爺」「かちかち山」の五話のこと。

二* 『宇治拾遺物語』と『醒睡笑』と…… 『宇治拾遺物語』は十三世紀初めごろ成立の説話集で、その第三話「鬼に瘦とらるる事」、『醒睡笑』は寛永年間刊の安楽庵策伝作の噺本で、その巻之一「謂へば謂はるる物の由来」第二十一話、巻之六「推はちがうた」第三十五話参照。

三* パールの「赤頭巾」Charles Perrault (一六二八—一七〇三)。フランスの詩人・童話作家。「赤ずきん」等の民間説話を集めた『おとぎ話集』その他の著がある。

四* 賀茂の……、出雲の…… 丹塗矢については『山城国風土記』逸文や『古事記』中巻の神武天皇に関する条参照。黄金の筋については、『出雲国風土記』の「島根郡 加賀郷」参照。

五* 舞の本 幸若舞の詞章を集めたもの。幸若舞は室町時代に桃井幸若丸直詮がはじめたといわれる舞曲。四* 「旅と伝説」の…… 観光・趣味の雑誌ではあるが、民俗学の研究や調査報告が多く掲載されている。

昭和三年から十九年までに一九三冊を刊行。三元社刊。「昔話号」はそのうちの四巻四号（昭和六年四月）。

六* 佐々木喜善 明治十九年—昭和八年。岩手県生まれ。文学に志すとともに、柳田国男の影響で昔話の採集をすすめ、『江刺郡昔話』『紫波郡昔話』『老嫗夜譚』『聴耳草紙』等をあらわした。

七* 高木敏雄 民俗学の専門雑誌「郷土研究」（後述）を、大正二年に著者との協力によって出した人。

八* 金田一氏 言語学者・国語学者金田一京助（明治十五—昭和四十七年）。岩手県生まれ。アイヌ語およびアイヌの口承文芸の研究をはじめ、国語学・民俗学の研究で多くの業績を残した。

三* 自分の旧著『雪国の春』

昭和三年、岡書院刊。論考「東北文学の研究」や東北旅行の紀行文・隨筆が収められている。本文庫および『定本柳田国男集』第二巻に収録されている。

四* 『神を助けた話』 大正九年、玄文社刊（『幻遊叢書の一冊として』）。木地屋の問題や山の神の信仰等について論じたもの。『定本柳田国男集』第十二巻所収。

五* 丹波の比治山の…… 『丹後国風土記』逸文の「比治の里」にある話。一種の羽衣説話で、家に連れ帰った天女から幸を得た老夫が、家富み榮えたのち、天女を追いついたというもの。

六* 『郷土研究』民俗学研究の最初の月刊雑誌といわれる。著者と高木敏雄との共同刊行であったが、第二巻から休刊までは著者の単独編集となった。大正二年三月創刊、同六年三月休刊。のち昭和六年三月に復刊して同九年四月廃刊。

七* ダナエ神話 ギリシア神話。アルゴス王アクリシオスの娘が、ふりそそぐ黄金の雨によって妊娠するというモチーフをもっている。

八* 武州熊谷の…… 昭和四年、朝日新聞社の民衆講座夏期特別講演会で講演した「熊谷弥惣左衛門の話」のこと。のち『一目小僧その他』に収録された。

九* 『嬉遊笑覧』 庶民生活全般にわたってその来歴・意義を解説した一種の民俗事典。喜多村信節著。文政十三年（一八三〇）の序がある。

一〇* 「久高の尻」 この一文は『海南小記』に収録されている。

一一* 赤本 江戸時代によく読まれた子供向けの草紙紙。『桃太郎』などの昔話に題材をとったものが多い。

一二* 大話 あるはずのないことを語り、その誇張と空想を楽しむもの。

一三* 私の住所 著者は昭和二年八月から東京府北多摩郡砧村（現・東京都世田谷区成城町）に住んでいた。一四* 筒井順慶 安土桃山時代の武将。明智光秀と羽柴秀吉との山崎の戦いの際、洞ヶ峠で戦況を観望し、形勢有利な方へつこうとしたという話が伝えられている。

二四 * ベンタメローネ イタリアの詩人ジョヴァンニ・パティスタ・バジレ (一五七五—一六三二) の著わしたおとぎばなし集。

二五 * 『白米城』の例について…… 昭和四年三月の「旅と伝説」二巻三号に発表した「木思石語(四)」において、著者はこのことに言及している。のち『木思石語』(昭和十七年、三元社刊)、さらに『定本柳田国男集』第五巻に収録されている。

二六 * 『海南小記』 大正十四年、大岡山書店刊。大正九年の沖繩紀行をまとめたもの。『定本柳田国男集』第一巻および本文庫に収録されている。

二七 * 『遊牧記』という…… 「はて無し話」(『遊牧記』一、昭和四年十二月) のこと。のち『昔話と文学』に所収。『定本柳田国男集』第六巻および本文庫に収録されている。

二八 * 『山の人生』 大正十五年十一月、郷土研究社刊。のち『定本柳田国男集』第四巻所収。

二九 * 夜啼石 夜ごと泣いたりうなったりするといわれている石。著者には大正四年に発表した「夜啼石の話」(『定本柳田国男集』第五巻所収) がある。

三〇 * 『炭焼小五郎』の研究において…… 「炭焼小五郎が事」(『海南小記』所収) のこと。

三一 * テオドル・ベンファイ。Theodor Benfey (一八〇九—一八八二)。ドイツの言語学者。すべての昔話はインドで成立して各国に伝播したと主張し、十九世紀後半の昔話研究に大きな影響を与えた。

三二 * 『金葉集』に…… 『金葉和歌集』巻第十参照。

三三 * 『著聞集』と『沙石集』との…… 『古今著聞集』巻二十「馬允某陸奥国赤沼の駕篇を射て出家の事」と『沙石集』巻第七「駕殺事」参照。

三四 * 西行法師が…… 「西行と女」という昔話参照。この話は、関敬吾著『日本昔話集成』第三部笑話2 (昭和三十三年、角川書店刊) 所収。

三五 * 餅つくくと目にはさやかに…… これは、『古今和歌集』巻第四の「あきさぬとめにはさやかに見えねど

も風のおとにぞおどろかれぬる」をもじったもの。

四六 * 『山島民譚集』 大正三年、甲寅叢書刊行所刊。『定本柳田国男集』第二十七巻所収。河童の問題、白馬についての信仰、馬蹄石の伝説等について述べたもの。

(田中宜一)

解説

昔話の採集 『竹取物語』をはじめ、お伽草子の類には昔話を潤色したものが多い。九世紀以降の宗教的目的をもって編纂された説話集のなかにも、昔話の範疇に属する物語が多くふくまれている。これらは昔話研究の貴重な資料ではあるが、現在の民俗学的意味での昔話採集の嚆矢は、資料の科学的価値を問わなければ、おそらく明治四十年代に遡るだろう。この大戦の直前、『福岡県童話』という半紙に書かれた一冊の稿本を、柳田先生に見せていただいたことがある。聞くところによると、信州のある古本屋で見つかったものであるとのことであった。このなかには、二一九の昔話が採録されている。語り手の記載はないが、採集した小学校名が誌されていたので、その伝承の場所ははっきりしている。十分に資料価値はもっている。このなかに、こういう話がある。父が二人の娘に〈金の文庫〉と〈金の車〉を約束して戦争に行つて帰ると、継母に託した娘がいない。小鳥が〈金の文庫〉も〈金の車〉もいりませんと鳴いている。継子と小鳥の名で知られている昔話である。この戦争が日清か日露の役かわからない。もしわかれれば採集の時期も推定できると秘かに考えていた。最近、たまたま高木敏雄の『童話の研究』（大正五年）を手に入れた。そのなかに、日露戦争終結後まもなく文部省が全国府県に依頼して管下町村小学校に「童話」を蒐集せしめた。その約四分の一は全く無視するか、あるいはわが郷里には「桃太郎」をのぞいては、全

く童話というものはないという報告もあったと述べ、これは報告者の怠慢ではなく、童話なるものの正しい観念をもたなかったためだと、著者は指摘している。著者はまた鳥根県の如きは見事な成績をあげていたと述べているが、いまその資料はどうなっているのか。この『福岡県童話』もおそらくその報告の一つであったにちがいない。ここで戦争といったのは三十七、八年の戦役であり、私自身も、このころすでに昔話の語り方の近代化がはじまっていることを併せて知った。当時民謡の調査も行なわれ現在貴重な資料となっている。おそらくこれと並行して行なわれたのであろうが、国家機関が行なったことは珍しい。

第二は石井民司（研室）の『日本全国国民童話』（明治四四年）である。これは前者とことなり、個人の調査である。一国一話を原則とし、編者自らの聞き書か文書による報告を基礎として編まれたもので、山城から琉球にいたる七四篇、それに台湾、北海道、樺太、朝鮮の七篇、記紀神話が八篇収録されている。

福岡童話は官庁の依頼のせいもあつたろうが、比較的忠実に伝承に従っているようである。後者はこれに反してやや自由に表現されている。記録の方法ものちには速記を応用するようになり、現在の科学的民俗学はいずれの国でも、テープレコーダーが開発されて以来、これによつて伝承を忠実に再現することを要求している。もちろんこれらの記録に科学的意図を求めることはできないが、後者は『桃太郎の誕生』にもしばしば引用されている。しかし、福岡童話は発見が遅かったために、まだ十分に利用されるにいたっていない。

本論とはいささかそれるが、ここに解説者の注意を惹くのは、国を賭けた大戦争の直後に昔話、

文化財の蒐集が、しかも国家機関の手によって行なわれたということである。ここに想起されるのは、世界的な科学的昔話研究の創始者グリム兄弟の昔話集の刊行が、その祖国ドイツのもっとも深刻な政治的窮乏と結びついていることである。第一巻が世に問われたのは一八一二年である。その初版の序文には十月十八日と誌されている。その同じ年に、「不敗のコルシカ人」がモスコーにおいて、冬將軍の前にもろくも跪坐し、退敗している。その帰途、翌年のライプチヒの戦いは、その王座から降らなければならないほどの敗北を喫した一戦であった。兄ヤーコブものちに認めたように、第一巻の刊行はライプチヒ戦の一年前である。この祖国窮乏のなかで、二年後に第二巻を、さらに二巻の『ドイツ伝説集』を公刊している。彼らが昔話をゲルマン神話の残滓、ゲルマン神話の遺産と主張したのも、あながち理論的推理のみではなく、祖国愛がその背後に潜んでいたのではなからうか。さらにドイツ昔話の遺産は、二度の大戦後も新たな機能をもって、病床に呻吟する傷病者、打ちひしがれた民衆の前に現われ、彼らを鼓舞した。その理由は知らないが、われわれの周辺でも敗戦後のいわゆる進歩的文化人による民話運動、それにつづく昔話採集の異常な高揚、資料としての昔話、通俗的な民話、民俗誌の刊行はまさに空前である。東西ドイツを先頭に欧米諸国にも、文明民族の民話だけではなく、アジア、アフリカその他の資料が相ついで公刊されている。一方、これらの資料を基礎として科学的研究も躍進しつつある。とくにヨーロッパ諸国は一つの研究共同体として相互に研究を押し進めている。つねに孤立的枠内で行なわれた日本の昔話研究が、この世界的趨勢に対応して発展するか、興味ある問題である。

この秋、柳田国男先生が四〇年前にとほしい資料にもとづいて、広い知識と鋭敏な観察眼とを

もって打ち立てられたこの記念すべき科学的名著『桃太郎の誕生』をいかに読むか。昔話研究者は、おそらくは二万に垂んとするわが昔話資料を駆使して、いかに柳田理論を展開せしむるか、日本の民俗学のさらに一つの大きな課題でもあらう。

科学的昔話研究の抬頭 柳田先生は昔話の蒐集がはじまったころ、すでに『遠野物語』（明治四十二年）を公刊されている。これには二つの昔話がある。先生は、このときまではまだ「昔話とは何か」ということは考へても見なかつた」と述べておられる。ついで、雑誌「郷土研究」（大正三年）が創刊された。河童、馬蹄石の伝説を主題とした『山島民譚集』が同じ年に出ている。大正十一年には佐々木喜善の『江刺郡昔話』、佐喜真興英の沖繩の『南島説話』、つづいて小池直太郎の信州の『小谷口碑集』などが、相ついで「妒辺叢書」として上梓され、昔話研究の基礎資料は「郷土研究」の報告などと併せて、しだいに集積されていった。

当時は、民譚、昔話、民間説話などの言葉がほとんど同意語として使われ、そのなかには伝説も昔話もふくまれていた。昔話研究にとっては伝説の知識は必要かくべからざるものである。昔話、伝説の概念規定は、グリム兄弟、とくに兄ヤーコブが二つを対比し、昔話については一八一二～一五五年に、伝説については一八一六年に、それぞれの集録の序文で行なっている。日本にグリムの昔話の一部が英訳から移入されたのは明治二十年である。その理論が紹介されたのは大正の初めであるらしいことは、ゲルマニスト高木敏雄の論文などからも推定される。

現行の昔話、伝説の概念規定は、ほとんど前述のグリムの古典的規定によっている。この抽象的な規定を暗記することは容易である。昔話研究の入門書には、いずれも門前の小僧式に、自己の

発見であるかのごとくグリム説をならべてあるが、呪術的意味しがなく、実際の研究にはほとんど役に立たない。柳田先生の研究は伝説研究にはじまったようで、『山島民譚集』につづいて『一つ目小僧その他』などに見られるように、多くの日本伝説の基礎的研究がなされている。その後の昔話研究もこの基礎を背景としてなされたものであろう。こうして他の追隨を許さない昔話研究に到達されたものであろう。

柳田先生の伝説研究の理論的帰結は、昭和三年以降の『木思石語』のなかに集約されている。それによって見ると、伝説の三つの主要な特徴が、昔話と対比して論じられている。

伝説 まず第一に伝説は無形式であること。ここにおいて形式をフォルム (Form)、タイプ (Type) と混合してはならない。昔話でいうるとき語り方、フォルミューラ (Formula)、きまり文句がないということであらう。これを様式 (Style) という学者もある。『伝説名集』にあげた伝説には適用したいが、複合形式の伝説、伝説を主とする語り物にはこれがある。さらに伝説と縁起の関係、ドイツ語では伝説 (Sage) と宗教伝説 (Legende) とに使い分けているが、むしろ縁起は後者に近い。先生は縁起を管理者を失った伝説と思えばたいした誤りはないといわれたが、けだし至言であらう。非キリスト教国の日本にはこの意味のレグンデはない。ドイツ以外ではリチャンドという語をつかって、ドイツ語の意味する二つの概念を入りくませている。

第二に、伝説は話に物があり、記憶に具体的な足場があること。これはつぎの第三の特徴を外面から述べたものである。話が事物、場所、人物と結合しているから伝説ではなく、伝説が真実を伝えるために、信憑性をうるために、具体的な足場を必要とするもので、これもまた昔話と正

反対である。

第三に、伝説は信じられることを自ら要求する。信憑性をうることに目的であるがゆえに、事実と結びついて語られる。これもまさしく昔話の特徴と異なる。伝説の意味する信憑性は時代、場所、文化の相違、教養の程度と関係する。西欧人と東洋人とのあいだにおいても大きな相違のあることを、西欧の研究者はすでに早くから指摘している。さらに伝説と関連して神話を問題にされた。先生に従うと、神話は神祭の日のごくもともと改まった機会に、必ずこれを信ぜんとするものの耳に、敬肅に語り伝えられ、あらゆる方法をもってその忘失を防いだものである。神話と伝説と異なる重要な点は、いずれの説話にも見られないほどの窮屈な方式のあったことである。これを語る人と機会とが限定され、みだりにこれを口にすることを戒められていたのである。昔話の起源。

昔話 昔話の特徴の一つは形式、語り方である。まず三つの重要な点がある。第一は「昔々」の発語である。定まった発語とともに導入部分がある。主人公の誕生、主人公としての爺婆など。伝説と異なり、場所、時、人物の規定がない。移行の形式。事件から事件へ移るとき使われる言葉、「話は早いもので息子は十五になった」「行かい行くと、町の長者どののところに出了た」というごとき決まった文句で、事件は新たに展開する。さらに、叙述の形式、「とき、といな、げな」など、昔話に固有の語り方がある。三人兄弟、三日三晩、三年三月など、伝統的な物語に使われるが、昔話も例外ではない。結末の法則というが、最後に「そればかり、どんとはらい、これで一期栄えた」の結語がある。これは本格昔話に多いが、主人公の幸福な結婚、富の獲得などは

ぼ一定した結果の事実が語られる。話の種類によるようであるが、動植物の發生的理由を最後にともなうものもある。

第二に、昔話は伝説と異なり、固有名詞の省略がある。昔話にはしかし、固有の命名法がある。太郎、二郎、三郎のごときいづれもそれである。これは固有名ではなく出生の順序を示すものである。桃太郎、瓜姫は誕生の形式、ちから太郎はその力倆、蛭皮は呪衣の名であるとともに、ある境遇におかれた女兒の名。灰坊、灰娘は家族内における仕事と結びついた処遇を象徴する名である。糠福米福なども家族内における待遇を意味する名である。主人公の名も本格昔話と笑話とは異なる。

第三に、伝説と昔話の異なる点は信憑性の有無である。語る内容の真疑は問題ではない。事件は語り手の経験したことのないような理想的な場所や理想的な人物によって行なわれる。昔話は真実の報告ではなく、娯楽のために語られるものである。そうかといって現実を無視したものではない。現にわれわれが求めているように配偶者を求め、生活に必要な物資、富の獲得が中心課題である。この真実は伝説のそれと違い、むしろ人間的、普遍的なことを語る。したがって伝説が伝えようとする真実とは異なる真実を語るものである。

柳田先生の意味における昔話は「伝記の性質を帯び、時としては呱呱の生ひ立ちから、一期栄えて孫子の繁昌するまでを説かうとしている。ことに数多く繰返される幸福なる婚姻、美しい長者の姫に嫁入り、あるいは靈界の仙女が押かけ女房にやつて来て、家を十分に富ませてから還って行く話などを聴いていると、目的は必ずしも一個の異常人物の生活を伝えるに止まらず、かつ

てそういう傑出した人を元祖として永くつづいていた一門の存在を、胸に描いていたことが想像せられる」(『口承文芸史考』)。これを柳田先生は本格説話と呼んだ。この言葉はフィンランドの学者アアルネがはじめて用いた言葉で、ヨーロッパの学者はもっぱら魔術譚(Tale of Magic)と呼んでいる昔話の範疇である。先にあげた昔話ないし伝説の規定の大部分はグリムの見解と一致するが、そうだからといって『桃太郎の誕生』の価値をゆるがすものではない。今後の研究者は少なくとも、本書を出発点とし、その後の論文を通じて、柳田先生がいかに昔話を規定したかを考へるべきである。

前述の昔話の構造的規定は記紀神代の巻のなかにその先駆形式をいくつか発見することができる。豊玉姫説話、八岐大蛇、三輪山伝説はともに先の規定と一致する。わが国には英雄伝説はきわめて少ないが、神武東征伝説も長短の相違はあっても、現在の昔話との一致がある。

完形説話と派生説話 柳田先生は昔話の根本範疇を完形説話と派生説話とに分けた。後者は動物話と笑話の二つとし、前者から派生し、独立したものとした。完形説話が、主人公の呱呱の生立ちから婚姻までの生涯を説くに反して、後者は大部分はある日の遭遇、ある一つの事件を問題として逸話風に語ったものとされた。この意味で完形説話というのは個人の生涯を語るという意味と、短い話を派生せしめた複合説話という二つの意味をもつようである。もちろん一つの話から分離独立したと推定されるものもあるが、笑話も動物説話も完形説話と相生いではなかったらうか。

昔話の起源 柳田先生は昔話、伝説の起源を神話に求める。現在、笑って童児に語っているおどけ話のなかにもかつて謹慎して傾聴した古伝が必ずまぎれ込んでいることは疑いない。昔話は

太古民族を結集させた神話のひこばえであった。神話はもとと神聖なものである。定まった日に、定まった人が、定まった方式をもってこれを語り、聴く者がことごとくこれを信じ、信ぜざるものも聴くことを許されぬ説話で、あらゆる方法をもってその忘失を防いだものである。この信じられた説話から脱脚して成長した、(1)真実または確心をつたえようとする伝説、(2)信仰はなくなつてもほぼ以前の型を追おうとする歌物語、(3)面白さを語ろうとする昔話、に分裂して、今日の口碑が成立した。この三筋の路を辿って行くことができると思はれた(『木思石語』三八—四〇)。

この説は昔話、伝説などの研究によって、神話、固有信仰に到達することができるということを示したものである。いいかえれば、現在の昔話、伝説は神話もしくはある種の固有信仰の残存であるということと言ったものである。この説は柳田先生独自の意見ではなく、十九世紀の初期にすでにグリム兄弟によつて提唱され、多くの人々に支持されたインドゲルマン説の系統をひくもので、これがわが国の昔話、伝説の起源の研究に代置されたものというべく、この限りではグリム・柳田説といつても決して不当ではあるまい。グリムは、塔のなかで百年の深い眠りに陥つた「茨姫」を、王子が目覚めさせ結婚したのを、北欧神話のオーディンとブリュンヒルデとの関係に比較した。柳田先生は「桃太郎の誕生」のなかの多くの論文その他で、カガミの皮で作つた舟に乗つて漂流して来つた小男神話と昔話のなかの少童との比較を試みられた。これはまた『山島民譚集』における河童伝説ともつながるものである。さらに先生が「流れ物」の伝承に深い関心をもたれたのもこれと無関係ではあるまい。この着想はグリム説とは別に三河伊良湖崎に流れついた椰子の実に始まり、そして晩年の『海上の道』につながる。

グリム兄弟の昔話・伝説の神話起源説の支持者は今も少なくないが、また一方では昔話が神話に先行するという説、さらに両者の相生説を主張し、神話、昔話、伝説の一致もしくは類似はモティーフの相互借用であるという説も並び行なわれているということを言えばここでは足りる。

神話と昔話 『桃太郎の誕生』のなかには、九篇の論文が収録されている。最初の四篇はいま述べた昔話の神話起源の先生の仮説を前提として述べられたものである。本書はさらに、伝説と昔話との関係、笑話と昔話に関する論述から構成されている。これらの諸論考は一貫して昔話の日本的特徴が強調されている。これは柳田先生における民俗学の中心課題でもある。ここに問題にされた昔話は、それぞれ分布の広狭はあるが、すべて国際的昔話の範疇に入るものばかりである。先生がそうした昔話のみをとりあげて論究されたか、はたまた先生の広い視野のもとに選ばれた昔話が当然の帰結として世界的に拡がる昔話であつたか、もちろん、私はそれを知らない。しかし先生はつねに日本文化の探究ということを念頭におかれ、それを追求するための比較方法は日本国内にとどまらず、真の意味の世界的比較へ進むべきことを無言のうちに示されたものではなかつたのか。民俗学の他の領域についてはここではないわなが、柳田先生によって築かれた日本昔話の研究を發展させる道の一つがここにもあるのではなからうか。

桃太郎の誕生 桃太郎昔話の現在の伝承は変化に乏しく一律化し、児童すらこれを拒否するような形式となつてゐる。この昔話の歴史を考えるのには、周辺のこれと関係ある昔話と比較しなければならぬ。ここにこの昔話研究の出発点があり、他の論文についてもあてはまる。桃太郎昔話は、(1)川上から流れて来た桃が老婆の手に入る。それから生まれた男児が主人公である。こ

れが主題である。(2)少童は長じて鬼が島征伐に行く。主要目的は脱落しているが、先生も指摘されたように、妻覓ぎである。(3)途中、三匹の動物が随行する。これらの動物はそれぞれ異なった機能をもつ。動物の援助はおそらくこの昔話より古い。この動物の解釈のいかんによって結論は変わる。(4)桃太郎は島に渡っているが、舟は缺けている。これも脱落であろう。ただ、宝物を運ぶ車があるが、他の民族の伝承に見られる水陸両用の車であったかもしれない。ただ婚姻についてはふれていないが、岩手の一例だけに誘かいされた娘を助けて来る挿話がある。八岐大蛇でも、主人公は解放した娘と結婚している。真の昔話は主人公の幸福な結婚をもって終わるのが共通した形式である。真の昔話を「妻覓ぎ説話」といって、この形式が本来の昔話と主張する研究者も少なくない。

柳田先生がこれらの昔話と神話との関係を強調されるのは、主人公は人間の腹から生まれず、川上から流れて来て川にのぞむ老女の手で達した桃から生まれた、最初はきわめて小さいへ小息子でであったことである。このモチーフはわが古伝承の小男神スクナヒコナ神話と結びつくことである。貴い一族の祖は小蛇の姿に変じた神あるいは海神の女が人間と通じて生まれたという記紀の神話とも結びつく。これらと同一の説話は、現在の昔話、伝説のなかにもいくつとなく見出される。先生はここに昔話の根源を見られる。

漂流神伝説は「うつぼ舟」問題として、すでに述べられている。この伝承はアジアにも広く分布し、古くはディオニソス、ペルセウス、ロムールス、モーゼスなどヨーロッパにも多い。この論文が書かれたのちに加賀、越前に採集された「桃太郎異伝」を媒介とすれば、主として東北地方に伝承する「ちから太郎」の昔話に結びつく。力太郎も異常誕生児で、ときとしては桃から生まれている。主人公は急速に成長し旅に出る。途中で、動物に変わる異常な能力をもつ仲間を従者として、協力して化物に誘かいされた娘を解放し結婚している。グリムでは「六人組」「六人の家来」といい、あるいは「ふしぎな援助者」(AT13ABO)*などの名で広く分布するアジア・ヨーロッパ型と同系統の話である。日本で缺けている「水陸両用の舟」(AT13B)も広く分布する。桃太郎は極東島国におけるこの系統の昔話の派生型である。

*AT=Arne A.+Thompson, *Si The Types of the Folk Tale*, Helsinki, 1961 G略号。

海神少童 『桃太郎の誕生』のなかでもとくに独創性にとんだ論文だと思う。桃太郎昔話の研究は、今日の著名な五つのお伽噺は相互に関係し成育したものだという前提から出発される。海神少童もこれと関係する。記紀にはじまる海神宮の信仰もまたこれらの一連の昔話と歴史的にながる。魚を助けるか薪を淵に供えたと、若い上臈が、汚い、黄金を生む小児を抱いて現われ、老翁に托する。一定の条件を守らなければ、この少童は黄金を生まない。これには海神信仰とともにその背後には道德観が介在する。(1)少童はハナタレ小僧、ヨケナイ、ウントクなどいう名前をもった醜い小僧である。これがまたしばしば問題とされる小男神と関係する。(2)小僧に代って小犬、黒猫などの小動物が出現することがある。これを飼育するのに、同じく定まった条件を守らなければならない。(3)福徳小槌のこともある。これも富を生み出す呪宝である。これらは所有者が定められた規範を守ることによって本来の機能を發揮する。規範を守らず、より以上のものを慾し、かつ満心を起こすときは、少童が去り呪宝は機能を失うばかりでなく、それまでに貯積

された富も喪失する。

柳田先生はこれらの昔話の發生を日本の自然条件に求められたようである。すなわち、小児の誕生を水の神の靈威に托するというだけの信仰ならば、偶合であれ、伝播であれ、多くの異民族にも共通であろう。日本は海の国、山川のたぎち流るる国であつたがゆえに、海には「うつぼ舟」が漂著し、川には瓜子姫、桃太郎の話などが、他には類のないほど發達したのである。この一章で發見したようになり著しい国民的特徴を示しているのである。これがまた昔話研究の目的であり、また先生によって樹立された日本民俗学にも適用される理念でもあつたろう。これらの実例を記録することによって、今日の神話学は改められなければならないと、主張されている。

この昔話もまた広く分布する、いわゆるユーラシア型の昔話である。日本でもよく知られているグリムの「漁夫とその妻」(GM19)はこの系統の昔話であり、道德的な面が強調されている。貧乏漁夫が魚を捕えるがにがしてやる。魚は恩を感じ、その女房の一切の願いをかなえてやる。女房の願望は途方もなく増大する。究極は王、法王、神になることを望み、一切を失う。これを「神になろうとする女房」(AT56)と呼んでいる(日本昔話集成・Ⅱ 一〇〇三)。柳田先生の論文はこの昔話の前半が強調されている。私もかつてこの昔話について述べたことがある。

この昔話はトルコ以東ではカンボジア、インドネシア、マレーなどに見られ、古くはインドの古典『パンチャラントラ』『ジャタカ』にも見られる。

田螺の長者 この昔話もまた桃太郎昔話と共通するモティーフをもつ。見ない夫婦が神に祈願し、蛙、蛇、田螺、小男など授けられる。腹から生まれたものではなく、指がはれてそこから

生まれる。あるいは路傍で田螺拾って育てる。長じて嫁探しに行く。長者の家に泊り、たずさえた餅、桑を食つたものは女房にすると親に約束させる。夜、秘かに三人娘の末の美女の口にくわえさせる。翌朝、約束に従つて嫁にする。このモティーフは旧約聖書の士師記になつて、エフタモティーフと広く呼んでいる。途中で娘はきらつて叩く、短刀で殻をわる、あるいは風呂に入れて箒でかきまぜる。これらは成年式の儀礼とも一致する。かくして、田螺は若者に転化し、娘と結婚するというのである。

柳田先生によると、(1) 貴い童児が信心ある者の希望に応じて与えられること。(2) その貴い童児の事業、これは誇張されることがある。(3) 童児は成長後、最善の結婚をして名家の始祖となること。この三つの要点が強調される。この三つの基本的要件は最初にも述べたように、本格昔話の基本構造とも一致し、かつ日本神話に淵源をもつ小男神信仰とも一致するものである。解説者の私見をさしはさむことが許されるなら、誕生、成年式、結婚にいたる過程において、とくに成年式の儀礼。小槌で叩きあるいは殻を斬り割るのは、成年式儀礼における、広く見られる峰打の儀式と一致するという解釈は成り立たないか。

この昔話の前半もまたグリム昔話の「蛙の王子」(AT440)であり、後半は蛇が人間の姿をとつて結婚する蛇型とは異なるが、人間がなんらかの契機によって動物に転化し、人間と婚を通ずることによって、再び人間に還ることを主題とした異類婚姻譚(AT425B)である。

瓜子織姫 柳田先生がこの昔話の分析に実際に利用された資料はわずか一一、あとで一〇例ほど追加されている。それから四〇年、現在二五〇に近い話が採集されている。先生はこのわず

か一一例で、この昔話の基本的問題はほとんど述べられたものではなからうか。

瓜子姫昔話と桃太郎とを比較するとほとんど対照的である。主人公は男児と女児であること。いずれも岸にのぞむ老女のもとに達した桃もしくは瓜から生まれた児が主人公であること。水の流れを下って来たということは、とくに欠くべからざる要件であったことを、先生は主張される。

第一に、桃太郎、瓜子姫の老婆は、いずれも児がなく、しかも善人である。いずれも児のいないことを、唯一の苦勞としている。ここに桃もしくは瓜が流れて来て拾われ、そのなから児が生まれ、老夫婦に育てられる。これは申し児の靈験であり、この種民譚の最初の要件であったと想像される。瓜または桃が流れて来たというのは、念願と応驗との関係にあり、高僧の出現形式と比較される。桃太郎の桃が瓜よりあとのことであることは、容易に認められる。瓜類はながうつろにして自然に水の上に浮かぶということ、うつぼ舟の前提となったものだと言われる。その成長の過程も同一である。

第二、事業。男性の鬼が鳥征伐という武勇に対して、女性の事業は技芸であり、機織である。

この瓜子姫の機織ということは、神を祭るに清浄なる飲食を調理するのを要件としたように秀れた美女を忌みこもらせて神の衣を織らしめたのと比較し、わが国だけの特徴であったかと思われる重要な慣習であった。織姫というのは神に仕える少女であり、のちに祀られて従神の一つに列すべき巫女に比較された。それが桃太郎の鬼が鳥征伐に匹敵すべき女性の大事業であることは疑いないと主張された。最後に、二つの昔話における類似点を動物の援助とされる。鬼が鳥征伐に対する動物の援助は、瓜子姫においては、天邪鬼が姫を殺して身代りとなって嫁入るとき、小

鳥が天邪鬼の正体を暴露し、姫を助けることである。

柳田先生は爺婆が町に駕籠を買いに行くのを、織姫が祭の式に参加すること具体化したものと解し、姫の嫁入りは神の衣を織りなした処女が神の御妻となると解釈されたのはけだし卓見である。もしそうだとすれば、天邪鬼の妨害はみずから神の御妻となるための謀略であつたろう。

小鳥の援助は、しかし桃太郎における動物の援助とは自ら異なる。瓜子姫説話は東日本と西日本とはやや異なる。柳田先生が利用された資料は少数ではあったが、東西の特徴をほぼ示していた。東日本では多くは瓜子姫は惨酷な仕方て殺され、顔の皮ははぎとり、天邪鬼はそれをおぼつて姫に化ける。この天邪鬼の懲罰は追放ぐらいである。これに対して、西日本では天邪鬼は瓜子姫の着物をはぎとり裸で木に縛りつけその着物を着て瓜に化ける程度である。ところが天邪鬼の懲罰は残酷をきわめ、両足を牛と馬に結えつけ股さきにする。いずれが先行形態であるか決しがたいが、東日本では小鳥はおそらく姫自身の魂であろう。西日本では、姫は生きているので、小鳥は援助動物であつたかもしれない。したがってこれら小鳥の援助をただちに桃太郎の動物と比較することは無理であり、桃太郎の動物は特殊能力者を動物化したものではなかったらうか。

瓜子姫昔話の分布は多少濃淡はあるにしてもほとんど全国的で、鹿児島まで及んでいる。それにもかかわらず、なぜか南西諸島にはまだ一例も発見されていない。瓜子姫昔話のいま一つ前の天邪鬼のごとく、偽の花嫁を主題とした昔話がわずかながら分布している。「鬼智」昔話と結合した話がある。母親の軽率な約束によって三人の末娘が鬼と結婚する(AT43B)。鬼が死んで娘は若者と幸福な結婚をする。ところがこれを知った姉は妹の里帰りの帰途、泉につつこんで、白

ら偽の花嫁となる。末娘は鰻または小鳥に化して夫に真実を伝える。姉は殺され、妹は復活してもとの幸福な結婚に還る (AT408)。

桃太郎昔話は国際的昔話 (AT53A) 変化型といったが、瓜子姫昔話もまた同じく国際的昔話の変化型である「偽の花嫁」型の昔話である。そのまとまった形式は「三つのシトロ」 (AT408) とよばれ、ユーラシア型の昔話である。その梗概を簡単につぎにあげる。

若者が王女を探しに出かける。老婆が三つのシトロ (オレンジ) をくれる。瓜と同じく水分の多い果物である。その三つ目のシトロから絵のように美しい娘が生まれる。池のほとりの木の上で待っているように王女に頼んではかき出かける。そのあいだにジブシー女 (天邪鬼のように) がやって来る。ジブシー女は王女を泉のなかに投げこむ。若者は王女の代りにジブシー女をつれて行く。シトロ娘は泉に投げこまれたとき魚または鳥に転化する (瓜子姫は殺されて小鳥になるが、南西諸島では鰻または鳥になる)。魚 (鳥) は若者に捕えられる。鱗または羽根から一本の木が生える。娘は若者のもとに帰り、ジブシー女は処罰される。

瓜子娘ははなはだ単純化しており、南西諸島のこの例は少ないが、これらを複合するとはほぼ国際型に近くなり、同じ系統の昔話であることはあきらかである。

伝説と昔話 ここに問題にされていることは、先生が規定される呷々の生い立ちから一期栄え孫子の繁昌を説く物語とは異なり、その存在形態から見れば事件の場所、参加した人物を述べる伝説と近い。現在の説話分類からすれば、明確に伝説とも昔話とも規定できない説話を分類する項目として世間という項目が最近とくに昔話集のなかに見られる。先生はここではそうした説話

がいかにして伝説となり昔話、となるか、あるいは逆に伝説、昔話が崩壊し世間話化するか、さらにこれが習俗といかに関係するかを述べられる。

狼と鍛冶屋の姥 この問題は土佐野根山の産杉伝説からはじまる。ところがこの一連の伝説もしくは昔話もまた他の民族の伝承とつながり、多くの問題を提起している。この論文は未完成のようでもあるが、これまで述べられた諸論文以上に発展性のある問題のように、私には思われる。最近、ヨーロッパの昔話・伝説学界では「動物の主」「森の主」を問題にした論文がしばしば目につく。

産杉伝説には共通する三つの条件がある。(1)大杉の梢で産をした婦人のあったこと。(2)群狼の危難に遭うて辛じて助けられたこと。(3)狼の巨魁は鍛冶屋の姥であったこと。この説話は伝説または昔話として東北地方から南西諸島にまで分布しているが、その一つの被害者たる産婦が平産したこと、とくにその大杉の根と称するものが残ったといつて、それを削って安産の護符とする習俗と結合、さらに鍛冶屋の家跡が残っているということによって伝説化している。先生はこの伝説化の過程をつぎのように推論された。この伝説は説話として諸国を流転し、いくたびか複合変化し、偶然に野根山の産杉と癒着したものである。他に狼の子育ての話、大木の梢にのぼって難をのがれたという個条があるところから、山の峠路の畸形の木に付着して、いくぶんか伝説化しやすい傾きをもっていた。

この説話のなかにはいくつかの挿話がある。柳田先生があげられた米子の伝説を見ると、山伏が狼の群に襲われる。大木にのぼってその難をさけると、二、三十匹の狼が背懸ぎしてのぼって

来る(1)。だがもう一匹足りない。五郎太夫姥(鍛冶屋の姥)を呼びにやれというと、やがてやって来て先頭に立つ(2)。その山伏は脇差を抜いて、その大狼を斬ると、一同は退散する(3)。翌朝、五郎太夫の家にやって見ると、婆が木から堕ちて怪我をしたと称する。人がうたがいをかけていると行方知れずなる(4)。

いまあげた短い挿話のなかに、いくつかの国際的に共通する挿話がある。(1)千匹狼の大梯子である(AT120)。柳田先生は狼の群が梯子を作って、樹上の旅人を攻めるという話には二つの系統があることを指摘される。歴史的には猫の婆の方が先であったと仮定し、消極的には山中分姥は土佐以外にはなかったこと、積極的には鎧をかぶって刃を防いだことが土佐にはあったとされる。この伝承も国際的にも広い。(2)化物の正体をその言葉で知ること、しかもそれが特定の家と結びついていること。これがまた伝説化の一つの有力な契機であるが、たんに立聴きすることによってその正体を知るのには蛇姫の立聴型と呼んでいるのがそうである。悪魔の名をいいあてて相手を征服する形式も広く世界的に分布する。「悪魔の謎(AT68)」がそれである。(3)茶釜の蓋をかぶって人間の攻撃をふせぐモティーフも同様である。すなわち、旅人が山中で猫の寄合いを秘かに見ていると、前の挿話と同じく某の頭が来ないという。その某は自分のことである。そこに家の三毛猫がついて来て仲間を指図して隠れて待ち伏せしている。そこに来合せた侍が猫と闘い、頭分の古猫を斬る。二人で家に帰ると家の婆が肩間を割ったというので殺すと古猫である。古狼ともよぶが、ときとしては鍋を被って木にのぼって来る。斬りつけると鉄の音がする。家の鍋もしくは茶釜の蓋が紛失したとも、あるいは狩人が茶釜の蓋で弾丸(矢)を丸めていると、猫がそれ

を見ていて十二回頭を下げるので、ひそかに十三番の弾丸(矢)を作って、これを退治したともいう。十三番目がサツ矢、シャチ玉である。これは独立した物語としても語られている。この形式の昔話を「狩人(AT304)」と同じく、同じく国際的昔話で、このサツ矢、シャチ玉に比較されるのがいわゆる応法の鉄砲(magic gun)のモティーフである。

始祖としての狼 野根山の鍛冶屋の婆の屋敷跡だけはあるというのに、子孫には代々背中毛が生えていると伝えられている。これと同様の伝承は越前にもある。但馬の加門塚の伝説はやや複雑に変化しているが、加門の妻は山路で毆にかかった狼を助けたともいい、狼の肩車の伝説では加門殿のかみ様が狼の頭となり、斬殺されたのは古狼であった。駿河の朝比奈の先祖も同じく狼にさづけられた児であった。中納言兼輔、八幡宮に祈り、狼が赤児を啗えて来る。その児の肩に狼の齒形があるという。この児、成長して古泰と名のり、武勇俊傑であったという。狼を祀り狼明神といった。この家の家督の男児には背に犬の齒痕が三つあったというのは、豊後緒形氏の蛇の鱗と同一である(AT268)。この系統の昔話はたんに蛇だけではなく熊、狼、犬などがあるが、昔話では始祖問題にまで発展しないのが普通である。猛獣とのあいだに生まれた児は朝比奈伝説に見られるように武勇俊傑が多いのは、他の民族の伝説にも多い。

狼報恩 狼が人を助けるに到った原因の一つとしてあげられるのは、喉に骨を立てたのを取ってやったことである(AT156)。これがまた子孫の繁昌と結びつき、狼を神に祀る伝説ともなっている。出羽荘内では同じく朝比奈の先祖が骨をとってやり、そのお礼に赤児を芦の葉にくるんで来たことになっている。飛騨にも同じ伝説がある。その返礼は轡であり、鉄の鎖であったと伝え、

柳田先生はこれを鍛冶屋と関係するものだと言われている。動物報恩の昔話 (Tales) と古くかつ分布も広い。ユーラシア型の昔話で紀元前数千年まで遡る。

神に祈願して狼が子供をつれて来たということは述べたが、これとともに負っていた背の子供を狼の穴に落とす、赤子を夜間にくわえて門のところにいたという伝承もある。甲州では、子供が狼にもって行かれ、のちにこれを発見して家につれ帰ると全身に毛が生えており、里の食物になれず、再び山に帰ったという伝承もある。狼が加門の妻に助けられ、狼はそれを徳とし、その女の死後、継母を食いころしてその姿をかりて先妻の子を愛撫したという話がある。こうした伝承は他の民族にも少なくない。狼を乳母、産婆という (Die Amme. Mot. J. 2066.5)。

柳田先生は「鍛冶の母なるものが、今日の産婆の前身、すなわちなかば信仰の助けを借りて、婦女産褥の悩み憂いを軽くする役目をもっていたのではないかと考えている」と推定されている。このことはまさに「狼と乳母もしくは産婆」と関係するものであろう。先生の該博な知識と明敏な洞察力は驚嘆に価する。あまりに長くなったが、いま一つ重要な問題をあげよう。

狼が子を啜えて来たという話は、狼に拾われてその乳で育ったという話とともに、どうしても今一つ以前の形がなくてはならぬような奇端であると前提して、良弁杉の伝説を問題とされる。詳しく述べるまでもなく、これは赤児が鷲に抓まれて東大寺の境内の杉の梢で育てられ、後に高僧になったという伝説である。これと同系統の話はしばしば報告されている。良弁僧正の伝説と同じ系統の昔話はスウェーデンにも報告されている。

子供が一羽の鷲につれさられ、その雛とともに巢のなかで育てられる。巨人のために奪われ、

ある城のなかに監禁されている姫を救い出そうというその子供を、鷲が助ける。その城は広い堀と永遠に燃えつづける火によって囲まれている。鷲はその堀と火をもとび越えて行く。良弁杉伝説の子供はのちに母子再会するという日本的な展開をしているが、スウェーデンの伝承は昔話である。ここに文化の相違による変化がある。良弁杉の伝承は日本では靈異記にまで遡るが、この物語はきわめて古い歴史をもつ。日本でもわずかに伝承する鳥と獸との争い、鷲と蛇との葛藤を主題とした「鴻の卵」などと結合した形式の物語は、紀元前三〇〇〇年のスメール・バビロニア出土の粘土版で解説された物語と一致する。少年が鷲の背に乗って、永遠の生命を育む草を探しに行くらしい。これをエタナ (Etana) 神話、エタナ昔話といっているが、両者の相関関係の証明はけだし困難であらう (AT313B. 537)。

柳田先生の諸論文、わけてもこの「鍛冶屋の姥」が他の民族の伝承ときわめて密接に結びつき、他の民族の伝承との比較研究なしには解決は困難であるということを、ここでは言えは足りる。

和泉式部の足袋 狼や鷲が赤児を運ぶ説話は古くかつその分布も広い。鹿の子の伝説はほとんど歴史上の女性と結びつく。第一は鹿娘もしくは鹿姫という。岩手では昔話として皿ヶ山の求婚譚と結合している。伝説としては、和泉式部、浄瑠璃御前、光明皇后などと結合している。柳田先生がここでとりあげられた問題は『桃太郎の誕生』の主題となっている主人公の異常誕生と関係する。その淵源をここでも「小さき子神」に求められる。それが変転零落したいろいろの説話をつらぬいており、なお依然としてこれを窺い知ることができる。それを解きほぐしてその因果を観測しようと試みられたものである。

その一つの実例として和泉式部の足袋がとりあげられたものである。鹿が和泉式部を生んだということは、具体的な因果譚として、鹿の子なるがゆえに足の趾が二つに岐れ、それを包むために五本の指を二つに分けてはく足袋というものを案出したのだと推定される。

これは、矢作の兼高長者、子無きを憂えて鳳来寺の峰の薬師に願掛けして、満願の夜に夢に薬師如来が大きい白鹿となって現われ、一つの球を賜わると身ごもったといい、あるいは鹿の子を授けられたという。これが浄瑠璃姫である。美女なれども足の指が二つしかないというのである。足袋の由来は肥前と三河にあり、和泉式部の生地、堺地も全国に比較的多く分布している。これは歌比久尼、薬師信仰者が運んだものだとされている。

人と鹿との婚姻モチーフは『今昔』の天竺篇(五十一)にも見られる。人と鹿とが結婚するというよりは、狼におけるように、牡鹿が小児に乳をのませているのをもらいうけて、子供として育てあげるのに神に授けられている。

絵姿女房 この研究はこれまでのテーマとやや異なり、小男神とも直接結びつかない。この昔話の主題は、下賤の男が美女でしかも超自然的な女性と結婚する。あまりに美しいのでそのそばから離れることができず、似顔絵を描き、それを携えて働いている。たまたまその絵が風に飛ばされ、権力者の掌中に入る。これから事件が始まる。端的にフェティシズムの信仰を背景として強制結婚にまで発展する。この昔話は後半は二つに岐れている。(1)殿様がその絵の主を女房にしたく、女房との交換条件に三つの課題を夫に課するが、女房がその問題を解決することによって、問題は解決する。この形式は概して西日本に分布する。(2)女房が殿様のところにつれられて行く

とき、女房が桃を振売りに来いといいつける。夫が御殿のまわりをふれて歩く声を聞いて笑わなかった女がはじめて笑う。殿様は女の飲心を買うために、桃売りと着物を交換し、桃売りになつてふれ歩く。殿様の桃売りは追い払われる。この形式は東日本に多い。

この論文では国内的な問題として論じられている。最後のところで、国内における説話の変化を無視してただちに輸入や国際的伝播の穿鑿にとりかかることは、これら興味ある一切の地方的変化に、わざと目をつぶっておられるだけの度胸のある学者でないと、到底企てられない難事業であると、かなり強い語調をもって述べておられる。これらによって見ても、先生の研究が主として日本の伝承だけに向けられていたことは明らかである。これに関連して、スウェーデンのジイドウの如きは、昔話の国際的な拡がりのなかにも「オイコティユブ」(Oicotype)といって、国民的、地域的および教区的な相違のあることを主張している。いまいった西日本型、東日本型はこのオイコティユブの範疇に入るものである。

柳田先生も『奈良県風俗志料』の資料などから唐渡来の疑問をもたれていたようだが、伊藤清司氏などの「中国の絵姿女房の研究」になお多くの例があげられている。広く世界に分布する昔話でトルコ以東、インド、中国、日本までつづいている。絵姿は中国、日本が多いようで、これを「絵姿女房」といっているが、「帝王求婚」におきかえると、日本では「竹取物語」までさかのぼることができる。国際的名称では「美女妻なるが故に妬まれる男」(AT465)といわれ、これも同じくアジア・ヨーロッパ型の昔話である。

笑話 柳田先生の昔話研究ではいわゆる本格昔話が圧倒的に多い。つぎの二つは笑話の範疇に

属する研究である。

隣の寝太郎 この昔話は『宇治拾遺物語』の「搏打掣人の事」によって知られるように、稀代のならず者が、長者の娘を採していることを知って、自分を掣にしないと家がつぶれると叫び、鳩に提灯をつけて放つ。愚かな長者はそれを神託と思い、このならず者を掣にする笑話である。柳田先生が桃太郎などで述べられた昔話の基本的テーマは、大事業の遂行、花嫁をもらって家を興すことであつた。寝太郎は長州では治水拓工の功績のために祀られた寝太郎荒神の由来譚となり、寝太郎餅と結びついている。この研究はここから始まる。先生は笑話は派生説話で、ある日の一つの事件を問題とした逸話風の説話と規定された。これなどはそれから逸脱するが、ドイツの学者など、こうした種類を「昔話笑話」などと呼んでいるものもある。

先生はこの話の主人公を豊後の吉四六などと同じく見ておられる。確かにそのとおりであらう。この笑話の主題は奸策による婚姻である。この寝太郎は昔話において成功の一つの要因となる意図者である。奸智にたけた男である。「あめのしたのかほよし」との触れこみであつたが、舅姑対面ときには「日鼻ひとつ所にとりすへた」ような顔であつた。多くの「求婚冒險譚では、小さいか貧しいか醜いか情け者か、何れか一つでも美人の妻を得たことを奇跡としていたのに、この若者は三つとも兼備していた。それでも福分あり智慧があれば、優に成功するということを、ここでは長者の愚鈍を餌にして実現させているのである」と、先生は笑話の本質を指摘された。笑話は決して内容がおかしいから笑話ではない。昔話では神の恩恵をかたり、神の恩愛をうけているものだけが成功すると説かれていたが、笑話の世界では神は信ずべきものではなく、生活の

手段として利用すべきものである。これが神観念の変遷であるかどうかは知らないが、昔話と笑話とのあいだには神に対する大きな差異がある。

この系統の笑話もわが国だけにあつたものではない。「不承不承の求婚者、樹上から助言する」(AT1462)というモチーフを主題とした笑話がある。分布はそれほど広くはないようだが、インド、中国などにもある。この笑話のなかの「鳩提灯」のモチーフと一致するものは、婚姻とは結びつかないが、墓場に捨てられた生きた蟹の背にローソクを立てておくと、これを見た牧師と寺守とが死者の魂だと誤認する笑話(AT1740)もある。これはヨーロッパには比較的広く分布している。

米倉法師 これらの笑話のほかに、先生には「笑われ掣」「俵薬師」などの研究がある。米倉法師は数少ない笑話研究の一つである。ここでも「笑話とは何ぞや」と真正面から説かれているのではない。日本の盲坊主に類する遊行僧が、ヨーロッパその他にいたかどうか知らないが、この論文の主旨は笑話の発達に盲僧が参与したことを説く点にあつたようである。このなかで『桃太郎の誕生』の主題と関連するものの一つは、米倉法師である。先生はまた桃太郎童話の一つの傍系として、これに興味をもつて述べておられる。というのは、正直な親爺が水神から黄金を生む少童、小動物をさすかる話は、すでに「海神少童」において述べられた。この米倉法師も水神の贈物としての打出小槌から打出されたものである。ここにいう「米倉」は「小盲」に通ずるもので、これが盲坊主が参与し、昔話を笑話の方に引きずって行くことに積極的に参与している。この問題は道徳観念と結びつき、「すべてを望むものはすべてを失う」ことを説明する昔話となつてい

る。日本の伝承は簡略化されかつ笑話となっているものが多いが、巡行する神や僧を泊め、そのお礼に三つの願いを叶える呪宝をもらう。多くは女房が慾ばりで多くのものを望んで失敗し、あるいは満心して一切を失う話である。「三つの願い」(AT150) ならに如意の宝としてグリムの「お膳」(GM36) (AT563/564) などがこの系統である。

わたしは解説からしばしば逸脱し私見を述べたが、柳田先生は昔話を日本の伝統的文化研究の一環として研究され、昔話を移入として説くことにはかなり批判的であった。だが、先生が打ち立てられた昔話研究をさらに発展させるためには、広い意味における比較研究に進まなければならないことは、これらの諸研究からあきらかである。

* AT+.....Aarne, A. & Thompson, S., The Types of the Folk-Tale, FFC 184, Helsinki, 1961.

** GM+.....Grimm, J. & W. Kinder-u. Hausmärchen.

*** Mot. A. B. C. etc+.....Thompson, S. Motif-Index of Folk-Literature. 6v.1955-58.

関 敬 吾

年 譜

明治八年 (一八七五)

七月二日、兵庫県神東郡田原村辻川に生まれる。父は松岡賢次、医家であったが、のち漢学者、敬神の念の強い人という。のちに操と改名、約斎と号した。母たけ、北条町尾芝家の出。両親共に伝承型の人という。八人兄弟の六番目である。

明治十二年 (一八七九)

四歳

辻川昌文小学校入学。虚弱であった。

明治十六年 (一八八三)

八歳

昌文小学校卒業。北条の高等小学校入学。このころ『播陽風雅』『武家百人一首』などを読む。

明治十八年 (一八八五)

一〇歳

高等小学校卒業。辻川の旧家三木家に約一年間預

けられる。この家の和漢の蔵書を濫読する。中井履軒の『昔々春秋』をまねて『花鳥春秋』を書く。ものを書くはじめである。

明治二十年 (一八八七)

一二歳

八月末、次兄(井上通泰、眼科医・歌人)に伴われて上京。長兄(松岡鼎、医師)の住む茨城県布川に同居。故郷を離れるに当たり『竹馬余事』と題する留別の詩文集を作る。布川にては病身のため学校に行かず、隣家の小川家の蔵書を読む。故郷播州と関東の違いに驚嘆する。長兄は後に利根川の対岸布佐町に移る。

明治二十二年 (一八八九)

一四歳

九月、父母二弟(松岡静雄、海軍軍人・国語学者松岡映丘、画家)を伴って上京。布川に一緒に住む。十一月、「しがらみ草紙」に短歌一首発表。

明治三三年（一八九〇）

一五歳

冬上京、下谷御徒町の次兄宅に同居。六月、「しがらみ草紙」に「秋元安民伝」発表。一〇月、同誌に短歌掲載。次兄を通じ森嶋外を知り感化を受ける。歌を学ぶため松浦秋坪翁に入門。田山花袋、宮崎湖処子、十持綱安らと交わる。

明治三四年（一八九一）

一六歳

高等学校受験のため、開成中学、郁文館を転校して中学卒業の資格を得る。

明治三六年（一八九三）

一八歳

第一高等中学校入学。寄宿舎にはいる。同室に乾政彦、菊地駒次、今村幸男、松本蒸治らいた。「しがらみ草紙」「小桜滅」に短歌発表。

明治三七年（一八九四）

一九歳

三月、布佐の岡田武松と旅し、旅の面白さを知る。赤松国裕、白旗生などの匿名にて短歌発表。

明治二八年（一八九五）

二〇歳

遠縁に当たる中川恭次郎を介して「文学界」に寄稿。赤松某の名で抒情詩を発表。

明治二九年（一八九六）

二一歳

七月、母たけ上京中に死去。精神的に打撃を受ける。肺炎カタルを患い、その後一か月鈍子にて保養する。九月、父操布川にて死去。

明治三〇年（一八九七）

二二歳

四月、『抒情詩』（民友社、国木田独歩、田山花袋、太田玉若、矢崎鎮四郎、宮崎湖処子と共著）刊。七月、第一高等学校卒業。九月、東京帝国大学法科大学政治科入学。このころ「文学界」によく抒情詩を書く。

明治三一年（一八九八）

二三歳

七月、田山花袋、太田玉若らと伊良湖畔に遊ぶ。この時の流離の椰子の実の話が藤村の詩となり、最後の著『海上の道』の端緒となる。「文学界」

「帝国文学」に松男、野上松彦の匿名にて叙情詩短歌を発表。

明治三二年（一八九九）

二四歳

松崎蔵之助に師事し、農政学を勉強する。

明治三三年（一九〇〇）

二五歳

七月、東京帝国大学法科大学政治科卒業。卒業論文は三倉の研究、これにより庶民史を知る契機となる。卒業後、農商務省農務局勤務。毎週火曜日、早稲田大学にて農政学を講義する。他方、田山花袋、島崎藤村らと頻々と往来す。

明治三四年（一九〇一）

二六歳

五月、松波資之（遊山と号し、歌人）の世話により柳田家を嗣ぐ。養父直平は信州飯田藩の出身で大審院判事。牛込区加賀町に住む。九月、日本農会報に生業組合の性質について発表。秋、約四〇日にわたり信州各郡を産業組合の講演に回る。

明治三五年（一九〇二）

二七歳

このころより、毎月文人清話会を開く。田山花袋、蒲原有明、国木田独歩ら参加。はじめ土曜会と名づけていた。二月、法制局参事官に任官。このころ、専修学校にて農業政策学を講義する。二月、『最新産業組合通解』刊。このころ、和洋の農政学の本と西洋の文芸書を読む。

明治三六年（一九〇三）

二八歳

内閣所蔵の諸国雑誌をよく読む。地名、伝説などに興味を持つ。国家学会雑誌に「日本産銅史略」を連載。

明治三七年（一九〇四）

二九歳

四月、柳田直平四女孝と結婚。横須賀の捕獲審検所檢察官となる。

明治三八年（一九〇五）

三〇歳

全国農事会幹事となる。産業組合の講演のため、各地を旅行する。九月、「新古友林」に「幽冥談」

を発表。この年、不在の日九四日。『農政学』（早稲田大学講義録）刊。

明治三十九年（一九〇六）

三一歳

八月末、北海道視察、樺太まで行く。二月帰京、和洋の書籍をよく読む。

明治四〇年（一九〇七）

三二歳

二月、イブセン会を開く。以後、月一回開く。『法字新報』『中央農事報』『大日本農会報』などに農業用水、産業組合などに関する論文を書く。文壇人と交友関係を持ちつつ、史書を耽読。

明治四一年（一九〇八）

三三歳

一月、兼任宮内書記官任命。四月、『二十八人集』（新潮社）刊。五月末より約三か月九州、四国を歩く。『後狩詞記』はこの旅行中の見聞による。

明治四二年（一九〇九）

三四歳

二月、『後狩詞記』自家出版刊。長女三穂生まれる。四月、『松楓集』（短歌一一首所収）刊。この年

北陸奥州旅行。

明治四三年（一九一〇）

三五歳

五月、『石神問答』（聚精堂）刊。六月、内閣書記官室記録課長兼任。大正三年四月まで、『遠野物語』（聚精堂）刊。秋、新渡戸稲造博士を中心に郷土会を創立。二月、『時代ト農政』（聚精堂）刊。この年、雑誌『太陽』『歴史地理』『考古界』などに紀行、記録の類の研究発表多し。この年、南方熊楠を識る。後年の民俗学の萌芽時代ともいえる。

明治四五年・大正元年（一九一二）三七歳

九月、次女千枝誕生。人類学雑誌に論文発表。

大正二年（一九一三）

三八歳

三月、高木敏雄と協力して、民俗学研究の最初の機関誌「郷土研究」発刊。民俗資料採集の端緒を開く。以後四年間編集する。川村杏樹、久米長良、大野芳宜、菅沼可児彦、中川長昌、山崎千束、安東危西等の筆名を使う。この年、近県を歩く。

大正三年（一九一四）

三九歳

四月、貴族院書記官長となり、官舎にはいる。七月、『山鳥民譚集』（甲寅叢書刊行所）刊。

大正四年（一九一五）

四〇歳

五月、長男為正出生。英人ロバートソン・スコット氏と各地旅行。十一月、大正天皇御即位式に奉仕。

大正六年（一九一七）

四二歳

三月、三女三千生まれる。四月から二か月間、台湾、支那、朝鮮を旅行。「郷土研究」休刊。このころ、郷土研究を鼓吹し、多くの講演を試みる。

大正八年（一九一九）

四四歳

一月、四女千津生まれる。この年もよく旅行する。十一月、貴族院書記官長辞任。

大正九年（一九二〇）

四五歳

二月、『赤子塚の話』（玄文社）『おとら狐の話』

（早川孝太郎共著、玄文社）『神を助けた話』（玄文社）刊。七月、朝日新聞社客員となる。七月、

三田史学会例会にて「Folkloreの範囲について」

講演、民俗学的重要性を説く。八、九月東北旅行、

東京朝日新聞に旅行記「豆手帖から」を連載。一

〇月、三河、美濃、尾張を歩く。この旅行記も

『秋風帖』と名づけて新聞に発表。二月より翌

年にかけて九州、沖縄を旅行。

大正一〇年（一九二一）

四六歳

五月、国際連盟委任統治委員会委員となり、ジュネヴアに行き二月帰国。

大正一一年（一九二二）

四七歳

三月、『郷土誌論』（郷土研究社）刊。『祭礼と世間』（郷土研究社）刊。五月、ふたたびジュネヴア、ヨーロッパ各地旅行。

大正一二年（一九二三）

四八歳

春、イタリア旅行。九月、ロンドンで関東大震災を知り、二月帰国。

大正一三年（一九二四）

四九歳

四月より昭和四年まで、慶応義塾大学史学科において民俗学を講義。六月、朝日新聞社論説委員となり、社説を書く。以下昭和五年まで。十一月、『娯楽書解題』（郷土研究社）刊。この年から、各地に朝日新聞社の巡回講演に回る。

大正一四年（一九二五）

五〇歳

四月、『郷土名冠録』『海南小記』（共に大岡山書店）刊。早稲田大学にて農民史を講義。この年、北方文明研究会、南島談話会などの研究会を開く。伊波普猷、岡村千秋、折口信夫、金田一京助、中山太郎ら参加。十一月、雑誌『民族』創刊。民俗学のみでなく人類諸科学全般にわたる論文を数多く発表。学会に新風をおくる。

大正一五年・昭和元年（一九二六）五一歳

二月、吉野衛門会を開く。昔話研究の萌芽。三月、『猿の皮』放送。はじめての放送である。二月、『山の人生』（郷土研究社）刊。この年も講演旅行

多し。

昭和二年（一九二七）

五二歳

八月、北多摩郡砦村（現成城町）に移り住む。このころ、方言に関する論文を多く発表。

昭和三年（一九二八）

五三歳

二月、『雪国の春』（岡書店）刊。四月、『青年と学問』（日本青年館）刊。九月、菅江真澄の墓前祭に出席、真澄の古跡を訪う。二月方言研究会設立。

昭和四年（一九二九）

五四歳

四月、『民族』休刊。三月、『都市と農村』（朝日新聞社）刊。五月、『日本神話伝説集』（アルス）刊。六月、『民謡の今と昔』（地平社書房）刊。八月、『紀行隨筆集』（改造社現代日本文学全集36）刊。この年も講演旅行多し。

昭和五年（一九三〇）

五五歳

一月、『ことわざの話』（アルス）『歌・俳句・謠』（アルス）、折口信夫・高浜虚子共著）刊。二月、

民俗学の一特色である。

昭和八年（一九三三）

五八歳

一月、『桃太郎の誕生』（三省堂）『地名の話その他』（岡書店）刊。四月、『昔話採集の果』（梓書房）『小さき者の声』（玉川学園出版部）刊。五月、比嘉春潮とともに雑誌『島』を発刊。島の研究の重要を説く。七月、『退社書』（書物展望社）刊。この年も方言、地名、衣食住の変遷などの講演を各地でする。

昭和九年（一九三四）

五九歳

一月、自宅書齋において民俗学研究に志す者の集まり、木曜会第一回会合を開く（郷土生活研究所ともいい、民俗学研究所の前身）。五月、全国山村生活調査を開始。この月、京都大学において民間信仰について特別講義。『日本の昔話』（春陽堂）刊。六月、『一目小僧その他』（小山書店）刊。八月、『民間伝承論』（共立社）刊。朝日新聞社退社以後、積極的に民俗学徒を養成する。

昭和七年（一九三二）

五七歳

一月、朝日新聞社論説委員を辞す。四月、『口承文学大意』（岩波講座日本文学）刊。このころ講演、放送を通じ、民俗学を積極的に説く。一月、『秋風帖』（梓書房）『日本の伝説』（春陽堂）刊。二月、『女性と民間伝承』（岡書店）『山村語彙』（大日本山学会）刊。語彙による比較研究は日本

昭和六年（一九三一）

五六歳

『日本昔話集』（アルス）刊。四月、信州洗馬村にて行なわれた『真澄遊覧記』刊行記念講演会にて、『民間伝承大意』講演。七月、『蝸牛考』（刀江書院）刊。

一月、『明治大正世相録』（朝日新聞社）刊。各地講演。八月、『柳田国男集』（改造社、新村出・吉村冬彦・斎藤茂吉合著）刊。十一月、『世間話の研究』（内外社総合ジャーナリズム講座）刊。十二月、『郷土研究十講』（『青年と学問』改題）『日本農民史』（刀江書院）刊。このころから、昔話の研究盛んになる。

昭和一〇年（一九三五）

六〇歳

一月、『山村語彙統篇』（大日本山村会）刊。二月、『国史と民俗学』（岩波講座日本歴史）刊。五月、雑誌『昔話研究』発刊。還暦を記念して七月三十一日より八月六日まで、日本青年館において日本民俗学講演会を開く。八月三日、講習会参加者を自宅に招く。この時、民間伝承の会成立（日本民俗学会の前身）。八月、『郷土生活の研究法』（刀江書院）刊。九月、雑誌『民間伝承』第一号刊行。民俗学研究者の組織が全国的となる。以後、各地に研究者の集まりができる。一〇月、『産育習俗語彙』（愛育会）刊。一〇月下旬より信州、京都、大阪、鳥取の各地で民俗学について講演。

昭和十一年（一九三六）

六一歳

一月、『地名の研究』（古今書院）刊。四月から中国、九州の各地で鳥の問題、民俗学の研究法などにつき講演。八月三日より、国学院大学校友会館にて第二回民俗学講習会。八月、『山の神とワコゼ』（寧楽書院）刊。九月大阪懷徳堂書院におい

て近畿民俗学会主催の日本民俗学連続講習会に出席。昔咄につき講演。一〇月『信州隨筆』（山村書院）刊。二月『国語史・新語篇』（刀江書院）刊。この年から三か年、全国昔話の採集始まる。このころ、社会制度、家族制度に関する講演が多い。

昭和十二年（一九三七）

六二歳

一月一九日より丸ノ内ビルにて日本民俗学講座を開講。常設一年。童神論を講義する。三月、日本民俗学講座婦人座談会（女性民俗学研究会の前身）にて婦人の労働と精神について講演。三月、『婚姻習俗語彙』（民間伝承の会）刊。五月、全国海村生活調査始まる。五月・九月、東北帝国大学にて日本民俗学を講義。六月、一〇月、京都帝国大学において日本民俗学講義。七月、『昔の国語教育』（岩波書店）『分類農村語彙』（信濃教育会）刊。九月、『葬送習俗語彙』（民間伝承の会）刊。

昭和十三年（一九三八）

六三歳

この年、日本民俗学講座において、衣食住・年中行事・口承文芸など民俗学の問題点について講義

する。四月、『禁忌習俗語彙』（国学院大学方言研究会）刊。五月、『服装習俗語彙』（民間伝承の会）刊。二月、『昔話と文学』（創元社）『分類漁村語彙』（民間伝承の会）刊。

昭和十四年（一九三九）

六四歳

一月、『歳時習俗語彙』（民間伝承の会）刊。五月、『神の未来』（農村更生協会）『木綿以前の事』（創元社）『居住習俗語彙』（民間伝承の会）刊。九月、中国四国地方講演。『国語の将来』（創元社）刊。九月より一〇月まで、第二期日本民俗学講座。祭礼と民間伝承を講義。二月、『孤猿隨筆』（創元社）刊。

昭和十五年（一九四〇）

六五歳

一月より三月まで第三期日本民俗学講座、民俗学と国について講義。四月『食物と心臓』（創元社）刊。五月『民謡覚書』（創元社）刊。八月『妹の力』（創元社）刊。九月『伝説』（岩波書店）刊。一〇月日本方言学会創立、初代会長に就任。十一月、『野草雜記』（野鳥雜誌）（甲鳥書林）刊。

昭和十六年（一九四一）

六六歳

一月二〇日、日本民俗学の建設と普及の功により、昭和十五年度朝日文化賞を受く。『豆の葉と太陽』（創元社）刊。一月二五日、朝日文化賞受賞記念講演会にて「次の代のために」を講演。六月、七回にわたり東京帝国大学全学教養部主催の教養特殊講義で日本の祭を講義。七月、神社精神文化研究所で神道と民俗学について講演。十一月、九州各地にて講演。

昭和十七年（一九四二）

六七歳

二月『子ども風土記』（朝日新聞社）刊。三月『蒼江真澄』（創元社）刊。五月『方言覚書』（創元社）刊。七月より『全国昔話記録』（三省堂）の刊行始まる。一〇月『木思石語』（三三社）刊。十二月『日本の祭』（弘文堂書房）刊。

昭和十八年（一九四三）

六八歳

四月『神道と民俗学』（明世堂）『昔話覚書』（三省堂）刊。五月『族制語彙』（日本法理研究会）

刊。晝希にて行なう月二回の木曜会にて、本の紹介をしきりに行なう。

昭和一九年（一九四四）

六九歳

五月『雪国の民俗』（三木茂共著、甲鳥書林・養徳社）刊。八月『火の昔』（実業之日本社）刊。一〇月八日、京橋泰明国民学校において古稀の記念会。このころ、柳叟と号して連句をする。

昭和二〇年（一九四五）

七〇歳

『週刊少国民』少女の友などの子供雑誌にやさしい民俗学を説く。九月『村と学童』（朝日新聞社）刊。

昭和二十一年（一九四六）

七十一歳

一月『笑の本願』（養徳社）刊。四月『先祖の話』（筑摩書房）刊。六月、兩陛下に国語問題につき御進講。七月、枢密顧問官に任官。靖国神社にて氏神と氏子講演。『毎日の言葉』（創元社）刊。九月より十一月、九段旧国防館にて日本民俗学講座、現代科学と言うこと講演。一〇月『物語と語

り物』（角川書店）、二月『家閑談』（鎌倉書房）、二月『新国学談―祭日考―』（小山書店）刊。このころしきりに日本人の来世観について説く。

昭和二十二年（一九四七）

七十二歳

一月『口承文芸史考』（中央公論社）刊。三月、書齋における木曜会は発展的解消、新たに民俗学研究所が誕生。五月、枢密顧問官廃官。六月『新国学談―山宮考―』（小山書店）刊。七月、芸術院会員となる。八月『俳諧評釈』（民友社）刊。十一月『新国学談―氏神と氏子―』（小山書店）刊。

昭和二十三年（一九四八）

七十三歳

一月、御講書始めに国書の控として出席。四月、民俗学研究財団法人の認可。五月、東京書籍株式会社小学中国語科検定教科書の監修を受諾。国語教育を通して公民教育の重要性を説く。六月『西は何方』（甲文社）、七月『村のすがた』（朝日新聞社）、八月『婚姻の話』（岩波書店）、十一月『北国紀行』（実業之日本社）刊。十二月、学

士院会員となる。

昭和二十四年（一九四九）

七十四歳

一月、御講書始めの御儀に「富士と筑波―常陸風土記―」御進講。『分類児童語彙上巻』（東京堂）刊。二月、国立国語研究所評議員となる。三月『年中行事』（日東出版社）刊。四月『北小浦民俗誌』（三省堂）刊。五月下旬、朝日古典講座のため講演旅行。九月、日本民俗学会第一回年会、朝日講堂にて「日本を知るために」講演。一〇月、鳥の話を聞く会を始める。沖縄研究のために行なう。十一月、神道宗教学会第三回大会で「鳥柴考大要」発表。十二月『母の手毬歌』（学書店）刊。米国人類学協会名誉会員になる。

昭和二十五年（一九五〇）

七十五歳

一月『老説書歴』（実業之日本社）『方言と昔他』（朝日新聞社）刊。一〇月下旬、折口信夫とともに西下、伊勢、大阪、京都など各地において講演。この年から三か年計画にて本邦離島村落の調査が始まる。

昭和二十六年（一九五一）

七十六歳

一月、『民俗学辞典』（東京堂）監修刊行。五月、国学院大学院にて理論神道学の講座をもつ。以後三五年まで。七月、三笠宮等と新嘗研究会を開く。稲作を通して日本人の伝来を探索しようとするものである。九月『大白神考』（実業之日本社）『鳥の人生』（創元社）刊。一〇月、国学院大学にて第三回日本民俗学会年会が開かれ、喜寿記念会を行なう。『後狩詞記』（実業之日本社）を記念に配布。一〇月、関西各地講演旅行。十一月三日、文化勲章を受く。

昭和二十七年（一九五二）

七十七歳

元旦、一福と正月」放送。五月、第六回九学会連合大会にて「海上の道」講演。六月、農業総合研究所において第一回稲作史研究会を行なう。安藤広太郎・石黒忠篤・東畑精一・盛永俊太郎ら文化科学と自然科学の両分野よりの研究会である。『東国古道記』（上小郷土研究会）刊。十二月、放

送文化財ライブラリー委員となる。

昭和二八年（一九五三）

七八歳

一月、国立国語研究所評議員会長となる。三月『神樹篇』（実業之日本社）刊。四月下旬より十四回にわたり毎週月曜日「農村青年と語る」放送。六月『不幸なる芸術』（筑摩書房）刊。

昭和二九年（一九五四）

七九歳

五月、第八回九学会連合大会にて海上の移住について研究発表。米に関する地名を比較研究したもの。一〇月、第六回日本民俗学会年会において八〇の賀の祝を受く。十二月『月曜通信』（修道社）刊。

昭和三〇年（一九五五）

八〇歳

一月『柳田国男集』（筑摩書房）刊。一〇月『年中行事覚書』（修道社）、十二月『新たな太陽』（修道社）刊。この年の前後から、未解決の問題を

後進に託すようになる。

昭和三一年（一九五六）

八一歳

一月元旦、米と正月について三笠宮との対談放送。この年より研究所研究会に出席しなくなる。十二月『妖怪談義』（修道社）刊。

昭和三二年（一九五七）

八二歳

三月、国立国語研究所評議員辞退。NHK放送文化賞受賞。三月末、民俗学研究所解散。七月『少年と国語』（創元社）刊。一〇月、成城大学に蔵書を委託、『史料としての伝説』（村山書店）刊。

昭和三三年（一九五八）

八三歳

一月より九月まで二〇〇回にわたり神戸新聞に「故郷七十年」を連載。十二月『炭焼日記』（修道社）刊。

昭和三四年（一九五九）

八四歳

一月、成城大学にて舟の話を。以後死の直前まで、成城大学にてたびたび沖繩に関する話をす

る。四月、相模民俗学会にて「子墓の話」講演。十二月『故郷七十年』（神戸新聞社）刊。

昭和三五年（一九六〇）

八五歳

一月、「旅と私」放送。五月、房総民俗学会出席。九月、慶応大学文学部史学科創立五十周年に際し、島々の話講演。

昭和三六年（一九六一）

八六歳

五月末より仙台旅行。七月、朝日新聞に「柳翁閑談」連載。七月『海上の道』（筑摩書房）刊。日本民族の伝来を求めた著書である。研究者に与えた影響は大きい。

昭和三七年（一九六二）

八八歳

一月『定本柳田国男集』（筑摩書房）刊行始まる。以下毎月一卷刊行。三月、NHKテレビ「此処に鐘は鳴る」に出演。故郷兵庫県福崎町名誉町民になる。五月、日本民俗学会主催の米寿記念祝賀会を受く。柳田国男賞を設ける。八月八日、心臓衰弱にて死去。八月十二日、青山斎場にて日本民俗

学会葬を行なう。墓地は川崎市春秋苑。九月、道言により蔵書を成城大学に寄贈。

昭和三八年

十二月『分類祭祀習俗語彙』（角川書店）刊。

（作成 鎌田久子）

索引

あ

相變の餅……………三三
赤頭巾……………三三
赤染衛門の歌……………三七
県守の淵……………二〇七
悪玉御前……………二〇
あくど太郎……………二〇
安積山の伝説……………三六
朝比奈氏と狼……………三七
藁の葉に包む赤兒……………三七
小豆五合……………二〇
阿曾沼の爲禱……………二〇
遊び坊主……………二〇
あまがくの話……………二〇
天國の宝剣……………二〇
雨乞と蛇骨……………二〇
雨乞の歌……………二〇
尼念仏……………二〇

天の探女……………二五
あまのじやく……………二〇
尼は娘……………二〇
綾姫と小手御前……………二〇
新たなる神……………二〇
荒血の忌……………二〇
淡島社伝……………二〇
阿波の鳴門の歌……………二〇
安産の祈り……………二〇
家と英雄……………二〇
家と説話……………二〇
家と伝説……………二〇
家の特徴……………二〇
五十嵐小豊治……………二〇
活きた昔話……………二〇
池と伝説……………二〇
石の餅……………二〇
異常誕生……………二〇
泉小太郎……………二〇
泉酒……………二〇
和泉式部……………二〇

泉と少女……………二〇
泉と葬地……………二〇
イタコと座頭……………二〇
イタコの煙草……………二〇
虎杖の名笛……………二〇
市子の祖……………二〇
一夜工事伝説……………二〇
一休和尚……………二〇
一寸法師……………二〇
一本の樹……………二〇
井手の神……………二〇
田舎の秀句……………二〇
稲妻の信仰……………二〇
大が墓穴から出る……………二〇
大子断……………二〇
大と清水……………二〇
大のへや……………二〇
大の靈智……………二〇
犬梯……………二〇
井の上の樹……………二〇
猪の母……………二〇
衣服交換譚……………二〇
忌機殿……………二〇

妹の嫁入……………二〇
異類求婚譚……………二〇
異類転身……………二〇
道老説伝……………二〇
岩長姫……………二〇
岩屋の権貸し……………二〇

歌比丘尼の故郷……………二〇
歌物語の哀微……………二〇
歌謡師……………二〇
打出の小槌……………二〇
卯月八日……………二〇
うつけ舟……………二〇
采女と山の井……………二〇
姥皮……………二〇
姥と狼……………二〇
産女の怪……………二〇
産屋の忌……………二〇
馬方節……………二〇
生まれ替り説話……………二〇
海から来た女……………二〇
海と少童……………二〇
海と山と川……………二〇
海より浮かび来る……………二〇
梅野座頭の山来……………二〇
裏切の首……………二〇
瓜と童児……………二〇
瓜姫と野老……………二〇
瓜姫の機織……………二〇
瓜姫分布……………二〇

瓜姫嫁入……………二〇
瓜を神棚に……………二〇
鱈に似た姥……………二〇
うんとく童子……………二〇
うんなん神……………二〇
え……………二〇
英雄再現……………二〇
英雄と婚姻……………二〇
英雄の危難……………二〇
海老なます……………二〇
えんぶ果報……………二〇
滝方婚姻の風習……………二〇
縁結び……………二〇
延命小槌……………二〇

魚女房……………二〇
浮かれ坊主……………二〇
篇……………二〇
宇佐神話二種……………二〇
牛山姥説話……………二〇
宇治拾遺物語……………二〇
白彫りと骨切り……………二〇
滴巻く瀧……………二〇
うそと文芸……………二〇
うその限度……………二〇
歌うたう骸骨……………二〇
歌合戦……………二〇
歌と昔話……………二〇
歌比丘尼……………二〇

お……………二〇
お歳の杉……………二〇
おいぬ嚙き……………二〇
おいぬ祭……………二〇
王様の鯉……………二〇
王子の狐……………二〇
奥州の真野長者……………二〇

お……………二〇
お歳の杉……………二〇
おいぬ嚙き……………二〇
おいぬ祭……………二〇
王様の鯉……………二〇
王子の狐……………二〇
奥州の真野長者……………二〇

狼神社	三〇三
狼と小羊	二四二
狼と首	四〇
狼の親方	三〇
狼の産兒舞	三七
狼の目玉	四四
大歳の夜の兇事	八二
大話	六二
緒方氏家伝	三二
お銀小銀	一六二
送り狼	三〇
桶屋と昔話	四七
和尚と小僧	三六
おしら神	四〇
おす様	八八
お伽草子	一八二
御伽と女性	三六
おどけ話	七二
おとほう瀧	九
鬼	三三
鬼が島征伐	一七
鬼の宝物	四六
鬼の花園	三七

おのがみのかさの歌	三九
小野氏と横山氏	三三
小野小町	三六
斧淵伝説	三
屋羽剪雀	二七
オムタロの話	二九
重い葛籠	二六
オモイという怪物	四九
重くなる赤子	三
おりかわ姫	四二
織姫の婚姻	一〇六
女話と男話	三三
改作と保存	四四
解し難い教訓	六
海底の華晶	三
害敵出現	二〇
海道下り	三六
鏡を捻げる	三二
柿の木合插話	一六
柿の木と織姫	二九
隠れ蓑笠	三六

か

景清屋敷	二九
欠柄に入れて	一五
駕籠	一五
かさ神の泉	一五
笠地蔵	三
笠と小さ子	三七
かしこ淵伝説	一〇七
鍛冶と山	三九
語り井	三九
語りはまこと	三七
かちかち山の成立	三二
川童と蜘蛛	三二
川童の髪入	三六
門松売	九
金屋神	三〇
蟹と大蛇	三六
蟹の子の遠征	四六
金のなる木	一七
金ひり馬	三
鉦ふりゆう	一六
金を産む子供	三
黒焼笹四郎	二六
蔵神の灰	三

電神火男	六
電の上の川童	九
金を被る猫	三〇
神降しと笛	三九
髪毛と鳥	二六
神棚	四七
髪長姫説話	二六
神の試み	三〇
上の爺と下の爺	三
神の恵の条件	三
神衣祭	二〇
薔の中ら	一六
亀は竜宮の使	三〇
亀を助けて	八九
鴨取権兵衛	三二
加門塚の狼	三三
鳥と田螺	一八
鳥の警告	二七
借り物の失敗	一〇
川上の未知数	一七
かわらんべ	九

記憶の目標	三
祇園の瓜	一六
勝手の手常識	一三
吉吉嶺、吉よむ嶺	一六
狐塚	三六
狐と座頭	三六
狐と猫	三六
狐女房	三六
木と水神	六
樹の上から	一七
桑団子	三七
狂歌咄	三七
行基菩薩	一五
経典利用	三三
京都の機能	二九
巨人説話	一八
記録外の保存	一〇
記録と証拠	一六
禁忌由来	一六
金銀の隠し矢	三〇
金石文の力	三〇
金伯伝説	三〇

く

空想の遊苑	一五
寓話化	三七
草刈山路	一六
葛の葉	三三
久高の尻	二六
口説節	三六
口返し	一六
口無し女房	一六
口寄せの言葉	一六
国の南北の一致	一六
熊太郎	一六
熊野街道の渡守	一六
蜘蛛の怪	一六
蜘蛛息子	一六
栗の木	一六
黒髪山大蛇物語	一六
黒猫	一六

け

芸術の分立	一六
下駄の藤に	一六

毛だらけの男……………一五〇
毛長明神……………二六三
大頭の富……………四〇

二

赤衣物語……………三七〇
小泉小太郎……………一七
恋の音楽……………二六六
甲賀三郎……………三三
庚申待と昔話……………三〇
香箱……………四七
光明皇后……………三三三
公治長説話……………二七
声と目との交換……………三〇
小男の大力……………一七
黄金小大……………二〇
黄金小臼……………二
黄金の瓜……………二
黄金吹花……………一
故郷の神……………三三
国語と盲……………四〇
国民的特徴……………六
心得童子……………六

混成説話

腰折雀……………一五
後日譚……………二六
腰に尺八……………一七
ござ文芸の特色……………四〇
小僧廻……………七
五大御伽噺……………元
古代人の信仰……………三
こだま……………一
小太郎君……………二
滑稽と盲……………三
子供と前代怖畏……………一
子供に教えられる……………二
子供の遊び……………一
五人の神楽男……………三
五分次郎……………一
瘤取りの昔話……………二
小蛇成長……………二
護法天童……………六
五万長者……………二
米倉話……………三
子安子育て……………二
固有説話……………三
ごんげのぼう……………九

さ

採集の必要……………二
賽の神秘……………三
さかしい言葉……………五
酒餅優秀論……………五
蛙を守神とする家……………三
笹舟……………一
座敷わらし……………一〇〇
座頭桜……………四
座頭と笑話……………三
さとり男……………四
猿楽峠……………二
猿樂合戦……………三
猿と墓……………二
猿九太夫……………二
寒田(さわだ) 晰……………三
山賊と狼……………三
山中誕生……………三
三度目の正直……………二
三人の顔いごと……………二

三人の娘……………六
産の杉……………二
山路の舞……………二

し

爺様の耳……………三
鹿嶋……………二
式日と昔話……………二
舌切雀……………二
葛う峠……………二
七難のそそ毛……………二
自嘲文学……………二
実験と伝説……………二
死と生との分界……………二
信濃盛……………二
死人感謝譚……………二
吉野の翁はたき……………二
柴刈翁……………二
洪江氏と川童……………二
蛇骨石……………二
蛇になった人……………二
邪魔と人真似……………二
十一面観世音……………二

十九夜譚

十三の彈丸……………三
十二の卵の歌……………三
獸類人語……………三
趣向相説……………三
樹木伝説……………三
小兒と狼……………三
葛蒲亮……………三
勝利譚の流行……………三
浄瑠璃御前……………三
浄瑠璃の物語……………三
上悪悪疾……………三
笑話化……………三
職人と歌物語……………三
白鷺……………三
白介の翁……………三
虱取り……………三
尻尾の証拠……………三
白い犬……………三
白田螺は水の神……………三
信仰と女性……………三
信仰と伝説……………三
信仰要避の跡……………三

す

神子譚の改造……………三
信じられた説話……………三
神人契約……………三
神人絶縁譚……………三
神童出現……………三
人狼説話……………三
神話……………三
神話と經典との差……………三
神話の自由分子……………三
神話の容器……………三
神話分離……………三
水神様の申し見……………三
水神信仰の痕跡……………三
水土の功……………三
末の娘の嫁入……………三
薄の葉の鏝……………三
雀の仇討……………三
すねこたんば子……………三
すね者……………三
炭焼長者……………三
相撲の賭……………三

せ

清悦物語	一四
誓願寺	一六
清少納言	一七
醒睡笑	二六、二七、二八
成長齋異	六、二四
世間話と昔話	二四
節供と昔話	二五、二六
説明説話	一〇、二六、二七
説話遺跡	一九
説話管理者	二〇、二六、二七
説話業の起こり	二七、二八、二九
説話国産	二〇
説話展開の傾向	二五
説話伝播の要件	二六、二七、二八
説話と宗教力	二六
説話渡来の方角	二六
説話二種併存	二〇
説話の運送	二五
説話の成熟期	二〇
説話の成長過程	二四、二五
説話の伝説化	二四

そ

説話の複合	二五、二六、二七
説話分立の順序	二六
背に狼の毛	二六
瀬見小河	二六
せやま太郎兵衛	二六
遅集の歌	二六
洗濯に行く姥	二二
千狼狼	二六
華法と口碑	二五、二六
挿話の一致	二五
付我物語の感化	二五

た

大蛇と盲	二五
大蛇の子	二五
大衆文芸と生活	二六
樵の木	二六
だいだら坊	二六
大力由緒	二五
宝物と伝説	二五
宝物と女房	二五

耕と水の神 二六

竹芝長者 二六

竹取物語 二六

タコといふもの 二六

紙鶴の行くえ 二六

但馬と越前 二六

立腹き 二六

脱落と省略 二六

蓼汁の忌 二六

田螺と鳥 二六

田螺の卵 二六

谷の洞穴 二六

田の神の父母 二六

田の神は高嶺より 二六

煙草の火と狼の眼 二六

旅と伝説 二六

足袋の始 二六

卵から英雄 二六

玉手箱 二六

玉世伝説 二六

玉世御前 二六

田縫の申し児 二六

太郎という名 二六

ち

団子浄土	二五
団子と糊	二五
誕生水	二五

て

杖立峠	二五
告の茶屋	二五
槌	二五
網の伯母	二五
角草履の山来	二五
つぶの長者	二五
妻の援助	二五
鶴市明神	二五
鶴女房	二五

と

天つこ神	二五
天人女房	二五
てんぼ語り	二五

峠の狼 二五

逃京説話 二五

童子と犬 二五

童女神授 二五

唐土の鳥 二五

動物説話 二五

動物の援助 二五

動物の歴史 二五

童話化 二五

童話の起こり 二五

童話の改造 二五

童話文字 二五

歳の暮に 二五

戸棚と神壇 二五

橋の実の助太刀 二五

唱えごと 二五

隣の金持 二五

隣の爺型 二五

つ

栗花落 (つり) 左衛門	二五
--------------	----

伝説補充	二五
伝説の歴史的分子	二五
伝説の考証	二五
伝説の境界	二五
伝説と信仰	二五
伝説と昔話	二五
伝説と下衆	二五
伝説統一	二五
伝説と家の移住	二五
天子流寓譚	二五
伝承者	二五
鉄の呪力	二五

刀禰の歌……………一〇
殿様の謎題……………二六、二七
殿様の装束……………一七
萬の告げ……………一〇、二五
友だちの加勢……………二五、二六
取上げ婆と信仰……………二六
鳥籠……………二六
鳥前生譚……………二五、二六

な

中の中の小坊主……………二四
聖の木……………二五
何故話……………一〇、一〇、二〇、二五
菜と酒泉……………二六
七草の由来……………二六
七難き松……………二七
鍋を被る狼……………二八
名前の興味……………二七
ならず者……………二八
南海の浦島太郎……………二八

に

錦の小蛇……………二〇

日本二神の婚姻……………六六、六八
日輪の精霊……………一〇
日本の竜宮……………二五
二人伴助……………二五
丹南矢……………二五
女性の勝利……………二六
女性桃太郎……………二六
鶏の親切……………二五
人形と河童……………二五

ぬ

鶴と頼政……………四六
糖次郎……………二六
糖福米福……………二七
糖屋の隅……………二五
ヌシの力……………二五
沼の神の文使い……………二五

ね

根株の中から……………二五
葱売正助……………二六
猫と狼……………二五、二六、二七
猫の淨瑠璃……………二〇

猫の宮……………二五
猫の寄合……………二五
寝太郎の目ざめ……………二五
寝太郎餅……………二五
睡虫……………二五
念願と応驗……………二五

の

農民の幻覺……………二五
野菊の井戸……………二五
信の宮の信太郎……………二五
糊を食う雀……………二五

は

俳諧零落……………二五
背後にありしもの……………二五
博士の占い……………二五
博打習入……………二五
白竜魚服譚……………二五
化け猫の話……………二五
化け物と言……………二五
箱……………二五
橋の下の淵……………二五

機織池仁説……………二〇
機織の歌……………二〇
裸鶴……………二六、二八
機音……………二四
機を織る事業……………二七
八石山の豆の木……………二二
八幡長者……………二五
八郎湯の八郎……………二五
果てなし話……………二五
鳩と鈴……………二七
花咲爺……………二五
話し方の変化……………二五
話し家の口うつし……………二五
話し手の名……………二五
話と旅……………二〇、二一、二五、二六
話のくりかえし……………二二
話の種類……………二〇、二六、二七、二八
話の中心……………二六、二七、二八、二九
話の間隙……………二五
話の芽……………二五
咄の者の功績……………二五
話のやま……………二五、二六
はなたれ小僧様……………二五、二六

鼻取地蔵……………二〇
花嫁の力……………二五
鼻を吸う音……………二五
母の園……………二五
母一人子一人物語……………二五
給女房……………二五
蛤の草紙……………二五
早物語……………二五
流行言葉……………二五
流行地蔵……………二五
針と糸……………二五

ひ

彦太郎話……………二五
悲劇趣味……………二五
狐の占……………二五
狐の米……………二五
比治山の処女……………二五
美人の姿絵……………二五
左甚五郎……………二五
左の手……………二五
概……………二五
人柱と生柱……………二五、二六

健の宇計木……………二五
日の光と稲妻と……………二五
雲雀の借金……………二五
姫塚の石……………二五
姫という語……………二五
百姓と殿様……………二五
百姓の敵……………二五
兵庫踊……………二五
ヒヨウスベは河童……………二五
風車と水の神……………二五
ひょっとこ……………二五
琵琶渡米以前……………二五
貧乏神……………二五

ふ

風景の宗教的起原……………二五
笛と蛇体……………二五
笛と天人女房……………二五
笛吹藤平……………二五
炎の米……………二五
不孝の鳥……………二五
伏打の歌……………二五
二つの話の繋ぎ目……………二五、二六

淵の渦巻……………六、一〇三
古い記録と古い伝承……………三六五
古い話……………三六三
古屋の漏り……………三六九
文化神……………三六九
文芸二途……………二九
文芸は踏襲……………一六三、一六五
文獻調査の不備……………三六五
文書万能の迷信……………三六五
踏張りの松……………三六五

へ

皿血郷談……………一六
平民の歴史熱……………一六
皿血欠皿……………一六
蛇女房……………一六
蛇の珠……………一六
蛇姫説話……………一六
尻ひり爺……………一六
ペロ井戸……………一六
尻をひらぬ女……………一六

ほ

舞の手と笛の曲……………一六
舞の本……………一六
負ける敵……………一六
孫三郎……………一六
孫太郎婆……………一六
樹洗い池……………一六
松王梅若……………一六
守の神……………一六
満願の日……………一六
まんこという女……………一六
満能長者のまな娘……………一六

ま

三井寺と母子再会……………一六
みかんごうの猫……………一六
三島録起の鷲……………一六
水の神と火の神……………一六
水の神の秘密……………一六
水のメシ……………一六
水の都の喜び……………一六
水の与華……………一六
ミタマは子種……………一六
箕作りの翁……………一六
みつち・おろち……………一六
三つの謎……………一六
三つの箱……………一六
ミトラ神の石像……………一六
見まじきもの……………一六
蚯蚓の眼……………一六
三諸岳伝説……………一六
三輪神話の変化……………一六
民間文芸の活躍……………一六
民間文芸の基礎……………一六

み

む

無意識伝承……………三〇
昔話成長の三様式……………三〇
昔話土着……………三六、三七
昔話と伝説……………三六、三七、三六
昔話の型……………三六、三七
昔話の酵母……………三六、三七
昔話の分裂……………三六
昔話の若返り……………三六
麦粉をつけた握飯……………三六
鋳入笑話……………三六
略と狸……………三六
無心出……………三六
無報酬の援助……………三六
無理助……………三六
むろの木と猫……………三六

め

盲と娘……………三六
盲と伝説……………三六
盲と笛……………三六
盲と文芸……………三六

盲と水の神……………三六
盲と昔話……………三六
目で見える昔話……………三六

も

申し見……………二二、二六、二七、三六、三六、三六
李蔵の名吟……………三六
文字の魅力……………三六
もすの書作り……………三六
餅と座頭……………三六
餅の袋……………三六
物草太郎……………三六、三六、三六、三六
物真似話……………三六
桃壳殿様……………三六
桃から小大……………三六
桃太郎原型……………三六
桃太郎実在説……………三六
桃太郎新論……………三六
桃太郎と羽衣……………三六
桃の川上……………三六
八つ頭的笑話……………三六

や

ゆ

結納の餅……………一七
遊士権斎……………一七
輸入説話……………一七
指から生れた子……………一七
指太郎……………一七

奴稱荷……………一七
矢の根鍛冶……………一七
山犬の初衣祝……………一七
山芋と瓜子姫……………一七
山姥・山母……………一七、一七、一七
山から赤子……………一七
山田白滝……………一七
山父一眼……………一七
山寺の化け物……………一七
山の御犬……………一七
山の神と平家……………一七
山の方へ……………一七
山番の妻……………一七
山彦……………一七

よ

用明天皇職人鑑	三
よけないう童子	三
横山の禰宜	三
夜啼石	三六
米原長者	三三
米白川説話	三三
夜話の衰微	三
嫁入支度	三三
蓬と菖蒲	一九

り

利修仙人と鹿	三三
竜吉と爺婆	一七
竜宮小僧	七〇
竜宮女房	四二九
竜宮の入口	七〇
輪廻の信仰	七〇

れ

雲山崇拝	三〇
歴史と説話	三〇

恋愛文学の型

三〇

ろ

良弁杉	三二
六月十五日の祭	六二
鹿母夫人	三三
露顯のもと	三四

わ

脇役者	三三
わざをぎ	三三
鷲見氏の由緒	三三
話者と説話の主人公	三六
萱草と紫苑	三六
笑い話の古色	三六
笑い話の役者	三六
笑い本	三六
笑を売る	三六
童言葉	一六
悪い話	七〇
枕貸し伝説	七〇

角川文庫

ももた たんじょう
桃太郎の誕生

昭和二十六年六月十日 初版発行
昭和四十五年十月五日 十三版発行
昭和五十年十二月三十日 改版三版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著作者 柳田 泉 男

発行者 角川 春 樹

印刷者 村 沢 達 弘
東京都港区新橋四ノ三ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三 株式
会社 角川書店
電話東京三二二六代表

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 旭印刷・本間製本
0139-308303-0946(0)

もの見方について	笠 信太郎	性 慾 論	トルストイ	福翁自伝新訂版	福沢 諭吉
禅とは何か	鈴木 大拙	B・ラッセル教育論	堀 秀彦訳	海南小記	柳田 泉男
無心ということ	鈴木 大拙	B・ラッセル幸福論	堀 秀彦訳	雪国の春	柳田 泉男
般若心経講義	高神 覺昇	B・ラッセル結婚論	柿 村 峻訳	桃太郎の誕生	柳田 泉男
法句經講義	友松 円諦	怠惰への讃歌	B・ラッセル	一目小僧その他	柳田 泉男
ツァラトゥストラはかく語りき	ニーチェ	懐 疑 論	B・ラッセル	遠 野 物語	柳田 泉男
若き人々への言葉	ニーチェ	西洋哲学史要	波多野 精一	日本の伝説	柳田 泉男
饗宴―恋について―	プラトン	弁証法十講	柳田 謙十郎	昔話と文学	柳田 泉男
ソクラテスの弁明	プラトン	子 論	矢内原 忠雄	木綿以前の事	柳田 泉男
方法序説	デカルト	マルクス主義とキリスト教	矢内原 忠雄	妹 本の祭	柳田 泉男
情 念 論	デカルト	共産主義の系譜 増訂版	清水 幾太郎	改訂版日本の昔話	柳田 泉男
実践理性批判	カント	社会学的基礎概念	M・ウェーバー	こども風土記	柳田 泉男
社会学入門	カント	官 僚 制	M・ウェーバー	小さき者の声	柳田 泉男
哲学入門	カント	職業としての政治	M・ウェーバー	野草雑記・野鳥雑記	柳田 泉男
女について	カント	人間としての政治	M・ウェーバー	火 の 昔	柳田 泉男
幸福について	カント	人間の歴史 全三冊	M・ウェーバー	新版 毎日の言葉	柳田 泉男
自殺について	カント	人間の歴史 古代篇	M・ウェーバー	女性と民間伝承	柳田 泉男
みずから考えること	カント	人間の歴史 現代篇	M・ウェーバー	地名の研究	柳田 泉男
ヒルティ 幸福論	秋山 英夫訳	カリーマ・ストロ	鳥山 喜一	精神分析入門	柳田 泉男
ヒルティ 人生論	秋山 英夫訳	改訂版中国 黄河の水	鳥山 喜一	性と愛情の心理	柳田 泉男

角川文庫発刊に際して

角 川 源 義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であつた以上に、私たちの若い文化力の敗北であつた。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかつたかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとつて、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及と浸透を任務とする出版人の責任でもあつた。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあつた我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎すためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも願ひず再建の礎石たるべき抱負と決意をもつて出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊することにした。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のシレクタントを作ることの目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養としての殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持によつて、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

角川文庫 今月の新刊

横溝 正史	高木 彬光	水上 勉	耳 勉	小松 左京	復 活	平井 和正	悪 徳	田辺 聖子	あ か	三 浦 一 郎	世界史こぼれ話 3
影の女	死を聞く扉	緑三〇八―9	緑二五六―21	緑三〇八―9	緑三〇八―9	緑三八三―8	緑三八三―8	緑三一四―4	緑三一四―4	緑三一四―4	白二二五―3
築地の橋下で、若い女の死体が発見された。金田一耕助の事務所を訪れた依頼人の女性は、この事件の目撃者だ。だが、その供述によると、犯行現場は西銀座にある人けのない路地だという。偶然、関心を惹いた彼は事件解決に乗り出す。金田一耕助の日常生活を生き生きと彫り出した異色作。ほか一篇収録。	何十億という金塊やダイヤモンドが隠匿されているという噂のある福井県小浜に、戦地帰りの奇妙な男がいた。この男が、中から鍵のかかった部屋で、顔を至近距離から撃たれ血に染まって死んでいた。天才的な法医学者神津恭介と松下研三のコンビがこの密室殺人事件のミステリーに巻き込まれる長編推理小説。	昭和三十一年十二月初めの午後、ビルの中の歩道の片隅に落ちていた、人間の片耳。ビルは、激しい労働争議を続ける雑誌社で、警察は組合と会社側に関き込みを始めたが、被害者はいない。数日後、手に筆跡のピアを握った身元不明の若い男の他殺死体が発見され、事件はいよいよ奇怪な様相を深めた……	秘密裏に開発された猛毒性を持つM.M菌のキャプセルを搭載した小型機が、吹雪のアルプスで墜落。春になり雪どけがはじまると、奇妙な死亡事故が報告されはじめた。人籍に明日はあるか……ちょっとした偶発事故からでも、人類を死の淵に陥れる。人類滅亡の日も刻一刻と近づく。著者最高のSF長編小説。	すさまじい非行少年グループの果敢、悪徳学園、不死身の狼人間犬神明は、何者にも屈服しない徳義の故に、七回も暴力の洗礼を受けるが、それでも彼らの愚かな挑発に決して応じない。だが、ついに彼の怒りが爆発する時がきた。彼を信頼する美人教師が襲われたのだ……。ほか四篇を収めた、傑作短篇集。	奥ゆかしくてやさしい、デリカシーがあつていじらしくもある。もののあわれを解し、思いやりがあり、そのうえ、夫をいたわる心づかいもあわせ持っているニッポンの女を求めてさすらう柔げの中年男の淡い希望と確きを描いた表題作「あかん男」は、田辺文学の心髄を示す好短編六篇を収録。	○大変おしゃれたゲーテだが帽子だけはいつもとびれた古帽子。それは新調したくても特大の頭に合うのがなかったから。○ある宴会で、最も花柳界の一人が知り合いない男と所定された森鷗外。だが、どやどや入ってきた芸者の一人が開口一番「あら、森さん！」五八〇余の愉快な話を集めた待望の第三集！					